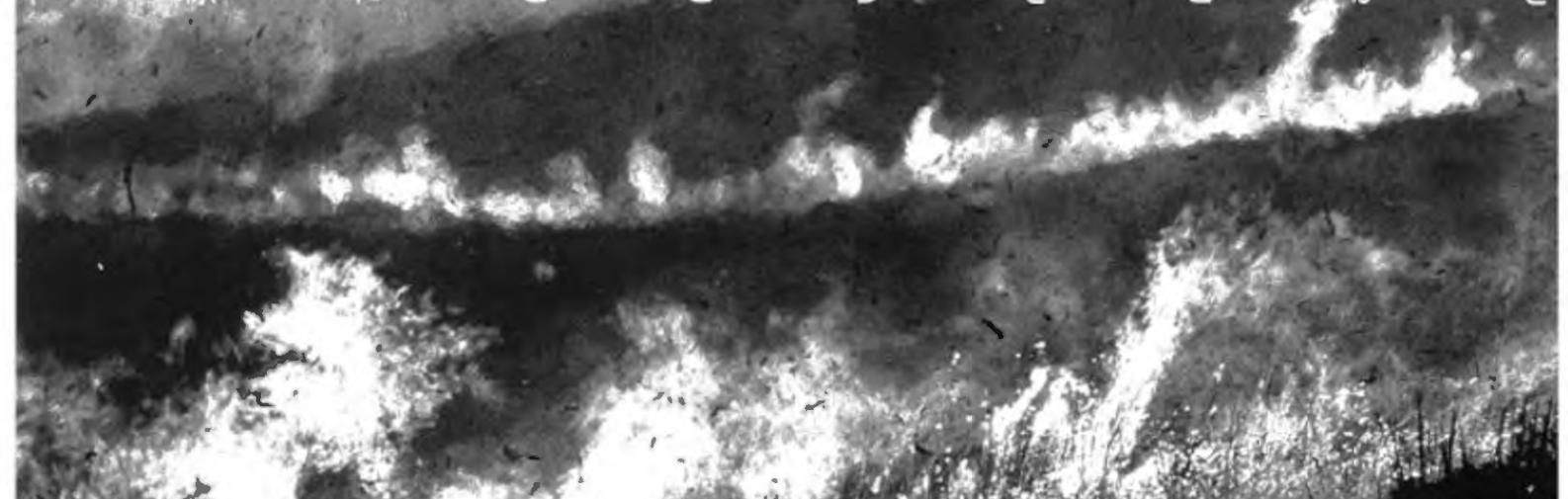


草原にこころをこがせ



秋吉台草原シンポジウム2001/全国山焼きサミットin秋吉台

AKIYOSHIDAI
GRASSLAND
SYMPOSIUM
2001 2.16_{Fri.}~18_{Sun.}

報告書

秋吉台草原シンポジウム・サミット実行委員会



秋吉台草原シンポジウム2001
全国山焼きサミットin秋吉台

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001 2.16 Fri. ~ 18 Sun.

とき 2001年2月16日(金)~18日(日)
ところ 秋吉台国際芸術村ほか

秋吉台宣言

今、草原景観は存亡の危機を迎えています。この危機は、そのまま草原に生きる虫や草花の絶滅の危機を招くと同時に、先人達が築いてきた草原文化を根底から揺るがそうとしています。農林業や畜産業の衰退によって、採草や放牧という利用目的が失われつつあるからです。草原景観の維持は、各地域共通の問題点です。

一方で、社会の進展と高度化によって、疲れ疲労した心の癒しの場所として、美しい草原には多くの人々が訪れるようになりました。人々の健康と安らぎにとって、草原はかけがえのない場所となってきたのです。そこには観光、福祉、健康という新たな生業も育ちつつあります。

本日「秋吉台山焼きサミット」に集う自治体は、草原景観を「地域の宝」、「国民の財産」として維持保全していくことを話し合いました。また共に、「人々の癒しの草原」を管理保全する責務も認識しながら、運営上貧弱している実状も協議しました。今後は機会あるごとに、こうした実状を国や国民に訴えかけ、「国民の財産」、「地域の宝」として、援助と支援を要請しながら、草原景観の維持保全に一層の努力を傾注することを宣言いたします。

2001年2月17日
全国山焼きサミットin秋吉台

開会あいさつ

実行委員長
阿座上 昌亮



おはようございます。こうして21世紀のはじめに、この「秋吉台国際芸術村」で「全国草原シンポジウム」、また「山焼きサミット」を開催するに当たりまして、日本全国、北は北海道から南は九州宮崎まで、数多くの皆様方にご参加いただきましたことに、大変厚くお礼を申し上げたいと思います。

「秋吉台国際芸術村」という名前でご参加いただきましたが、残念ながらここから秋吉台の草原を見ることはできません。この芸術村も計画当初には台上という計画もございましたが、色々な規制、保護等ありますて、この地に落ち着いた訳でございます。

そういった色々な規制がかけられ、秋吉台の草原も今まで守られてまいりました。一番今私どもが見ていただきたいのは、秋吉台の最高峰である「龍謙峰」でございますが、あそこへ上がりますと、西側に「西台」と呼んでおります山がありますが、秋吉台と同じカルスト台地であります。しかしそちらはもう、セメント会社・石灰会社が、今、四方八方から掘り尽くしております。一步保護の手を間違うとそうなるんだというのが龍謙峰へ上がるに一目瞭然、よくわかる訳であります。今日明日の日程のうちにはそこまでの事は入っておりません。また機会がありましたらゆっくり見ていただいたらというふうに思っております。

こうして、昔どこにでもあった草原が、今本当に希少な価値として数少なくなっています。まあそういった中でここ秋吉台の草原も、やもすると人手不足とか高齢化とかで草原の維持が難しくなっております。まあこれは、今日お集まりの皆様方、どの地区にも同じ感覚だと思いますが、しかし、「草原」というのはやはり人類の宝であるし、やはり人間の心を繋ぐ場でもあるというふうに思っております。これを秋吉台の場合、山焼きの歴史が600年といわれてありますが、そういった中で人間の手で作られた草原、これを今からも人間の手で守って行かなければならない。これが今私どもが考えております大きな課題であります。それに向かって日本全国の同じ悩みを持つ各団体、自治体の方にお集まりいただきまして、より一層連携を取りながら、何とかこの問題が解決できればというふうな形でご案内をした訳でございます。そうした趣旨を御理解の上、本大会が最後まで有意義に終わります事をお願いいたしまして、開会の挨拶にしたいと思います。

歓迎あいさつ

秋芳町長
上利 礼昭



ご紹介いただきました地元秋芳町長の上利であります。ようこそ、ここ秋吉台国際芸術村に、北は北海道から南は九州まで、全国の各都道府県から遠路わざわざこの秋吉台にお越しいただき、美東町・秋芳町を代表いたしまして、心からご歓迎を申し上げます。ようこそいらっしゃいました。

この度、「秋吉台草原シンポジウム2001」、「全国山焼きサミット in 秋吉台」、をここ秋吉台でこのように盛大に開催できます事は、地元町町といたしまして誠に意義深く光栄に存じております。

草原を取り巻く課題は、地域によって異なっておりますが、この草原をどのようにして、今後守りながら維持・管理し、また利活用していくためには、お互いに知恵を出し合い、地域の実情に沿った取り組みをしなければならないと思っております。

こうした時に全国各地域から、草原に関わりのある方々のお集まりをこのようにいいたしまして、こうした会が催されることは誠に意義深い事と思っております。どうかこうした機会にお互いに交流を深められまして、それぞれの立場で本サミットなりシンポジウムがより良い成果を上げられるよう念じて止みません。

終わりに、本会開催に当たりまして、格別のご尽力をいただきました山口県御当局、実行委員会の皆さんや、御指導いただきます関係各位に厚く厚く御礼を申し上げまして、はなはだ措辞でありますのが、歓迎なりお礼の挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
秋吉台草原シンポジウム2001 ■

■基調講演

秋吉台の山焼き —自然の利用と保護をめぐって—

講 師 秋吉台科学博物館長
藤 本 正



司会

これより「秋吉台草原シンポジウム2001」第1部の基調講演に移ります。

基調講演の講師は、秋芳渓、秋吉台の「物知り博士」として有名で、現在も山口県環境教育学会会長など多くの役職をお務めの、秋吉台科学博物館館長の藤本正様にお願いしました。

「秋吉台の山焼き 自然の利用と保護をめぐって」と題したテーマでお話しをいただきます。

それでは藤本様よろしくお聴きいいたします。

藤本

只今ご紹介いただきました。画本でございます。

本日は日本各地から草原を愛する方がたくさんお集まりになりまして、附のこもった種々な討議をしようという会議です。それに先立ちまして私が秋吉台の生い立ち、また利用の歴史についてご説明しようということでこの壇上に上がらせていただきました。しばらくの間ご静聴をお願いいたします。

秋吉台というのは、もうみなさんご質になった方がほとんどじゃないかと思うのですが、大変素晴らしい草原でございます。この風景というのは、ひとつは大地の歴史、秋吉台の場合でいきますと3億年という日本でも一番古い岩石からできている、非常に古い土地でございます。3億年という長い年月をかけて自然が作り上げてきた素晴らしい風景が見える訳です。ここでは「カルスト地形」という興味深い地形が見えます。

そこに縄文時代以来、人が住み着きました。人がずっとこの秋吉台を利用してきた訳でございます。台の上を歩いてありますと、種々な人間の使った道具が落ちている訳ですが、

今から40年前くらいでしおうかね、秋吉台で字佈調査をやりました。そのときに一番古いところでは、縄文時代のごく早い時期に使われたイヤリングが出てきたり、あるいはナイフのかけらが出てきたり、いろんな道具が落ちておりました。それを拾い集めていきますと、早くからこの秋吉台の上に人が住んでいたということが分かった訳でございます。

弥生時代になりますと、農耕を伴った文化でございますから台の上の利用は非常に少ないでございますが、台の周辺に広がる「ボリエ」と呼ばれる平原がございまして、そこにたくさんの人達が住み着く。これは北九州、九州から奈良に向かってですね「弥生ロード」という大きな弥生遺跡が濃密に分布している地域があるのですが、この秋吉台はそのど真ん中に入ってきます。非常にたくさんの弥生人がこの秋吉台の西辺に住み着いた訳でございます。何を求めてこの山の中に住み着くようになったのか、というので以前から議論が重ねられてきている訳ですけれども、秋吉台には素晴らしい遺物がある。弥生時代というのは、稻作と同時に金属の文化を持っておりますが、その金属が秋吉台から掉れる。秋吉台の周辺にあります弥生遺跡を最近使ってみると、ほとんどが遺物、例えば鍬とか鋤とかの金具を精緻にするのに必要な道具が出てまいりまして、これらを目指してみんなやって来たんだなあ、ということが分かります。人による台の上の利用はあまり多くないんですね。

ところが奈良時代になりますと、この秋吉台で田が、飛びが支配する遺物が出てきてですね、積極的に田の飛地が行なわれる。こういうように、秋吉台では非常に古くから人が利用をしてきております。

ですからこの「風景」を見ると、地球3億年の歴史と、そこに住み着いた人々が利用した跡がそのままずっと風景の中に刻み込まれておられます。それがとても美しい訳でございます。3億年の大地を創った、大地生成の神はとても

堅い神情であったんだから、またそこに住み着いてきた人々はとても優しい利用の仕方をしてきたんだから、ということが目に見えまして、大変気持ちが良くなる訳でございます。

まあそこで、時間の許す範囲で、秋吉台の歴史の重要なポイントだけをご紹介したいと思います。お配りしましたシンボジウムの冊子の中に、17ページから西条書きで地域史及び利用の歴史を書いておりますので、ちょっとご覧をいただきながらお聞きいただければと思います。

秋吉台で一番大きなポイントになるのは何かと申しますと、右灰岩という岩石でできた山だということです。これは今から30年位前、私の先輩になりますが、秋吉台科学博物館におきました大田正道という学芸員が研究したことです。彼によると秋吉台の上にはたくさんの化石がありますが、その化石を調べていくと、秋吉台は3億年前の珊瑚礁だったということが見えてきた訳です。彼は大変細かい詳しい研究をして珊瑚礁、環礁であったということを証明しました。秋吉台の右灰岩の起源というのは当時非常に大きな海の通が彼方で誕生した珊瑚礁が、そのまま因縁でこの秋吉台の右灰岩になったのですからこの右灰岩の中にはたくさんの化石が入っております、サンゴだとウミコリだとアンモナイトだと、様々な生物の化石が入っております。それがそのまま残されております。秋吉台珊瑚礁の生成の歴史は、今から8億5千万年前くらい前にですね、海の海団火山が噴き出した小さな高まりの上に様々な海の生物が住み着いていく訳です。そして約1億年もの長い年月を掛けて、今から2億3千万年前くらい前まで約1億年くらいの年月を掛けて、厚さ900メートルという巨大な珊瑚礁の塊ができる訳でございます。まあその歴史が見えてきまして、秋吉台の起源というのは両の海で、非常に暖かい両の海で、サンゴ礁という非常に静かな世界で生まれてきたもんだなあ、ということが分かってみんなとてもワクワクいたしました。

その次に非常に大きな話題をなしたもののは何かと申しますと、「秋吉台の珊瑚礁がひっくり返っている」という研究が行なわれました。実はこれは大正時代の終わり、大正9年、10年頃から昭和の初めにかけての研究です。東京大学に小澤俊明という地質学者の先生がいました。先生は早業論文を書くために秋吉台にやって参りました。そして秋吉台を中心にして広い範囲の地質調査をしまして大変大きな発見をする。秋吉台の大地がですね、普通ですと、今お話ししましたように珊瑚礁ですから出来始めの時は3億5千万年前に住んでいた生物が住み着く。それから次の時代の生物が住み着きそのまた次の時代の生物が住み着く。それが段々、段々と断続的に上に上に乗っかっていて巨大な珊瑚礁になっていく訳ですが、それが全くひっくり返った状態で出てくるということを、秋吉台の北半分ですけども見つけましてですね、これはどうしてだろうかと考えた訳です。そしてもう素晴らしい研究をなさる訳ですが、この研究が

実は、大学の卒業で始めた研究が宣伝に博士論文になり、学士院講演に輝くという大変すごい研究でした。それはどういうことかというと、秋吉台の大地をひっくり返すような大きな地殻変動があった。これは古生代の末期、今から2億年くらい前のこと、非常に大きな、後に「秋吉台運動」という名付けられる地殻変動なんですが、それで大きく秋吉台がひっくり返った。そしてこの秋吉台をひっくり返した地殻変動が、日本列島の一一番古い骨格、座台骨を造ったとあるんです。小澤先生の研究は「日本列島の起源」を論じるという大変大きな仕事になりました。高い評価を受けまして、学士院講演に輝いたということです。それは昭和元年のことです。ところが小澤先生は大変残念なことに30歳の若さで亡くなってしまいます。小澤先生の研究以来、秋吉台は非常に有名になりました。日本中の地質学者が一つとやってきて、もう歎々と研究を続けています。いまだにその研究は続けています。秋吉台に取組んでおられる地質学者は本当にたくさんいらっしゃいます。毎年すごい成果を上げてあります。まあそういう山だということをございます。

それからもうひとつは、中生代の終わり頃にありますと秋吉台の右灰岩の中にマグマが入り込んでくる火成活動が起こりまして、火山活動の影響を受けました。右灰岩の中にマグマがどんどん入り込んでくると、それが右灰岩と侵する面で侵襲交代鏡床という試験をたくさん作り出してくれる。長谷洞山をはじめ赤穂山、赤福山、あちこちに鏡山跡がございますけれどもその元を造った。中生代の「地殻の壊り壊し」でございます。同時にそれから右灰岩を温めて焼き尽くしていくので、右灰岩から大理石がたくさん生まれるということになってくる訳です。だからとても素晴らしい珊瑚礁の山が、やがて試験をたくさん作った山、大理石を含む山になるということになる訳です。

今の秋吉台が出来上がってるのは新生代の、そうですね今から数百万年前のことです。秋吉台で一番古い「龍鏡碑」というところは、あの平坦面ができるのが約200万年前くらい前じゃないかな。「長谷ヶ森」のあの下の辺りの平坦面は100万年前くらい前かな、という場合にたんだん下がって来て、地形が出来上がった様子を伺い知ることができます。秋吉台はまあそういうような非常に長い、すごい歴史を持っております。

今度は人の利用の歴史を申しますと、最初に縄文人が住み着き、弥生人が住み着き、奈良時代には紀山が栄えた。日本最初の官宮の紀山ができた。ということを申しましたが、やがて中世の初め頃になりますと、秋吉台の上に人がたくさん入ってきて、農業技術の進歩とともに台を平原にしていきます。山を焼くことによって平原にしていきます。何故中世の初めかということになる訳ですけれども、実は考古調査をして秋吉台の上にいろんな遺物を調べていきますと、樹木時代のものは結構たくさんあるんですが、弥生時代になると非常に少なくなってきて、次に遺物がたくさん出て

くるのは中世の初め頃のものなんです。ああ、この時期に里の人達が里山である秋吉台の上にやってきて、山を焼いて草原にして、そこで草を採るようになつたんだなあ。同時にドリーネ耕作が始まったんぢやなあ。ということが分かる訳でございます。

江戸時代になりますと、秋吉台は「子鹿台」と呼ばれたくさんの草が採れるところだということになりますて、恐らく当時の人们はみんな豆いに喧嘩をするように草を刈っていました。この地域には「朝草を刈る」という呂東がござりますが、朝まだ暗いうちに馬や牛を連れて秋吉台の上に上がってきて、草を刈って馬や牛の背中にたくさん積んで家に帰る。帰ってから朝に飯を食べる。というそういう生活の様式が成り立っていたということでござります。ああ江戸時代には大変草原が脅かされたということが当時の記録に書いてあります。

ところが明治になりますとガラッと様子が変わってまいりまして、日本の国が誕生していく訳ですけれども、最初に目を付けるのは何かと言うと陸軍でした。帝国陸軍でございました。最初は小倉の砲兵隊がやってきて、秋吉台の上に「砲台山」という山がありますが、そこに大砲を据えて長者ヶ森に向けて大砲を撃つ。あるいは広島から砲兵隊がやってきて長者ヶ森から龍頭峰へ向かって大砲を撃つ。そういう演習を始める。山口市に連絡ができますと、大変すごい演習場地になりますて、廻舎もできまして連日演習をしていきます。大正時代の陸軍の地図なんかを見てみると、今の山の名前がみんな違っています、「井鹿山」とか「秀経山」とかやはり源平合戦、二つに分かれて陣取り合戦の演習をする訳ですが、そういう陸軍の山の名前がせちんと記載されておりまして大変面白い訳でございます。

また同時に明治になりますと「陸軍列車」、鉄道を買せということが合意事になつまして、小野田セメントが最初にセメント工場の採石場を持つとか、あるいは大掛かりの採石場が非常に盛んになります。大理石も、地元の方々が火理石の採掘をしていく。やがて國が東宮御所を造るとか国会議事堂を造るとかということになりますと役人がたくさんやって参りまして、大理石の調査をして、この石を持って帰りました。その中に本間巣平という、大変柔軟らしいクリスチャンの方ですが、この秋吉台に住み着きました。大掛かりな作業をしていく。そして同時に様々な教育を行なつながら、大変柔軟らしい思想をたくさんの方に広めていく。そういうようなことも行なわれています。

やがて観光も併せてまいります。明治30年代の後半頃から福原文治郎という滋賀県の方ですが、良良山を買ひにやって来るのですが、日露戦争で大儲けをする訳です。そのお金で今のれ芳洞に投じて観光開発をしました。今の秋吉洞、当時は「滝穴」と呼ばれていましたが、それが観光開発されるのが明治43年です。この場に開拓式がおこなわれました。当時の滝穴を見ますと大変すごい洞窟で、身も心もとろけるような柔軟らしいところだ。これを世界中の

人に見てもらわないのでどうするか。というので観光開発に踏み込んでいく訳です。

第2次世界大戦中には悪わぬ利用の仕方が出でます。鉄が無くなつたというので、秋吉台の赤土の中から鉄を採り、山を掘り下げて鉄を採つたり、鐵溝河などは飛行機の格納庫として、洞窟の中に飛行機を格納しようという、あの前飛行場にしまして飛行機の格納をしようという計画も出来ましたが、あまり使われない内に終戦になつました。

そして戦後になりますと、この柔軟らしい草原を何とか利用しようということで、やがて開拓団が入ります。昭和20年ですね。そして台の上を開拓します。しかしジャガイモを植えても「ジャガイモ」と苦われるくらいの豆粒ほどの大きさにしかならない。あまり開拓には適していないということが判つてまいります。やがてそうしていあうちに誰か畠が入つてまいりまして、最初山口市にはニュージーランドの兵隊さんが入つてくるんですが、オーストラリア軍、ニュージーランド軍、一緒に入つてくるんですが、やがて秋吉台のこの草原を利用して演習を始める。毎日毎日すごい演習をする。まあこんなトラブルもあったということも聞いてますが、開拓団の人が一生懸命で細を作つて、そうしたところがそこへオーストラリア軍、ニュージーランド軍が畠の中を走り回つて演習をする。大変被害を受けた。こんなことどうなるかと言うので開拓団の方が國やオーストラリア軍に抗議を申し込むということになります。そうするとむこうから「それは申し訳ない事をした」というので、保証を払いましょうということで保証金が下りた。「その金額がすごかったんですよ」と言っておられました。昔は「円」が非常に重かったものですから、支払う側にしてみれば大した金額ではなかったのでしょうか。受取る側では大変たくさんのお金を頂いたといふ感じがしたんでしょうね。そういうことがございます。やがて演習場も米軍に移つて、自衛隊ができましたと自衛隊が演習をする。この草原の中で駆船を構つて走り回る兵隊さんがたくさん出てくる。そういうことで演習場として使われてきます。

ところが昭和31年に大変大変な事件が起つた訳です。それは何かと言うと、今の岩国の大兵隊、岩国に海兵隊の基地がありますが、そこから飛びたつた飛行機が秋吉台の上にやってきて、剣山という山を中心に空爆、ナバーム弾を行なうという空爆演習場として使つた。今までのようになど兵の歩兵が走り回るというんじゃなくて、ジェット機で空爆をするという演習場に使つた。と言う申し入れがありました。これには山口県知事さんも困つたし、秋吉台長さんも長東町長さんも困つた。どうするか。「反対しよう」ということになりますて反対運動を起こす訳です。ところがこの反対運動は大変大きな影響をしまして、それが成功するんです。秋吉台は、先程も申しましたように、小澤先生の研究以来日本列島の起源を論じる大変重要な山だ。これを「たかが戦争の演習でやつていい

のが」ということで、山口大学に松山基範先生という地質物理学の大家がおられまして、九州大学の先生だとたくさんの方々が秋吉台を研究する人達が集まってきて真正面から米軍とやり合った訳でございます。当時の小川井知事さんの話を聞くと「アメリカ軍はグランドキャニオンやナイアガラの滝で空爆演習をやりますから」ということを言ったといふんですね。そしたら米軍の司令官は「いや、そんなことはしない」と、「秋吉台がそんなに学術的に大切なところなら、それは我々が空爆演習をするのは間違い」ということになりました。秋吉台から米軍が撤退していったんです。今沖縄問題で大騒ぎをしておりますけれども、米軍はなかなか普通のことでは撤退しないのですからいいわゆる国宝のようにならぬかといふに「人類の宝」、大変重要な山だということになりますと、それは話が違うということになりましたという、日本では非常に数少ない歴史反対闘争の成績じゃなかったかなと感ります。

やがて米軍が去っていくと、秋が秋吉台、美東町も大変喜びまして、やがて観光の新しい町づくりが進んでまいります。それまで秋吉台だけお客様を集めていましたが、秋吉台の上にも上がられる、秋吉台の壮大な草原を見ることができる、楽しむことができるということで、やがて秋吉台の観光開発が進んでいった訳でございます。

せっかくみなさんおいでになられたので、秋吉台の素晴らしい、美しいといったものを、今日も向こう御でたくさんの方々の写真の展覧会をやってありますので後でご覧頂きたいと思いますが、地元の方々が秋吉台に取組んで一生懸命になって写真を撮っておられます。「秋吉台の自然に親しむ会」という、自然に親しもうという方々が秋吉台で勉強しながら写真を撮るというので展覧会をやってありますので是非見ていただきたいと願うのですが、私もちょっとここにスライドを用意してありますので、20分くらいちょっとスライドをご覧頂きたいと願います。

皆を出して下さい。

(スライドBGM 以下は藤本氏によるテレーラン)

秋吉台は石灰岩の山です。
3億年の昔、海の中の生物が珊瑚礁を造り石灰岩になりました。
秋吉台の石灰岩の中にはおびただしい数の海の生物の化石が見られます。

秋吉台の春は台地の中からやってきます。
焼け跡にフキノトワ、ベニヤマタケが跡を出します。
ベニヤマタケの赤は秋吉台の赤土の色を集めた見事な赤です。
いはらくするとたくさんの方々が芽を出し始めます。
最も春も十日目に伸びきらないうちから、もう花をつけ始めます。

ヒバソウアリ、オキナツツジ、こういった野草たちです。
こうなると後は野の草たちの大洪水。赤、紫、黄色、白、色とりどりの花がカルストの野づらに咲れます。

5月を過ぎると秋吉台にはまた別の野草が花をつけます。
シャクツイバラ、ムラサキ、カキランなどです。
そして梅雨の季節には连日の雨、「春雨」には一頭的な観もあらわれます。

雨が上ると猛烈な暴風が台地を支配します。
人々は大きな木の下で涼みます。
コオニユリが美しい花をつけます。

6月を過ぎると秋吉台に秋の気配が強まり、クズ、ネコイウ、ススキ、ハボといった秋の七草が花をつけ始めます。
夜には、マツムシ、カンタツ、コオロギなどの虫たちの大合唱、秋吉台が最も聞く季節です。

10月になると秋吉台の主人公、アキヨシアザミが花をつけます。
そして夜の冷え込みが強くなると、草は色づき始め、紅葉が始まります。
この頃になると夜明けに露が立ち始めます。
周囲のボリエを覆う露、秋吉台のせんを南北に走る露の川。
幻想的な風景が浮かび上ります。

12月になると秋吉台の草は枯れ果て、昇華した枯れ野が現れます。
それでも雨や雪が降ると、草は急に生氣を取り戻し、芽を始めます。
秋吉台の冬景色で最も心をとらえるのは雪の原でしょう。
雪が石灰岩をすっぽりと覆うといろいろなモンスターが現れて私たちを驚かせます。

2月の第3回雪は「山焼き」です。
1,000人もの地元の人々が台地を取り囲み、花火を台地に一斉に火を放ちます。
火はたちまちのうちに燃え広がり大地を焦がしてしまって、火は風を呼び、風は火を運らせ大地は焼けていきます。

山焼きが済むと秋吉台は黒一色。
それでも晴れの日が降ることもあります。
この地方の人は「晴山焼き」と呼んで、この雪に懸念を込めます。
台地の草は石ごとに焼くなり、草が芽生えて日に日に色づいていきます。
そして再びベニヤマタケの赤に出逢います。
こうして秋吉台の季節は繰り返されます。

秋吉台は生物圏の世界です。岩の中に閉じ込められた3億年前の湖の動物や植物、そして赤土の中や洞窟から出てきたニッポンサイやトワヨウソウ、オオツノジカといった50万年前の動物たち。そして今秋吉台で出逢える草や虫。時の流れの中で命は確実に伝えられ、命の續が出来ました。この命の續こそ、私たち人類を支えてくれているのです。

(スライド終了)

秋吉台の四季をちょっと見ていただきました。山焼きが明日おこなわれますが、今のスライドで見るよ。あんなちやちなのではございません。もうホントにすごい感動を伴うものでございます。

秋吉台の利用もやがて観光時代を迎える。世の中がここ20年、30年のうちに大きく変わりましたね。

何も無かった時代から、段々と車が増えてきて車社会へ、農業も、ひとつひとつクワで耕していた。そういう農業から機械化が進んでいきました。やがて肥料も何も草を使う必要はない、化学肥料でいこうというそういう時代に向かう、大きく変化をいたしました。

それにつれて秋吉台の利用の仕方も確実に大きく変わってまいりました。それまでみんなが競うようにして草を刈っていた草原も段々刈る人が少なくな。やがて観光客が増えて、小さな道を車が走るのではどうにもならないと、「長者ヶ森」の中に車が駐車場のようにに入るという時代もありましたが、これも困ると言うので、やがて有料道路、秋吉台の自動車道路ができた。これも賛成、反対をめぐって盛んに議論された訳ですが、秋吉台の中央を、現在は車が走っています。まあそういう時代です。

やがて、「今何が起こってきているのか」と言うことになる訳でございますけども、農業としての利用の仕方は非常に少なくなつてまいりました。どちらかと言うと観光主体の利用の仕方。観光も今までの秋芳洞中心の観光から秋吉台の上を歩く。いわゆる楽園らしい草原に触れて心を癒していくなど、そういう観光が広まつてくる。まあ「エコツーリズム」というような形のものが段々と進んでくる。という形のものになってきております。

私は長い間自然公園の指導員をさせていただいておりまして、假があれば秋吉台を歩くようにして居る訳ですけれども、毎年報告をする義務がございまして、報告にここ20年くらいずっと同じ様なことを書いてまいりました。どんなことを書いてきたのかというと、秋吉台の上には歩く人が段々増えてきた、いたるところで歩く人たちのために道が整えて、土や石が流れて非常に土壌浸食が盛んに起こつて、もうどうにもならない。これをなんとかして直してくれないだろうか。ということを毎年毎年書きました。つまり秋吉台の上をたくさんの人利用する訳ですが、利用すれば必ずどこ

か壊れる。規模の大きいいいさいは別として、やはりどこか壊れるんです。だから壊れるとこを最初から少しづつ計画的に修復していくかないと、流れるままに任せているんじゃいけない。よく考えてみたら、縄文時代以来、秋吉台を丁寧に修復するということは掛けたんじゃないだろうかと感じる。

まあそれはちょっと大袈裟な話ですが、實際に「ワイスユース」ということが今盛んに呼ばれている。昭和30年ですかね、秋吉台が国定公園になりました、「かしこい利用の仕方」。遠さないで利用しようじゃあないかというのが進んでいるのですが、これは諒に理想的なお話ですね。ですが實際に山の上を歩いてみると壊れている。

例えは「長者ヶ森」。秋吉台の中心にある「長者ヶ森」に行きますと、300年も経ったような大きな樹が森を造っている。簡単にできるものじゃない。その森の中に入つてみると、大きな木が一本倒れ、一本倒れ、一本倒れ。で、太陽の光が入ると樹が生えるかと思うと自然駄目なんですね。何故かと言うと、長い間森の土を詰め固めてしまつてカツチカツチにしている。近頃は園芸ブームで落ち葉を拾いに来る人がいて、ちょっとこれは困ったことだねあとということで、そこを利用していくと壊れしていく。例えば「若竹山」だと「北山」という山ですが、大変興奮がいいんです。大変跳ねが良い訳です。皆さんそこに上がる訳ですが、やはりたくさん的人が行きますと「オーバーユース」になりまして、使い過ぎになります。草がやがて子切れ、割がれて、土になって、土壤浸食を起してしまつ。これは大変困ったことです。

山口県では今から6年位前ですかね、壊が悪いって何傷というお金を使って込んで修理してくれたんですよ。「若竹山」と「北山」と。これは素晴らしいということで、国定公園にとっては課題のことだといつて私は大変痛んだ訳でございます。

これからは秋吉台を大いに利用していくなければならぬししかし利用して壊してしまつたのではどうにもならない。「壊れない利用」というのはちょっと考えられない。だからそこで研究をしないといけないんですね。「壊れないように利用するためにはどうしたらいいか」という研究から始まって、常に秋吉台の「健康診断」をしながら、私たちも健康診断を受けてますね。健康診断しながら、少し懶いところがあつたら早く手を打つですね、直していくと。そういうことがこれからはとても大切になるんじゃないかなあとということを感していいます。

とは申しましても行政にそれをお願いするというのはなかなか参りませんので今の時代は「ボランティアの時代」ですから、ボランティアでやろうじゃないかということですね。「秋吉台パークボランティア」。秋吉台の修復をすることを専門にしたボランティア活動をたくさん的人が集まつてやっています。本日の実行委員会の中にも「秋吉台パークボランティア」のメンバーも居つておりますね。

お村会の中でもまたそうした話が出るかと思いますけれども。まあこれは、ただ使いつばなしといふんじゃなくて、嫌さないようにするにはどうしたらいいかということを一生懸命みんなで考えながら利用していく、そういう利用の仕方がとても大事じゃないかなあとという気がいたします。

秋吉台をこうして見ておりますと、演習場の時代から放牧場もできましたし、草をみんなが持って帰って困る、虫が少なくなった、といろんな時代でいろんなことが行われて来た訳ですけれども、これからは、それこそみなさんと一緒に議論をしながら、英知を集めながら、固定公園として、自然公園として正しい利用の仕方を積極的に推し進めていって、すばらしい秋吉台を守るといいなあと思います。

秋吉台の草原もですね、今から20年くらい前ですかね、ネザサが一齊開拓してみんな枯れてしまいました。自然の「大実験場」です。これは、やがてそこから芽が出てきて、それもチガヤ(第)とかスキがバツツと開花したんですが、やがてどんどんどんどん目に見えながら変わっていく、スキが少なくなったネザサが多くなってきております。また温帯化の影響でしょう、草丈も随分高くなっています。また、「わあこれはすごいなあ、今歩かれんね」と心配しておひましたが、その高い草の下にヒナノシャクジョウだとかホンゴウソウだとか、その下に生きる植物たちがまた芽生えてきて、〔おっ〕といつて見ております。いろんな虫、バッタやあるいはカタツムリの仲間、キュウシュウシロマイマイなんていうカタツムリもいるんですが、これは深い草の間を非常にうまく利用して大根穴を開けております。秋吉台の上を歩いておられますと、草丈の非常に高いところもあるは非常に低いところもありまして、本当に多彩な植生が見られる。それを見て歩くとワクワクするような面白い現象がたくさんあります。このカラカラに乾いた草原の中に湿地植物、そんなものがバツツと生えている。そんな場所が延々と出てくるんです。何故そんなことが起こっているのか、石灰岩の間にある小透層が深くから水を含んでくるということも考えられますが、自然というのは本当にぬめども尽きない、大変素晴らしいものでござります。

地質学的研究、化石の研究、カルスト地形の研究、動物や植物の研究。今、草原がですね、日本中から姿を消してしまって、絶滅の危機に立ち至った状態となりました。秋吉台には絶滅に瀕した昆蟲があり、また絶滅の危機に瀕した動物や植物がいっぱい中でいる訳です。これを大事に守らなければならぬ。秋吉台にとって「新しい草原文化を守ろう」という動きがござります。

まあ、こうしてみなさんも今日、明日と秋吉台に実際においで、「どうしたら秋吉台を守れるか」という意識をなさる訳ですが、是非活発なご意見を頂いて、素晴らしい秋吉台を後世に、素晴らしい草原を後世に伝えていきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

大変まい見事講演になりましたが、ご聴聽ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。
聴衆を交えての大変素晴らしいご講演でした。大変ありがとうございました。
一度大きな拍手をお送り下さい。

■第1分科会

『観光と保全』

—事例発表—

事例発表 秋芳町わくわく村村長
松原 勝夫

平尾台の自然を考える会
浦田 健作

防長交通株式会社観光部長
春野 義一

進行 熊本大学法学部教授
佐藤 誠



佐藤

「観光と保全」の分科会を始めさせていただきます。最初に報告をしていただきますみなさんをご紹介いたします。最初は防長交通株式会社、観光部長の春野義一さん。

春野

うこ紹介をいただきました。防長交通の観光部で部長をやっています。春野と申します。よろしくお聞いいたします。

佐藤

2番目に秋芳町の「わくわく村」村長の松原勝夫さんです。

松原

「わくわく村」の村長をやってあります。松原です。地元の者です。

佐藤

2番目に「平尾台の自然を考える会」の浦田健作さんです。

浦田

浦田です。よろしくお聞いします。

佐藤

進行でございますけれども、それぞれの立場からご報告をいたたいて、その後、ごういう構になって座っておりますのは、みなさんと一緒に、是非、共同討議という形で、実りのある時間が過ごせればと願っております。お三方の経歴や、やっておられる内容に二きましては、レシヨメに載せて

おります。

それでは自己紹介も兼ねて、発表の時に、ご自分で必要な自己紹介をお願いいたします。早速ですけれども、まず最初に、春野さんの方からお願いします。

春野

はい、では私は、まあ旅行業というような観光業界代表、または、旅行業を通しての意見というものを今から少し、話しさせていただきたいと思います。

みなさん方もご存知のように、最近の旅行といいますのが、まあいつゆる、昔からの「日所・名跡めぐり」というようなもので、お客様の動きの大半はそちらの方に行っておられた、というふうに動いておりました。最近はお客様のニーズも変化してきました、特に「自然志向ブーム」、特に「健脚ブーム」だと、また、「登山ブーム」等で、それに「ガーデニングブーム」、まあそういうものが相まって、最近は、火牛のお客様が花や自然を求めるツアーに人気が集中しているという現状です。専門的なツアーとしては、最近は「ウォーキングツアー」だと、または「登山ツアー」というものが、年々、そういうものの遊興傾向が強くなってきております。秋吉台においても次第や九州の方から「秋吉台のウォーキング」というようなもので来られるお客様が年々増えてきている、ということを秋芳町さんの方からお聞きしておりますし、私も実際に経験させてもらっています。

で、今までのツアーのように日所・名跡、またはきれいなものを空に遠くから見るというようなツアーでありましたら、規定された場所である程度一定の箇所にしかお客様は行かなかつたんですけども、最近はやはり「ウォーキング登山」ということになりますと、かなり奥の方まで入って行きます。そういうお客様の中には、やはり自然の醍醐寺

の認識の薄いお客様もいらっしゃいまして、自然破壊につながるような行動をとっていかれるというケースがかなり増えているのではないかと思います。まあそういうように、これら登山だとが増えてくれば、一番悪いのは、珍しい花の盗掘。特に秋吉台には貴重な希少な植物があります。まあそういうものの盗掘。登山なんかにいたっては道路の施設、先駆、鹿本監修も言っておられましたけど、「秋吉台上に多くの人が足を踏み入れることによっていろんな崩壊が始まっている」というようなことも、先駆、監修が苦られておられましたけども、やはりそういうものにつながっている。またトイレの問題ですね。これがやはり、特に自然環境の中では非常に難しい問題として最近取り上げられている、ということを聞いております。

で、一番悪いのが、秋吉台もそうなんですが、もう既に出来た道路なんですけれども、観光目的、まあ実際町住民のためだ」とか「地盤住民の交流のためだ」とか、という目的で道路が作られていますが、最近はどんどんどんどん奥地への道路建設が進み、まあ、自然環境がかなり悪化に進んでいると、我々業界にとっては大変有り難いことなんです。遠くまで道路が伸びて新しい観光地が増えれば、我々も発展がやり易くなっていくんですが、逆の面で恐い部分が、問題があるなど最近とみに感じ始めました。まあ最近では、地元の反対運動が盛んになっているような道路建設も中止になるというリースもあるようです。

で、じゃあ「この秋吉台においてはどうか」と申しますと、やはり、それだけ多くの方が入ってくるということになると、いろんな、まああの登山でもそうですけど、靴についた種子がそこに落ちて新たな芽を出す、いわゆる「帰化植物の侵入」だと、また、さっき言いましたように「貴重な植物の盗掘」といった問題が出てきております。特に秋吉台におきましては、帰化植物の侵入は、台の観光地的な価値が高まるにつれて、展望台を中心とした建物附近、歩道、駐車場、または台上を走る秋吉台道路沿いなどの施設の増加とともに、その付近からの帰化植物が問題化されているということを報告されております。

では今後どうしたらいいのか。まあいわゆる「自然環境」というのは我々に取っては大事な観光資源の一つでもある。ただそれを我々観光業界として「ただ利用するだけいいのか」という問題が存在すると思います。まあ、そういう問題に今後、我々はどのように取り組んでいけばいいのか、ということを少し考えていただきたいなどというふうに思っております。

私もですね、実際は7年前くらいから登山ツアーを社内で始めました。で、私も直面しまして登山については業者なもので、どうしていいか分からぬということで、地元の登山用具専門店の方といろいろ相談をさせてもらった訳なんですが、まあその方から「登山ってのはそんな簡単なものじゃないよ」ということで、いろいろアドバイスを受けながらやり始めた訳なんですけども。

私のツアーでは、今、登山に行く場合は、リーダーを2名必ずつけます。そして2名のリーダーが必ずお客様をご案内するというシステムをとっておる訳なんですが、私たちのリーダーっていうのはやはり登山経験の豊かな方が多くて、まあ、それだけ山に愛着をもっているというんですかね、当然ながら登山の心得だと、安全に対する心得は当然されますが、「山の自然を大事にしてほしい」ということを必ず言います。で、今、目の前にいくらきれいな花があつても決して取ってはいけません。これはあなたのものではありません。これはみんなさんのものなんですよ。あなただけのものにしてはいけませんよ、ということを必ず言います。そして、山に行った場合は当然のことなんですが、ゴミの持ち帰り。岩慢して言う訳じゃないんですけど、私たちのツアーのお客さまはほんとに粗野な一枚落としません。全部持て帰られます。まあまたまた手弁当などを包んでいた袋等が風で飛んでしまったというようなときでも、走って取りに行きます。なぜそういうことを思うのかというと、やはり「ツアー」というものはですね、お客様をご案内するだけじゃなくて、やはりお客様に対するそういう「啓蒙運動」ということも当然大事になってくるんじゃないのかと思います。いわゆる「観光客のマナーが悪い」ということ、よく言われます。また山小屋に行ってもですね、「登山ツアーのお客さんはマナーが悪いからやだ」と、いうような話も、我々聞きますけど、まあそういうツアーであつてはいけないということで、我々としては、私達の目を楽しましてくれれる自然を、とにかく大事にしていきたい。

で、そういう考え方のとて昨年の9月に秋吉台さんと話しをさせていただきました、「カルストウォーク2000」というものを去年の9月に開催させていただきました。その「カルストウォーク2000」の目的というのは、やはり秋吉台の自然ですね、これを守っていきたいと。私達の仲間にもやはり秋吉台の花が大好きで、ずっともう、月に最低1回以上は秋吉台に来て花の観察をしたり、または自然の保護運動、たぶん仲間の方がここにいらっしゃるんじゃないのかと思いますが、そういう活動をされている方もいらっしゃいます。で、まあ、そういう「カルストウォーク」を始めた要因というのは、やはり「日本の草原」というのはですね、自然には成り立たないんだと。日本の気候風土というものは、林や森をつくる気候風土であって、草原というのは「人の手」を加えていかないと守れないということを、我々は分かっていますが、一般的の力にはなかなか分かっていただけない。まあ、そういうことを知っていただきたいという目的と、レジュメの方にも書いてござりますように、たまたま私、買った本ですか、若川鶴也さんという方の書かれた本で、「山を愛する」というふうな本があります。その中の一文で、ちょっと気になった一文がありまして、レジュメの中でも書かしていただいたんですけども、北海道大学の小野教授という方がですね、北海道の盗掘が全国で一番ひどい、ではないかと、その本の中で書かれておられます。なぜかっていうと、

本州の山はお花畠が小さいうえに登山者も多く、それが結果的に相互監視となり、盗掘がしぐらくなっている。ところが北海道の山は人の山小屋も少なく、また標高が低くて盗りやすい山が多い反面、高山植物の種類が豊富で盗掘しやすくなっている。まあそういうことで、道内ばかりか本州からも盗掘団がやってきてているようだということで囁いておられる、という文書を読んだときですね、秋吉台もまあそれに似たような環境にあるんでなかろうかなあと。というのは、高山植物にはみんな興味をもつていらっしゃるんだけど、秋吉台にそんな貴重な花があるとは、一般のお客さまはなかなか知っておられない。ですから逆に言えば、そういう花をそのへんの花と同じように摘んでしまわれるんではないかという危険性を含んでいます。それから秋吉台道場が秋吉台の真ん中を走っていますので、駐車場も「長者ヶ森」の南側にもあります、展望台にもあります。簡単に行けます。まあそういうことで北海道の山と似たような状況を持ち合わせているんではなかろうかな、というふうに私も思います。で、やはりそうなれば、お客様にですね、一般の方に、秋吉台に如何に貴重な花がたくさんあるのか、また大事にし、それを守っていかなければいけないのか、ということを我々が訴えていかないと、なかなか理解してもらえないんじゃないのかと。また、これは組織の力を作って、またそういうような啓蒙運動で訴えんですか、そういうのを進めていかないといけないんではなかろうかと、いうふうに感じ、この「ウォークフェスティ」を開催した動機にもなった訳です。

またこの「ウォークフェスティ」は、宣伝っぽくなりますが、今年もまた実施させていただきたいと、そういうふうに思います。そして、前回は予定して出来なかつたんですか、秋吉台を守るために「基金活動」。そういうものもぜひこのウォークのなかでやっていきたい。そして、秋吉台の自然を理解し、またこの秋吉台の自然を維持するためにどれだけの苦労があるのか知ってもらう。そしてその上で基金をお願いしたいな、というふうに計画しております。

まあ、要は、我々観光業界にいる人間が「自然をタダで利用してはいけない」。やはり利用させていたく限りにおいては、この資源を守っていくために我々が何かを、行動を起こしていくしかけない時代に入ってきてるんではなかろうかと思います。観光業界というのはいつも言われますが、自然破壊の一端を担っているんじゃないのかという見方をされております。現実にそうだろうと思います。私もいろいろな山に行ったり、いろんな観光地にお客さまをご案内しながら、今までそういう世界を実際に自分で見てきておりますので、まあ、せめて地元のですね、秋吉台を手始めに、これから自然を守るために活動をですね、是非進めていってみたいなというふうに考えております。

佐藤

どうもありがとうございました。たいへんすばらしいお話

して、従来、おしゃるように、観光と環境は矛盾しがちで、歐米でも「ツーリズム・テロリズム」と、観光が環境のテロ活動に手を貸すという強い批判もありますし、また日本でも「エコツーリズム」と言うけれども、これはエコツーリズムではないかという批判も出て、大変難しい問題があります。そして最近本を読んでいて、日本の観光について深くおもえになった宮崎亮一先生という方がおられますけど、彼が「観光を考える」という本の中で、自然を愛するということは、美しい自然を見て、親しみ、活用するという意味じゃない。そうではなくて、自然を守り育てることだ、と。彼の日本人はそれを信仰の力によってやってきたんだ、と。ところが現代では自然が好きだと言うと、木や草、動植物を大事にするというよりは、むしろ自分の好みで自然を使う、というような動きを取りがちである、ということを非常に懸念されておられまして、「新しい仕掛け」が必要だということを言っておられたことを、今、思い出しました。ほんとうに遊元の人と、どういふうに、大事な自然を見てながら一緒に歩んでいくか、ということを考える瞬間に来たと思います。

次、松原さんに、懇親をしながら、この魅力の源泉を守ってこられた立場からですね、新しい、地域で実践されていくことやお考えを述べていただきたいと思います。どうぞよろしく。

松原

先程「わくわく村の村長です」と言いましたが、村長といいましても、あの、背広着て、イスに座っている村長じゃなくて、ウチの集落でイベントをやる際に「わくわく村」という愛称をつけておりまして、その中で「おまえ村長ということにしなさい」という程度の村長です。

ウチのところは幹線道路からも外れていて、ホントの「田舎」という中にある訳です。ウチの集落は、この秋吉台の東西、要するに北側と西のちょうど真ん中あたりの、ホントに書院の奥みたいなところで、まあ(外部との)交流の少ない場所にある訳ですが、それだけにいろいろな「観光資源」がある訳でございます。「観光資源」と言えば非常にカッコいい訳ですが、自分たちの住んでる周りには、珍しい、恐らくよその人が珍しいと見てもらえるものがたくさんあります。まあそれと、ウチの一帯大きな崖になりますが、奥とは言ってもこの秋吉台の近くに位置しているために「山崩れ」とかいろいろなこう大きい行事があるということです。

まあそういうのですが、なかなかこの「山崩れ」日本も、ウチの集落もよそと変わりませんで、老齢化した中での「山崩れ」、「火道切り」となっておる訳で、みんな崖を取つて山崩れなども非常にしづらくなっています。山に上がるだけでも大変だということで、一昨年、ああ、昨年ですか、「作業道路」というのが、やっと廻解されて、山の(作業現場)近くまでは車で行けるような道が出来ました。しかしながら、まあ「道」がついたからといって歩きができる訳じゃなくて、や

はり「人」がないとこの山焼きさまでできないということです。まあそういうことで、私のところは昔から秋吉台とのつながりが非常に深いところであります。秋吉台を利用した者からの歴史が伝わっている訳です。今では段々変わってまいりましたが、以前は、例えば秋吉台のスキ、こりゃまあ「鹿鳴堂」と言いまして、鹿鳴を音く材料に使用していました。それからまあ、当然どこかの家にも家畜がありまして、これがいなかったら困る餅ないので、家畜のエサにするために草を刈っていました。それから今みたいに化学肥料というものが無い時代には、草の有機物を肥料として利用するために採集していました。それから、まあ昔ですので、ガス、電気がまだ非常に少なかった時代、炭焼きが非常に盛んであったと。そしてまたその炭焼きの灰を入れる、ここでは「ダツ」と言っていますが、そういう入れ物を作るのにもスキを使っていました。

ところが時代もどんどんどんどん変わっています。今ではほんとうに秋吉台の草原、せっかくの「資源」ですが、牛もトラクターに代わり、肥料も化学肥料に代わり、屋根もほとんどの屋根が瓦に代わったということで、秋吉台の大きな「資源」が、あまりにも使われなくなつたということで、(昭和)20年代以降、非常にこの秋吉台の利用率が落ちてしまつりました。秋吉台にはドリーネーと、といって陸地がたくさんあります。これを利用した煙(の跡)がたくさんあります。この煙は秋吉台にあっても個人所有になっておりますけれども、これも戦後、食料のない時期には、イモを作ったりゴボウを作ったり、勿論、イノシシが喰りますので、イノシシが食べないようなもの、そばなども非常によく作っておりました。しかしながら、ほとんどこれも時代の流れで飛んで、今では大體の煙の跡が残つておるだけだということです。

まあ昔はいい道がなかった訳で、みんな刈った草を馬にしよわして(背負わして)、馬で運んでいった訳です。まあ今はいい道が出来ましたので、草原の近くまでは車でも行けるという、非常に便利にはなりましたが、しかしながら少しきち言いましたが、時代の流れで、努力の非常に掛かる作業だということで、刈り取りが非常に少なくなった。ただ、今でも部分的には、かつて放牧場であったという場所があります。部分的にはそこで採集して、家畜のエサに、農業組合の方はしておられるようです。

まあそういうことで、時代がどんどん変わってまいりますので、私達も秋吉台との「つながり」が、いろんな「思い」が変わってまいります。私達の若い者のグループですが、「とづてゆかいいな秋吉台ミーティング」というのがあります。これはなんで始めたかと問うると、やはり先程申しましたように、秋吉台の自然を守るために山焼きは欠かせないんだけども、過疎化、老齢化で山焼きや火消しが火消しであると、どうしたらいいかというのが一番根本にあって、それではみんなに秋吉台をたくさん見てもらおうと、また知つてもらおうと、ほつたらかしとしてできた草原でないことをみんなに知つてもらおうじゃないかというこ



とで活動を始めました。この「ミーティング」では色々な活動をしています。そばを植えてみたり、秋吉台を観察してみたりということで、いろんなイベントをして、よその人にも来てもらいたい、秋吉台を理解してもらおうという形で活動をしています。

そうした中で私もメンバーの一員としていろいろ勉強をさせていただいているうちに、自分の地域の中でも何か出来んかなあということを思いました。まああの「水の上」という集落ですが、たった18戸しかないような所ですが、里落に戻つていろいろ話をして、ウチにもせっかくこんなに資源がたくさんあるんだから何か出来んかなあ、と話してみた訳です。

ちなみにウチにある「資源」ですが、ウチには「中尾洞」という天然記念物があります。まあ小さい、それも加工していない、「加工しない」というのは電気(設備)が引っ張つてない、あの、電光用の洞窟はお客様が歩きやすいように通路が整備されており電気(照明設備)が引っ張つてあったり(張つていて)しますが、そういう設備のない、昔のまんまの洞窟がそのままあります。今はまあ一般的には閉鎖されていて、許可をもらって(お客様を)室内しておますが、中尾洞はまだ昔のまんまで、洞窟探検のスリルがいっぱいの穴です。まあそういう穴もあるし、あるいは秋吉台を水源とする川、まあ湧水が出るところがある訳ですが、農業の汚染が非常に少ないということでホタルがたくさんいる。それから、秋吉台にワチのところから上かったところですが、「晋谷」といって、秋吉台上で一番大きいドリーネーがあります。秋吉台の高いところにあるんですけど、ドリーネーの底は(秋吉台上で)一番くぼい(低い)と言われているんです。そういう珍しいところがたくさんあります。

ということで、いろんなモノがあるんじゃないかと思うことで、私の利を逆手にとって、「逆手」と言うか「利用」して、よその人との交流をひとつ考えてみようじゃないか、ということで始めたのが「わくわく村」です。まあ先程も言いましたように(集落の人の)年齢は、私が今59歳になるんですが、それでも若い方、あと80歳くらいまでの人は、会え

は「どうか、元気かよ」というような話しかないという回答です。そういう中で、よその人達と話をしたり、いろんなことをして交流をしようと、まあそうすれば話題ないと(話題くらいは)変わらんんじゃないかと、芋焼が話しばかりしちょつたって(していても)楽しくないじゃないか、ということで、まあやってみようかと。

それともう一つは、そういう回答で感動的、あるいはそんな「モノ」を売るにしても、なかなか難しい。今は、勿論運があって、品質が良くてという商品しか流通しません。その中で、来たお客様に「良かったらちって行って下さいよ」と、勿論有料で、お金はいただきますよ。勿論、まあ、ほんとうに(初めからそれで収入を得るために)栽培して、ものすごく手を入れたものじゃありませんから、まあ、物の見た目はぎはららしいもんじゅないかも知れんけど、まあ、「もいで」、「河いで」、「掘って」、「採って」という体験を楽しめた中で、農産物も持ち帰ってもらう、というような形でやって行けたらいいんじゃないか、ということがありました、この「にくわく村」というのを始めました。

始めましたが、実は平成の9年度、最初の一年間は「どういう方法でやるか」ということについて、いろいろな意見を出し合って、いろんな話し合いを一年間待ちました。その中で一番問題になったのが、まあこうしたイベントをやろうすると、どの地区でも一緒にやるか、やはり人手が必要です。やっぱり心配する人(面倒を見る人、受け入れ側)が大変なことが多い訳です。で、そういう中で、じゃあ、出来る所でその「大変なこと」を振り分けてやろうじゃないか、例えば、勤めに出ていている者まで同じ強引な話をして、「今日は休んでやるよ」と、こういうやり方をすると、こういうコトは最終的にはしないと思うんですね。みんながなるべく出て来れない人は原則に出て来なくてよろしい、勿論次の機会のときにはまたお手伝いしてくださいよ。というような形で、なるべく多くの(集落の)人が参加できる日で、あまり忙しくないとき、忙しい時期にはしない。要するに「ウチのところの都合」に合わせようと、お客様の都合じゃなくて、すべてウチの都合でイベントをしていきましょう、というような形で、「最終的には出来るような取り組み方」にしてイベントを始めたという訳です。

それで、第1回目に「山焼き体験」ということで行ないました。この秋吉台はみなさんも心存知のように、山焼きは「見る」ことはできますが、山に「火をつける」ことは決してさせないという。今までの慣例があった訳ですが、それをウチの地区で、平成10年度に、「火入れ体験」お客様に火をつけてもらいましょうと、そして燃えるところをしっかりと眺めてしまいましょう、というようなことを始めました。勿論これは、当然、誰かが火をつけてやるがんじ、地元の人も山焼きにはみんな上がって「火入れ」の作業をせにゃならん訳ですね。そういうことを地元だけじゃなくて、みんなでやろうじゃないかということで、参加者のみなさんに

はよくお話しをして、やはり、経験豊な人が秋吉台にはたくさんおられますので、そういう方に説明をしていただいて、これに取り組んでもらおうということで、平成10年度2月15日、山焼きを行っておりました。

参加された人は本当に感動された様で、こんな体験が出来たということを非常に喜んでくれて、ただ見るだけではなく火入れを体験出来たということで非常に好評でした。お陰でウチの集落も「そんなに喜んでくれるのなら」と、我々は普通のことをやったんだという感覚しかなかったんですが、あまりにもお客様が喜んでくれたので、それはやあということで第2弾、第3弾をいろいろやった訳です。

中には失敗もありまして、例えば「竹取物語」という竹の子を採るイベントを4月にやった訳ですが、これが、竹には凶作と豊作の年がありまして、しかし生える(竹の子が出てくる)までは豊作か凶作か分からぬ訳です。で「やりますよ」という宣伝をした訳ですが、いよいよやろうかという直前にになって、非常に凶作でしてね、生えてなかった訳です。それで竹の子を抱の山からも集めて来て、一応イベントはどうにか済ませたのですが、なかなか自然は我々の思う通りにならない訳です。

その他にも10年度には「夏の秋の収穫祭」、これは芋掘りとそばの収穫という、主に収穫を体験するイベントです。それから、そば打ち体験と越乳育苗機、先程言いました中尾湖の中に入っていただくということでやっています。10年度は都合4回のイベントをやっております。その頃はまだ、あまりそういう「仕掛け」というか、やってみなければ分からんという部分が多かったものですから、(つかる(試しにやってみる)方が先で、そばなどについても、当時ウチのところでは、そばなどあまり無かったものですから、みそからそばを入れたりなんかしてやっておりましたが、今ではそばも全部集落で栽培、加工してイベントをするような形になりました。

それから11年度は、実はお客様がたくさん来ると、イベントの会場として集落の集会所を使っていい訳ですが、わずか13戸の集会所なので非常に小さい、ごじんまりした集会所です。それではなかなか思うようにできないということで、屋根の掛け出しをしたり、そばを打つ台(テーブル)を作ったり、「にくわく村」という大きな看板を作ったりということで、手に事前の準備の方ですが、手作りでいろんなことをやりました。勿論、業者に頼めば済むことですが、ウチは「無農本」、お金がひとつもない中でイベントを行う訳で、始めからちゃんとした予算があって、何があるって、というものではないですから、そういうモノも手作り、みんなが手を集めて、身体を出し合って作ってあります。イベントとしては「山焼き体験」と「夏の秋の収穫祭」、これをやっております。

それから12年度は、やはり「山焼き体験」をやるつもりでしたか、山焼きが延期になりました、結局この年はウチの集落だけで山焼きは行ないました。「意見会」と「そば打ち会」

を12年度にやっています。まあ11年度の山焼き体験は明日に控えておりますが、明日はまたたく間に参加者で計画してあります。

この分科会の話は「観光と保全」ということですから、観光のことについてですが、この「山焼き体験」のことを聞いたと言って、実は山口(市)のある旅館から「旅館に泊めて山焼きに連れてきたいが、お宅で受けられますか。」ということでお話を来られまして、ウチでも「じゃあやりましょう。ただし人数は制限しますよ。」ということになりました。明日、25人程度の方が山口に泊まられて、ウチの体験に来られることになっています。

そういうことで、やはり、「意図的に作ったものではなく、身近な自然の中にあったいろいろなものを使っての体験、あるいは作業ですか、そういうことを通じて、我々は、これからいろいろな交流をしていきたいと思っております。特にこの交流を通して地域のコミュニケーションが非常によくなつたことがあります。昔はやはり年寄りの人が盛り付けていて、何かにつけて「上座に座って」、あるいは「座らせて」という形が多かった訳ですが、まあ、こういうイベントをすることで年間何回も集まって、準備や何かでいろいろなことで話をする内に、お互いの意思の疎通と言ふんですか、イベント以外の話なども、非常に難しい動作などの問題につきましても、今まで以上にみやましい(スムーズな)話し合いをそういうことがどんどん出来てあります。

それと、「わくわく村」に来てくれた「村田さん」ですが、お名前はみんな「村民さん」ですが、今ではイベント以外でも「交流」が生まれまして、話題も色々な話へと拓がっています。私達も、ただイベントをするだけじゃなくて、それに参加した人々の「ふるさと」になるような感覚で、私達も今から続けていきたいと思っております。

「わくわく村」は小さくて、本当に形があるか無いか分からぬ様なモノですが、無投資で、年齢のみんなの協力のもとに、これが行われていることを、私は大変誇りにしております。簡単ですが、以上で私の話を終わります。

佐藤

どうも有り難うございました。

本当に素晴らしい体験故でございました。私も阿蘇の「野焼き」が出来なくなつて、どうするかということで、3年前ぐらいから都合の人にボランティアを頼んでしまって、今、数百人くらいのボランティアが参加して阿蘇の野焼きを行なっています。

当初は地元の人たちも、野焼きというものは死者が出るくらい危険な作業だからボランティアに野焼きをやらせることは絶対ダメだ、遊び気分、観光で来ちゃあいけない、というふうに言われてありました。ですから、きちんと組織立てて、ちゃんと研修もして、危険性など、野焼きについての認識をしっかりとさせた上で野焼きボランティアとして参加するようにしたんですね。そしたらですね、非常によくて、今

年は多分1,000人くらいになるんではないか、多分500人に5,000人の参加者が見込めるだろうというふうに考えています。マスコミなんかが書いた後には電話での問合せなんかがエラクすごく、参加したいという意欲っていうのは、強烈にこの1年で伸びてきているんですね。

それで、参加した人たちと地元の人たちが話し合いをしたときに、今「いくわく利」っていう名前が出てきましたのでたまたまのようですけれど、福岡から来た人が、印象強い言葉を言いました。「ワクワク、ドキドキ、ハラハラ、そして笑顔。私にとって野焼きはレクリエーションです。」と、結局、始めてのことなのでワクワクしたし、相当危険が伴うことでドキドキもしたし、実際火が飛んできたら「火消し棒」で防火しちゃいけないから責任が非常にかかるつくる。しかしそれが終わって、もうススだらけになって、達成感というか「いやあ、やったぜ」という感じがあるんですね。

そしておっしゃったように「あること」にあるという感覚。それは私共も同じで、それは長く分かります。その後の交流会も非中あって、一緒に竹で炭を焼こうとか、もう「観覧付合」をやりたいという地元の意向と、(参加者は)九州全県から来ているんですけれども、「観覧になりたい」という、そういう層といふのは、何かこう共通して在るような気がいたします。

お話をかけないで集落のコミュニケーションが活動になっている、って言うところも何か共通するものがあります。私共では「桜宿旅行の野焼き体験」も今年から始めております。高校が200人くらいですけれども、やってみるとそれが「商品」になるんですね。で、一人あたり2,000円くらいをいただくんですけれども。

実は「エコツーリズム」っていう言葉がありまして、「観光」って言うのはちょっと昔の言葉で、最近は、体験型、グループ型のツーリズムって言うか、それになっております。例えば福岡市なんかは「環境教育」っていうことで一昨年くらいから始めて、今年は2,3,000人くらいの観光客、いや修学旅行客を説明しておりますし、JTBとかのエージェントがすごく熱心なんですね。そういう意味では、私は「環境」ととかは、流行のプロの春野さんもおられますけれども、「有望な商品」になるだろうという気がしております。海でアートをしていただきたいんですけども。

次に、司会ばかりが喋っていてはいけないので、浦田健作さん、浦田さんは、ちょっとご紹介しておきますけれども、東京都立大学で、ご専門は非常に難しい「洞窟学」などを研究されている理学博士でいらっしゃいます。そして北九州で洞窟所なんかからも練りにされていらっしゃる方で、ご出身が北九州ということもあって、東京から足繁く通つて、「平尾台」に聞わっておられる方です。じゃあ、よろしくお聞いなさい。

河田

最初に、自分のことを紹介させていただきたいんですが、私、今お話ししていただいたように、北九州市の戸畠というところで生まれ育ちまして、北九州市には郊外に「平尾台」というカルスト台地があります。「秋吉台の象分」のようなところでして、非常によく似たところです。子供の頃から洞窟などで平尾台に行きまして、秋吉台と同じように不思議な形をした岩がたくさんあつたり、地下の鍾乳洞などがあって、すごく興味を持ちまして、まあ趣味としてですね、洞窟探検、ケーピングをやっておりまして、それである、北九州地元の友人といっしょにケーピングを中心としたアットドア・スポーツのグループ、「カマネコ探検隊」という名前なんですかね、それをつくって、初心者の方を対象としたケーピング教室などを開いたりしています。それから自分の専門の研究として、大学で地質学、それから地理学の分野で「カルスト地形」を研究しています。

それでは、そういうふうに研究していきますとですね、最初は地質学でその岩石だけを調べたり、地形を調べていたのですが、結局はこのカルスト地域というこの不思議な場所がどうして出来たのか、いったいそこで何が起こっているのか、なんかその地下で洞窟ができたり、地下水が流れたりしてますよね、なかなか分からぬんですね。それを研究してみますとですね、結局いろいろなことが関係していくんだということが分かってきましたし、地質も地形も地下水も、それから生物や植物、それから土壌なんかもですね、全然が相互に関係してカルストを構成している。鍾乳石ひとつ出来るのにしてもですね、地上にどういう生物がいるのか、どういう植物が生えているのか、雨の降り方とかですね、雪の降り方、そういうのが密接に関係しているんだということが分かってきましたし、博士論文をまとめる段階で「カルスト・システム」という言葉をでっち上げてしましました。これはまあ、そういういろんな自然界の現象が相互に関係しているという意味で「カルスト・システム」というふうに呼んで、後の話でとことこ、ところどころで出てきます。



まあ、簡単に言えば、「カルストの出来る仕組み」ですね、仕組みがある程度分かってくると、そこに住んでいる人間がですね、どんなふうにそれを利用しているのか、そういう人の暮らしなんかがやっぱり影響しているというのが見えてくる訳です。それがいいのか悪いのかは別にして、どれくらいの影響が自然に及ぼされているのかということを少し見えてくるんですね。で、そういうことから、平尾台の保全、環境保全にはどんなことがいいのかということを最近考え始めているところです。これはちょっと、自分の本当の研究、専門から外れるんで、まだ勉強中です。例えば、生態系なんかについてもですね、勉強しているところで、そのへんのことについてですね、みなさんのお見を聞いて、教えていただきたいと思ってやってまいりました。

それで、今日は、平尾台の事例を話すのですが、今回は「観光と保全」という分科会なんですが、実は平尾台のカルストは、秋吉台のよう、わざわざ「昔ながらの観光」というものはあんまりないんですね。みやげもの屋やレストランやホテルが林立してお客様を広く呼んでくるということが、平尾台ではほとんど興っていません。観光用の鍾乳洞がいっぱいありますが、小さなものであまり人も来ていませんし、管理入さんは、あんまり人が来ると面倒だがらうるさい、とかいうぐらいの感じなんですね。それから、あんまりご飯を食べるところもない。観光地として整備しようとしたこともあったんですが、なかなか問題があって成立しなかったんですね。なので、今日は「観光」だけに限らず、「開発」、「土地利用と環境保全」ということをですね、「薪焼き」、「草原維持」ということを中心に考えてみたいと思います。

じゃあ先ずですね、「平尾台の紹介」ということで、スライドを見ていただきたいと思います。お願ひします。

(以降、時折スライド、DHPを指し示しながら報告)

はい、これはですね、平尾台の北にある台地の壁っこですね。この写真の左側が小倉の街です。後で地図をお見せしますが、小倉の街から30分くらいで台地の上まであがってこれます。台の周囲はですね、こんなふうな急な斜面に取り込まれてあります。これは秋吉台と同じなんですが、昔からの標高が秋吉台の倍くらいあります。台上がですね、海拔400mから500mくらいですから、まあ秋吉台の倍の高さがある台地と思っていただければ結構です。で、台上はですね、こういうふうに危にならかになります。そして、このような石灰岩の露頭、すなわち「カレンフェルト」ですね。で、ドリース、こういった非常にたらかな台地の露頭です。次お願ひします。

これが台上の典型的な石灰岩の露頭、「カレンフェルト」と呼ばれているものですね。あの、これの、平尾台でも薪焼きを行うんですが、ちょうど明日、秋吉台と同じ日に行

なう予定ですが、野焼き後でちょうど草がなくなっているところですね。露岩がよく見えます。だいたい高さが1mから2mくらい。でですね、平尾台の特徴として石灰岩が結晶化して「大理石」という、結晶の大きな石灰岩になってますので、秋吉台の石灰岩に比べると、より優秀が進んでいて、丸い形になっているんですね。なので、子の薛の原っぱ、「洋蔵原」というふうに呼ばれています。次、お願ひします。

これはあの秋吉台なんですかね。秋吉台の岩、「ピカクル(尖峰)」というのは、このように先端が尖っているんですね。だから「地獄台」とか「針の山」とか、ちょっと恐い名前がついているんですね。その点平尾台は、これが丸くなっていますから、この上に座ってお弁当を食べてもらおうかとくない、という感じで、「女性的なカルスト」とと言われています。次、お願ひします。

これは平尾台の真ん中ですね。平尾台は台地なんですが、真ん中が盆地になっている、で周りが高くなっているというですね。「台地の上に盆地がある」というおもしろい場所であります。ですから台上に上ると、周りが全部山に囲まれてしまっていますね。街が見えないんですね。だから、北九州からすぐ近くいんです。すぐ近くへ来ているような感じがします。

それからその中心の盆地には森があります。この森はかなり人の手が入った森です。植林もされてますし、昔から森を保つたりして、いわゆる「里山型の森」と言っています。で、集落が今は60戸、100人ぐらい住んでいます。かつて最盛期は250戸ぐらいありました。どんどん減っております。そして森の周りがですね、なだらかな斜面ですが、草原になっています。斜面のこういう茶色のところ、こういうところは畠として利用されています。それからベーネの中も畠として利用されています。そのへんは秋吉台とよく似てあります。かつては放牧も盛んにされていましたが、今はほとんど放牧はされておりません。次、お願ひします。

これが野焼きのシーンですね。火をつけてかなり燃え広がっているところです。で、野焼きにつきましても、秋吉台と同じように、かつては農業用にですね、草を刈って、そのための草原地帯だったんですね。昭和30年代後半から農業形態の変化もありまして、農業には使わなくなっています。特に「観光用」、「見せる野焼き」ということではありません。今は「野焼きしている目的」といいますと、「防火」のためというのが一番大きいです。放逐しておきますと失火が危くてですね、山火事になってしまいます。毎年燃えるんですね。で、以前、もう20年くらい前になりますが、野焼きのときに、強風で、炎に消防士が取り囲まれて亡くなるというような事故がありましたので、もう、全体の野焼きということはやっておりません。今は農業の通りだけ、農業の方に野焼きがおこ

らない程度にというので、北九州市の方から補助が出て、野焼きをやっております。次、お願ひします。

地下にはですね、このような美しい鐘乳洞がたくさんあります。160くらいですね。まあ、秋吉台の鐘乳洞が400以上ですから、半分以下なんですね。まあきれいな鐘乳石、石筍なんかがたくさんあります。次、お願ひします。

鐘乳洞の中は地下水が流れていますが、それが窓から湧き出しまして、このような泉をつくっています。これは大清水神社、大きな湧水と書いて「おしおす」と読むのですが、そこここで水が湧き出しまして、水の湧き口がご神体になっています。で、昔から神の聖水用や水田農業用水としてですね、使われてまして、雨乞いなんかも行われている場所です。

はい、スライドありがとうございました。

じゃあ聞いてDHPで説明を続けます。

先ずちょっと、日本のカルストはどんなものであるかということを簡単にご紹介します。日本全国、ほとんどの都道府県に石灰岩、カルスト地形というのがあります。しかし、あの、この黒塗りのところがカルスト地域、石灰岩地域なんですね。どれも小さいです。大きなところはないです。そのなかで一番面積が広いのが秋吉台ですね。平尾台は、九州の北にあります。だいたい秋吉台の10分の1の面積、9平方kmぐらいです。

そして平尾台の位置です。

ここが小倉ですね。北九州市の中心地の小倉です。大体この辺が八幡で、製鉄所や重化学工業地帯になっているところですね。小倉から直線に、だいたい車で約40分くらい、10kmちょっとありますね。そこにある台地、これが平尾台です。

黒塗りのところは石灰岩ですね。こういう丘間に点々と石灰岩が続いている。これを延長してやると、ここからに秋吉台がある。まあホントに「秋吉台の城」と思っていた結構です。

ひとつの台地ですね。元程スライドでも見ていただいたように、奥がたくさんあります。その奥が北九州地域の主要河川の水源になっています。これが栗川。小倉の真中を流れていますが、こちらから小瀬川といつて福岡市を流れる川です。それからこれには接していないのですが、遠野川に、ぐるっと回ってこのように出て行きます。ですから水道地帯としても非常に重要な場所です。

それから先程お話ししました「カルストシステム」というのを理解していただくためにこんな図を持ってまいりました。これはカルスト台地の断面図です。平尾台のものですが、秋吉台もほぼ同じだと思っていただけて結構です。それで

この柄を描いている部分が非石灰岩で、白いところが石灰岩です。まあこんなふうに石灰岩が台地になっていて、その周りに非石灰岩が布ると。

そして石灰岩の中になんかの断面とかの割れ目が入っています。そういうところが地下水の流れ道になります。雨が降りますと、畜糞は地表の川を流れて谷に出ていくんですね。石灰岩地帯では地下に吸い込まれていきます。これは酸性の水が石灰岩を溶かす役割があるからなんですが、それも「どこからでも」ということではなく、こういうふうな割れ目が交差しているふうなところですね。そこに地中してきた水ですね、そこが特にたくさん湧けて、そこに「ドリース」という湿地が出来ます。

まあそこ(割れ目)に入った水は地下を流れます。その地下の水の流れ、「地下の川」が断面、疎乳洞になります。当然それは石灰岩が途切れるとこうで地上に出て湧れるということです。

まあこういうふうにカルスト地域の一番の特徴は何かと言わされたらですね、「川が地下を流れる」と思ってください。で、その直前にドリースができ、洞窟ができる。それから山上ではピナクル、カレング(石灰岩柱)ができる。多分全廻水の流れに沿ってできる。ですから「水の流れをどう保全するか」というのがカルスト地域の保全に一番の重要な観点だと思っていただきたいと思います。

そして、具体的に平尾台の「土地利用」「開発」の話をしたいと思います。これは平尾台の石灰岩の部分を白抜きにしたもので、これが1kmで、大体長径が6~7kmくらいですかね、短径3kmくらいの台地であります。

左手点て示してあるのが洞窟の入口です。このように160くらい見つかっています。これを見てお分かりのように「偏り」があるんですね。この辺にたくさんあります。この辺は見つかっていない。それから番号が引いてあって二ヵ所二ヵ所と筋があるのが、これが大きな洞窟です。この間に移せられるぐらいの大きな洞窟です。一番長いのが2番の洞窟、「白目洞」と言う洞窟で3kmくらい。観光洞としては2番「平尾疎乳洞」と言うのが古くから有名で、今でも年間2万人くらいの観光客が訪れてています。それから洞窟の入口のところにもあります黒マリ。これずっと平尾台の縁にありますけど、これが泉です。さっきスライドでも見ていただいたような、前にある湧泉ですね。ここから平尾台に隣接した角川川に流れています。

で、平尾台の土地利用の歴史といいますのは、今日午前に中西先生が基調講演で話された秋吉台の歴史と大体似ています。戦時中までは陸軍の演習地として利用されておりまして、その他としても、周辺の農村から農業用の牧草地、それから肥料の、堆肥としての採集地として農地を利用しておりました。戦後になってですね、陸軍から払い下げが行なわれまして、大きく2つの利用がありました。

ひとつは石灰岩の採石ですね。ここにケバで描いてある

ところが嵐山です。三菱マテリアルズ、住友大阪セメントという2つの大きな嵐山がありますが、北九州工業地帯に近いこともあって石灰岩のニーズが非常に多い。まあ、最初は平尾台全体を嵐山にして採石しようとしたんですが、それに対して北九州市、当時はまだ小倉市だったんですね。それが反対しまして、「全域を保護しよう」、「貴重な自然を守ろう」とですね。まあ当時としてはかなり先駆的な考え方だったんですが、これが県議会から対立しまして、10年以上、最後は県議会まで争いました。結果環境庁の土地調整委員会で認定が下りて、「県中から割って分けよう」ということになりました。で、西半分が嵐山、東半分開発区域。これはもう全部埋めてしまつて良いだろうと、で、東半分、これはカルスト地形が良く残っているんで、洞窟もあるんで、これは天然記念物にしようと。で、この緑色の側のところが国指定の天然記念物ですね。で、その後、ほぼ同じラインで囲まれた区域が「北九州国定公園」に指定されました。ですからこの小さな、秋吉台の10分の1しかない台地ですね、県中からですね。「天然記念物」、「国定公園」という、日本の国土の中でも一等圏域にとって大事であるという趣旨ですね。それから近代産業に欠かすことのできない石灰岩の採石場が残しているという、まあすごい状態になっています。

それから県中の部分、茶色の部分ですね。これは嵐山の中なんですが、採石場から出た土砂、これを捨てる「土砂捨て場」として造成されています。これはただ土砂を捨てるんじゃなくて、ドリースを埋めて、そこを放牧地として使ったり、それから、天然記念物側から越境が直視見えないようここに木を植えて「遮へいする」という役割。そういうことも考えて土砂捨て場として利用しています。ということで、かなり「人の手」が入っています。

そして「観光」ということでは、最初にお話しましたように、あまり観光、利用がされておりません。隣の天然記念物側の、指定から外れた地域に、一時的、観光ホテルや宿泊施設が建てられたのですが、最初は訪れる人が多かったんですね。ちょっと交通の便が悪いとかですね。登山道路の輪があり広くないので大型バスが入れないということもあってですね、残れてきました、残るようになりました。

それから「開発」も、段々人口が残ってきて、農地としても利用されなくなってきた。それで1980年代以降、公園の方がかなり「違法利用」と言いますか、オフロードバイクが入ってきたり、野草の資源採取ですね。そういう違法行為が多くなりまして、自然保護団体の多くが自主的にパトロールを行なつたり、それから県や市などからも監視掛けがありまして、「保護法」、「保護計画」が立てられました。

それから90年代に入ってからなんですが、福岡県と北九州市の方で「平尾台整備計画」というのが立てられて、画期的な動きが出来ました。それを次にお見せしようと思うんですね。この真中に赤いゾーンを塗ねましたか、この「平尾台整備計画」というのは「平尾台を3つに分けてしまおう」とい

うものです。今まで「開発」と「保護」という形で分けてきましたが、これが直接接するのはマズイということで、其中の部分に「干渉ゾーン」を據える。そしてここで「観光活動」を行なって、そこに出た収益をこちらの「保護ゾーン」の整備に回そうという、「ハートランド平尾台」と言う第3セクターの会社を、北九州市が中心となって、地元企業、セメント会社なども入ってきて設立しました。それで最初の計画では、「カルスト テーマパーク」ということで、洞窟の内部を模したジェットコースターみたいなものとか、鍾乳石、それから鍾乳石ローラーを走る、また鍾乳石ビール工場を作つてとか、かなり大規模な観光計画を立てました。しかしそれに対してですね、やはり地元や自然保護団体から、自然破壊や地下水汚染などの環境破壊につながるのではないかということで、かなり疑問が出ました。まあ結局はですね、企画として成り立たないのではないかということで、お金が運ばなくて、去年この計画が一度凍結されました。それでテーマパークの代りに自然公園にしようということになりました。出来るだけ自然をそのままに残した公園にする、しかしそこで駐車場や施設の利用者からお金を取つて、それを保護の方へ回すというような、自然公園を元にした「グランドワーキング」いう運動に変わりました。これは「平尾台自然の里」という名前になつてあります。それまでの、テーマパークでお金を取つてお客様を募めるという計画から、そういう面倒に隠れてボランティアで動いてくれる人達を募めて、人を「資源」として活用しようという、そういう動きになってきました。

それと運動するようになつて、昨年、中心地に福岡県が「平尾台自然観察センター」という施設を作りまして、まあ秋吉台にも「秋吉台エコ・ミュージアム」というのが出来ましたが、それと同じように環境庁の予算ですね、ここが自然保護団体の拠点となりました。今までそういう施設がありませんでしたので、台上の道路などを通りましたら「自然観察センター」をやつしたり、ボランティアを募めて何かやってしたりといろいろと、かなり活発に動いております。

そしてそういう動きの中で「グランドワーキング」をして企業、企業といいますのはこちらの乾山ですが、それから地元住民、それから一般市民ですね、それと行政が一体になつた「グランドワーキング」いう形で、「先駆野焼きについて考えよう」という動きを起してあります。実はそのシンポジウムが明日、平尾台で行なわれるんですが。

実は「土地利用」については、このように深い衝突に固まっていますので、お互いの利害関係による対立が、戦後50年くらいの間にかなりありました。これは行政と地元住民の間では農地の払い下げ等の問題で、それから企業側は「保護」に私は半分取られたという、そういう思いがありまして、なかなか上手くそれぞれの「思い」が一致しなかつたんですね。それを行政側が一歩前進して、思いをひとつにしようということで、始めたばかりです。これがどういうふうに動いて行くかというのは、まだまだ分からな

い段階であります。非常に注目される動きであります。

最後に私の専門の立場から「土地利用」について、ちょっとお話ししたいのですが、もうひとつ話を重ねました。青い線がたくさん描いてあります。これは地下水系の流れです。例えばこのところはこちらへ線が描いてあります。これは地下水がこっちの方へ流れているということを示しています。

かつて「保護地域」と「開発地域」に分したときに、その根柢というのはですね、地下水系などはつながっていないだろうということで、2つに分けた影響がないと思われていたんですが、研究が進んで、いまますと、実はこの辺り、ちょうど開発と保護の中間地域が地下水の上流地域になっておりまして、この上流地域で汚染が起りますと、平尾台のどちら側へも汚染が行なってしまう。平尾台全体の地下水が汚染され、それがまた地表の河川を通じて下流へも汚染が進むんじゃないかなというようなことが分かってきてまして、これも後に至ってテーマパークの建設、大規模な造成というものが中止になって良かった、ということになるのですが、行政もこうした結果を受け止めて、出来るだけ環境に影響がないような工事を自然公園を造るとしております。

それから「野焼き」についてもですね、「本当に草原というのがカルスト地域にふさわしい自然環境なのか」というようなことも、実はもっと説明される余地があると思うんです。と云いますのは、本来、日本のような温暖、湿润な場所では「森林」が自然な環境であります。今日、原木先生のお話にもありましたように、昔、ソウやいろいろな動物の化石が洞窟から出てくるというのは、森が厚く覆っていたからなんですね。それを人間が草原にしていった訳なんですが、そのときも、草原を維持するために草刈りを行なつたり放牧をしたりしてですね、かなり手を加えていたのですが、今は「野焼きだけで維持しよう」としているんですね。そうすると、やはり今まで造られてきた「草原とは別のモノ」が出来ているんじゃないかなという可能性があります。例えば、火で燃やすだけでしたら、根っこで繁殖していくような植物、これは逆に増えてしまうんですね。ですから今、平尾台ではスキに代つてササがすごく増えています。一旦ササが生えてしまうと、なかなか他の植物が生えてこないということが報告されています。それからこの鍾乳洞のような水源にあたる地域では、やはり森林を再生した方が良いんではないか、というようなことも考えられますし、やはり活動地域にふさわしい環境を、特に自然環境を保全するためには、これからもっと考えていかなければいけないんじゃないかなと思います。まあその辺のことについてはみんなどんどんの考え方を聞かせていただきたいと思います。以上で終わります。ありがとうございました。

佐藤

どうもありがとうございました。たいへん考え方を

るいくつかの問題がありまして、ひとつは草原と水辺問題の水の問題。また、森林と草原のリーニングの問題、それがこれから21世紀に向けて、社会の人が求める自然、取分け草原、草原といふのは「やすらぎの自然空間」として世界的に注目されておりまして、そういう観光ニーズの問題と、それから生態の話と、いくつか重要な論点が広がったと思います。

これは冗談かも知れませんけど、「なぜ人が快適と思うか」、「なぜその場にいてやすらぎを感じるか」という調査がありまして、心理学者の調査だったと思いますが、「後ろに山を控えて、目の前に草原がある環境がいちばんアメニティー(快適感)が高い」と。それは多分、50万年前に人間が草原の中から生まれて、やはり敵をいち早く発見して、小さな人間が足で立つことによって程々脳を進化させ、自然をコントロールしていく。そういう意味で、弱い存在の人間が一番やすらぐのは「クサハラだった」という説もあるんですね。けれども、観光で草原が注目されている背景には、やっぱり「美しい」とか「やすらぎ」とか、そういう人間の深い心理に根ざした快適空間であるという意味もあると思います。

それで今から、お三方のお話、もう振り返しませんけど、観光業の立場から何とかの手帳で観光する人、ツーリストが、守る側にどう貢献するかという問題。2番目に、退廃化、高齢化で、都市との交流の中から新しい「飯のタネ」をつくっていく。またそれを持続していくための觀光、「觀光」と言うよりは「ツーリズム」という言いかたの方が私はふさわしいと思うのですが、それを持続させるためのツーリズムの発展をどうするのかという課題。そして3番目に開発と保全の関係という課題がございましたけれど、今から、時間が1時間少しありますので、残りは15時50分ですが、ちょうど1時間残っております。それで、今から第2回ということで、ご質問でもいいし、自分のお三方に対する意見の開陳でも結構ですし、どうぞ自由にいろいろ、どうしたら具体的に草原を活かしながら新しいツーリズムのニーズにも応えることができるのか、という共生の関係を求めるという方向性でディスカッションをしていければと思います。そしてそれを、このあと行われるパネルディスカッションで、最初に私がパネリストとして皆様方のご意見を報告するという形にならっておりますので、どうぞ活発なご議論をよろしくお願いいたします。どうなたでも、はい、どうぞ。

鶴谷

荷森から参りました。鶴谷と申します。防長交通さんの方で「ウォーキング」をやられたということですが、秋芳町さんからの、何か協力を得てということだったんですけども、行政側からの、何か「補助」みたいなのはあったんでしょうか、その「ウォーキング」のですね。規模とかですね、あと、その料金とかですね、そういうのをお聞かせ願えればと思います。

春野

お答えします。これは企画の方を、私共から秋芳町さんへ持っていきました。実質的には秋芳町さんが実行委員会を作られて、いわゆる「ウォーキング大会」。まあ、「フェスティ」という形で立ち上げられました。で、私共の方はそれに対する募集活動を行って、お客様を送り込むというような役割を取らせていただきました。まあ、第1回目でちょっと準備が足りなかつたんで、直伝等が行き届かなくて、当初は300人程度ぐらいの規模でしか、去年はやっていませんでした。今年は一応500人。来年は、これは公開していいのかどう分かりませんが、渠の方も一緒に力を入れてやりたい。というような動きも出ていますので、もっと大きな「フェスティ」に発展できるんじやなかろうかと思っております。

鶴谷

ちなみに参加料の方はおいくらくらいですか。

春野

はい、これはですね、やはり経費かかりますので、一応、秋芳町さんの方に2,000円の会費でやらせていただきました。そして、あと、遠くから来られます方は、当然交通費等も別に」という形で作らせていただきました。

鶴谷

どうもありがとうございます。あとは「わくわく村」の村長さんにお尋ねしたいんですけど、野焼きの参加についてですね、どういう規模と料金と、をお知らせ願いたいんですけども。

鶴谷

一応、野焼きは、やはり火を使う作業ですので、参加者にはある程度の監視下で作業をやっていただいております。やはり一般的の觀光客とおぼえますか、まあ、火を扱ったことのない人がやはりおられますので、火の状態、あるいは面の状態によっては、いわゆる危険が伴うこともありますので、そういうことから「参加者を監視下に置いて作業がやれる人」などということです。限定で、最高で50人そこそくぐらいの参加者を募集してやっております。先程言いましたように、受け入れる側は13人程度ですから、まあ、「その後の準備」などに取られる人を除くと、実質的な実働参加者が7~8人程度しかいませんからね。

で、コストということですが、そういうことで、まあ、「野焼きだけ」という説にはいきませんので、そういう意味で、会員(参加者)の方には食事をしてもらう。要するに、山焼きを見ていただいて、その後みんなで食事をして、交歓会の場を持つということを「ねらい」としていますので、そういうことで、1,500円いただいている。だから、「宮殿」というか、ウチの方も、「もうかるのか」と。わざわざ、とても、もうかるような状態じゃありません。ですが、まあ、みんなで、山焼きが

その日1日を楽しもうじゃないかという趣旨でやっていいかないとね。だから、そりやまあ、ほんとうに、みなさんから「もうけた方がええじゃないか」という意見があれば、それなりのやり方をやっていいかないと。

黒田

どうもありがとうございました。あとは、佐藤先生にお聞きしたいんですけど。なんか、あの修学旅行で、その300人程度、実績があったということですけども、その情報を詳しく教えていただきたいんですけど。

佐藤

あの、申し訳ありません、記憶の関係上、お名前と出身所を。

鶴谷

青森市役所の鶴谷と申します。

佐藤

どうもすみません。で、修学旅行の話ですか、例えば水戸(市)なんかでは、昨年くらいからそういう動きが本格化しました。それで阿蘇市では、そのプログラムとして、農業体験が1日と、通常のホテルを利用した詰合型のやつと併せて2泊3日なんですが、これも本格的なのは去年からです。

突然のようですね、なんか、JTBさんとか、新しい「体験型のプラン」を組む必要が出てきて、エージェントがすごく積極的なんですね。要するに従来型の、歴史でいうと、「京都・奈良のお寺をめぐる」だとか、「平和教育で長崎・広島をまわる」だとか、ああいう、数百人でドカんと行くっていうスタイルから変わって、それは恐らく、多分2002年からの「宿泊的学習の時間」だとか、あのいろいろ、学校の、食農教育であるとか、島になんか、教育資源が豊富でありますから、それに合わせて修学旅行のスタイルも、グループごとに事前の勉強をして、グループごとに地域で自然や環境や、歴史や、農業や、諸々の課題のテーマに即して小グループで行なうというスタイルに変わらつると。そういう場合、「受け皿」がなしんでよ。

それで、みなさん、どこの地域でも、一度に大量の修学旅行生を受け入れることは出来なくて、例えば50人とか100人くらいの小さなロットの受け入れが出来れば、地区地区で分担するとか、「裏まで」というか、今日は50人、次が50人とか、スケジュールの調整や工夫をすれば、100人や200人の宿泊を受け入れることが、2泊3日で出来る訳なんですね。そういうニーズが、なんか突然のようにこう持ち上がってきましたけど、なんか情報ございませんか。

青野

「体験学習」については、もう、そうですね。約10年くらい

前から、言われているのは言われておりました。山口県下においても、そのような体験学習ができないかという問題はありました。今やっているのが、あの、あれはなんだっけな、山口県の何某町のもっと奥になるんですけどね、そこで農業体験なんかは細々ながらやってあります。大規模的には、山口県はまだやってないですね。

佐藤

ちょっと情報をもう一つ申し上げますと、「受け入れ」をやるためにには個別の農家や地主では難しいから、そのためのインストラクターであるとか、現地の案内ガイドであるとかを育てなければならぬ。地域特性にあわせてニーズがあるものですから、地域でそういう「人」を急速育てなければいけない。と書うんで、例えば4年前から「九州ツーリズム大学」というものを、我々は、行政と大学と一緒に、「ラーニングバーション」ということで、そういう「専門の人を育てる」ということで学校を作りました。それほどても評判が良くて、去年、和歌山県でも「和歌山ツーリズム大学」というのが出来て、今年は北海道と沖縄と、場合によっては信州に、そういう「ツーリズム大学」という名前の、民営一体の人材育成講座が出来ることになっております。

それで、受け入れを紹介する専門の業者さんもおられますし、いま人気があるのは「農業体験」や「自然体験」で、それは大体2時間くらいで2千円くらいの料金になるんでしょうか。高いのはですね、乗馬が確か1時間6千円くらい。それからラフティングっていうか、川下りが5千円で、単価が高いのはその2つですけども、だんだん活動メニューに「定価」がつくようになったので、野焼きは3千円くらい、5千円取ってもいいんじやないかと思うくらい「お金が取れるプログラム」であろうと思います。

で、宿泊に結び付けて、どういうふうにすれば地元の農家にお金が落ちるようになるのか、農家にインストラクターにならうにとか、なんかこう、「観光」というのじゃ説明できない、「ツーリズム産業」の動きがあります。

私はつかりがしゃべっても非常に問題がありますので、どうぞ、他に、ほい。

高橋(女)

島根県の大田市からやって参りました、高橋と申します。先程、ホールの「サミット」でもお話しがあったように、大田市には「三瓶山」という草原があります。それがたかだか100ヘクタールくらいにしかなりませんが、24年ぶりに放牧が復活したということで、第2回の「草原サミット」も開催させていただきました。それで、あの、いろいろな所をまわさせてもらっています。秋吉台も今回か来させていただいて、平成台も夫の出身地が小島です。そこで過疎したということを聞いています。子供の頃ですね。そういうつながりで、非常に胸が深い県なんですが。

で、どちらに向ってもですね、私はその、何て言うか、県

源の目さといふのは「人の香りがする」良いだといふに思っております。ところが、人の香りというか生業の香りというのがしないんですね。その、向て言うんですかね、生業と言っても、観光産業にだけお金が落ちるようなシステムになっているんじゃないのかと。で、「荷物検査」とか、そちらの方では、私の方では駄力が、あの、いたるところで「嵌め」言うものが満たされてしまいまして。

で、「開けた」、先程佐藤先生が言わわれたように、やはり、何か遺伝子に組み込まれているような、「開けたところ」を求めてるといふものがあると居うんですよ。それを求めていたいと。それが「野焼きだけ」では足らないと思うんですね。「草原の維持」っていうのは、「野焼き」、「採草」、「放牧」と3点がセットになって初めて、その、「生業」と言えるものであるような気がするんです。ですから、そこに農家の人がいないといけない。農家の人が、観光だけでなく、メリットがないと維持していく事が出来ないんではないかと。それがどうも足らないのではないかと想います。で、「植生も單純化していく」というふうにおっしゃいましたけれども、やはりその3点がセットになっていないからではないかというふうに思っております。

で、そこで、色々考えましてね、お話を伺っている間に、他の、秋吉台にもありますよね、何でしたら、「とってもゆかりの秋吉台ミニーティング」、そこで「ドリーネ耕作」なんかもされてますよね。それでその(耕作地)の「入会権」があるんですね、その、入会権があって、そのドリーネというのは個人所有じゃないかと思うんですよ。そうですよね。で、その所有者が見つかれば、ヒカ、分からなくなっているという可能性がありますよね。

松原

入会権はあります。で、(所有者の)分からなくなっていたものもありました。ですが大体は分かります。そういう記録、地籍が残っていますから。

西原(女)

ああ、そうですか、そういうところを都合の方に開放して、耕作していただく、ちょっと違うヒーターになっていただく、という方法もありますでしょ。そういう方々を中に入れる事によって、「希少種」ですか、そういうものの盗難を防げるという可能性もある訳ですよね、どちらの方が来られているのかというの、こちらが把握している訳ですね。

ウチの三橋の場合でも、キテクサとか色々な希少種がある訳なんですが、牛が放牧されたことによって、牛がその「守り」をしてくれてるんですね。盗難が防げている、といふことが起こっています。「(草原の)中にどうぞ入って下さい」といって、やはりそこには何か人間に「壁」のようなモノがありまして、何か見られているような感じがして、盗難っていうものはあまり無いような気がします。

ですから、そういった「人」を入れて、「農家の人生が潤うシステム」っていうものをキーチェックして、私達が行っても、「ああ、農家の人も潤ってるんだ」と、「色々な人が潤ってるんだ」という姿を見せていただくと、より「近付きやすい」ような、そんな気がします。

佐藤

それではご質疑を。

松原

はい、あの、今大変いい意見だと思います。農家の、まあ今頃は「時代が変わった」ということで、秋吉台をあまり利用しなくなったりと。まあ昔は、一回には放牧場も走ったんですね。実は、先程平尾台の話がありましたが、非常にここの方はですね、これ、とんぎつていて(とがつていて)というか、おいんですよ。それで、結構牛なんかも怪我をしたりね、そういういろんな事情がありましてね。まあ放牧場そのものの、まあ「近代化」というか、近頃の風潮で、輸入牛肉がほとんどになってしまったので、生産者として牛を飼うということが成り立たないというような、まあいろんな面の危機の懸念も、そういうものがありますと、頗る人自体が少なくなったというのもあります。

ただ逆に、今のおっしゃった発想からいきますとね、逆にあまり手の届かないヤギとか羊とかね、利用するという方法もあるんじゃなかろうかと。今ちょっと、チラッと思ったんですけども、まあ牛だけに設定することもないだろうと。だからまあ他の方法でも、北海道でやっているように牛の肉を鹿肉の材料にするとか、まあいう頃料をどんどん作ってやってるじゃないかと。そういうやり方でもいいかなあと、そんなことも、チラッと思ったんですけど、ありがとうございました。

佐藤

他に何か。

あの、打合せをしているときに少し出たんですけれども、農家の危機というのに、今、高橋さんが言われた「持続できない理由」っていうのは、そのためのコストを、もう農家では払えない訳ですよね。要するにメリットがある人しか、その持続のために必要な努力やお金を出すというの、普通は「原則」なんですが、そのメリットを一番享受している人、いわゆる観光客が、維持のためのコストを負担するシステムがない、というところだろうと思います。この根本的な問題があって、農家は基本的にその観光客が草原に入ってくると嫌な顔をすると、カンを捨てられていくだけだと、うろちょろされて危ないとか。そして自分は一生懸命干渉して動いているのに楽しそうに、他人の土地にゴミなんか捨てて、もうむかっ腹が立つ、という関係だったんですね。どうしたら、そのメリットを享受している人が維持管理のコストを負担するシステムができるのか、その問題を少し、

はい。

吉野

まあ、私も仕事を通じて、これは大変良く感じることなんですかけれども、まあ、先程から、登山ツアーやなどを組んでいらっしゃるところに行ってるという話を申し上げましたけれども、信州の方なんかは「山の文化」が進んでいて、ちゃんとお金を払う。いろんな「システム」があるんですね。

ところが中間地区、それから九州の方に行きますと、まあそういうものが「観光財産」だと云う「商品」であるんだ、とかいう意識がほとんどないように思われるんですね。ですからなんの設備もないで、我々はそこに行って、なんかこう、よその店にですね、黙って入り込んでババッと売らして来るような、なんか「後ろめたさ」っていうものを感じさせられるんです。信州の方に行けば、なんか違うと發らさせていただけだと。まあ、それだけのシステムもありますから、ただどこちらの方にはまったくないし、また地元の方たちそういう意識がないで、我々行く側からすれば、向かこう、勝手に入って黙って帰ってくるというような、後ろめたさのようなものが逆にある訳なんですね。

で、かえって我々の方から言わせていただければ、まあ適当な「入山料」だと、秋吉台たってウォークをするのに、(維持管理のための)「まあこれも経費かかるんだよ」ということで、何かを支払う方が、どちらかというと、気持ちの中ではさっぱりするっていうような部分も正面からござります。

佐藤

外国の例なんかも、なんかご存知なことがありますか。

瀬田

そうですね。やはり草原を、こういう秋吉台のような人工的な草原を維持するためのシステムっていうのは、もう何百年間も掛けて、まあ恐らく中世くらいからですね、作られてきたものですから、先程おっしゃられたように野焼きだけじゃなくて、放牧それから草刈りっていうような「手間」を掛けないと維持できなくて、それはもう本当に「農業のために」やっていた訳ですね。で、今やはりそういうような農業としての必要性が無くなったりた取扱で、誰がそれを肩代わりするのかというのが、やっぱり一番大きな問題だと思うんですね。それでまた、自然公園というものを考えてみると、それなりに規制があるってですね、何か変わった事をしようとしてそれに引っ掛かる。

で、元程、放牧で岩山とかついてて別圖になると言つておられましたが、放牧のことだけを考えいいのであれば、岩は除いてしまうし、ドリーネは埋めてしまうし、洞窟は埋めてしまつた方がいいのですよね。で、実際に平尾台でそういうことをやられいるんですね。採石場の土砂でドリーネを埋めて平地にしてそこに放牧するっていうのが1970

年初に行われていたんですね。しかしながら、更になつてそれが地下水汚染になんかにつながつてはいるって言うので、それはいけないってことになつて。しかし、公園内の一帯草原がきれいなところは岩を残していくしかない。ですから、こういった秋吉台、平尾台のようなどこかは、放牧には、実はあんまり向いてないんですね。

ですからその辺でどういうふうにですね、「農業」と「保全」と「観光」とを共生させるかというの非常に難しいですね。

で、「打合せの時に出た話」というのは、海外に目を向けてみると、海外の国立公園、アメリカなり、オーストラリア、ニュージーランドなんかは、非常に管理が行き届いてますし、また「そのための入場料」というものをはっきりと取るんですね。公園に入る道路にゲートがありまして、有料道路かと思うと、普通じゃなくて公園に入る入場料なんですね。それを払わない人は入らせないと。で、そのお金でレンジャーをまかなかったり、いろんな維持管理はされていると。で、まあ日本ではまだそこまでいっていないですね。だから観光ツアーや利用しようとしても施設がないというのは、そういうふうなシステムになつてないからなんですね。もうはっきりと、これだけのお金を払えばこれだけのことがされて、維持管理にちゃんと見えるようなことが、そういうシステムが出来ておればですね、利用する方も利用しやすいですね。

日本は自然がすごく豊富ですから、「自然に対してお金を払う」という意識がほとんど無かったんですね。で、面白い例が「水」であります。誰も、あの水にお金を払おうと思つていなかつたんですねけれども、歐米では水の方がお酒よりも高いっていうことがずっとあります。最近日本でもミネラルウォーターをわざわざ買って飲むようになってですね。そのような自然や環境に対する意識の変化、これは環境が悪くなっているからであつて決していいことではないんですけど、そういう意識の変化が起こり始めている。そういう時代には、環境を維持するためのお金というのを、やっぱり農業や観光とまた別にですね、財源として作れる可能性がもう既にあるんじゃないかと、そういうふうに思えると私は思います。

佐藤

今のご意見に対して何か発言したいという方はありますか。

「草原基金」みたいなものを、例えばニュージーランドなんかでは牧場に入るときに、これは九州農政局長がよく言つんですけど、何か、コインを投げたらゲートが自分で上がるという、人手を要さない簡単なお金の集め方もあるんで、草原維持のために「是非日本でも」と言わればがらまだ何も出来ていないんですけどね。いい組織、もしくはどこか、もうやってる所があったら教えていただきたいんですけど。

例えば宮林局、今の森林管理局では、開拓の跡の草地

それで、音から「水源の清掃のために」ということで100円ずつ敬収しています。で、それは誰も文句言わずに払ってますけども、草原についてちなんか、どうですか。

なんかご意見があれば、はい、どうぞ。

高橋(女)

実際にやってる訳ではないんですけど、三郷のところで、研究者の方が1年間、調査されたんですよ。「この草原を守るために、どのくらいのお金をあたしたら、1年間に払って頂けますか」という調査をした結果、平均で6,000円くらいですかね。その高低の差はあるけれど6,000円くらいを草原維持のために出していいよ、というお答えを頂いたことがあります。やはり、そういう草原については「守っていかなくちゃいけない」というような気持ちは日本人の中にはあると感っています。

それがあの、そういうものをキテと出していいないといふか、「日本人にはそういう気持ちはないんだろう」と勝手に思っている所があるのではないか。そういうものはキチッと提示してみれば、大事なものだというようなことは分かっていただけるのではないか。それこそ「環境教育」ではないか、というふうに思っています。子供の頃から草原に触れていくということを、そういうことをしていくかなくちゃいけないと思ってるんです。

実際にウチの方にも草原があるんですが、それほど貴重な、第2回目の「草原サミット」をやられるほど貴重な草原である、という認識は市民の中にはないですね。かえって外側の方のほうが、都会の方々のほうがそういった「意識が強い」という結果が出てますので、やはりそういうもののを中心(地元)の方々に知らせていくべきであります。「言っても分からぬ」とじゃなくて、やっぱり「言っていかなきゃ分からない」という意識を持っていかなくてはいけないのではないかというふうに思っています。

佐藤

はい、どうぞ。

菅野

それとですね、今の「支払い」の件なんですけども、これはお客様の側が「支払わない」と言ってるんではなくて、多くは受け入れ側の方がですね、「取ったら来ないんじゃない」という恐れ意識の方が強いんじゃないけど、私はそう思っています。我々も行政の方と話したり、まあ我々業者の側でいろいろ話をすると、まあ「タダにしないと来てくれないし、来ていただけない」という意識がかなり強い。あります。ですから逆に我々ユース側(利用者側)の方が、「支払うからちゃんとやってほしい」ということを言った方が手取り早いんじゃないかな? という気がします。

佐藤

同意ですね。はい、どうぞ。

高橋

地元の高橋と申します。こういう席に初めて出させて頂いた、まともなことが言えるかどうか分かりませんか。

実はごく最近、ここ3、4年前から「山歩き」をさせていただいております。あの、その際で防災(災害)さんには1,2度ご厄介になりました。ありがとうございました。それで、高橋思っているんですが、特に昨年ですね、防災さんから近くの山で「冠山」、それから私共で四面の石庭(愛媛県)に参りましたんですけど、特に石庭の方で、いわゆる登山道を含めた整備を、非常にきっちりやってらっしゃる。で考えてみると、「この企図から出てるんだろうかな」という疑問が湧いてくるんですね。

まあこれを草原の秋吉台に即当てはめていいかどうかはちょっと分かりませんけれど、やはり我々、やっぱ山を利用させてもらうとなると、やっぱり道も良くしなきゃいけないし、年に何回かは道の、登山道の崩壊もありましょう。そういうものを毎日するためにはどうしても「地元の方」ということであれば、それを草原に当てはめてみると、やはりこれは利用する者がそれに対する何だかのお金を少しでも、やっぱり払うべきじゃなかろうかと、私達利用する側も、私自身は考えてています。先程言われたように6千円とか、平均が6千円とか言われましたけれど、それほど高額なものでなくても、やっぱ「いくらかでも」という気持ちは、みんな利用する者は持ってるんじゃないかというふうに、私は利用者の一人として思っております。

佐藤

どうもありがとうございました。他に手を上げられておられた方。はい、どうぞ。

高橋

すいません。今日は「ビデオ係」なんですけど、実は話をきいてたら、やっぱり言いたくなってしまったものですから。

あの、やっぱり私も「クリーンツーリズム」とかいうものに興味があるって、いろいろですね。あ、すいません。私、山口県の朝日町の徳永と申します。

「わくわく村」、それから秋吉台にもここ7、8年間わざわざですね、やはり「わくわく村」の村長さん。すごく人が良くて、すごくあのサービス精神旺盛で、すごくいいですけども、出来れば美ね。「もう少し儲けていいのかな」と思ってます。それから「儲けないといけない」と言うか、要するに儲けて、「わくわく村」の松原さん。すごく儲けて最近家を建てたらしいとかね。(笑) そうなると、要するにそういう刺激を他のみなさんにもうえられるというかですね。

まあヨーロッパなんかでも、私たち2回ほど行かせてもらつて、そこでクリーンツーの話、それからその辺のクリー

ンツーで、ある農村におよって、普通のサラリーマンの家庭の方が、自宅に泊められるんですね。で、何もない、何もサービスできないけど2階の息子の部屋が空いているから泊めてあげる、というような形でやっています。

まあこれは、日本では「旅館業法」とかですね。いろいろあって、「民宿」ということになると結構違法なものがあるって、山口県でも、すごく熱心にそういう「旅館業法をクリアしよう」という動きとか、公衆、衛生関係のですね、「食事を扱う場合はこうしなきゃいけない」とか、いろいろ指針を出しているんですけども、まあそういう規則は結構あるんですけども。

ですから、そういうことをやるためにには、せっかく秋吉台の場合は「わくわく村」があって、そういうことを始めたんだから、例えば「入村料」を取るとかですね、村のあるところにゲートを、そんなにまあゲートとまで言わなくていいですね、なんかのイベントの時にはゲートを設けてそこで入村料を取るとかですね、秋吉台での「遊び料」とかですね、なんでもいいと思うんですけども。

だからそれを、例えば身近な方がやられて、例えば「そこはちょっと小遣いが貰えて、ちょっと親さんにいいものを買ってあげたよ」とかですね、あの何かやると「ちょっと良いことがあったよ」みたいな、そのくらいのことがないとい(誰も)手を出さないですよね。それよりはどっかのパートに行ってですね、「小遣いをちょっと貰った方がいいや」ってなっちゃうんで。だから「サービス精神」大いに結構なんで、それをお金に代えることをもうそろそろやられていいのかな。

それとやっぱり、「受け入れ側」というかあの業者さんがですね、僕も前に聞いたことがありますけど、修学旅行のことについてですね、日本旅行の方にちょっとお話を聞いたことがあります。「田舎だけど、もしグリーンツーで仕掛けるとしたら何人くらい受け入れればいいの」と聞いていたら、やっぱり300人、200とか300って言われるんですよ。都道府県修学旅行で来ると200、300の単位で来るので、それを受け入れられないだめだと。で、そんな施設、グリーンツーやってる中でもうそうないですよね。で、「どこかに泊めいやあいいいいじゃないか」ってことで、10軒くらいでやろうとしたんですけど、「旅館業法違反」ですね、まあ物を食べさせたりすると、ちょっと問題になったりする説ですね。だからそういうことをクリアしないといけないけれども、ちょっとその辺のギャップがありすぎると。

だからもう少しうまくですね、民間ベースで安く、旅館業法もうまくクリアしながら、まあ「法の規制」を解くのが一番いいんんですけども、要するに、あの、「B&B」と言われてる、もう朝食だけいいと。寝て(Bed)、朝食(Breakfast)だけいいと。あとは当所を用意してあげてですね、そこで自分達で食事を取るとかですね。地元の、その辺の畠の物を取っていいよと、その代わりはらかは払いなさいっていうんで、ちゃんとお金を払っていいですね、自由に取っていい

いっていうのをやってるところがやっぱりありますよね。秋田にも確かグリーンツーでやってるところ、知っていますし、長野でもやっておられますね。そういうことをちょっとやらないと。

あの山口県はよく「ちてなしが下手だ」というふうに、そういう県だとよく言われるんですけども、ちゃんとこういふ「資源」があるんだから、だったらうまく利用してですね。それをお金に代えるっていう、ちょっとこうなんと云うかな、「もう少し貪欲になつていいのかな」という気がしますんで、せっかくやられてるんで、是非そろそろ値上げをされてですね、儲けようという意図があるていいのかなって気がします。

佐藤

村長、どうですか。

松原

はい。まあお話をあったように、ある人から「村役場から税金を取ってもええいやないか」というような話もありましたから、まあぼちぼちみんなで考えてですね、「わくわく村」にたくさんの方が親しく来ていただけるような方法をね、考えていきたいと思います。

まあお世話する人もですね、今おっしゃったように「お金をばっかしじゃない」と言っても、やっぱりお金は付いて回ることですので、いろいろ、その、ちょうど「エエ塩漬」のところを検討してみたいと思います。

高橋(男)

あの、「仲間内」ばかりで喰っちゃあいけないんでしょうけれども。

佐藤

いえいえ、同業者もしゃべってるんで。

高橋(男)

あの僕ちょっと反論みたいなことを言っちゃうかもしれないんですけども、「わくわく村」で、僕も「わくわく村」に関わらせてもらってるんですけど、例えば「一万円払って下さい」と、まあお金払っても「遊びたい」とて気持ちはあるんですけども。

あのちょっとディズニーランドに書き換えて考えてみたんですけども、みなさんミッキーマウスやドナルドとかが好きでディズニーランドに入るんですけども、そこでミッキーが「一万円頂戴」と言って、ミッキーにお金を払ってると、何かミッキーは「金の亡者」の嫌なキャラクターみたいに見えてきて、で、結局入場券ていうのを入口のところで貰って入っちゃって、でミッキーはただ遊んでくれるだけお金も要求しないし、黙ってこんなふうに写真をとってくれる。で、やっぱり「わくわく村」の人達は、なんか「ミッキーで

ではいいな」といふことがあるんですよね。

それで、出来れば「お金」っていうのは、先程「定価」の話がちょっと出てましたけれど、高にあつたら6,000円とか、それから營業体積2,000円とか、そういう「定価」があると、みなさん当たり前にお金うのかなって気がするんですね。で、秋吉台も、入るとさに誰かお金を取る「標準料金」がゲートのところにいてくれてですね。で、先ずガソリンとお金を取りやつたら、中にいる村民や住民は「ミッキーマウス」でいてくれないかなあっていう、なんかちょっとそんな気が返ります。

それからあの、旅行で、例えば観光登山なんかをするときに、防長さんで、レンジャーっていふんですかね、専門の登山隊の方を2人付けるんであれば、そこからガソリンと取った予算の中から、そういう専門の登山隊を要するようなツアーやは、その専門の登山隊に対するお金を払う、レンジャーの給料をそこからまかなう、そういうようなシステムにしてもらうと、非常に「美しいお金の使い方」になるようね、ちょっと気がします。すいません。

春野

先程の方へ、あの2つ回答したいと思うんですけど、石鎚山に行って、まあ「道路が良かつた」と、これは前は有料道路だったんですね。でこれがもう有料が終わって、で今、自治体の管理に回っています。河内山が去年ですかね、無料になりました。やはり自治体の管理になったと。それでこれを見てもですね、どういうふうにして管理するのか、それは全部自治体の負担になってるんですね。っていうことは地元住民の税金です。ですからその税金の中から道路の補修をしていただいているっていうのが現状だらうと思います。

それから登山の場合はインストラクター、我々は「ガイド」と呼びますか、これは支払ってます。ちゃんと支払ってます。支払わないと来て頂けませんので、で、それはもう私共のツアーやの場合は地元から、こっちから全部連れて行って、例外的に北海道だけ県外のガイドを雇うっていうことにしていますが、それでもまあ(料金の)ほとんどはこちらに落としていますので、現地に落としてないし、お金をですね、そういう現状もあります。

まあ、そういうことではやはり何らかの形で、特に山口県の方はですね、お金を頂くのは何か罪悪のような意識が多少あるんではないかなど。これはまあ山口県だけではなく、日本人にはちょっとそういう何か「本土道」ではないですか、「そういったことにお金をもらつてはいけない」というような、何かそういうようなものを、みなさんどこかにお持ちだらうと思つんですね。

だけれどやはりこれからは利用する基準がですね、やはり支払うというシステムは作つていいかなきゃいけないんじゅないか。これは結局、じゃあ何をもつて利用していないその地区的住民の税金で全部まかなわなきゃならないのかというと、

地元の方は多分歳を立てられると想います。「私は何を使つてないのよ」と、「私の税金で何でよそから来た人にちゃんととしてあげなきゃいけないのか」と、そういう問題になると思うんです。ですからやはり方が「今度また来る時にきれいにしておいてください」という意味合いで支払いをする。汚した分ちゃんとしておいてくださいと、まあ汚さないん、さすけどね。まあ歩くことによって山の崩壊、秋吉台にも崩壊があるという訳ですから、それにやはり補修をしていかなくてはいけない。その補修代はやはり利用した人が支払つてくべきではなかろうかと、いうふうに思います。

佐藤

はい、どうぞ。

横井

春野様にですけども、ちょっとですね、あの「観光業界の方」ですよね。かなり日々付いていますが、私自身はかなり偏見を持っていたんではないかと思います。もう少し想いやヤツだと思っていたんですけども、非常にですね、特に「自然をただ利用してはいけない」というのがですね、(発想、あるいは)いろいろな話を伺つておきました、ちょっと自分のイメージが「違うな」というふうな気がいたしました。

で、恐らくですね、他の春野様は語つておられないでなければ、お仕事の中、あるいは個人的な体験の中で、そういうふうな「自然観」をですね、今話しておられるような「自然観」を持つに至った。もっとご経験があるんじゃないかなと思いますので、出来たらそのことを少しお話いただきたいと思います。それからもう一つは現在の秋吉台の観光のあり方について春野様の目から見てですね、それをどのようにご覧になつておられるのかと、この2点のことを少しお話をいただけたら幸いです。

春野

まあご指摘の通り、私もさつきから何度も言いましたように「登山ツアーや」を7年前に始めて、そのときに初めてですね、登山という体験をさせてもらいました。以来、私はずっとこのツアーや付いて行っております。

で、今言うリーダー、我々の仲間がありますが、最初からずっと山の素晴らしいしさを教えてもらいました。そして自分がその自然にすごく感動を持ちました。さっき言われました三瓶にも随分行って、「自然観」の方も、かなり私、知っています。いろんなお話をさせていただいて。そしてそういう方々とお会いして、お話しして、また自分が感じて、この手ではいけないと。

確かに言われたとおり、先程佐藤先生も言われましたように、アソーリストではなくテロリストだとかは、まあそういうふうな「被虐の一役」を怠っているのが旅行業者だということは間違いないと思います。私自身が他の業者ではそういうことをやつてると想います。で、このままではこの旅行

業、観光業は崩れるなど。だから我々が真剣に考えてですね、これからは利用するだけじゃなくて、一緒に、「共生」とて言うんですか、自然の中に共生していくような業界を作ってしまないと、この業界は終わるんじゃないのかというような危機感も持っています。

まあそういうことで私は、みなさん多くそういうイメージを持たれたんではないかと思います。旅行業界のヤツが来て、多分旅行業界だから、「あれを良くしろ」、「これを良くしろ」、「道路を作れ」と。そういうふうに思われてたのが、私が逆の発言をしたので戸惑っておられると思うんですけども、私はどちらかというと、今日は「旅行業」というよりも「山を愛する人間」の一人として、まあ今日は話をさせてもらつたっていうのがひとつです。

で、秋吉台の問題についてもですね、今、秋吉台の方で「ウォーキングツアー」をやっています。これには今、九州からも大阪からも来られているんですけど、まあ私が読んだ本の中にも、「規制をして入れなくしてしまう」とか「ダメになる」とか言って、多くなり過ぎてもいけない。その調和が大事なんだ」と。調整をしていかなければ

だから私、先程の話の中でもあったんですが、お金を取れば「来たくない人」は来ないと思います。みんなが行くから「じゃあ、俺も行こうか」という方、結構いらっしゃると思うんです。「ついでに」とって、お金を取るようになつたらそういう人は来ないと思うんです。で、来られる方は、ホントに「秋吉台を見たい」、「歩きたい」、そういう方たちのみが来る、そうするとそこに調和が取れるんじゃあないかと思う。

だから逆に言えば、「タダだから故に来れる」、そして(その修復のために)金を掛けなきゃいけない、という「悪循環」になってきているのではなかろうか。それよりも有料化にして、本当に来たい人、愛している人にだけ来ていただければ、この秋吉台の自然というものは守れるんじゃないかな。これはどこの観光地、自然を提供している観光地においても同じことと言えるんじゃないかな、というふうに思います。

あの、「オーバーコース」っていうのが、結局道路を作つて、誰でも簡単に行けるようになって、どんどん車で来る。ま、私も経験があるんですけど、四国山(愛媛県)なんかに行きますと道路が狭いんですね。で、駐車場もない。もう道路の脇にずっと車を置いていて、車がもう動けない。これは大台ヶ原(高知県)でも同じ経験をしました。で、九州でも同じ経験をしました。で、もう「何でもタダだったら行かなきゃ損だ」という感じでポンポン来られる訳ですね。それもただの「物見遊山」で来るだけで、本当に山が好きだから来るっていう人は少ないんじゃないかなあと、で、オーバーコースになつていろんな弊害を引き起こす、そういう原因を作つているんじゃないかなというふうに思いました。

櫻井

最初にお尋ねしたもう一点のところで、もう少し詳しくお聞きしたいのは、いわゆる秋吉台が「通過型の観光地」という状態になっているところを、旅行業界の方からのお気持ちを、もう少しお聞きしたいと思います。

ま、よく出合うのは「秋、瀬戸内、秋吉台、3日間の旅」みたいな感じですね。そういうのが「今の秋吉台の観光の主流」になってるんです。秋吉台とかのね。そのへんの観光と、現在はしゃべられるような「観光のあり方」の矛盾とかですね、そういうのを「観光業」という立場から、もう少し意見を聞きたいと思います。

春野

私が「こういうことを言うのは間違っている」と自分で思ひながら言います。

今、旅行業界も末期的な症状を示していると言ふのは、まあ「底堅化」でないとお客様が来ないと、もう「グランピング合戦」で低価格の旅行商品ばっかりが氾濫している。

そうするとですね、どういう事が起きるかと言うと、肩には入らない、金が要るから、肩を通つて台上を走つたらもう秋吉台に行つた事になる。と言うような論法なんですね。で、宿泊「通過型」で、展望台に寄つて、スカイライン通つて夜に行く。また、秋から反対方向で来るというのが現状ですね。だから、ほとんどの地元に金が落ちない。金が落ちないで、補修ばっかりやっている。補修ばっかりに税金を使つていて、という結果におりかねないんですね。だから有料にしてしまえば、逆にそういう「どうでも」ね、本当は見たくもないんだけど、「ただコースに入つてから来てるんだ」というお客様には来ないと思います。

だからこれからは、私、いつも話をするんですけど、この旅行業というんですか、まあ世の中もそうですけど、「曲がり角」に来ています。ちょうど、こういう「低価格競争」が始まるっていうのは、もうどうにも手の打ちようがない状況。それが結局、低価格競争になつてるんだろうと。で、また旅行業自体が、今のところ「新しい方法」がまだ見い出せてないっていうんですかね。それが見い出せれば、この低価格競争ってのは終わるんでしょうけれども、まあ今まで右上がりで走ってきた旅行業です。で、旅行業界の人間つて言つるのは、その中でつぶつと走つて、新しいものに対する開発能力というものがどうも最近弱くなつてきている。

だから、気が付いたところは、もうどんどん「新しい事」をやつてます。だけど、昔のように、まあ何て言つんですかね、昔で言えば「頭を擡げて」(サッと補つていく)っていう言法でないと旅行業でない、というような感覚がまだあるんですね。「一本釣り」は、そんな馬鹿らしくてやってられないよ、というような感覚がまだあるんですが、世の中は、完全に「一本釣り」の方向に行つてます。だから、早く気付いて直すべきじゃないのかなと、同じ業界人として思つています。

佐藤

はい、どうぞ

清水

私も他の地元の観光業者の一人ですけれど、先程から観光業者の方のお話を聞いていますと、まあ、「来る度に来なくていい」とある意味においては非常にショッピングな発言である。秋吉台にどういうふうに「壁」を作つて、どういうふうに有料化して、まあお金を取るかと。

ただですね、お金を取るだけが経済効果じゃないんですよ。例えば、たくさん人が来てくれれば、地元の商店は何らかの形で利用していただけます。だからですね、人が来なくなつたらどうにもならない、既にそういうふうにですね、こまなってるんですよ。

しかしながら、秋吉台は有料ですよね、これに入られた方が、千いくらだけ、「おお、高いのう」と、家族4人で来れば何千円かの入場料になる訳ですよね。だから「案外高いなあ」というようなことを言われるんですね。だからこれまでですね、秋吉台を有料化したらですね、これほどもしない事になる。いきさか「現実離れした高論」だと、私はそういうふうに思うんです。

それで、今以上に観光ですね、秋吉台を我々が手入れをしていくのか、そういう具体的なものも見えない訳で、今の議論の中で、あの秋吉台をどういうふうに我々が手を入れてですね、「やれ」という事なのかも、その辺りも、もし具体的なご指摘があればですね、具体的ご指摘いただいたら、こういうふうに思うのですが、

齊藤

まあ、今の話は正直言って、まだまだ先の話のことになるとと思うんです。私が先ずやりたいなと思うのはそういう、特にウォーキングのお客様等は、やはり「基金」とか、そういうものを自主的に入れてもらいたいし、そして、利用させていただくという気持ちを育てていただきたい、ということが先ず第一歩だと思います。

で、確かに今の意見、切実な問題だと思うんですね。私も業界の人間だから分かるんですけど、確かに有料化にいたら来ないです。今は、今は絶対に来ません。

今は「コース作り」を私達がやって、「あそこここは有料だから外そう」というようなコース作りがメインです。そして回遊(回遊経費)をいかに落とすか、そうしないと競争に勝てないというのが現実ですね。それは分かります。私達が言っているのは「商業的な話」であって、今すぐどうこうしようという問題ではないんですけれども。

まあ先程からお話をしているように、我々は「先の話」をしている訳でして、専門的に、これを一切無料にしてしまうと、先程言ったように、その観光地は荒れていく。我々が大事にしなければいけないのは「資源」ですね。その資源をなくしてしまったら旅行業者も観光業者も何もない。

だから一番大切なことは、この自然を、我々の観光資源を「どうやって守っていくか」ということが先ず第一だと思います。それがなくなつたら、もう何も出来ない。だからそのためには「将来どうしていくべきか」というのが今日の会話ではなかろうかと、私は思っておりますけど。

佐藤

確かにそうですね。今、たくさんお客様が来ている北海道に消費者に行きますとですね、地元の旅館が1泊2日でもらっているお金ってのは3.5万円くらいしか落ちてないんだそうで、数は多いけれどもお金は落ちてないという話でした。

そういう現実の中で、いろんな世界的な流れを少し、JT日の調査部なんか勉強しているんですか、ヨーロッパのクリベンドロフという、ヨーロッパのツーリズムの理論的な学者がおっしゃってるんですね、既成したツーリズムのマーケット(市場)には3割ほど、高い支払い能力を持った高所得者、エコツーリズムなどにたくさん支払う意思があるという人達の階層があると。そしてそういう人達がマーケットに溶け込んでいると、そういうことを言いました。

で、日本でもこれから「おいしい客觀」はですね、やっぱりいるんですよ。やっぱり支払い能力があり、そうした「意思」っていうのを持っているっていう人達はいる。ですからそれに「踏み込み事が出来るところ」が生き残る。21世紀には生き残り、極端に言うとエージェントに熱情してダンピングで生き残るところは、僕は何か消滅するんじゃないかなと、「仕分け」はとても簡単で、まあ学者だから、そういう言い方をしたんだと思いますけれども、ここは「考え方」だと思います。

齊藤

あの、具体的な例であるんですよ。ある地区で安いソーラーを何千人と打つからという事で、供給金まで支払って、で、実際に誰かに来たと、落としていたのは、お金でなくごみだけだったと、現実にあるんですね。で、本当に聞いておられました、「あんなものに入るんじゃなかった」と。

だから、「安いソーラー」ですから考えて下さい。金があれば、そんなソーラーに行かない訳ですね。されば、ちゃんとしたソーラーに行くはずです。ないから行く訳です。そしたら、そこでお金も落ちないんです。だから、その辺のところは良く考えなくちゃいけないですよね、これから先は。

浦山

それで将来のことを考えですね、草原に限定してみると、草原の環境資源的な価値を高めて、お金を払ってもいいというふうに思ってもらおう。例えば、ミネラルウォーターでも、どこどここの水だから「これは飲もう」ということがある訳で、そう考えますと、日本の草原でいうのは完全に「価値が高い」と思います。

と言うのは、ひとつは、先ず広い草原って日本には少ないですよね。どうしてかという理由は、日本のように険しい地形の場所には、なだらかな場所があまり残っていない。さらには、雨が多くて湿かいところには、ほっといたら森ができるから、草原が出来てないってことは何らかの条件か、特別な条件があって、「森を作らない」ように邪魔しているんですよね。それで残っているなだらかな地形といいますと、三瓶や阿蘇のような火山地帯であるとかですね、また秋吉台や平尾台のようなカルスト地域。それから海岸近くの海底が隆起したところなどですね。そういう環境的には特殊な理由があるところですよね。そしてまた、森が出来ないというのも、人間の手が入っているんだとか、自然環境で言えば条件が悪い、湿地帯であるとか、風が強いとか、砂丘になっているとか、そういうところなんですね。そういうことから逆に考えましても、草原ってのは、日本の環境の中で非常に「特徴のある場所」なんですね。

だから草原といつても、全部ひとまとめにせず、それそれにどういう特徴があるのかということを打ち出すとですね、それが価値として人を集めることができるとと思うんですね。そうすると、ある草原に行って、それからまた別のところに行って、そしてそこが「なぜ草原であるか」ということを考えさせるようにする、そうするといいと思います。

生態

そうですね。

まあ大変いいところで時間が来まして、「まとめ」をしなければいけないんですね。やはり、お客様を、いいお客様をたくさんお迎えする、またしなければならないという切実な要望がありますし、それを支える農家がとにかく生き残ってもらわなくては困る。そういうことを考えますと、今、浦田さんからおしゃっていただいたように、ひとつは、資源としての草原をネットワークすることによって、日本人は「百名山」とかいいってネーミングがあると必ず行ってみたいと気が済まない性質ですから、「名所旧跡めぐり」というのもそれで沿っていっている訳ですから、例えば「草原四十八景」とかですね、我々もあちこちで、第4回目で集まりましたけど、そろそろ草原の「ブランド化」を確立してですね、そして、それが「大切」のかどうかいいのか、そこは学術的な研究をきつちりやって、「世界的にアピールできる根拠の確かなら」にして、そしてそれが「支払能力のある人に届く」ような形で情報発信する。そういう事を次の課題として留みませんか。

そして、ひとつ提案があるんですか、来年が国連の「エコツーリズムイヤー」です。まだ日本で動いているところがほとんどないんですね。時間がないんですけども、草原をエコツーリズムイヤーの「日本のプロジェクト」という形で情報発信する、という決議をここで上げていただけませんでしょうか。それを「シンポジウム」で議論をするという流れを作りたいのですが、

3つ提案をちいつと。相当遅いな司会者ですけれども、ひとつは価値のある草原、この草原に「なぜ価値があるのか」という根拠を多くの研究者の担当研究で確定をする。そしてそうした「価値のある草原のネットワークを作る」。そこにエコツーリズムの大きな人の流れを引っ張り込んで「国際化していく」。そして、そのための「草原基金」とか「草原トラスト」とか、もしくはブランドになった草原を運営の限りにおいては「料金を取る」。そういう意味では、「料金を払うほど価値のある」草原を、我々は、みんなで運んで守っていく、そういう事を始めていく。そのことが「新しい観光」を、観光というのはある意味で終わると思いますけれども、「ツーリズム」世界に通用する21世紀の基幹産業にツーリズムはなるとあっておりますけれども、そういう地域の基幹産業を作る」というような決議をですね、「環境を守ることが産業を作ることになる」という時代にあるということを、賛成出平ない方は手を上げてください。(笑)

こういふやり方はとても日本的なんですねけれども、時間がないので仕方ないんですが、「拍手をする」という形で了解していただけますか。(拍手)まあ「要請懇願」といったところでしょうね。

まあ、こういふ課題を今後議論していくうと、まあやっぱり、もう「草原サミット・シンポジウム」も来年で5回目になりますので、もう「議論の段階」ではなくて、(草原は)どんどん進むべきつありますので、「アクションを起す段階」に来たと思います。

そういうことで、シンポジウムの場では、「観光と保全」の分科会ではこういふ話がありましたと、懇願と意見で問題提起を先ず切り出して、進んでいきたいと思っています。

じゃあ、真っ直ぐどうも有難うございました。どうもみなさへ方、おり難うございました。

■第2分科会

『生態系と保全』 —事例発表—

事例発表 秋吉台パークボランティアの会

塩谷 信夫

ナチュラリスト

武次 房江

坊がつる野焼き実行委員会会長

弘蔵 岳久

山口県畜産試験場

藤井 宏志

進行 中国農業試験場主任研究官

高橋 佳季



高橋

時間が来ましたようですので始めさせていただきます。この分科会は生態系の保全に興る分科会ということで、今日4人のパネラーの方にお話をさせていただきます。時間も時間ですので、一筋縄でこちらの方からパネラーの方をお紹介させていただきます。

一番左、最初にご講演をしていただきます、塩谷信夫さんです。「秋吉台パークボランティアの会」の会員で、奥広の職員でもいらっしゃいます。そのお隣が、ナチュラリストということで塩谷のお話をさせていただきます、武次房江さんです。よろしくお聴きいたします。それからそのお隣は、「坊がつる」という、丸住山(大分県久住町)の山に「坊がつる」という渾名というか本名があるんですけれども、そこで実際に野焼きをやっておられる弘蔵岳久さんです。どうぞよろしくお聴きいします。最後かお隣の矢井志志から、皆永吉にある山口県畜産試験場の方で牛の飼牧による草地切りを、「草地切り」というのは「火道切り」ですね。このことを研究されている藤井宏志さんです。よろしくお聴きいたします。今日はこの4人の方からお話ををしていただくことになります。

で「生態系と保全」という非常に大上位に振りかぶった分科会に引っ張り出されまして「どうなるのかなあ」と心配なんですけれども、ここは「学会」ではございませんので、「生態学会」でもなければ「植物学会」でもないし「動物学会」でもないということですので、学術的に進化するようなお話をというよりは、むしろ草原を生態系として捉えたときに、それを守っていったり、その内容をいろいろ調べていったときに「何が分かったか」、それから、それを守るために「どういう工夫をされているか」、或いは「どういうふうにしたらいしいか」という事をですね、それそれに追加をしていただければよろしいんじゃないかなあと思います。

それでは時間も時間ですので、早速パネラーの方にお話をさせていただきたいと思います。一人10分から15分程度お話をさせていただいて、その内容についての質問だけをですね、まず会場の方からお聞きいたします。それで最後にいろいろと討論をしたいと思っております。

それじゃあトップパネラー、塩谷さんの方から話題提供をお願いいたします。

塩谷

塩谷と申します。私は一応レジュメの方に書いてありますように、過去に秋吉台の草原について調査をやっておりますので、その調査の内容と現状を、またこの2月に写真を撮ってありますので、それらをご紹介しながら進めて参ります。それからお説明をさせていただきます。ちょっと早くしていただけますか。

(以降、スライドを使っての報告)

まずこの調査につきましては、「秋吉台草原実態調査」ということで、平成8年度に山口県の方が環境省の外郭団体の「財団法人国立公園協会」に委託いたしまして実施したもので、

で、まず秋吉台につきましては、「我が国最大のカルスト台地」ということで、約130平方キロメートルあります。で、先程の「基調調演」の中で藤本輝長さんの方からありましたけれども、「国定公園」、それと「特別天然記念物」に指定されております。まあ学術的にも重要な地域となっております。

で、これはちょうど去年の「山焼き」の風景になりますけれども、まず秋吉台の草原、これは先程来ご紹介がありましたように、明日行なわれます毎年2月の山焼きで維持され

ております。

で、「秋吉台の山焼き」、これは先程渕本館長さんの方からご紹介がありましたが、文献によれば古墳時代。今から1500年前頃にはもう「火が入っていた」という記述があります。ですから丁度、渕本館長さんのお話のよう、「中世の始め」ということですから、この秋吉台の草原自体が千数百年、1200年から1300年ですか、これくらいの歴史を持っております。

で、「火入れ」、火を入れる草原では岡原地方が一番広くて、秋吉台の約10倍くらいのヘクタールとしての面積はござりますけれども、「ひとつの区域」ということでは、「我が国では最大規模の草原」を誇っております。

それともうひとつ、朝方の話してもありましたけれども、草原性の動植物が生息する、まあ貴重なエリアでもある、ということです。

その中で、今回面している問題につきまして、ちょうど朝方の話してもありましたけれども、例えは景色の良いところなどに集中して、一ヵ所で、観光客の方とかが結構集中して歩かれますので、「裸地」と言うか、そういう「けもの道」のような道、人が集中して歩くことで出来た道が隣所に作られております。

それで結局、ただの「はだか地」という以上に、傾斜がありますとどうしても侵食をしてしまうということで、苔の土が剥り取られてしまつて溝のようになら变成して、雨が降るとそこを溝のように水が流れて、更に表面を削り取る、こうこうとした石が露出している「溝のような状態」になつてしまつといった個所が結構見受けられるという問題がひとつあります。

それともうひとつ、樹木が結構、あたご難いだけれどもと思うんですか、草原の中に樹木がどんどん、どんどん入ってきておりまして、特にこれが「古い樹木」と言うよりも、むしろこの10年間くらいで入ってきたなどと思われる樹木がたくさん生えております。

で、この主な原因は、採草が、どうしてもずっと続いていないという事がありまして、広い一面の草原に、ほつほつほつという具合にブッシュ化した樹木、林がどんどん、どんどん出来ております。

で、この実態調査では「山焼きの範囲とその変遷」と書いてありますけれども、どのように動いてきたかという事と、「裸地の分布状況」、それから「植生荒廃と裸地化の現状」、それと「樹木の分布」、それと最後に「草原修復」、これをですね、ひとつは裸地を草原に戻すという事と、歩道を出来るだけ一本化して、そのかわりカットした歩道にしていくという事と、それと樹林の方は樹木の伐採をやって行きたないと考えておりまして、まあその「工法を検討する」といった指針になつております。

で、まず最初の草原の焼けたところで「山焼き範囲」。空中写真で測定した結果1,180ヘクタール、俗に「1,500ヘクタールの草原」と言われてありますけれども、1,180ヘクタールになっておりまして、この10年前後で縮小した山焼き区域が100ヘクタール以上と、原因が判っているのが40ヘクタールくらいありますけれども、まあ100ヘクタール、10分の1くらい縮小しております。

で、これが一番の草原の特徴と見える、「コキダケースキ群落」と呼ばれる群落になりますけれども、典型的な秋吉台の植生になります。

で、丁度ここが、右の方に切ってありますけれども、これが「火道」、防火帯でございます。これは2月の始めに写真を撮りましたので既に火道通りは終わっておりますが、ここが防火帯になっておりまして、多分これが1年くらいの草が生えていたんじゃないかなと、そしてここを10m幅くらいで刈っておりまして、その外にはもう既に樹木が、ここは松がありますけれども、樹木がどんどん、どんどん入ってきておるという現状があります。

で、向こう側に丁度草原が見えておりますけれども、段々こういう具合にブッシュ化していくという、どんどん中間に残りてくれれば、こうブッシュ化して人が中に入れないような状態になって、これが丁度植林とブッシュ化した間にありますけれども、結構この間を通過するということが、なかなか難しくなつておると、で、地元の方が山焼きで上がって来られますけれども、非常にこういったところは通り難くなっているということと、色々山焼きの草原の区域と地元の聚落との間が遠くなつておりますので、移動に相当な時間と労力を要すと言うような現状、問題点もあります。

で、これが「裸地化」というか、「けもの道」、私達が「けもの道」と呼んでいます、人が歩くことで出来た裸地化した道になります。ここが明日山焼きを見に来ただく展望台になります。これからずっと歩道がありますけれども、ここが「若竹山」という見晴らしの良いところです。で、その間にたくさん、「わき道」が走っております。正規のルートはこれからこう、この若竹山の後ろを回つてこういう具合に上がって行きますけれども、ここに一本とかここにも一本とか、バイパスみたいに形で「わき道」が形成されております。この辺りが結構踏み付けられていて、そういうところが残かっているというのが、まあ上から見ると判ります。

で、若竹山の頂上から見た、踏み付けられた近道の「けもの道」になりますけれども、これはまだ樹木がないからこれくらいで済みますけれども、中はど迫りまで倒れて行けば済のようになつていて、表上が流れてごろごろした石が露出している、ごろのものよりもちとひどい、そういう状態になつてありました。

で、これがもうひとつ裸地化の激しいところで、「若竹ヶ森」の駐車場がこの辺りにありますけれども、「丸山」という丘の北側にある山です。若竹山同様、大変開けた

良いところで、たくさんの観光客の方が長者ヶ森の駐車場に車を止めて、歩いて上がってこられるところです。本来の歩道がこれからこう回って、こうありますけれども、ここをバイパスで通られておりまして、後また写真を見せしますけれども、結構「ほげてる」と言いますかですね、崩れて溝のように溝がなっております。

で、これが北山の山腹の、妙板する以前の写真になります。このように道がツルツルになっておりまして、ここをずっと人を踏み付けて走路のようになっておりました。

で、これが「施工後」と言つか、きれいに修復した後で、人が入れないように柵がしてあります。

で、従来がこれで、こういった山腹に「裸地」と言つか、道がずっと上まで続いていて、雨の日はまさに「溝のよう」に水が流れておるという状態で、これが工事が終わったら、ここに芝を張ってあります。まあ段々こう、こちらの方の草がこちらの中に入ってきて来るという状況なんですが、ひとつ問題は、多くの観光客の方はなかなか入ってこられないんですけども、人が入らないようにこうして柵を柵で囲っていても、例えばここに、もう脇に別の道が出来ているとか、柵の中を上から辟りてこられる方がいらっしゃって、なかなか悪い通りには元に戻らないという現状があります。で、「いたちごっこ」になっておりまして、結構お金と一緒にやっておりますけども、なかなか悪い通りにならない。人の動きはどうしても良き方へ、良き方へと行くということで、多分ここを渡したら(修復したら)またこちらの方ということで、どんどん同じ事が続いております。

「山焼きの範囲と樹林帯廻」ということで、一番注目されますのが、この「落葉広葉樹」が2.8%とあります。主にクヌギの木になります。クヌギの木は非常に耐火性があると言うかコルク質が固いということと、落葉樹ですので落葉樹に比べれば葉っぱが無いということで、現在の山焼きの方式では火をつけたらバツッと燃やすという方式になりますので、非常に燃え難いというのがあります。これが結構幅を利かせて残っております。

これは先程の地点と反対側の写真になりますけど、草原の方にカメラを向けてバッと写しただけで、こういったところに、随くでいえばこれで、近くではこれくらいの木が毎々生えて来ていると。これは2月ですので常緑樹です。で、ここにあるのが落葉樹。こういう場合にあります。

で、これは「ドリーネ」と呼ばれる庭みですが、ドリーネの中に常緑樹が結構残っているのがよくございましたけれども、このままでは

で、逆に山の尾根と言うか、高いところにはこういったクヌギの、耐火性のある木がどんどん、どんどん種を落として跡がついております。

これが秋吉台の一番中心の「地獄台」と呼ばれている一番石灰岩柱が多いところです。ここにも樹木が密集してい

るところが見受けられますか。岩に囲まれた形で、これが火を止める動きが岩にありますので、こういったところでは結構耐火性の無い、少し弱いタイプの木というかそういう常緑樹、広葉樹が結構残っております。で、これが現在してあるといつ次第です。

で、ここは北山。先程戻れていますと紹介しましたけど、一番展望台としては都合がいいところですが、ここに長者ヶ森がありまして、向こうはもう秋吉台の端になりますけども。こう一望しても、季節的に2月ですから落葉してますけども、結構ここ、ここ、ここ、ずっと樹林がどんどん、どんどんこの辺で残がっているというのがお腹にしだだけるのではないかと思います。

以上で一応「実地調査」の方は終えさせていただきますけども、時間の関係で、対応につきましては、平成9年夏からずっと、いろいろ木を切ったり裸地の修復を行なったりしていますので、後は資料の方をちょっとご覧いただければと思います。

続きまして、私の向してあります「秋吉台パークボランティアの会」について、ちょっとご説明をさせていただきたいと思います。

まず「活動内容」につきましては、元々「草原の修復」と言つか、それが生になっております。それと、まあ「遊びながら」と言つか、永続させるためにはある程度「楽しくやる」ということで、いろんな「自然観察会」がありますけども、まあそういうことで活動をやっております。今、会員数が30人。年会費1,000円ということで、「秋吉台管理事務所」の方でお世話をさせていただいているとあります。

で、「活動風景」ということで、丁度大雨の後、遊歩道の修復をしている様子ですが、秋吉台の遊歩道は赤い柄装とかがされておりません上に、こういった便食で石などがゴロゴロしてありますので、それをもう一回「上流」と言いますか上方へ戻すということでやっております。

で、もうひとつ、これは先程出ました北山のところですが、駅方の岸本先生のお詫の中でもありましたけども、駅跡やというか、駅跡のために掘られた褐鉄鉱(鉄鉱石の一様)の跡が残りましたけども、実はもう50年くらい経つんでですが、ひとつには秋吉台には水が無いということで、結構堆土が熱くなりまして高温であるということと、土が流れやすいということで、どうしても草が根付かないということで、広い面が赤茶のままになっておりまして、ここに手作業で芝を張り付けたという。丁度その直後の写真です。これを去年の春行ないまして、この冬見ましたら、まあこういったシダ類というものがバツバツと生えてきておりまして、この辺は少し、やはり芝が高温で枯れておりましたけども、次第に取り戻しておるという状況です。

で、これが全体の様子ですけど、毎々と上方にあがって来るという状況になります。

まあ「パークボランティアの会」、手作業でみんなやつて

ありますので、どちらかとこういった活動を続けておられます。ご興味がある方は是非入会をしていただきたいと思います。以上でございます。

高橋

はい、どうもありがとうございました。

施設を実施されて、マクロの面から段々小さなところまで、そしてその具体的な提案に基づいてですね、道の整備だとか、樹木の伐採だとか、そういう活動内容をご紹介していただきました。

秋吉台全体のイメージを見るのに、先程の「基調講演」もとても判りやすかったんですけど、また違う面を見ることが出来たんじやあないかと思いますけれども、今のご報告に対する質問、何かありましたらお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

ここですね、光(照り)がものすごくあらしくてですね、赤場の方の顔が全然見えないんですけど、それで声を出して手を上げていただけますでしょうか。どうぞ、よろしかったら、いかがですか。ございませんか。

はい、それじゃあまた後の「討議」の中でもいろいろと話題を提供していただきたいと思います。じゃあ折角ですから私の方から幾つか質問したいんですけど、「けもの道」とか「牛の道」とか「人の道」とかいろいろあるんですけど、「けもの道」の場合も、ああやつて頂上へ向かって真っ直ぐに行くようなものがあるんでしょうか。

畜産の方ではですね、「牛の道」ってのは必ず斜面に対して構造にしか作らないんですよ。ですから少々、あんな垂たい牛道が歩いていてもですね、土壌が崩壊することはあんまり無いんですけど、それで実際に斜面を壊すのは「じゃあ誰が」とて言うと、大抵人間なんですね。面白いことに、人間はすぐ、縦に真っ直ぐ走ろうとする。そうなると、もっぱら道を補修する一方で、何かそういう「説教道」みたいなものを作つていらっしゃるのかどうかってのを、ちょっとお聞きしたいのですが。

豊谷

元々、「緑色のいいところ」に道を作るというのは非常に難しいですから、緑色の判断にならないように、出来るだけ実測を通して「道が見えないよう」ということで工夫して作っていることが逆に「仇」になりまして、先程高橋さんがおっしゃいましたように、どうしても一面線に人間が上がると。

で、もうひとつは、調べてみると大体傾斜が15度以上になりますと侵食が始まるというのかどうもあるみたいで、侵食が始まつたら人間はどうするのかと言うと、今まで一面線を歩いていたのがですね、段々こう並がつてくる。で、先程の「緑の写真」でご覧いただいたように、柵の外側に並がつてくる。自然へ段々拡がつて益々大変な事になる。

ということで、「こううから行けますよ」という(正解のル

ートを)実内しました。確かにその通りに上がられる方は多いんですけど、今度降りるときは「一面線」に降りられるということで、これもなかなか「知らかねばなし」と言うか、もう監視するくらいしかないのかなと。もうちょっとモラルに訴えたいなというのもありますけども、どうしても「草をしたい」というのがみなさんあるようです。以上です。

高橋

はい、ありがとうございました。ほんとに難しい問題ですね。先程の「基調講演」にもありましたが、「人が入ろうするとどこかが壊れていく」という、「草堂通り」の轍たるものかも知れませんか、またいろいろとお気付きの点があったら後でお話しをいただきたいと思います。

それじゃあ2番目の「ご提案」でございます。武次さんの方から、よろしくお願いいたします。

武次

武次です。お手元の資料にですね、秋吉台の南北部を含んだ地域に生息する蝶の種類を列挙しておきました。私は秋吉台の蝶に大変興味を持ちまして、14~5年、秋吉台の中をずっと歩き回っておられます。本日は、秋吉台の自然とその保護を「蝶の観点から考える」ということで、お話しをさせていただきたいと思いますが、あがつて途中で話しが中断しても如何かと思いまして、こちらの方に書いたものを準備しておりますので、失礼ですか頼ませていただきたいと思います。

これは少し古い資料ですが、以前、1991年1月26日の毎日新聞に、「日本の森林と草原の割合」ということが載っていました。森林が60%、草原が40%と、「世界に比べて草原の面積が少ない」という事が書いてありました。多分海外では牛や、羊とか、数を多く飼っていて、また放牧などをしているから、そういう点では「人工的な草原」が多いのではないかと思います。またこれは10年前のものですから、現在では草原の割合はもっと少なくなっていると想われます。

戦後、1950年から1960年には、特にクヌギ、コナラなどの純木林がスギ、ヒノキの材に変えられてきました。純木林の樹木を薪や炭にして燃料にした生活も、石油やガス、電気に変わりました。

草原は「草刈り」、先程からおっしゃつていらっしゃるようにな、「草刈り」、「山焼き」、「放牧」によって維持されてきたことは周知の通りでございます。以前どこかの農家でも田畠の耕作、耕作のために牛馬が頼んでおりました。牛馬の飼料として、また田畠の肥料として、草刈りは不可欠でした。

戦後、「高度成長期」に入り、農業機械、化学肥料の急速な発達、普及により草刈りの必要性も薄らぎ、草原の構成が「シバ草原」から「ススキ草原」に進化してきました。都市と農村の所得格差が生まれ、農村の過疎化が進み始めました。現在多くの農家は宅地化、ゴルフ場、スキー場に変貌し

ています。そうした中で園地「秋吉台」は多くの方々の英知と理解の元に、草原として守られてきたことを嬉しく思います。

近年「里山」という言葉が一般的になり、「里山を守ろう」とよく言われております。人の手が加えられて維持されてきた森林、「二次林」を中心に、人の暮らしと深く関わって来た里山村の自然と生活を守る運動も行われるようになりました。里山はたくさんのおいしい動植物を育んできました。ここ10数年前より各地で理解されるようになり、それに対する対策、取り組みも始まりました。日本林道学会も早くから「里山」に注目し、各地で調査研究がなされてあります。

草原性の蝶の衰退は著しく、早いとして日本屋の蝶は、また一種類も「種の絶滅」はしてはおりませんが、国内でも種によっては多くの地域で絶滅したところもあります。その原因として草原の開発は勿論のこと、草原の草刈り、山焼き、放牧の衰退といったことも無関係ではありません。種も人為を含め環境変化に対応し巣場を疊り返してきました。人間は多様な環境でも生きられますし、蝶にとってはちょっとした環境の変化が致命的な結果になります。秋吉台と言えども蝶にとって決して満足のいく環境ではありません。次に挙げたものは秋吉台の草原を代表する蝶で、「山口県産蝶類レッドデータリスト」に指定される蝶たちの名称とその生態の一覧であります。

ということで、ここに「ツマグロキチョウ」、「クロシジミ」、「シルビヤシジミ」、「オオウラギンヒョウモン」、「ウラギンシジヒョウモン」、「オオムラサキ」、「ウラナミジャノメ」、「ギンギチモンジセセリ」と列挙いたしましたが、この秋吉台周辺には現在71種類の蝶が確認されております。

蝶は種により「成虫発生時期」、「発生回数」、「越冬状態」、「食草」も異なります。そのため環境の多様性、食料となる草「食草」も豊富なことが望されます。これらの蝶がいることは、やはり山焼きと草刈りによって、秋吉台には蝶の餌になる「食草」が維持されてきたことに起因しているものだと考えております。

「山焼きが蝶に与えるもの」ということですが、山焼きによって一部の蝶が焼死することは事実ですが、蝶の食草の生育に好影響を与えるメリットの方が大きいと思われます。それは山焼きをしない場所より、山焼きをしている場所の方が蝶の種類が豊富なことから推定できます。

また「草刈りが蝶に与えるもの」として、草が刈られる時期により「被若」が無い訳ではありませんが、山焼き同様、蝶の食草の生育に好影響を与えるメリットの方が大きいと思われます。それは山焼きをしない場所より、山焼きをしている場所の方が蝶の種類が豊富なことから推定できます。

草原の維持には「山焼き」、「草刈り」は不可欠であります。秋吉台ではどちらも部分的に継続されてきましたが、10数年前頃から多様性に富んだ草原が、急速にススキ草原に替

換してきたように思われます。

ススキは多種の蝶の食草ではありますか、刈取りがされずに山焼きが行なわれると、根元で越冬している蝶の幼虫は高温にさらされ、死亡率が高いように推測されます。全国的に草原がススキ草原へと向かう傾向にあり、かつては繁殖率の高かったジャノメチョウ科の「ジャノメチョウ」が、ここ近半、秋吉台でも激減したように思われますのは、ここでは「何故でしょうか」と書いておりましたが、ススキが全部刈られないで焼かれた場合には、このジャノメチョウと言うのは地表面ではなくススキの根元近くで越冬しておるそうです。だから上から火の粉が落ちて当たる率が高いから全国的に、よく「爆発」の中では「駆逐」と言われてきた多くの蝶たちが、今全国的に激減していると言われております。

秋吉台でも確かにこの蝶がいなくなつたんです。「いいい訳ではありませんけど、このチョウチョは元々7月の上旬から8月いっぱいまでたくさんいる蝶で、それから8月の間は少し減りますが、草原に入れば、他の蝶を観察するのにも邪魔になるほどいた蝶ですけれど、現在では激減しております。

だから蝶というのは、「誕生のバランスが崩れてきたから蝶のバランスも崩れてきた」ということが言えると思います。「蝶は環境を守る蝶」と書かれております。蝶を愛護してきたものとして「運営ではない」と思います。

秋吉台上の放牧、草の利用、ドリーネの活用なども総合的に考えてみる時ではないでしょうか。広画面な草刈りに対して、同時に全面的な草刈りを行なうのではなく、季節も視野に入れて、いくつかのブロックに分けて、ローテーションで草刈りが出来れば、草原自体も多様性を持つ草原になるのではないか。私は素晴らしい自然と、その回復のために英知と力を合わせてやって行こうではありますか。という事が私の懐に纏わって来て思った事であります。

その懐にも、こちらの秋吉台上には日本各地で姿を見なくなつた蝶で、「オオウラギンヒョウモン」という、西日本地域と言うか、本州ではここ秋吉台だけにまだ生き残っている蝶がおります。食草はスミレです。この蝶は九州ばかりでは割と豊多く繁殖しているんですが、その「生き残っている場所」と言つのが焼肉にも自衛隊の演習場、山焼きをするところ、放牧をするところ、草刈りをするところ。そういうようなところに、九州では割と本州に比べて繁殖状況が良いくて、こちら秋吉台の方でも以前、15年くらい前は大変多かったんですけど、ススキ草原に遷移することによって食草のスミレが減ってしまったとか、草刈りの時期が例年よりも遅くなつた時に、一番大きな「ポイント」と言いますか、場所、「繁殖エリア」の草を、卵の付いたまま秋吉台から持ち出されたことが過去にある訳です。その頃から急激にその蝶が減つたことも事実のようです。でも今まだ生息しておりますから、みなで力を合わせて守っていってやりた

いと私は思っております。また、みなさんのご協力もお願いいたしたいと思います。

まあ、大変大きなタイトルで、小心翼翼になぞらえてお話をしましたけれど、その点、私も知識が無いものですからお許し下さいませ。終わります。ありがとうございました。

答稿

はい、ありがとうございました。ご謹慎されておられますけれども、私共、そんなに「大きめ」を持つてお話をございませんで、そこから「地べたに這いつくばったような目」から意外と広い世界が見えてくるものだと感ります。

「煙の日」から見て、「煙にとっての草木のあり方」とか、あるいはそれを管理する知恵とか、文化だとかいうものまでお話を聞いていただきました。そのお発言の内容についてご質問があればありますか、いかがでしょうかかしょろしいですか。何か他の考え方でもよろしいですけど、それはじゅあまた後で、討論の中でお話をさせていただきたいと思います。

それじゃ改めて目に入ります。3番目は秋吉台ではございませんけれども、あそこは久住町にあるんでしょかね、久住町の「坊がつる」の方から、火入れを実際に再現された活動をやられている事例をご紹介していただきたいと思っております。弘謙さんです。それじゃあよろしくお願いいたします。

弘謙

「坊がつる」の、その名前の由来とかそういうことは、資料に書いてありますので、それを参考にならって下さい。

たいたい「坊がつる」自体の標高が1,200mです。私共が山莊を経営しておりますが、そこは1,300mあります。だいたい九州では「一番高いところ」に常時住んでいる人間の一人であります。

非常に雨の多いところでありました。大分市では2,800mm平均、岐阜高原で3,200mmぐらいなんですね。それから300m上かったウチのところでは、大体4,200mm平均、年間に降水量があります。

「煙焼き」をやめてからですね、だんだん、だんだん灌木とかが生い茂り、またそれに「温暖化」というものも加わりまして、木の伸びが、ここ10年くらいで非常に良くなりました。特に斜面で、元々かび山地帶ですので、下の地面が隆起した上に、表層土が1mから2mしかありません。すぐ下は岩盤になります。そういう状態での斜面ですから、台風とかが来てちょっと木が倒されるとですね、非常に表面の崩壊が激しくなって、斜面は崩れやすくなります。

「坊がつる」にいたっては、明治の中頃くらいまではまだ森林に覆われていたという文献もあるぐらいで、ある日突然、硫黄山(九重連山の山)の重硫化ガスにより木が枯れまして、今の「湿地化」が進んだと、そういう話にもなっているよう

であります。

じゃあちょっと、坊がつるをご存知ない方には、スライドをちょっと見ていただきましょう。

(以降、スライドを使っての紹介)

「32年ぶりの野焼き復活」ということで、以前は牛の放牧とかで、この「遊びなど」と言いますか、登山道も歩いて2時間ほど掛かる場所まで、牛はちゃんと草を食べに来ておりました。それがやつぱり「舗装の合理化」とかそういう形で、だんだん牛の放牧をやめるような形になってきましたが、これが貢印の色がやや違っているところ、この辺り全体を称して「坊がつる」と称呼します。これは昭和59年の写真です。これでもう野焼きをやめて約15年ほど経った状態です。この辺りの「形」というか様子を次の写真と見比べて下さい。よく見ておいて下さい。

ちょっと斜面が変わってきてていますけども、もうさつきのラインですね、このラインからずっとこちら側に来ておったのが、これが去年の写真なんですが、約20年程でもう20センチ、こちらまで出てきています。どんどん、どんどん森林化が進んでおります。

で、この坊がつるも全部が「国立公園」の区域内ではあるんですが、この川を境にこの部分は「特別保護区」です。今野焼きを実施している部分は「一種」から「二種」の混合地域で、こういう部分を焼くようになっております。次どうぞ。

これも去年、焼く前の状態で、だんだん、だんだんにいうカヤが増えてきました。ほんのちょっと前までは、今の時期は雪が降って、それが上に落り積むことによって、毎年カヤは押し倒されていきながら、草を刈らなくてもあまり「伸び」がないという状態だったのですが、「温暖化」で、特にここ5~6年に重づては毎年どんどん、どんどん伸びております。

で、去年「地焼き」、「焼地切り」をしての大さな変化は、この林(木)の大きさが、一回切ったことにより、かなり細くなったりということですね。作業も効率化が出来るようになりますし、また、見晴らしがかなり良くなりました。次、お願ひします。

昭和59年頃というのと、(山の中腹まで)、こういふうに判ってたんですよ。で、この辺りのラインですが、次どうぞ。

先程の線で示したところはこの辺りですね。このラインから下が全部、一面の草原でした。たった32年間という間に、これだけのノリワツギとかアセビとか、そういう灌木類が、どんどん、どんどん、生い茂ってきました。

「じゃあこの辺りまではなぜ変わらないのか」と言うと、

大体3年から4年に1回ぐらいの割合で、登山道の方がキャンプ中に火を飛ばすことによって、時々焼くことになってたんです。それでこの辺り(夜火の火が)止まるということで、こちらほど激しくは「森林化」と言うか、そういう状態にならずに済んだかと思います。次どうぞ。

で、これは坊がつるに残っているノハナショウブなんですが、これが去年から今年の夏に掛けては非常に多くのところで見られるようになりました。次どうぞ。

同じくハンカイソウという花ですね。これも多くなりました。しかし、今、この辺りの特別保護区の部分で、ノハナショウブとハンカイソウの色とりどりの花が咲くというの、私の子供の頃には見えていた風景なんですが、だんだん、だんだん追いやられてきていますんで、ここを、(省庁西端で)環境省に変わりまして、許可を取ったりするのに、非常にまた時間が掛かったりするかも知れませんけど、是非、特別保護区に指定された頃はですね、この辺りも一画の風景であります。で、こういうハンカイソウやノハナショウブといったものやミズゴケ類、モウセンゴケとかそういうものもたくさん繁殖していましたんで、そういう時代に指定されたものであれば、「その時代に是非見てみたいな」とそういう気持ちで、まあ「32年ぶりの野焼き復活」になった次第です。以上です。

高橋

はいありがとうございます。随分短く終わっちゃったんで、あれなんんですけど、すみません、それじゃあ質問を受けてみたいと思いますが、いかがでしょうか。はい。

塙井

すみません。あの、「許可を受ける」というのがありますしあげど、わざわざ「火をつける」ために許可を受けてやつらしゃるんでしょうか。

弘司

はい。国立公園内はいかなる火、例えばキャンプの火にしても、ちゃんと指定した場所でしか火は焚けないです。そういう点では全体に火をつけるという事に至っては、環境庁だけではありませんけども、許可を得ないと、坊がつるでは出来ないようになっています。

それから先程言いましたけど、私は「ボランティアを募集する」という形ではやっていません。それは、まあそれまでには3~4年掛かったんですけど、九州電力さんが実はこの近くの山を持っておりまして、その「水源涵養保安」とかそういう形ですね。九州電力さんが、例えば作業のときのバックアップ、それは材料から車両から、そういうものに至って「全面の支援」をしていただいている。ですから「ボランティア」という形ではなく、「ひとつの仕事」とし

てですね、「仕事の一環」として、「野焼きをやろうじゃないか」と、そういう形で話しがまとまって、今日に至っております。

高橋

はい、ありがとうございます。今お聞きしようとしたことを先に答えてしまったんですけど、「民間の支援」によってですね、実際に「守られる」と言っていいのかどうか判りませんけれども、「昔の草原に少しつつ復元しつつある」と言うことなんですが、何かご質問はございますか、他に。

そこはまだ、入会地では、牛場の放牧とかそういうことに牧野組合などが関わること、或いは野焼きについて関わつたりってことはあるんでしょうか。

弘司

はい、大船山(九重連山の山)を挟んで反対側の板切牧野組合の方も参加していただきますし、そういう意味で、会議を持つときには参加していただいております。

高橋

はい、ありがとうございます。それじゃあ最後のご振舞でございます。4番目は山口県農業試験場、藤井さん。よろしくお願いいたします。

藤井

只今紹介にあずかりました。山口県農業試験場、同農業技術部放牧管理グループの藤井です。よろしくお願いします。

今回「草原シンポジウム」及び「全国山焼きセミナー」がこの秋吉台で開催されるに当たりまして、山口県農業試験場として何かお役に立てる事が無いかと考えまして、現在人力で実施されている「火消切り」を、牛を使って作ることの実証を試み、「防火帯設置のひとつ的方法」として提案することとしました。

「牛で防火帯を作る技術」は、座長であります農林水産省・中国農業試験場の高橋(佳季)さんが提唱されており、島根県三瓶山、熊本県阿蘇山で既に実践されている技術です。また、今回の試験を始めるに当たり、高橋さんのご助言を仰ぎながら実施しました。

本県では平成元年度より、牛舎周辺の水田や畠山などの放牧を推進しており、試験場としても放牧技術を蓄えてきました。

前面化が長くなりましたが、これから「牛による防火帯作りの試み」について紹介させていただきたいと思います。

(以降、スライドを使っての報告)

先ず発表課題名なんですが「カルスト台地における牛の舌刈りによる防火帯作りの試み」としまして、「牛の舌



「刈り」とは、牛が草を食べる習性を利用して放牧により草刈りを実施することを意味しております。スライドお願いします。

現在秋吉台で実施されている「火消り」です。防火帯幅は5mから8mで、このように草刈り機で刈取った後に、人力で草を「火入れ側」にかねす(除去する)というような作業をされております。植生につきましては、このようにササ、ススキが生体となっております。スライドお願いします。

この「人力による防火帯作り」の労働時間を聞き取り調査しました。調査地区名はN地区で、防火帯の長さは620m、幅8mです。それに要します「労働時間」なんですけども、刈取りは6人で3時間で「延べ18時間」、草の除去は9人で3時間で「延べ22.5時間」となりまして、合計で「37.5時間」、1kmあたりに換算しまして「60.5時間」の労働力が必要でした。スライドお願いします。

次に防火帯作りの本題に入ります。

先ず畜産試験場の概要なんですけども、ここが美濃町です。ここが秋吉町で、ここが美濃市にあります。国定公園から車で美濃市へ20分程度のところに位置します。地形も国定公園の中とよく似ております。このようなどころで今回の試験を実施しました。スライドお願いします。

これが今回「火消り」の試験を実施した試験地です。ここにカーレン(カレン:石灰岩柱)が見えます。スライドお願いします。

先程の防火帯を図式にしたもので、ちょっと上の部分が途切れていますけども、この赤い線が今回防火帯を作るために電牧(電気牧柵)を張ったところで、この線の「野草地」というのが山焼きの際に火入れをするため残した部分です。スライドお願いします。

先ず「材料及び方法」なんですけども、試験期間は平成12年の8月から11月。供試牛は黒毛和種の妊娠したものから12頭放牧しました。その下に記したものにつきましてはこれから順次ご説明していきますので、ここでは省略させていただきます。スライドお願いします。

これが今回用いました「放牧施設」です。これが「電牧線」非常に軽くて400mで1kg程度です。「ポールセット(電牧の杭)」はこういうラボールで、こういうソーラータイプの電牧線を使用しますので「電源」を引っ張ってくる必要はありません。

「給水施設」はこういう農業用の50リットルタンクを用いて、このように設置して、これは「浴槽」なんですがどちらも、建てられてあつた物を使いまして、そしてこれにポールタップを取り付けておりますので水が溢れ出ることはありません。こういう施設によりまして「水の無いところ」でも放牧は可能だと考えられます。スライドお願いします。

これが先程の電牧柵を設置しているところです。スライドお願いします。

このように石灰岩が林立しているところでも、このような岩と岩との狭い隙間でも、電牧は簡単に設置することが出来ました。スライドお願いします。

「電牧柵設置・撤去の労働時間と経費」なんですけども、防火帯の長さ1km、幅20mで「長方形のもの」として、実測値を基に試算しました。

防火帯の長さは全体で2,040mで、電牧の設置に要した時間は、延べ19時間。撤去は「火入れ側」の電牧のみ撤去しましたので、撤去側1,000mで延べ2.1時間で、合計で延べ21.1時間になります。先程の「人力による作業」が約0時間でしたので、約3分の1程度の時間で設置出来ます。なお2年目からは、こちらの撤去した側、「火入れ側」の設置のみとなりまして、多分「撤去時間」の倍になりますので4.2時間程度、再設置のための労力が掛かると思います。

「直接経費」なんですけども、電牧柵は2機使用しましたが1台75,600円、電牧線が1mあたり100.4円、ポストは5m間隔で使用しましたが1本につき410円で、全体で初年度の経費は350,000円となりました。なお2年目からはですね、電牧柵、ポストの耐用年数が5年程度あると思われますので、2年目からは、もし電牧柵が燃えた場合にのみ37,000円程度が必要経費として考えられます。スライドお願いします。

これが先程の試験地の「放牧前」の状況です。スライドお願いします。

これが放牧の様子です。この石灰岩があるところでは、

岩の草まできれいに食べてあります。スライドお願いします。

これが「放牧後」、放牧から3ヶ月経ったときの状態なんですが、こちらとこちらに墳地標を張ったんですけど、このように防火帯の「標」がはっきりと見えるようになりました。スライドお願いします。

放牧をした場所の植生について調査したものなんですが、けども、先ず「草丈」の推移なんですが、最初明かりであったものが23cm程度と低くなっています。スライドお願いします。

次に「牛の舌草刈りによる冠部被覆の推移」なんですが、この「冠部被覆」と言いますのは、地表の草を上から見て「どれくらい覆っているか」というものなんですが、野草地は100%であるのにに対して、放牧地ではこのように一番下がったところでは40%で、少し踏んで48%くらいになつてあります。スライドお願いします。

で、その防火帯の中での生長、「ススキ、ササの冠部被覆の推移」なんですが、ススキはこの(グラフ)のように、9月から「直線的に冠部被覆は減少しています。ササについてですが、10月まではススキ同様、直線的に減少していますが、そこから小さい「草丈の低いササ」が発生します。このように上がっておりました。なおこの「草丈の低いササ」は「火入れ」時でも活躍でしたので、防火効果の高い草ではないかと考えられました。スライドお願いします。

これが「生草収量」の推移を表していますけれども、こちらが野草地で、こちらが防火帯内です。「牛の舌草刈り」により防火帯内の生草量は減少していくとして、11月には(防火帯内の収量は)野草地との比較で、野草地の50%程度の収量になりました。スライドお願いします。

これは「1頭の牛が生活できる延べ日数」ということで、今の草の量で牛が何日間生活できるかという延べ日数を表しています。

この「カウディー(CD)」と言いますのは、「牧草力」とも言います。体重500kgの牛1頭を1ヘクタールの放牧地で(何日倒れるか)というのを表す指標です。

それで838日という結果になりました。これを365日で割り取ると1.7頭。ですから1年で1.7頭の牛を倒すことが可能ではないかと考えられます。スライドお願いします。

次に「飲水量」なんですが、夏場は45リットル、冬場は18リットル程度でした。今回の試験に用いました500リットルのタンク1基で、1日1頭が最大の45リットルの水を飲ん

だとして、11日間飲える計算になります。スライドお願いします。

2月に火入れをしたんですけど、これがその直前の「可燃物量」の調査です。可燃物の主な内容は、立ち枯れた草、枯草の堆積物です。

こちらが野草地内の「立ち枯れ」部分、こちらが「堆積」部分で、このように多くなっています。

で、防火帯内部では「立ち枯れ」部分はほとんど無くなるんですけど、堆積物は若干残っていますのでこのようになります。放牧1年目では、ある程度の「立ち枯れ」も含めて「立っている草」は食べなんですが、堆積物は牛は食べないので、このくらいは残るかと思います。スライドお願いします。

それでこれが試験地内に火入れをしているところです。スライドお願いします。

で、これがよく燃えているところです。スライドお願いします。

これは焼けた跡、火が通り過ぎた後なんですが、この辺は既に火が消えておりまして、一人で十分に消火活動が出来るような状態でした。スライドお願いします。

先程の「低いササ」というのはこの辺りの縁の部分なんですが、これは2月の現像なんですが、このように奇々としておりまして、「防火効果」が期待出来ると思います。スライドお願いします。

で、これが試験地の全景で、ここが山焼きをしたところでカーレンがあるところです。スライドお願いします。

それで、牛を放牧することによりまして「牛の糞による堆積汚染」が懸念されます。そこで野草地内の糞とその周辺の(アンモニア態窒素(窒素肥料であると同時に過剰な場合に環境汚染物質となる))について調査しました。

これが放牧後の糞で、こちらが放牧2ヵ月後の糞です。このように手に持つても不潔感は無く、良いのは飼育士のようないいかもしれません。スライドお願いします。

これが「土壤(糞中のアンモニア態窒素の含量)」なんですが、こちらの部分が土壤で、こちらから「防火帯内の糞の無いところ」、「野草地内の糞の無いところ」、「防火帯内の糞の糞下」、「防火帯内の糞から30cmのところ」、そしてこちらが「防火帯内の糞の糞側」を表しています。

「糞の現物」では100グラム中8.8ミリグラムのアンモニア態窒素があつたんですけども、調査した4地点中で最高を示した「糞の糞下」でも6ミリグラム程度と、他の3地点と

比較しても、ほぼ1ミリグラム程度しか上昇していないないといふふうなことで、畜による影響はほとんど無いのではないかと考えられます。スライドお願いします。

で、これまでの結果と畜産試験場の放牧技術の経験から「無理体外」を考えてみました。先ず「電気牧柵の設置」。これは通常の1kmなんですが、「山焼き直前に放牧」、「山焼き終了後に放牧」というふうに考えてあります。これはどういうことかと言いますと、「火入れ割」の構はすぐに撤去出来ますので、火入れの際にはそれを防火帶の中の火入れ地點から2m~3m離れた「燃えないところ」に一時撤去しておいて、山焼き終了後にはそれをまた元の位置に戻すという簡単な作業です。

それで「防火帶幅」は、今回の実験から20m程度。「放牧頭数」は、目安として1ヘクタールあたり1~2頭なんですが、まあ防火帶内の状況をみて調整すると、「放牧期間」は「連続放牧」と言いまして、ずっと出す方式を考えています。やはり山焼き直前に放牧(牛を放牧区域から出す)し、山焼き直後に入牧する(牛を入れる)というふうなことです。

「衛生状態」として、殺ダニ剤を毎月1回噴下します。以前は放牧の際の衛生対策というの結構厄介だったんですが、良い殺ダニ剤が出来まして、現在は非常に簡単に出来るようになりました。

「飲水槽」は、1頭あたり最大45リットル必要です、ということです。スライドお願いします。

それでこれが畜産試験場で見掛けることが出来る草原性の花々なんですが、今後は、放牧によって草丈が低くなることで蘇る植物の生態の変化や、環境の問題として既に発生する害虫の調査、及び今回の発表内容と同じようなことを、今後数年間に亘って調査をして、その生態、植生、環境調査等について調査する予定にしています。

スライドありがとうございました。以上で発表を終わります。

高橋

はい、ありがとうございました。「猫の手も借りたいところを牛の舌を借りた」というやり方なんでしょうかね。人がやるよりは効率時間は少なかったと。日本ほど人件費の安い国はありますので、そういうところで牛を使ったという事なんですが、今のご発言に対するご質問、ありますでしょうか。はい、どうぞ。

上原

おおざっぱな話して結構ですけども、秋吉台には今17kmの火道があると言っていますけども、「牛で火道を作る」といったとき、「全体」というのは無理でしょうけども、どのくらいが可能なんですか。

藤井

先ず「放牧頭数」なんですが、先程も言いましたように「1kmの距離に20m幅の防火帶を設置する」という事になると、単純計算で34ヘクタールの放牧面積という事になります。それで先程の結果から、「目安」として1ヘクタールに付き1頭~2頭の放牧が可能という事ですから、「34頭から88頭」の範囲くらいの頭数が、「全体に出す」場合は必要となります。

後ですね、まだウチの方でも確認をしていないんですけど、「水飲み場から牛が何キロ歩くか」というのがあります。それによってはまた変わってくるかも知れませんが、これは今後の研究内容として取組む予定としていますので、ちょっとまだその辺は判らないんですけど、まあ全体をやった場合、頭数的にはそのくらい、34頭から88頭くらいが必要かな、と考えられます。

上原

人間で刈った場合に比べて、牛の場合は「後に残る量」があると想うんですけども、まあそれは別にしても、(牛は火道を)真っ直ぐに進みますか。どう表現すれば良いか、火道に進ってこう。(防火帶を設置したい場所で思うように草を食べてくれるか、その場所から外れる事は無いかという感覚)

藤井

火道の脇に出ることは無いかという事ですか。分かりました。ちょっと説明がますで判り難かったかも知れません。けども、今回は電気牧柵というのをですね、防火帶として想定している場所の左右に設置することによって、その中を牛が歩くというような「通路」を作る、というふうな形になりますので、牛はその中に留まると言うか、外に出ることは無いと思います。

高橋

はい。一応4名の方から話題提供をいただきました。今からいろいろと討議をしていきたいと思うのですが、全体を通してですね、或いは個別でも結構ですので、何かご質問ございますでしょうか。何か思い出した事があつたとか、或いは勘言程度、或いは補足でもよろしいんですけれども、はい、どうぞ。

川添

あの、久住町なんですか、今の電気牧柵の件について、ウチら大分では「輪地切り」とか「輪地焼き」とか言うんですけど、防火帶ですね、その防火帶作りが、野焼きの中でも一番大変な作業なんですよ。だから牧野の組合員の方がだんだんお籠を取って行くうちに、その作業が出来なくなるので「野焼きが出来ないと、そういう形になりそうなんで、ウチの方でも(牛によって防火帶を作つてはどうか)と

いうふうな検討は今してあるんですけど、今お聞きした中で「大丈夫かな」という点が何点かあるんでお聞きしたいんですけど。

例えは前の方も言われていて、牛を放牧したときに、有刺鉄線の複層でも4段張っても、5段張っても逃げるときがあるんですよ。牛が冷靜な場合だったら大丈夫なんでしょうけども、例えは牛であれば「発情期」とかもありますし、お互い喧嘩をしたりするんで、そういうときに複層鉄線では簡単に抜け出てしまうんですね。だからそこら辺の「脱出」すると言ふのか、そういう可塑性を心配するのと、もうひとつは今の方も言われてましたように、きれいに全部食べる訳ではないんで、そこにある程度、枯草なんかが残りますよね。そうしたときに、今度は脊・野焼きをするときに、それから延焼をしないかどうかですね。通常の場合(九州地方での野焼きの場合)であれば、防火帯っていうのは、そこに刈った草を置くとして、ねらして、そこを燃やすことによって防火帯を作ってるんだけど、牛の場合は全然燃やさないから、延焼しないか、そこら辺をうつとお聞きしたいのですが。

鶴井

先ず「牧場から脱出するのではないか」という点なんですねけど、先ず最初、牛の導入時に「駆除」と言いまして、「駆除を教える」という作業が必要で、それを十分にやってもらうということがありますし、もし仮にですね、出たとしましても、牛は群で行動する動物ですから、まあ「駆除」と言いますか、どこかに集合場所を作つてそこから出て行く形にしておくと、朝夕とかで頭数確認とかする場合には必ず戻ってきますので、そういう点はあまり、まあすぐ隣が民家とか山んばとかといったところであれば、それは弊害もあるかも知れませんけど、秋吉台のように広くて離れているところであれば、また戻ってくると思います。

鶴谷

ちょっとよろしいですか。「防火帯の効果」ですが、実は私、畜産試験場の「火道」を見させて頂いたんですが、思いの外、非常に良く出来てありました。

現在、秋吉台におきましては、年に1回、11月から12月に掛けまして、草の伸びきった時期に(防火帯の)草刈りを実施しておりますので、実際に今から見ていただいても良く分かりますけど、防火帯に切り株等が残ってあります。で、まあ明日、雨間に行けば火入れになりますけども、火入れの際に、防火帯にそれぞれ人がついて、火を点けて行くはしから噴いて消すという要領で、その焼け跡が「ずっとつながった」所で初めて「火道が切れた」と称している訳です。

実際、畜産試験場の「牛が食べたところ」を見させて頂きましたら、非常に良く食べてありますので、まあこれを継続して行けば、「大きな切り株」と言うか、株自体が消滅するというのがありますので、秋吉台で言えば、現状よりも随分と

延焼は防げるんではないかなど、まあ効果的には「あるんではないか」と思いました。

高橋

よろしいですか。牛の防火帯のことばっかりになっちゃつたんですけど、秋吉台のように「牛のいないところ」でも、そんな試験をしてるんですね。

それと、多分言ひ忘れたんだと思うんですけど、さつさともお話しをしたように「牛で全部踏うんではない」と考えればどうでしょうか。短い草丈だったら非常に安全な輪切りが出来るんですね。そこにカレンが離れているって事も無いし、ちゃんと離出しているし、「短い草だから」ということで。そういうメリットってのは大きいんじゃないかなって思っています。

他に何かご質問はございませんでしょうか。

えっと、チョウチョのお話しがあつたんですけど、植物の方から誰かお話しの出来る方いらっしゃいませんか。

ホントに会場が見えなくって、ホントに申し訳ないのですが、それでも、内藤さんいます。いらっしゃいませんか。あ、どうぞ。

内藤

あの、「植物のことから」という話でもないんですけど、秋吉台の草原がだんだんスキが優先する「単調な草原」に変わりつつあるということをおっしゃったので、それについて。

そういうところでは、昔はいろんな使い方をしていて、場所によって草丈が高かったり低かったりと、いろんな場所があったんだと思うんです。で、そういう利用をされなくなつて行くことで、だんだん同じような草原ばかりになっちゃつた、ということだと想うんですけど。

そういう自然と言うか、生き物を調べている方達は、その感じられたことを、どんどん、今まで草原を使ってきた人達に向かって発信していくことも大事じゃないかな、と私は考えます。

今日3つほど分科会があるんですけども、「それそれ結構が違う」ということになるのかも知れない。で、そのときに、「生態系」ということを考えたときに、どんなことが必要なのか、どういう草原がふさわしいのかということをまず説明していくと、そして実際に草原を使ってきた人達、これから使う人達にとって、それは応じることが出来る事なのか、それとも難しい面があるのか、ということを聞いていきながら、「お互いに協力出来ることはどういうことか」ということを見つけて行くための「きっかけ作り」に今日のシンポジウムがなると良いな、と私は期待しているんですけども、後のシンポジウムでそういう話になればいいなと思います。ちょっと植物の話とは違うんですけど。

高橋

はい、ありがとうございました。植分哲学的なお話しをされましたか。今お話をされたように「どういう草原が必要なのか」っていうのは「永遠のテーマ」でして、内藤さんは今のようにおっしゃったんですけど、一方では「単純な草原でもいい」という人もいる説ですよね。その辺なかなか結論が出てないところだと思うんです。

ただ、今お話をされたようにですね、「ヨウコウの目から見たらこういう事が言えるんですよ」「植物の方からいつたらこういう事が言えるんですよ」という発想を今まで果たしてしてきたかなと思うんですね。「これは守りたい、守りたい」と言う一方で(言うばかりで)、そういう昆蟲を他の人達に出来なかつたんじゃあないか。それを、これを機会にやって行けばいいんじゃないかなってことです。

じゃあ、少し具体的に「話し」を深めて行きたいと思うんですけど、今いわゆる「人のいとなみ」によってファジー(あいまい)でモザイク状の草原があつたはずだと。その「いい加減さ」がまた良かったのかかも知れませんけどね、ある植物を守つたりとかヨウコウを守つたりするとかって時にあります。それでもやっぱ「火入れは必要なのか」どうか、先ずそこから。

大半の方はやはり「野焼きは必要だ」と思われると思うんですね。野焼きは「必要だ」と。野焼きは必要だけれども、じゃあ次は「刈取りは必要か」どうか。その辺のお考えをパネラーの方から、じゃあ最初はお二人の方からお聞きしたいと思うのですが。

武次

私は蝶を通しての「植物の見方」をしております。あの、(秋告)台上での植物は、刈りをする事によって、シーズン、シーズンの植物が再生されてるようになります。

またヨウコウの話で申し訳ないんですけど、「危惧種」の中にシルビアシジミと言う蝶がおるんですが、この蝶がミヤコグサと言う、地面をある程度這う、日の当たる所で水はけのいいところに生えている植物なんですが、これをシルビアという蝶が食べております。シルビアの生態は、先程のカッコの中にも書いておりましたが、年3~4回、5回くらい、年間に成虫になる訳です。この最近台上での草刈りがうまく行かないで、ミヤコグサが少なかつたりしたときに、スキが大きくなることによって日照時間が無くなると言うか、日が当たらなくなつてミヤコグサが、以前はこうつかんで育つて出来たものが、カヤの間にヒヨロヒヨロっとこう出ていてるくらいで、その内には無くなつて行く訳です。そうするとまたおかしな話ですが、この最近シルビアシジミと言うシジミ蝶が台上から飛出しているような状態の中で、じゃあどういう所にいるかと言うと、農家の方達が車で走られるところなんかは別とまだシルビアがしっかりととしている。草刈りをされることで今まで再生を繰り返していたシルビアが食べるミヤコグサはかなり少なくなつて、

ヨウコウの発生が激減している感じがします。ホント去年あたりは私はシルビアシジミを1頭も見てないって言うか。勿論観察する時間が少なかつたり、時期によっては飛んでいないときもありますけども、去年あたりは1頭も見ておりません。その前は「おひ、お前さんシルビアじゃあないか」とて程、ヤマトシジミと混じってたくさん飛んでいるのを見た記憶があるんですが。

そのように「草刈りの必要性」というのを、私は、シルビアだけを通してではなく、他の草原性の蝶の食べるスミレなんかについても感じます。スミレなんかも、牧草地が刈られた後をよく見ると、草を刈るとときに、草刈り機によつて地面の所々がえぐれると云うか、ひっくり返される。そういうふうなところにスミレの群落なんかを露出することが出来る訳なんですね。だから植物をいろんな形で再生したり、また人が入ることによっていろんな植物の種があちらに運ばれていったり、こちらに運ばれていったりと、以前は牛馬がしていくけれど、そういう事で植物が植がつていくってこともあるんじゃないかと思います。

またこの秋吉台の、地元のみなさんとそばを作つたり石んかする金(とってもゆかしい秋吉台ミーティング主催のドリー字耕作休耕)に参加した所の話なんですが、(耕作地周辺で)全然スミレの生えてないようなところでも、私が草刈つたら必ずここはスミレが生えるよ!って以前2年くらい前に書いたら、この頃は「武次さん、やっぱスミレが生えたよ」、「じゃあもういろいろなものが生えてくるから知れないから、もうちょっと刈つててよ」、そういうふうなこともあります。やはり草刈りがあって植物が再生されると思います。

そのまま置けば、植物も蝶によっては生育する時期が異なるとは思うんですけど、だけれどやはり、「草原」という事で考えてみると、スキの種が育くなることによって、他の植物が伸びられていることは事実です。

ですからまあこういうのもおかしい話なんですが、山焼きによって植物の種が部分的に残るのを事実だらうと思うんです。あるとき私がムラサキセンブリの群落を見つめたとき、「ここは良く育っている」と思ったところがあります。それはどういうところだったかと言いますと、秋吉台の土壌というものは粗粒によって土手などが造れる場合があるんですけど、まあそういうのと自動車か何かが入ったかで、そこが「隣地」になったというか表土が削り落したんですね。そこを先程のお話で、みんなさんが補修をされた。石灰岩だとか石ころだとかを敷き詰めて補修をされたんですよ。そうするとその辺りにあったムラサキセンブリの種が、その年から石のすき間に入ったんですよ。そうすると山焼きのときにもその種は焼かれないので、一時的ではありますか、そこは見事なセンブリの花が2年、3年咲きましたね。それは路上の土の上に種が落ちてなかつたから焼えなかつたということと、他の草が生えるには適さなかつたからムラサキセンブリがそこでは群落をなしましたと思うん

ですよね。

だからやはり、いろんな変化があって、多くの植物が育まれてのことち事実だと思います。もう1点、私はチョウナツだけを見てからこうして考えるもので、何かと説明不足のところがあるかと思いますけれど、やはりいろんな形の、時には牛が芝を蹴ってそこに新しい命が芽吹くとか、そういうようなことが今まで行われてきたと推測しております。

高橋

はい、ありがとうございました。塙谷さんの方から何かござりますでしょうか。

塙谷

私、最初にご説明いたしましたけれど、「樹林化が進行」といった状態、これがどんどん、どんどん、ここ10年から15年の間で進んでいるという状況をご説明いたしました。本来、「固定公園」とか先程の「めがつる」のお話でてもありましたように、こういったところの自然というのは「規制で守られる」のがほとんどですけれども、この秋吉台全体、この「石灰岩の草原」というのは、「人の手」と言うか、「同じ人のいとなみの中で維持・保全されている」というのが、一番良く判る10年間、15年間ではなかったかな、と思っております。

で、1点、悪いのは、まあ「規制」もありますけれども、それを含めて、「人のなりわい」が10年、20年、変わらなければいいんですけども、どうしても変わってしまう。こうした止むを得ない事情の中で、そこで採草が飛ってきたと。そういう面があると、これはどうしようもない。という現状で、今、木がどんどん、どんどん増えておるんじゃないかなと思います。

で、もうひとつは、「以前は」、「戦後は」ってことで地元の方からよくお伺いしますけれども、「草を争うようにして取って持つたよ」と、要は「山上から有機物が剥ぐなる」というか、栄養が無い状態、草丈が低くなるという、「取る側」から言えば、非常にいい草が取れると、まあこういった「輪廻」と言つか、まあひとつつの「流れ」が切られたというんですか、まあこういった「採草」というひとつになりわいが飛れたこと」しか、実際変わってないんですね。

まあ、こうして秋吉台の草原に木がだんだんと増えてくるという、まあ「大きな動きがある」というのがありますので、みなさん、いろいろ、「今がいい」、「10年前がいい」、みなさんの「理想の秋吉台」ってのがありますので、バラバラなんではないかと思いますけれども、この「採草」ってのは、どうしても欠かせないものではないかな、と思います。

で、まあ例えは「トリーで耕作した」ってのがありますけれども、ひとつはやっぱり、「残念ながら」と言うか、「いいか悪いか」は別として、その生活、「なりわいの仕方」っていうのが変わってきたと。先程「自動車の乗り入れ」ってのがあります

したけど、昔は人が歩いて入ってきたものが、どうしても同じ事をしようと思えば車で入ってくると。で、採草についても同じところを踏むから、どうしても追が荒れるという面がありますので、今どっちかと言うとルールが無く、そのまま好きなところを踏って歩くというのが多いんですけど、確かに「取って飛ばされたところ」には、非常に草花がたくさん残っています。まあその辺りで、「採草も大切」、「荒れたところの問題も大切」という面もありますので、まあ「ルール作り」と言いますか、これを機会に「ルール作り」はひとつ見るんじゃないかなと思いますけども、まあ最低限、この「採草」というのは避けていく必要があります。この「秋吉台の草原を作る」上では必要ではないかなと考えております。以上です。

高橋

はい、ありがとうございました。どうですか、会場の方で反対意見ございますか。「火入れは必要だし、採草も必要だ」という考え方に向むけつつありますかいかがでしょうか。意外と異言が無いんですね。

ただ、先程ご採草がありましたように「じゃあ誰かやるのか」という問題と、それから「規制」とか「制度」というものと、どう折り合いかをつけていくか、というのが最後まで、多分残って行くんだろうと。それはちょっと次の段に回すということです。

じゃあ、いよいよ「火入れも、刈取もやっぱり必要だなあ」というのが「みなさんの考え方」だということで、じゃあ次は「放牧はどうか」、「草を入れるのはどうか」っていうことを、そちらのお二人の方から、秋吉台に想定されなくとも結構ですので、どういうメリットがあるのか、或いはどういう問題があるのかを解説していただければと思いますが。

高橋

まず、野草地にですね、牛を放牧しますと、スキは強放牧(放牧区域内の草の量に対して多めに牛を出すと期間を長くするという放牧)を続けることによって黒くなっています。しかしそのまでも牛が食べない植物、まあこういった中に人間が見てきれいだと思う草花は多いですが、そういう植物とか毒のある植物とかは残る可能性はありますし、そしてそこで牛が草をすると、草が黒くなるまではその下の草を食べませんので、そこからまた草が出てきて、それをまた牛が食べるという「循環型」で牛はそこで苦ねというふうな形になります。

高橋

まあいろいろ農業の形態もどんどん変わって来ていますし、今「牛を戻す必要性」っていうのは、私は感じてないんですけども、それよりも「野焼きをやることに対する意義」とかが「時代の流れ」について行くような形ですね。まあ

ひとつは路側を見てその「やり方を見直す」というような、牛の放牧を免てまた「やり方を見直す」ような、「常に見直して行く態度」の方が、今からは重要なんじゅあないかなと思っております。

高橋

はい、どうもありがとうございました。まあ秋吉台では元々「放牧」という形態は無いので、新しく取り入れるということは、また相当なエネルギーが要ると思いますけれども。

いずれにせよ「草原の管理」というのは「火入れ」と「刈取り」か「放牧」がヤットになったものが基本なんだろうと思うんですね。その中で秋吉台に関して、みんなさんのご提言の中では、「火入れも必要なんだけども、足非刈取りも、何とか復元して欲しい」ということだと思うんです。

じゃあ、今ご提案があったように「刈取り」という作業は何かのために必要か? 或いは農業園から見てですね、「草」とか「野草」とかっていうのをですね、「どう収益付けるか」ですね。

「経済的な収益が無い」として捨てられてきた訳ですけれども、でも経済以外に、こうやって「生物多様性」だとか「生体面から見たら必要だ」というご提案が始った訳なんですか、じゃあそれをですね、地元の人達や生活者がどの程度喜んでいていいのかというのをですね、是非会場の方から発言を頂きたいんですけども。まあ「放牧の話」が無かったんですけど、「放牧の話」も含めてでも結構ですけれども、いかがでしょうか。上田さんどうでしょう。

上田

突然のご指名だったので頭が混乱してしまいますが。昨日泊まったホテルから外を見たときに「今は使われていない宿泊施設の跡」というようなものもあるのではないかなどという気がしたんですが、どうもコンクリートというのは未まで、未タまでスカッとしたところがあるんですね。しかし、この秋吉台にも「ワラ」の、或いは「ワラ」を使った観光産業なり、ワラじゃなしに、ごめんなさい、スキを使つた建物を作るとか、或いは高級な野菜を作るためにはスキを刈り取つて、その作物の下に敷くことは絶対に必要だとかっていうようなことが、だんだん、また最近は見直されてきてあるんですね。何らかの形で「地元の産業に結び付くような構造」をこの台地の中に配置すれば、「回転していくんではないかな」という気がいたします。

で、今日始めてチョウの話をお聞きして、非常に興味深かったのですが、チョウというのは非常に古くやかな、その自然って言うか、人間の宮みに影響されているなどということを感じたんですね。チョウの種類ごとの「その作曲方に応じた草原」を、ドラマとして、「人工的に」というか、まあ「半人工的に作り出していく」ってようなことは、どこかでやられている所があるんでしょうか。ちょっとお聞きしたいんです。きっと成功するんではないかと思います。

以上でございます。

高橋

はい、ありがとうございます。それでは、

直次

あの日本ではいろいろと、「草原住の蝶」だけというのはありませんが、「蝶の巣」というか、その巣は全國各地にございまして、中にはお寺のお坊さんが市の、町でしたかの城代で「蝶の巣」のようなところにペインティングって言うんですね。そういうのを経営しているところもあります。

それからまた広島県にも大きなものがありますが、あそこら辺ではやはり「熱帯の蝶」が主体で、植物も熱帯の植物を温室で育てて、温度調節をしながら飛ばしております。オオカバマダラとか、「オオゴマなんとか」というですね、ちょっと忘れていましたけど、一番大きな白黒の蝶ですけれどそういうのがいます。ですがそういう場合でも、一つの館の中で生態系を守っていくことは出来ないようで、「幼虫」って言いますかね。サナギはサナギ、幼虫は幼虫で別の部屋で飼育して、成虫になったのが自然と共に出てみんなを産ませるような形にして、卵をそこで産んだりしているところも見ることが出来るんです。その卵は採集員の方が取り込んで、また別の部屋で飼育してやっておられます。

秋吉台の場合を申しますと、秋吉台の蝶だけではそれがあることはちょっと不可能だと思うんです。私も研究のためにちょっと飼育場をこしらえて、全く秋吉台の中と同じ形で、ちょっと10年ばかりやってみましたけれど、チョウチョの生態というかそういうものは良く判りましたけれど、それを「観光で使う」ということはちょっと不可能だと思います。

ただ私の考えとしましては、都会の子供たちが自然を知らなさ過ぎるとか、そしてまあ、自然科学というの子供達が取り付くときが無くて、その「きっかけ」となるようなものが出来ればなあと思っているんですか。まあ今の家族旅行村(秋吉台にある渋谷型体験型施設)あたりもありますので、そういうところで2泊3日とかそういうような形で娘子の昆虫採集会でもしていただけたら、そしたら子供達が自然を観察する機会も増えて、自然科学というのにも目覚めくれるんじゃないかと思って。まあ都会の子供達をそういう形で受け入れるということもいいなあ、夢だなあと思っています。

高橋

多分、私も専門でないんでよく判らないんですけど、蝶の「飛来性」のものっていっては、幼虫の時期も成虫の時期もいる場所が違ったりもするでしょうから、特定の草原だけを見ていてはダメなんだろうなと思うんですよ。周りの環境なり、周辺の生態系も含めた「景観レベル」で考えなきゃいけないんだろうと、或いは割りで、例えば農業を

使っていたらそれがダメになるとかですね。そういう「副作用」も当然生じてくるんじゃないかなと思うんで、非常に警しいことかも知れません。

先程、上田さんの方からですね、牧草する草の利用を「何とか地元産業と結び付けられないかな」というお話しがあった。正しく「農業のあり方」をもう少し見直してみて、地域の特産のよしなものにするとか、或いは「工作りに生きてる」とか、そういう循環の方法があるかどうかということなんですが、そこで何か農水関係の方、いらっしゃいませんでしょうかね。ほい、どうぞ。

畠田

地元の農林事務所の者なんですけれども、今、採草のお話を出ましたけれど、そういう中で今の現状をちょっとお話ししますと、秋吉台では、町の放牧場が以前ありました。100ヘクタールくらいのところで放牧がされ、一部採草も行なわれていた訳ですけど、詳しい状況はちょっとはっきり覚えておりませんけれど、ここ10年ばかりは放牧は止められて、その内の40ヘクタールくらいを町の方で採草、機械によっての採草作業がされている。という状況になっているだろうと思います。

で、一般的の農家の方はですね、その草が非常に安い値段で販売されておりまして、農家の方はそれを利用するという事でやられておられますか、もつとも量に限りがございまして、「それでは足りない」という方が個人的に秋吉台に行って採草をされてるという状況になっています。

ただ畜産農家の方々、最近は高齢化で随分少なくなっています。そういう意味では「採草利用をする」という選択が限られているという状況になっています。これは秋芳町、それから美東町、両方とも同じ形で、牛に与えるということでやられております。

で、「野草の価値」という点ではですね、非常にこの野草の場合、乾草にした値ですね、「非常に嗜好性が良い」という事で、今ウチの方、まあ「畜産部」というところになるんですけど、そういうところでは子牛の指導者やってますけど、そういう中で野草を与えると「非常にいい牛作りが出来る」という事で、またそうした子牛は市場においても非常に高値で取引されており、「良う原」の販賣需要としても好んで買っているという事で、そういう「野草の利潤」というのは「農家としてはやりたい」と。やりたいけれど努力的には「なかなか大変だ」という事で、秋芳町の場合には、先程申しましたように、旧放牧地を使っての機械採草をしてはいけれど、ほとんどが一般の農家の方が個人的に上かられて草刈って持ち帰っているというのが現状です。

でまあそういう点で、私も畜産農業にいるんですけど、先程、畜産試験場の方で「牛の放牧」ということを取組まれておりますけれど、こういう形でのですね、「秋吉台に牛を入れていく」という事が今後、やはり今からの高齢化をしていく「火道切り」、「防火帯作り」とか、そういう部分等を踏

まえてですね、「生態系への影響も少ない」という力強いお言葉もいただけたんで、位置付けが出来るんじゃあないかなとは思っている次第ですけど。

高橋

はい、ありがとうございました。何かパネラーの発言がありましたが、お聞かせください。

いずれにしても、「草を介した畜産の振興」、「農業の振興」ってのが前提でなくっちゃいけないってことですから、地域の農林業が生き生きしていないと、やっぱり守れないのかなと。これは一方で、とても大切な話なんですね。

ただ現実の問題として、それだけの「想い」すら、もういない時代で、それに間に合う「新たな想い」を作らなければいけないんですか、お金も稼がないでもそれに間に合う人がいるんじゃないかなと思うんです。例えばホランティアであったり、さっきお話しに出たのは「体験学習」ですよね。教育の場として使って、「草刈りを競争させている」とかですね。そういうむずかしいものかも知れないけど、そういう「取組み」もまたあろうかと思うんですが、そういう民間なり、地域外の人達が「そういう道筋に間わる」ということに触れて、私がつるの方で実際にやられてみてですね、どういう道具をお持ちでしょうか。或いはそういうビジョンをお持ちでしょうか。

弘前

まあ「一番恥い」のは、草刈りをするときのケガですよね。それから火を入れたときの火傷とか、そういうのを考えたときに、これは私がつるではない、農の方なんですが、上からどんどん火を引いて行つてると(火入れをして行つてると)、下の方で「もういいのかな」というライターで火をつけた事例が2年前あったんですよ。で、火が打ち上がってしまって非常に危険な状態になって、

で、そういうことを聞いたり見たりするうちに、これはもう相撲的にキッタリ、もし何があったときの「処分が下される」ような状態じゃないと、例えばホランティアでやると、どうしてもみんなが責任を取らざるを得ない。で、今月10月の輸送船のときも、船長の指導不足で少し失火をしたんです。そういうことを考えたときに「組織と規約」そういうものがしっかりした状態じゃないと、ウチの会としては「ホランティア募集」というのがしづらいなという状況です。

高橋

はい、ありがとうございました。阿蘇の方では200人くらいホランティアを募集したり、或いはかなり組織的にやっていく事例もあるというふうに聞いております。

それで、もうひとつ問題なのは、制度や規制との関わりの中で、火入れとか刈り取りをどう実施していくかということがあるかと思うんですけども、その辺も含めて、出来たら「阿蘇のホランティアの実情」も含めてですね、阿蘇の国立

公園の所長である国安さんの方から発言を頂きたいと思うんですが。

国安

環境省の九州地区の所長をしております国安と申します。まず「列島のボランティア」の関係につきましては、今、「グリーンストック財團」と言うところが中心になりまして、列島の轄地切り、野焼きの「ボランティアを養成する」ということを、相続的には平成11年度あたりから始めています。

昨年度400人くらい応募があったと。それも集まって来たのは熊本県の人間が半分くらいで、半分くらいは福岡とか、福岡以外の本州のほうからもいらっしゃるという方も出てるというような状況です。

ただし、例えば轄地焼きについてではですね、「火消ししかやらせない」ということで、火を点けることは一切やらせない。「完全に牧野組合の人の主導の下にやる」というような形です。で、毎年ボランティアで参加してくれる方については、その「ボランティアの方のリーダー」になって行くという形で、順次体制を作るということで、今年はボランティアの「リーダー養成講座」というのも始めると。いう形になってきたというふうに聞いております。

それから「自然公園の中の規制との関係」でございますけれども、先程、坊がつるでのお話しでは「特別保護地区だからやっていない」というふうにご説明がありました。

で、私はもう環境省と言うよりは、私個人の判断かを知りませんけれども、場合によるとですね、「特別保護地区」でもきちんと、野焼きが必要であれば、または保全が必要であれば、これは「やるべきだ」というふうに考えます。

「自然保護」に対する考え方、これはやはりいろいろな「考え方」があると思うんですけども、特に阿蘇、九重、トカラ列島(鹿児島県)、それからここもそうだと思うんですけども、「人手が掛かって草原景観が維持されていること」が、それが「公園としての質がある」ということであれば、きちんと人手を掛ける必要があると思うんです。

ただし、現在の「自然公園法」という法律自身はですね、「規制の厳しいところは手をつけない」という方式の法律体系になっておりますので、残念ながら「特別保護地区」については「きちんと手焼きをしなくてはいけない」というのがあるんですけども、やるべきときはきちんと手焼きを取りながらやって行くということが重要なのかなあ、と思っています。

私自身の経験では、草原ではなくて湿原の開拓ですけども、「利尻礼文サロベツ国立公園」の「サロベツ原野」というところがありますが、ここは環境省の土地なんですねけども、そこはやはり「湿原だから開拓公園」だということで、人为的に環境省で小さなダムを作つて水位を上げる、維持するということで「湿原景観を守る」ということも環境省自らやったこともあります。

ということで草原景観が必要であれば、坊がつる

でもきちんと、「特別保護地区」についてもですね、「人手を掛けで維持をする」ということも、私としては認めていいのではないかというふうに考えております。よろしいでしょうか。

島崎

はい、ありがとうございました。大変心強い発言を頂いたと思うんですが、要するに「地元の意思」だと思うんですね。おそらく..

何かにつけて日本人は「あれは農林省が悪い」、「環境省が悪い」、「どこそこが悪い」とかですね、なんとかかんとか言いながらなんですが、地元の意思として「やりたい」ということをですね、必要だということを、是非そういう声を上げていただきたい。

そのためにも、じゃあこの分科会からは「刈取りと火入れはやりたいんだ」ということをアピールしていかなければいけないじゃないかと思うんですかいかがでしょうか。

はい、どうぞ。

前田

先程からいろいろな意見を聞いております。地元の者として、そしてここに60数年生きた者といたしまして、少しお話を申し上げてみたいと思うんですが。

先程から「草は肥料として」、或いは「飼料として大変いいんだ」と。これは確かにその通りでございますね。「それを上手く利用したらいいんじゅないか」、おっしゃる通りでございますね。「それが出来ない今時代になっているんだ」ということですね。

それは何故か。皆様方ご承知の通りでございますね。牛を育つんですね、「牛肉の自由化」になって、安い牛肉がどんどん入ってくるでしょう。採算が合いませんよ。生活それじゃあ出来ないんですよ。私の寧ちかつて、まあ恐らくここにおられる方はほとんどがそうだと思いますね。日本がそうでしたように、農家でした。農業でした。百姓でした。その百姓では生活できない時代になった。そこで牛を飼って、田んぼを作つて、草を刈つて牛に入れて、牛はそれで生活できました。で、1町4~5反作れば子供を2~3人育えた。今は3町、4町作つたってですね、大変なんですね。だから「もう農業をやめよう」。生活出来ないんです。サラリーマンになつていくんです。そういう現状がずっと続いている。そういうふうにあります。まあ私もその一人です。「農業じゃあ」っていうんで貰めに出来るようになりましたね。

でも今まである用語を守らなきゃいけないたうと。この秋吉台もですね、長い間掛かって、まあ一説には800年くらい前から山焼きが行なわれていたと。それを私達が、ここに住んでいる者が、何とかして維持しようとしてきたんですよ。

でも先程からお話しがありますように「無給化」になってきました。私も実際にですね、分担があります。そこへ出て

やりますね。毎年やってるんですから申し上げますが、それがだんだん出来なくなったり、だから「どうしたらいいんか」と。

「ボランティアを募集してやってみようじゃないか」、そういうことも町も考えられました。自分もそういうことを書ったこともあります。でも、先程おっしゃいましたようにですね、坊がつるのの方々がおっしゃったように、事故があつたらどうするんだと、今はですね、何かあったときには「損傷をどうするんだ」と、こういう時代になってまいりましたですね。

だから、「山焼きは抜けたい」、「草刈りもしたい」。じゃあそれをお金を掛けてやるんでしたら一番みやすいいたやすいんですよ。これは、お金を出来るだけ掛けないでやろうとするためにはどうするかと。それにいい知恵はないかなあ」ということで、みんなの知恵を借りたいということです。

だから「放牧」という方法もございますでしょう。これは私聽いておりまして、ちょっとコストが高くなるなと思いました。ボランティア、いいですね。でもボランティア、じゃあその次の「万が一」という場合はどうするかということですね。

だから先程、阿蘇の所長さんがおっしゃいましたが、お金を掛けなきゃいけないと。ある程度はやっぱりお金を掛けなきゃいけないと感じます。それでも、秋芳町、実業町で、この山焼き面積に1,000万円(円)くらい掛かってるって言うんですか。何かそういう資料をどこかで見ましたけど、お金掛かってるんですね。

だからいろいろですね、「こうやったらしい」、「ああやつたらいい」と第三者的にはそうでしょうか。じゃあ実際にここでそういうことをやるのかってことですよ。そりゃあ「趣味的」には出来ますよ。採算を度外視したら出来ます。でも実際はそれじゃあ生活できない。どんどん過疎になってしまいますね、この町。そういうことです。

で、まあそういうことはかかし言つてもしょうがありませんから、ひとつはですね、「牛の放牧」もいいだろうと思いませんが、「ボランティアの方法もあるなあ」と思いますね。それから今、御苦労で放牧されている、飛の放牧場、育成牧場がありますが、そのように牧草をずっと植えていく。防火帯に牧草をずっと植えていく、そういう方法もあるかも知れないなど。或いはですね、歩いたら、先程のご発表にありましたように、「人間が歩いたら、そこが裸地になつて、踏み固められて、そしてついに草が生えなくなる」んですから、周辺部をですね、ここに来た子供達や御年される方を「歩かせば」、そこを歩かせればいいんじゃないかと思うんですね。

ですから突拍子もない事ですが、そういう何らかの「出来るだけお金が掛からない方法」で火道を切る方法をですね、「火道を切らなくても済む方法」を考えなきゃいかんのだと思うんですね。

あのですね、「山焼き」、明日ある「火入れ」というのは行けば火道が切ってありますから、火を入れたらもう、火道に入らないようにサンサと消せばいいんですから私なんですよ。それで楽しいですね、ワーソと燃え上がりますから。あの「草刈り」が大変なんですね。これは面白く右側にもありません。だから「ボランティア」って書いたって、そんなに多くは集まらないと思うんですよ。そういうものですよ。

まあそういうことの「地元の現状」というのは、ここに来られる方は皆がご存知だと思いますけれども、あえて申し上げます。

それからです。もうひとつ申し上げますが、「草刈る面積が減ったのではないか」ということでしたが、私は「それはどうかな」と思ってます。データはございませんが。

君は確かに、岡山から農家が(秋吉台に)上からって刈っていましたが、私も中学校の頃から、朝3時頃からたたき起されましてですね、刈りましたね。で、朝で刈る量は大したことないんですよ。今は草刈り機、刈り払い機でバーッと刈りますから、上がられたらこまめのようにですね、「オー、あれだけ草が刈ってあらあ」って、それだけ草は刈ってあるんですよ。だから今から30年も40年も前と、草を刈る面積が減っているのか、増えているのかってのは疑問だと思います。以上でございます。

高橋

ありがとうございました。草刈りの面積は減っていないんじゃないかなあいか、というご意見でしたが、私もよく刈りませんけれども、「官署上」見たら減ってるんだろうな、という感じでしか知らないんで、実情が判らないんですけれども、その辺はもう一度、確認をさせていただきたいと思いますけれども。

それで、まさしく「なりわいが疎からないから出来ないんであって」ですね、「どうか」っていうお話し、まさしくそうで。

ただ、「ホントに疎からないか」どうかってのは農林省の方でも、実は考慮しているところがあるんです。例えば野草の「資源としての価値」をですね、今まで牧草や飼料作物に対して「すぐ刈る」という価値付けをしていましたが、「どうもそうじゃないようだ」と。特に内閣総理大臣を務めに至っては、「疎かってる農家はみんな野草を利用している」というのが全国レベルで見られる傾向。ただその利用の仕方は放牧で利用されたり、採草で利用されたり、いろいろある点ですけども。その辺も含めて、農林業を含めた「産業」ともう一度リンク(結び付けることが)出来ないかというのを、もう一度見直してみてもいいんじゃないのかなと。

それから都市の人の生活の嗜好の変化とか、或いは食べ物に対する考え方の変化というのが出てきている現実ですね。そういうもので付加価値をつけたり、地域の中に加工や流通のようなシステムが出来れば、また地域の中に「新しい血」を呼び戻すことも出来る訳ですね。現実に日本

全国いろんなところを見ると、貴様を「極」として、第3次産業、第2次産業をどんどん興してですね、ホントに遊びの山の中に、大学出の若い女の子がですね、就職に入ったり、そういう事例がたくさんある訳です。ですからそういうものをですね、「台上の草とリンクさせること」が本当に出来ないのかどうかですね、もう一度考えていいんじゃないでしょうか。

そういう意味からもですね、「鹿児島県の人がここにいらっしゃらない」というのは、非常に私は不適なんですねけれども、事務左員ですね、どうかそういう省庁を抱き込んだ形ですね。もう一度「草の鹿島」というのを見直してみられたら、坪草なり放牧というものの「生きる道」も無い事はないんじゃないかなという気がします。

で、ここはですね、今のようないいのは、しばらく次のシンポジウムの中で地元の方に発言になる内容だったと思うんです。で、もう段々非常に貴重なご提言を頂いたと思うんですけれども、ここでは一冊「生態系と保全」ということなんですね、生態系から見た要望なり、問題点を挙出したらいいのかなど。

いざれにしても、これから時代は「百点満点の管理方法」ってのは無いんじゃないでしょうか。例えば「ボランティアは60点だからダメだ」と、或いは「牛がやっても100点は出来ないからダメだ」と考えなくては、それぞれを何とか工夫して組み合わせてみよう。それを「何とかやってみよう」っていうのが「地元の知恵」じゃないんでしょうかね。だから「外部者は地元のことは判らない」と思っしゃるかも知れないけれども、「意思決定をするのは地元だ」ということなので、その辺を是非いろいろ考えていただきたい。私は、それに対する素材を、この場から提示していくつもりなんやないかなと思います。

えつと、全体を通してですね、そろそろ「まとめ」に入らなければいけないんですけども、何かご意見かござりますでしょうか。はい、どうぞ。

村中

豊田市から参りました村中と申します。私は「野焼き」という知識はあまり無いんでございまして、ちょっと想い過ごしながらも知れませんが、野焼きをすることに当たっては、いわゆるダイオキシンの問題が「ホントに無いのかな」ということをちょっと考えてあります。

というのは、まあ塩化樹脂ですね、塩化樹脂がどうしても野原に焼つてみると、これが一緒に燃えてしまつて、「ダイオキシンの問題が出来る」ということは無いのかどうか、その辺りは、例えば勿論「持ち込みだらイカン」、「捨てたらイカン」と言われているけど、実際は「実際はどうなんだろうか」ということだけを、ちょっとお分り心配から知れませんが、どんなふうに考えていらっしゃるのか、教えて頂きたいという事でございます。以上です。

高橋

はい。というご質問ですが、誰が平均ですか、どなたかご存知ですか。

塙谷

あの、私が「ゴミ拾い」と言うかですね、ぐるぐるっと周って見た中では、赤松の「上から見た写真」をご紹介しましたけども、大体人が来る牛谷からそんなに離れていないところというか、そういう場所にゴミがあると、で、今の「山焼きの範囲」まで入ってゴミを捨てられる、ゴミが残っているというのは、まあ特に燃えない缶ジュースっていうかですね。そういうのは残っておひますが、私の「適切な経路」で言えばですね、大体歩道から、そう2~3分、4~5分歩いたら、ぐつと「ゴミが減る」と言うかですね、そういうのが多いようです。ですから秋吉台の赤い奥まで入ってゴミを捨てられるって事は、私の経験からでは余り当てになりませんが。

で、結構、例えば管理事務所(秋吉台管理事務所)とかですね、一般の方とか、自然保護協会もいらっしゃる方にありますけども、いろんな機会を通じて、秋吉台の中でゴミ拾いとか、人のよく来るところはやつてらっしゃいますので、よく言われる「観光地」である秋吉台のゴミは落ちていないんじゃないかななど思ひますけども、確かに燃やす中にはあるとは思いますけども、実際には多いのは、人の歩くところが、燃えない歩くところが多いんじゃあるかなと思ひます。余り言えになつておりませんけど。

高橋

はい。他にござりますか、はい、どうぞ。

岡田

私は前の職員で自然保護課に勤めている者なんですね。ある日、山口大学の学生さんから電話が掛かってきて、「山焼きをするところのCO₂(二酸化炭素)が増える」と。これでですね、「地元環境に悪影響を及ぼすんではないか」というような質問がありまして、まあちょっと、ふと見たんですけども、まあそういう面はあるかなと。

ただそのときに答えたのは、まあ「秋吉台は草原景観が美しいから国定公園に指定されたんですよ」と。それからもう暫く年を経て、この山焼きというものが繰り返されているから、「山焼きによって特別にCO₂が増えることは無いんですよ」ということは言つたんですけども。

確かに草原を放置しておけば「樹林化」します。樹林化すると、まあCO₂は吸収します。まあそういう面では、二酸化炭素を減らす意味からはですね、まあ相反するところ、相反すると言うか、「難しい面があるなあ」というのを思いました。

まあたたこれは「こういうことがありました」という紹介だけで、特に「生態系」とはつながらないかも知れませんけ

ども、ご紹介させていただきました。以上です。

高橋

はい、ありがとうございました。いろんな立場から見るとですね、「聞くこと」自身にも、いろいろと問題があるようですが、何が何にござりますか。はい、どうぞ。

前田

先程は「生態系」ではないことを言いましたが、ひとつですね、今問題になっていることがあります。セイタカアワダチソウが大変繁殖していると、これはですね、私共ボランティアで、引いたり刈ったりするんですけど、到底追いつけませんですね。人海戦術をやらないと。

と言つても、それを国定公園、特別天然記念物になっているところを、ああ許可を取れば根っこを掘ってですね、掘つて落けるのか一苦しいんでしょうけれどもですね。やはり「大変な問題」ですね。

ですから、「秋吉台の生態系もぎわりつつあるんだ」ということ、これはまあ出ませんでしたから、あえて言つておきます。

高橋

大変大きな問題を提示して頂いたんですが、はいどうぞ。

藤井

あのこれ、牛を放牧することによってセイタカアワダチソウは、この前の試験でも、すごく良く食べまして、我々の今までの放牧の経験の蓄積からも、もう次の年からは、もうほとんど見えない状態まではもって行く事はできると思います。

高橋

他にござりますか。どうぞ。

藤井

先程ボランティアの話しがありました。私も実験的につて言つた、ちょっと実験的に、ずっと山焼きに、実はちょっと勝手に行っておりまして、私の経験からしてですね、まあ多少分明くらいは出来るんかなあと思つたけども。

まあ普通、ボランティアで組織的にやればですね、確かに「日にちと時間」を決められれば、それ相応の人数が出せるという面がありますけども、どうもこの「山焼き」自体、ずっと平成になって、まだ1回しか予定通りにやつてないという状態なんですね。

で、特に必要な、地元にとって必要なツイーカーとかいうか、断続したときに入を集めるのが大変で、この時間によつたボランティアが「すぐに対応できるか」という問題があつたと想つます。まあ、自分一人でもなかなか大変で、朝起きてですね、私、山口市(在住)ですけども、朝8時半に起きて

博物館(秋吉台科学博物館)にいつも電話して、「今日やつてですか」って電話するんですけども、それから実際、組織としてですね、連絡網を使って、どれだけの半径で(範囲で)人が動かせるかを考えたら、非常にですね、まあお天とうさんを気にしながらのですね、やる作業になりますので、なかなか。

確かに「ボランティアが参加すれば助かる」という面はありますけども、実際どれだけ「当てになる」と言つたら感られるかも判りませんけども、その面がちょっと。今の、生産者が主体的になってやってらっしゃる上で、何て言うか「助ける」とて言うんですけどね、そういう援助のボランティアは非常に難しいんじゃないかなと、また別のルールをちょっと考えないと、なかなかボランティアを、同じ人数を増やせばいいという状態ではないと、今思います。

高橋

はい、ありがとうございました。ボランティアは生産単位でのシステムに入り難い、ということですね、ボランティアという体制が。

何歳通りでも「牧野組合」単位でやってらっしゃいますよね。その辺はどう解決されてらっしゃるのか。

田安

正直なところを言って、今のところまだ、そのボランティアが、例えば野焼きって言いますか、火入れやなんかで、ほんとにプラスになっているかって言うと、どちらかと言うと「足手あつとい」な部分が多分、多いんだと思います。

ただ、まあ3年くらい続いているところを見させていたいたい限りでは、だんだん彼らはなっているんでしょうねけども、それでも都会の人と地元の人との「交流が深まる」と、それで「理解をしていただく」ということのプラスの面が相当大きいらしくてですね、順次、ボランティアを受け入れる牧野組合が増えてきている。大体毎年1.5倍ぐらいづつ伸びて、「受け入れる牧野組合が増えている」というふうに聞いております。

というところで、どちらかと言うと、その人的な部分で、努力としてプラスと言うよりは、都会の人達と地元の人達の「理解が深まる」というところに、どうも一番大きなメリットがあるみたいですね、ということでおもしろいでしょうか。

あ、それから、そういう意味で、出来たらですね、もうボランティアに何いては「この牧野組合の担当のボランティア」というような形ですね、牧野組合をぐるぐる回るんじゃないなくて、出来れば「同じ牧野組合と付き合う」ような形のボランティアの組織にしていった方がいいんじゃないか、という話しなんかも、この前の我々の方の内部の、こういいう「モデルディスカッション」では出ておりました。

高橋

ありがとうございます。実際につけてみると、人間は作

して行くものでして、いろいろ工夫をしてみたり、組み合合わせてみたり、そういうものが分かれます。このシンボジウムも恐らくそうだと思います。今まで秋吉台の中で論じてたものが、例えばいろんな地域の人達と関わることで、また「新しい道」も生まれてくるかも知れない。そういう意味で是非ですね、前向きに捕らえてみてはいかがでしょうか。日本人って「マイナス思考」ですから、「これがダメだからダメなんだよ」、「ダメだからダメなんだよ」ではなくて、「こう言ういい点があるんだから何が出来ないか」、そこから技術革新も生まれてくるでしょうし、面白味が出てくるんじゃないかなと思うんですが。

さつきのセイタカアワダチソウの事、誰か判ります。放牧したり、あれたりすると、どうしても倒れて。あ、はい。

松井

松井と申します。先程セイタカアワダチソウの問題が出ていましたが、秋吉台の場合はですね、やはり耕作放棄地ですか、それと道べり、或いは耕作地の周りと。後はですね、比較的安定しているところには入って行っていません。

ただ、今、秋吉台の場合はドリーネがたくさんあります。ドリーネの場合は昔は全耕作地であった、ですから今「耕作放棄地」としてかなり入ってきています。それがどこまで入るかは判りませんけどね、まあそういう状況です。

それともう一点、先程チョウチョの問題で、ミヤコグサとススキの問題がありました。ススキは「今増えている」と言われてましたが、実際はですね、減っています。ササ草原になります。

それは何故かって言うと今から30年前にですね、ササの花が咲きまして、一斉に枯れてしまつて、それから徐々にススキが増えた。そして今はコキタケの方が徐々に帰って来ています。それからササの問題もありますが、このササの開花と同時に秋吉台の草原の植生が徐々に、ですからササの開花が大体50年から80年と言われてあります、それを周期にですね、秋吉台の草原は変わっています。

それともう一点、ミヤコグサの問題ですが、ミヤコグサは秋吉台にはセイヨウミヤコグサがあり、それは今のススキ草原の中にはほとんど入っていません。ただ刈取ることによって多少は「敵入種」として入っています、その程度だと思います。

もう一点ですね、秋吉台の草原の刈取りの部分ですが、年に3回以上刈取ると、貧瘠地の場合はシバ草型になってしまいます。ある程度土地が肥えている場合ははですね、開花植物のヒメジオノンあたりがかなり入ってくると。ただヒメジオノンの場合は、そこの刈取りを2年くらい放置するんですね、消えていきます。

それと、先程の畜産試験場の放牧の問題ですが2点ほどお聞きしたいことがあります。今「放牧で火道切りをする」と言われました。その中で火道の中にですね、やはり牛、牛ですから草なり何なりをします。そして土地がある程度

肥えてきます。そうすると開花植物の進入が考えられるということが一点。

それとですね、高橋さんも最初に言わされました、「牛道」というのが出来ます。牛は大体1mから1.5m間隔でですね、零高原状に進んでいきます。たけど火道の場合は「零高原状」には切ってはいけません。当然傾斜地もあります。そのクリアの問題、以上2点です。

高橋

それじゃ私の方から。牛が糞や尿をしてですね、富栄養化しないかどうか。放牧場はむしろ酸性型なんですね。例えば水田放牧なんかした後で、次に水田に戻したときには肥料成分のほかに落ちるんです。それは多分「肥料」の影響だと想うんですけどね、肥料としては、牧草も、当然、牧草型ですよね。ですから富栄養化になるから生物多様性が高まって、いろんな草花や花なんかが混在するっていう恰好になります。広い意味でですよ、局的には富栄養部分が作るんですけど。ですから富栄養の部分とホントに痩せた部分と、モザイク状に残っていく話ですね。それじゃあ、牛道のことを。

高井

牛道についてですが、今回は20mをやりましたけど、傾斜がきつくなれば傾斜を広くして、牛が横に歩けるような道幅を取って行なれば、そういう問題は無くなつて行くんじゃないかなあと想うんですけど。

松井

広い放牧地の場合はそうでしょうね。ただ牛っていうのは大体走ってるんですよ、歩くところは。だからジグザグに歩くよなことは先ずしませんね、牛は。

高橋

それこそ今お使いになっている電極をフルに活用されたらよろしいと思います。ひとりで管理出来るようなものですから。

松井

一部分は大丈夫だと思うんですけど、何度も同じ手筋で同じところに来なると、牛道が出来ると想うんですけど。

高橋

阿蘇辺りではですね、40度近い急傾斜地の放牧場でも、牛道上にもシバが張るような形で、きちんとテラス状に管理されているところもあらんです。ですから放牧の回数と、植生がシバ型に変わるかどうか、変われるかどうかで決まるんだろうと思いますね。

いろいろ論議も尽きないんですけど、もう度10分におっしゃいましたんで、「まとめ」はしません。

が、それそれまたパネラーの方にですね、最後、ここまでいろんな意見を聞いて、その上での感想を、またそれぞれ最後に一言づつお話を伺いたいと思うんですが、よろしいでしょうか。じゃあ塙谷さんから、よろしくお願いします。

塙谷

先程ボランティアのお話がありました。結局、阿蘇と秋吉台とは、もう根本から、時間から、自治体から違っておりまして、結局秋吉台で「ひわい」が出来なくなつたということは、何らかを変えるないと、もうルールを変えるないとどうしようもない。少なくとも、こういう1000年の歴史で、「今までやって来たから」、「当年までやって来たから今年もやる」というスタイルで続けていたら確かに、非常に「エラクなる懶しくなる」と、またこのルールは非常にまた變えづらい、「歴史の重みのあるもの」じゃないかなと思います。

今日来られた方、それぞれ色々地域でまた違った、秋吉台は秋吉台、阿蘇は阿蘇、三瓶は三瓶なりの、「草原の違い」があると思いますけども、先程高橋さんが言われたように、「正解」がなかなか見つけられないと思うんですけども、まあこうやって、みんなで話し合って行くことが必要じゃないかなあと思います。

特に私、畜産試験場がこの度発表されまして、まあ実際17キロ(秋吉台の火道の距離)を牧場で使うというのは不可能に近いんじゃないかなと思っておるんですけども、人の出入りが非常に多いですから、まあそれひとつを取ってもなかなか難しいと思っておりますけども、まあひとつ、こういった研究で、草の研究でそういう事が「身吹いた」と思ってるのは嬉しいなと思っております。

まあこれからも、いろいろな議論をしながら、いろんなことを考えながらやっていったらなあ、と思います。以上です。

武次

私はホントみなさんと違って、生活とは一切関係無いようなどころからの「草原の見方」をしていますが、今日、結果的には「野焼き」、「草刈り」の必要性は、みんなが、みな持っているらしいやるということを感して、急激に草の危機等は、まだ考えられませんが、このままでは心配でけれど、何かみなさんの方で、「山焼き」、「草刈り」、そういうものの「やり方」を変えられたりなんかすることに、期待することにして、私は私なりにチョウチョを保護して行きたいと思っております。

皆橋

是れ、その期待に応えてですね、参加をしてください。作業ですね。

仏原

そうですね、「野焼きを復活させたものの」というところもありまして、自然の変化よりも、人間がどんどん、どんど

ん入ってくることが「非常に怖い」のをここ何年間かで感じております。

特に、例えば登山道に付いた保育植物であるとか、そういうのが状態がよければどんどん付いて行って、どんどん変わっていくと。

今私が思っているのは「登山の分散化」特にひとつの季節に集中しないようにすること。それから登山道あたりを余りどんどん、どんどん広げていくようなことをしないこと。それから山の中に迷らす者としては「ちょっと迷かしい」と言われたんですけども、山に入らずにですね、「休耕山」「山にも休耕を考えましょうよ」と、「遠くから見るだけの日があつていいじゃないか」という構想を、今みなさんに私は啓蒙していってるところです。

鈴井

畜産試験場では今からこの研究を始めたばかりなんですが、十分に説明出来るようなデータが、まだ取れてませんので、これからも種統的にデータを取ってまいりまして、植生なり、その影響なりについてですね、追及していきたいと考えております。

それとですね、もし仮に、秋吉台で(放牧による火道切りを)やられる場合はですね、畜産試験場の方から、「牛の出し出しも検討する」と言う事ありますので、もし「その時」がありましたら、「ご利用願えればな」と思います。

高橋

はい、ありがとうございました。ホントにまとめようがないので、大変申し訳ないんですけど。

いろんな意見が出たと思います。是非これを待ち構ってですね、また地元で討議されればよろしいんじゃないかなと思います。

大体大まかにまとめると、「火入れは必要だけど、刈取りもして欲しい」ということですよね。要するに「利用をして欲しい」。

ただその「利用が出来なくなった歴史背景がちゃんとあるじゃないか」と。だからそれをどう産業と結びつけるかあるいはその「使い手」として、新しいものをどう取り込んでいくかということですね、考えて行かなきゃいけないんだろうなと思います。

それから環境行政そのものも次第に変わつつありますし、人手が入った二次的自然に対する国民の理解も少しづつ高まって来ていると思います。でも私達はまだまだ「言い足りなかったんだ」と思っています。国民に対して、こうやって「手を加える」ということがあります。ある意味での「自然環境」を健全したり、生態系を行ったり、景観を守ったりするんだという事を、やはり声高に言わなければならないんだろうなと。

それから、そばに畜産試験場があるんだから、「何でも利用しましょう」。或いはみんなもっと努力を上げて、全員で、

「ちゃんと守る」というようなシステムを作つたらいいんじゃないのかと。

最後に、「入山規制」らしいんじゃないのかって。まさしくホントはそなうんでしょけれども、「観光資源」として考えたときは「ひとりでも多くの入れたい」というもう一方の考え方もある。ただ、どうなんでしょう、地元の資源を「観光」なり「産業」なりとして守っていく場合には、「資源を無くさない」という努力を一方でやらなくてはいけない説ですよね、私達は、ですから「持続可能な利用」をどうしていくかということを、やはり大前提に置かなければいけないんだろうと、その辺をもう一度見直してみる価値はあるんじゃないかな、と思っています。

はい、どうぞ。

塙谷

「規制」がいいながら私が言つてはアレですけど(塙谷氏は山口県庁自然保護課の元担当者)、一応、秋吉台国定公園の「公園計画」が、先程「特別保護地区」という話がありましたが、もう「第一種特別保護地帯」ということでこここの草原はなつてあります。まあ「公園を守っていく」という意味で、「第一種」という、「一つ落としている」のはですね、人の苦みと苦しみと、先程来話題になつてありますけど、「保全を前提とした自然公園の開発」という面がありますので、あくまでも生態系自体は「結果論」であつてですね、みなさんが本来、1000年前からやってこられた事を続けて来られれば「当然あるべき道」であつて、先程「山大(山口大学)から電話があつた」という話と同じ話でありますね、「全体でやつた結果、生態系が守られる」という面がありますので、「それに合わせて国定公園にしてある」と。もともと「国定公園を守るために」というのもありますけど、それ全体の「なりわい」を含めて国定公園にしているということを、最後にひと音付け加えさせていただきます。

高橋

はい、ありがとうございました。まとめていただきましてありがとうございました。私がやることがないんで。

まあ、おっしゃる通りで、「草原文化」そのものを守つて行かれたらどうでしょか。そういう方向で「決め」にしたいと思うんですけど、いかがでしょ。(拍手)

どうもありがとうございました。つたない進行で、大変あちこち飛び回つてですね、「あとまつ」がつかなくななりましたけれども、みなさんのご熱心な討論の石柱けでですね、少し、光が見えてきたかな」と思います。もう一度拍手一のみなさんに盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

それではこの「生態系と保全」の分科会を、これで終了いたいと思います。みなさんどうもありがとうございました。

■第3分科会

『なりわいと保全』 —事例発表—

事例発表 (財)阿蘇グリーンストック専務理事
山内 康二

環境省自然公園指導員
大滝 興雄

西の原牧野組合組合長
川村 孝信

久住町稻葉牧野組合
佐藤 隆幸

進行 山口大学農学部助教授
宇佐見 晃一



宇佐見

それでは『なりわいと保全』の分科会を始めることにします。

まず最初にさすね、どういうふうにこの分科会を進めていくかについてご説明します。この分科会は4名の報告者の方がござります。みなさんのお手元にはですね、もう順番が書いてありますけれども、行程「打合せ」がありまして、報告者の順番を変えさせていただきます。ひとつ目が大滝さん、ふたつ目が山内さん、そして佐藤さん、最後が川村さんというふうな順序にさせていただきます。それで一報告20分を計画してあります。それで報告者の方には15分使って頂いてご報告していただきます。それで残り5分と短いんですけれども、報告の内容に直接関わるご質問を受けたいと願います。それで4報告が終わると、おそらく残り40分程となりますけれども、それはこの分科会のテーマである「なりわいと保全」ということについて報告者の方と、それから出席者のみなさんと共にですね、考えていくかと思います。

私はこの分科会の進行役をさせていただきます宇佐見と申します。よろしくお願いいたします。

それでですね、あの、報告者の方は順へ、そしてスライドとかOHPを使ってみなさんにプレゼンテーションをされます。で、報告に関する5分の質問につきましては、私の、このワイヤレスマイクを使って、質問をみなさんにご披露していただきたいと思います。といいますのは、全て録音をしてですね、後で「テープ起こし」をして記録として残しておこうに、事務局から言われてありますので、発言なさるときにはですね、最初に申し訳ないんですけども、お名前を言って頂けませんでしょうか。「どこどこのだれべえ」で結構でございます。それからご質問ですが、限られた時間は5分です。報告の総合的な検討も40分ではありますけれども、これだけの方が、一人1回質問すればですね、割合十分の時間がありませんので、なるべくコンパクトなご質問をして頂くようにご協力をお願いいたします。

それでは最初の報告に移りたいと思います。最初は、東本宗の阿蘇郡からお見えいただいています、大滝興雄さんに、発表していただきます。題目はですね、「草原と人々の暮らし」ということです。じつあ大滝さんよろしくお願ひいたします。

大滝

お手元の資料に書いてござりますこの内容は大きく3つに分かれています。第1項目が、草地と家畜と農地って言うのは有機的な組合關係にあったということですね。で、古典的な草原の利用を想像でお示しいたします。2番目は、採草地の必須的な維持管理技術としての野焼き、という映像を出します。3番目には、放牧頭数の減少による放牧圧の変化、植生の変化、そういうものの話をていきたいと思います。では早速スライドに移らしていただきます。

(以降、スライドを使っての報告)

これはあの、ランドサット、自然探査衛星から見た阿蘇です。一番中央にあるのが噴火口ですね。周囲4キロメートルの噴火口。で、大きくなりますと、これがカルテラ、今から15万年前ですね。それから8万年の間に3回大爆発を起こしたときの爆発式火山の火口丘ですね。「カルテラ」といいます。で、東西が18キロメートル、南北が23キロメートル、カルテラの周囲が100キロメートルでございます。

で、色分けでいいますと、この白っぽいのが水田地帯、阿蘇台地これが4,000ヘクタールあります。こちらが南側谷ですね。で、これが北外輪地域の草原、これが中央火口丘

の草原、これが北外輪の草原分布でございます。

草原の特徴に5つあります、1つは「集団性」ですね。まとまりがあるということで、こういった、北外輪地域はここだけでも15,000ヘクタールあります。全部で阿蘇郡の草地面積は23,000ヘクタールで、ここの場合には、幅が6キロメートル、波野村から二重峠までの距離が30キロメートル、非常にまとまりのある草原ですね。これが、土地利用の面でも、耕作の面でも、非常に「日本離れした草原農業」になっております。

2番目にはですね、波野って言う村がここにあります。その名前のように「波状丘陵地」ですね、波のようこう、うねってるんですね。後で想像が出てきますが「波状丘陵地」。それから、中央火口丘では「山麓傾斜地」。阿蘇山を頂点としてその間に展開している草原が、こう見えます。

3番目には、標高が800から800メートルですね。一番多いのが約700メートル、これが分布域としては一番多いんですね。特にこの北外輪地域は、阿蘇谷が標高が500メートル、外輪山上が800メートル。で、「コニールカルデラ」の壁、300メートルの「壁」がある訳です。この「壁」がでですね。草原の利用にとって、農家にとっては非常に適切な勞動を与える「運命」を与えたことになる訳ですね。

それから、緯度でいいますと、ここに「北緯33度」が走っています。で、低い緯度にある草原分布ということで、これは國際的な草原の分布の位置から見ても非常に実験的な分布ですね。北緯33度、「温帯地にある草原」ということで、この草原の成り立ちについては、秋吉台と同じようにですね、「人為的な土地利用によって草原が出来た」ということです。

それからもうひとつ非常に大事なことは、これはあの江戸時代に出来ました、今から300年前に出来ました「入会地」ですね。高瀬川が農家の「入会権」を認めてですね、農業的な土地利用をしなさいっていうことで、認めた入会地でございまして、所有は町村有ですね。ほとんどが町村有で入会権があります。そうして175の牧野組合がそれぞれ利用してます。

で、これは、あの、阿蘇っていう所は「もうひとつつの顔」がありまして、「中九州の水瓶」と呼ばれてます。それは、阿蘇っていうところは、この高瀬川、白川、菊池川、筑後川、大野川、五ヶ瀬川っていうことで、熊本県、佐賀県、福岡県、大分県、宮崎県、この別県にまたがる水瓶と言われています。実はこの事がですね、「阿蘇の草原を守ろう」という運動を展開する上において、とても大事な要素になっております。特にこの6大河川に受益する下流域の人は300万人。特に熊本県の85万都市は、阿蘇に降った雨が地下浸透してますね。数十年の歳をして流水する訳で、85万都市が100%地下水の水を利用して生きてると、こういった都合でございます。

で、これはあの、「行くと秋 行けどすいかの 原開し」とい

う名句ですね。文豪、夏目漱石が詠ったようにですね、行きども行けども草原が続いているという、北外輪山上の波状丘陵の草原でございます。遠くに「阿蘇の五岳」、天子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、佐佐岳、杵岳が見えます。

で、「阿蘇千年の草原」、「人と牛の繋り成す自然」ということであります。が、「阿蘇千年の草原」という言葉が、随分と近頃使われるようになります。それは905年、「延喜式」っていう国の政を書いた農物の中にですね、「肥後國 二重馬牧、波良馬牧」(二重馬牧は阿蘇町の二重峠、波良馬牧は北外輪山の一角)という記述があって、国営の馬の生産牧場が在ったということから、現在まで1000年の間、歴史が続いているということからですね、近年は「阿蘇千年の草原」ということが随分と使われるようになってまいりました。

で、そこでですね、草原の利用の一一番の原点になるのは「採草」です。その次が「放牧」ですね。で、農家の人々は昭和30年代まではこういった苦労をして草を刈ったんですね。

これは「草泊まり」風景って言いますが、農家から草原までの距離が数キロメートルもある、ということで、朝、露のあるときに草を刈ると露水が上がる訳ですが、「通勤型」では非常に遅過ぎるということで、草原の中に草の小屋を掛け、そこに寝泊りしたと、それを「草泊まり」といいます。で、牛の背中に布団、それから炊事道具、全部積んでですね、家族で草原に小屋掛けに向かうとこです。昭和37年まで阿蘇で見られた風景です。

これが「草泊まり」ですが、スキの草原の、草の高いところを刈ってですね、で、竹の支柱を入れて、そしてこれに草掛けをして、泊まれるようにしてですね、夕方、おはさちやんがせせらぎの水を汲んで来て夕飯の支度をしてる。非常に普通な写真です。で、こういった農家が、大体150戸から200戸くらいは、こういった草泊まりをしていて、この草泊まり期間が、大体2週間。その期間は、小学校、中学校もお休みになったと、それくらい、この、「村をあげて」のですね、お草を取ったという風景です。

どうしてこういったことをしたか、これは、現在では冬の積てていうのはサイレージとか乾草とか十分にありますけれども、昔はサイレージもありませんでしたので、「乾草=冬の貯蔵材料」と。そして、この乾草を収量によって牛がたくさん貯える。そしてその牛がたくさん貯えると、仔牛が売れて現金収入になる。そして糞肥(堆肥)が取れて、農耕地の米の生産量が高くなるということで、もうこれは農家の「無くしてはならない必須的な作業であった訳です。

これは草刈ですが、昔は大鎌をふるってですね、刈っておりまして、今では刈り払い機で草を刈っておりまし。

これは「草小稿み」といいますけれど、ひとつ的小稿みの

量がですね、「一社」、「二社」、「三社」とて言う表現が何歳ではありますけども、牛の背中に積む量を一つの単位として、あとで映像が出てきますけど、牛の背中に6頭積むんです。片一方に3把、向こう側に3把ですね。これは「千草小積み」といいますし、80把小積みですね。で、冬の間に牛の頭は、朝1把、夕方1把の1日2把与えますので、60把ありますと1ヶ月分になりましたんですね。ということで、農家にとっては、冬場の頭を探ることがとても大事な仕事でした。

ということで、農家の人は「階の家に食けるね」と、よその家はもう5時に出て行って草を刈った、「ウチはそれよりも早く出て行こう」ちゅうことで、早起きの競争。それから、草原に向かうのも「朝より先に」。そういうった過酷な「労働の競り合い」があった。そういうった時代の印象です。

で、これは夕暮れの「千草小積み」ですけども、日没寸前でお父さんが上で、お子さんが下で放り投げてですね、千草小積みが完成しようとしております。

これは、三重連による牛の運搬風景ですが、おじいちゃんかこのように、牛の頭が1頭、2頭、3頭と見えますが、三重連ですね、こっちに3把、向こう側に3把、これが1社、2社、3社と言います。

現在では頭蓋骨品があって、トラックによって大量に搬出が出来ますけども、昔の搬出方法っていうのは、こういった駄載(牛馬の背中に荷を乗せて運ぶ)しかないんですね。牛の背中に積るしかないということで、出来るだけ1回で多くの草を運ぶために、三重連という、連結の知恵が生まれた訳ですね。大体、最大4頭までは通れて行ったそうです。で、そういった中でも、先端に立つ牛はですね、非常に優秀にみんな利口な牛を先頭に連れてくるというふうなことで、そういうった連結の方法にも生活の知恵があって、それで、万が一、途中で切れても3頭一緒に転落しないように「途中で切れるような駄先の仕方」、そういうた話をもったとおれています。

で、これは非常に貴重な昭和30年頃に撮った映像ですけども、農家の主婦がですね、1頭、2頭、3頭と連結して外輪山の坂を下りてくる訳ですね。そして午前中に1回運び、午後1回運ぶということで、もう過酷な労働なんですね。

で、昔の農家がですね、野焼き。干草刈り。それからこの運びっていうことを調べてみましたところが、1頭の農家がなんと、この外輪山を越えるのが200回にも及ぶんです。往復で5キロあるとしますと、200回だと、1,000キロメートル。都本から東京に行くぐらいの距離ですね。歩いて草を運ぶ、野焼きをする、放牧に牛を連れて行く、そういうた過労に就いた訳ですね。それから外輪山の標高は、200メートルから約300メートル、これを越えて行く訳ですが、これを積み重ねると、実際に富士山の10倍ぐらいの高さになるんですね。そういうた過酷な労働の中で草を運んだ。

ということで、どうしてそれだけの労働を厭わずにやったかといいますと、草は牛の食であり、それから硬いところ、食い残したところは肥料であり、そして牛の糞と尿と混じって肥沃になります。その肥料はいわゆる耕種農業(田畠を耕し作物を植える農業)、米のですね、生産力になるということで、農業にとって草をたくさん刈り、運ぶということは「美徳」であったんですね。

その当時の石脇の道をう歩いておりますけども、「阿蘇の農家はみんな石工であった」、「石工であった」と言われるぐらいですね、凝灰岩を運んでどこかで割って運んで、そして外輪山にたくさんの道を造るんですね。一の宮町だけでも約30箇所、その中の21箇所を私は歩いてですね、確認をしております。

で、阿蘇の昔からの牛小屋ちゅうのは、こういった「踏み込み式」の棟で、だんだん、だんだん、千草を中心に運びてやります。そして、(牛が草の)歯いとこだけは食べて、硬いところは敷き藁になる訳ですね。で、それに糞と尿が混じって肥沃になると、そうして、だんだん、だんだん、床が高くなってきて、牛の頭が天井につかえそうになると、農家では三あら(三脚)でこれを出してですね。そして、橋手でくぐって牛の背中にまた積んで、田んぼに運ぶと、そういうた西環が見られた訳です。で、言うなればですね、阿蘇の西環構造っていうのは「肥沃の生産工場」です。だから牛の子を取ることよりも、肥沃を取ることの方に第一の目的があったと想われています。

そしてさらにですね、草は莢素成分で0.1とか0.2ぐらいのパーセンテージしかありませんけども、糞尿と混じることによって莢素濃度が0.8とか1.0とかにですね、4倍にも5倍にも、肥料としての価値が飛躍すると、そういうたことで、草原の草と牛と耕地って言うのは「有機的な連鎖関係」にあった訳です。

さらにですね、農家では傾斜地を利用して、「落とし坂」といいますが、上が高台で、牛、馬が駆け下りて、こう、段があって、ここに牛、馬の廻りを落とす訳ですね。で、馬車に積んで田んぼに持つて行く、こういった畜力構造が、昔は一番近代的な畜力構造であった訳です。はい。

で、これは、遠くに見えるのは北外輪山の、元程言いました15,000ヘクタールにも及ぶ広大な草原。ここに過酷な農業に労働を与えた「カルテラの壁」、300メートルの断崖があります。そしてこれが阿蘇谷の4,000ヘクタール。ここに農家が張り付いている訳ですね。4、5世紀にさもう古墳がたくさんあって、この辺に農家や農業の跡みがあったと想われていますが、農家の人は、この外輪山の上にある草を運びたために、この外輪にかかる道をですね、1年間に200回も上り下りする訳ですね。

そして、この草原の草を畜舎に運び、そしてこの畜舎で出来た厩肥を、また困る間に運ぶと、それから畠の草と畜舎と耕地って言うのは、有機的な関連にあって、牛が1頭ありますと、厩肥が3トン出来て、30アールの水田の肥料が出来ると、そういうこの連鎖関係、それから有機的な流れがありました。

そこで農家はですね、安定期的に干草を取るために、生活の知恵が生まれたんです。それは「古野」とて言うことですね。ここは米塚(阿蘇町にある山)ですが、こっから向こう側は草が刈ってありますね。こちらは刈り残してあります。それは「草原に休息を与える」ということです。光合成を十分行って、地下茎に貯蔵部分を蓄えて、そして翌年も生産力が上がるようになります。こういった休息をうける。これを「古野」とて言います。昔から農家の人が受け継いで来た伝統的なですね、草原の維持管理技術です。

で、野焼きが始まりますけれども、この野焼きもですね、ただ単に都会の人から見るとイエントに見えますけれども、農家にとっては、今話をしますように、複数地の草を安定期に、そして牛の食べる、枯れ草の混じっていない、いい草をとるために、野焼きをやるのは必須的な管理技術でした。

野焼きをしないと、低木、低木が生えてですね、具体的にはブルトリイバラ、ノイバラ、それからアキグミ、そういうのが生えて来てですね、刈り取りがしにくい、牛が食べないということで、農家の人は縦文の時代からですね、宮々と野焼きをすることによって、複数地の草が刈りやすくなり、草が立つということを覚えてきた訳ですね。

その、慣習が今でも阿蘇では残っておりまして、あとで山内さんの方でも話がありますが、野焼き面積は16,000ヘクタール、ここに關わる農家の人は800人ですね。一人当たりの負担面積が2ヘクタール。一番ひどいところは一人当たりの野焼き面積が10ヘクタール。そういう重い荷をかかっているところもあります。

これは野焼きの歴史ですが、既に今まで50年間に、野焼きによって亡くなった人が、阿蘇市だけでも数名に及びます。おそらく1000年の歴史の間に、単純計算しますと、200名の命が野焼きによって失われたであろうと想うことが推定できる訳ですね。

で、これは火の合流ですけれども、農家にとってはですね、野焼きをやるのは命を懸けた作業なんですね。秋の台の野焼きもそうですけれども、指導、命令系統を明確にすること。そして火をつける人を「火引きさん」といいますけれども、一番大事なペテランの高齢の人があたる訳ですね。風向きを見、そして、つけたところから消して行って、そういうことをしながら、安全にこの包囲網が出来



たところで合流をしますと、向こうの谷から来た火と、こちらの火が合流して、ドッキングしてですね、10メートルも15メートルも炎が昇る、そういう伝統的な野焼きの管理技術っていうのを土地の人は身につけております。

で、「輪切り」、ここでは「火道切り」と言いますけれども、熊本県ではクルマの輪、土地の地と書いて「輪地切り」と言います。で、「輪地面で命がけの作業」、高齢農家に重い負担、あと5年もつか?という新聞のショッキングなタイトルですね。今平均年齢56歳です。5年すると57歳、66歳の人は70歳に確実になる訳ですね。

ということでこの輪地切りの輪延長が640キロメートル、那ホホから那ホホくらいの距離ですね。(防火帯の)幅が1メートルですから、450ヘクタール。これを5,000人が受け持つて輪地切りをしてあります。

で、(輪地切りの実態は)夏、まだ9月で高温の時期、それから高齢である、足場が悪い、刈り払い機で一つ間違うと大怪我をさせると、そういう心理的な負担、それから野焼きのときに森林に火が入りますと、その保護せにやならない。それと重い負担のために、だんだん、だんだん、野焼きが減って、平成7年以降、阿蘇では450ヘクタールが野焼きを中止して、見廻上の問題にもなっております。

で、輪地切りをした後、1週間くらいすると「輪地焼き」という作業を行ないます。(防火帯が確実に防火機能を発揮するため)、(輪地切りで刈り払った草を)束めて焼くんだけね。そういうことを阿蘇ではやっております。

これが冬の映像ですが、これが防火帯ですね。冬、雪が降っておりますから輪地に見ることができます。

で、その次は「放牧」ですが、阿蘇では昔からですね、放牧されておりまして、昭和35年代に一番多くて、2万頭放牧している。2万頭が150日の放牧期間でしたので、約300万頭

の「延べ頭数」の牧畜力があつた訳です。

で、現在では1万頭に牛の数が減っておりましてですね。牧草の導入によって240日間に放牧期間が延びております。延べ頭数で言いますと240万頭の牧畜力があるという訳ですが、その差が60万頭ちうことで、草原に放牧して余裕がある訳です。

ということで、放牧の「圧」(放牧圧:か牧)によって草原に働き掛ける力)がそれだけ弱くなりますと、草原が荒れてくるんですね。同時にでも盛んにチカラシバが生えてきたりですね、エゾノギシギシが生えてきたりということで、「放牧圧の不足」による草原の衰退が見られます。

で、さらにですね、「牛は山にのぼる」という言葉があるように、この等高線を作つて傾斜角度35度で上っていく訳ですね。阿蘇の草原の23,000ヘクタールのうち、16度以上の急傾斜地は70%ですから、この牛がいないと阿蘇の草原の利用率というのばく、ぐんと下がってしまう。牛があることによつて、こういった傾斜地まで綺麗な物草型の草原になる訳ですね。

ということで、この牛のことを中國要職の高橋(住家)さんは「草原の造園師」と、私は草原の、これは全部メスですから「草原の美容師」という言葉で、表現をしている訳です。また、ゴルフをされる方は「グリーンキーパー」とですね、草原を綺麗にするグリーンキーパーであると、いろんな表現を使って牛の「美徳」を説いております。

これら外輪山の急斜面ですね。35度あるようなところですね、「牛道」(牛が通つて出来た道)を、こう作つて。牛がここに通つてゐるでしょ。ここにも2頭出でますが、こういった斜面をですね、等高線状に進みます。でよく見ると「スインチバック」がある、所々に、こう下から上に、上から下に移動するスインチバックを作つてですね、これは何十年という歴史の間に、牛が「生活の知恵」で作った移動の路線ですね。スインチバックを作つてあります。で「牛道」と言つ、非常に珍しい景観ですね。

この牛の「採食行動」、「登坂力」ですね、そして体重の10%から12%を食べる、加キロから72キロもの草を食べる。こういった行動によつて「阿蘇の草原景観」でいうのは保たれてゐる訳です。

で、最後に2枚で終わりますが、これは「草千里」ですね。熊本県の観光地の中でNo.1と言われている草千里ですけれども、この広々とした草原、そして苦みのある岩、動きのある景観。牛の苦みは、仔牛が母牛の乳を飲み、水を飲み、寝転ぶ、そして緩やかな時の流れ、清らかな空気。そういうところに育まれた人が身を置いたときに、心の安らぎ、心の癒しを感じる訳ですね。

で、もしもこの牛がいなくなつたときには、この景観は薄くなつてしまつてしまつでしょう。

たゞたる低木、または荒れ地になつてしまつてしまつでしょう。そして阿蘇にきた観光客が「こんな景観が国立公園か」と言うでしょ。そういうことですね、牛が持つてゐる「多面的な機能」ですね、第一面的には牛肉の生産であり、仔牛の生産ですけども、そういう「多面的な機能」を見直してですね、牛を増やそうという運動が今起こつてゐる訳です。

最後になりますが、これは草千里の景観ですね。刈草型、芝型の草原です。9月から9月になりますと、下の万から、里から牛が上がってきますけども、ミヤマキリシマが咲き、そして芝型の草原があつて、この景観が「熊本県でNo.1」といわれる景観です。

ということで、今日はメインテーマとしての「なりわいと保全」という意味でですね、「阿蘇の農家の人々が千年の歴史の中でどう草原と戦つてきたか」という話をいたしました。以上で終わります。

宇佐見

大庭さん、ありがとうございます。

えっと、報道者をちょっとご紹介するのを忘れてしまいましたけども、大庭さんは、現在阿蘇地区のパークボランティアの代表であり、自然公園指導員をなさつておられます。

それでは、大庭さんの報告に関してご質問がございましたら、お手を挙げていただけませんでしょうか。ありますか。はい、それじゃあ、後でまた「全体」のところでありましたら、積極的にご質問をお願いいたします。

それでは続きまして「第2報告」の方に移りたいと思いまます。第2報告は、「財団法人阿蘇グリーンストック」の専務理事をなさつておられます山内康二さんからの報告であります。西目は「市民参加の草原保全の取り組み」です。よろしくお願いいたします。

山内

先程ご紹介をいたいたいた「グリーンストック」の山内と申します。

私の話は、ここでのテーマは「なりわいと保全」ってことになっておりますので、若干、無理があるかと思うのですが、私共は「市民参加による草原保全の取り組み」ということで、実は私共の財団は、平成7年に、都市と農村、行政の3者の連携で、「阿蘇の生命資産」、まあ草原とか、森林、農地、あるいは水、水源ですね、これを守り、後世に引き継いでいく、ということを目的として設立された財団本証です。で、先程大庭先生の方からご報告のあった、地元の「なりわい」によって維持されてきた阿蘇の草原、その保全に向けて、「都市農の市民による園作り」が何とか作り出せないかということで取り組んで参りました。そういう意味で、どちらかと申せば、そういう都市農の参加、関わりによる草原保全の取り組み、「私共の財団でやってきた取り組み」を中心にしてスライドを使って、ちょっとご紹介をさせていただきたいと

思います。

(以降、スライドを使っての報告)

もう前半は省いていきますが、野焼きの後に、阿蘇ではオスミレが一面に咲きありますが、これはその様子です。はい、どうぞ。

これは阿蘇の景観。それと野の花を代表するヒゴタイの写真ですね。「阿蘇が火炎と地続きだった」と言われる証拠の、こういった希少な野の花が確かにあって、いわゆる野焼きで草の高いスキなんかを落去することによって、こういう野の花が生息する条件が作られているというふうに言われています。はい、どうぞ。

これは非常にスライドの写りが悪いですけど、先程大渕先生のお話にもありました、実は私共の財団で平成10年から11年にかけて、2年間かけて、阿蘇の草原について調査を行ないました。阿蘇には175の牧野があるんですか、その牧野組合の持つ全部の牧野について総合診断、及び野焼き、補助切り、先程話しがありました「補助切り」という防火帯を作る作業がありますが、こういった作業の現状について調査をした訳です。その結果に基づいて、データで、阿蘇の土地利用のスケールとか、人的スケールというのを紹介しようとしたスライドなんですが、ちょっと写りが悪くて分かりませんね。

(スライドを指し示して)ええ、阿蘇の草原の面積は23,000ヘクタール、そのうち野焼きをしている面積が16,000ヘクタールっていうふうになっております。そしてこれは「阿蘇市内の入会権」。阿蘇市の草地にはほとんど入会権がございまして、その入会権者が70,000戸、入会権を持つ方が10,000戸いらっしゃるということですね。はい、次どうぞ。

これが野焼き面積。16,000ヘクタールですね。そして先程出てきた補助切りという防火帯を作る作業ですが、これが総延長640キロ。175の牧野組合の総延長で640キロ。南端距離で佐本から御園までの距離になるというふうになっています。次どうぞ。

これが補助切り及び野焼き作業に関わる地元の人々の人数ですが、(スライドを指し示して)こちら上の方が、補助切りに関わる人数ですね。出役者5400人。野焼きに関わる人々が約7,000人というデータになっています。次、お願いします。

で、そういう中で、阿蘇の草原の維持が困難になってきているって量たる理由、私共も調査をしてひっくりしたんですが、平成1年から平成10年に掛けて、8年間の間に、家畜を飼っている農家の減少率が、この調査で588戸、まあ26%

くらい減少している。この3年間にですね、そういう非常に深刻な状況、これが阿蘇の草原の維持に関して非常に深刻な問題になっている、と思っております。次、お願いします。

これは、その調査によって、175ある牧野組合をタイプ別に、4つに分けてみたものです。(スライドを指し示して)上から、草原の維持が極めて困難だという牧野、もう既に野焼きなんかを一部中止している牧野ですね。これが35牧野で、全体に占める割合が27%もあります。で、「タイプ2」が、現在は維持されているけど、恐らく条件的に厳しいといった牧野、例えば補助切りの出役者の平均年齢が50歳を超えており、そういう牧野がですね。この時点では、平成10年の時点では60歳を超えている訳ですから、現在ではもう52、3歳くらいになっている訳です。そういう牧野が「タイプ2」ということで、これが40牧野、全体の約22.9%。このタイプ1とタイプ2を合わせて、既に43%くらいが、野焼きの維持が非常に困難だというデータになっています。はい、次お願いします。

まあそういう中で、お手元の資料28ページに私の報告の項目だけご紹介しますが、「市民参加による草原保全の取り組み」の、私共が取り組んでいる「取り組み」の大さな1つの柱でもあります。先程の大渕先生の話の中でも「草原の維持に畜産が非常に大きく関わっている」という話がありましたが、そういう意味で、「阿蘇の草原維持に関わる畜産」。阿蘇の場合、牛は赤牛なんですが、その赤牛の、「畜産振興を都市側で実施していくこう」ということで、赤牛の「畜産(生産)地元販売」を生産(生活協同組合)なんかを通じて行なう「畜産振興支援活動」を開催しています。

これはそのときの交流会の写真です。九州に「グリーンコープ」という、山口にもありますかね、グリーンコープという生産がありますが、そこと赤牛の「尾真」をやっている。これはそのグリーンコープとの交流会の風景ですね。次どうぞ。

これも同じ交流会の風景です。はい、次どうぞ。

これは、その生協の組合員さんの子供さん達を呼んでの交流会。産直の音及びのひとつで、「赤牛に会おう」ということで集まっているところですね。これが赤牛ですね。

一応今のところ、平成12年で年間260頭から260頭位の赤牛の産直をしています。で、このところようやく地元の阿蘇のホテル、旅館問屋も、だんだん「赤牛の肉を何とかせんといかんだろう」ということになります。先日ようやく契約が成立したので、おそらく平成13年度は年間350頭から400頭近い産直に広がるだろうと思われていますが、そういう「産直」、「畜産振興事業」を財団の方で取り組んでいます。次どうぞ。

これもちょっと分かり難いんですけど、これは去年から準備中ののですが、直だけじゃなくて、荷物の牛を増やすのに、都市の人々に「赤牛のオーナー」になっていただけで牛を増やそうという画面です。

これは実は後で紹介する、「野焼きボランティア」の取り組みの中から、そのボランティアの人から「野焼きの支援だけじゃなくて、何かもっと草原維持のために都市側が支援出来る方法はないか」ということから始まって、現在、最終的な子牛の販賣代金の調整をしているところで、おそらくこの番には、第1号の導入人が始まるんじゃないかと思います。

都市の人々にお金を少し出していただけで、大体30万円くらいで母牛を貰って、そしてそれを地元の農場に預けて、子牛を生産していただけて、その子牛の売却益で都市の人々に、まあ「元金を保証する」って言ったら出発に引っ掛かりますので、出来るだけ「元金程度は返せるように」、まあ1年から2年間で返せるようにしよう、というふうな「仕組み」を今検討している最中です。

地元の「受け入れ側」として現在3件くらいの申し込みがありまして、そこで打ち合わせをしているところです。もう既に福岡の方には「赤牛なんとかクラブ」ってのが出来上がっていて、今10頭分くらいの資金が集まっているところです。他にも、福岡で準備されたこともあります。今17件くらいの問い合わせが来ているところです。次どうぞ。

いよいよ「市民参加による草原保全の取り組み」の、もう1つの具体的な「取り組み」として、先程からの大瀧先生の話なんかにも出てきました、「野焼き」と「新地切り」、まあ野焼きとその野焼きをするために欠かせない新地切り、防火帯作りですね。この2つの作業が欠かせないんですが、この2つの作業に「都市の市民のボランティア参加が出来ないか」ということを、ずっと財団の方で追求してきました。で、これは地元の人々が新地切りをしている風景写真ですね。次どうぞ。

で、実は財団の方では、平成6年頃からですね、20名くら

いで「体験的な野焼き参加」を続けてきたんですが、平成11年から本格的に都市市民に呼び掛けた「ボランティアでの野焼きと新地切りの支援活動」を開始してます。

これは去年の10月に、ボランティア参加をされる方に来てもらっていたので、新地切りの作業に入る前に、新地切り、或いは刈り払い機の扱い方について、地元の人から講習説明を受けているところです。次、お願いします。

この方が地元の方で、ボランティアの人には、みんなこういうゼッケンを付けたもらってます。ボランティアの人達が刈り払い機の扱い方なんかを地元の方から、今実際に講習を受けているところです。次、お願いします。

で、講習を受けた後、まだ危なっかしいんですが、(スライドを指し示して)実はここが森林なんですね。で、その森林地を、この時は幅が12mから16mくらいの幅で、「新地」っていいますか。防火帯作りをボランティアの手でやっていくところです。次どうぞ。

これも同じですね。これは去年の10月、福岡市のモデル事業としてボランティア作業をやったところですね。これも同じく防火帯作り、新地切りです。次どうぞ。

大体これで新地が、かなりもう出来上がってきましたところですね。(スライドを指し示して)こっちが森林地。これが防火帯。これで15mくらいの幅があるんでしょうか。はい、次お願いします。

で、作業が一応終わって、記念撮影をしているところです。次どうぞ。

で、これが一番最初にやった野焼き。94年の3月だったと思いますけど、20名くらいの参加者が「体験的にやった野焼き」のときのものです。で、初めて、「何百年の草原」で、地元の人々が持っていない人で、都市側の市民が初めて参加してやったという意味では、確かにこれが初めてだと思います。次、お願いします。

で、これが95年位の春の野焼きです。(スライドを指し示して)この2人がボランティアの方ですね。この方は確かに九州農政局の人だったと思いますけど、このお二人と、こっち側におられるんですかね。あ、ここら邊おられるんですね。だと思います。次どうぞ。

で、本格的に大々的に「野焼き支援事業」として始めたのが平成11年からでして、今日お手元にテラシをお配りしたと思いますが、野焼きに参加する上で、ボランティアには必ず「初心者研修」というのを受けていただくことになっております。先程の大瀧先生のお話にもありましたかし君が何回か事故が起こってありますので、福岡ボランティアには



必ず保険を掛けますが、先ず「講習」を受けてもらわないと、本番の野焼きには参加させないという条件で、地元の方と信頼関係、協力関係を作っております。これはその講習会のときの様子です。次、お願いします。

そして講習を受けた上で、これは野焼きの際に使う消火用の道具で「火消し棒」と言うのですが、それぞれのボランティアに自分用の火消し棒を作つてもらつておるところですね。次どうぞ。

実は今日、河原の方で、その「初心者研修会」の第2回目が、今年の第2回目が140名くらいのボランティアを集めて行われているはずです。

これは、第1回目のときの大瀬先生ですね。第1回目は平成11年の春ですかね。初心者研修会のときに、1日オリエンテーションと火消し棒作りがありまして、翌日が小規模の野焼き体験ということで、一応予定しておるんですが、この年と去年の2年間は、大瀬とか別でですね、体験の方方が出来ませんで、現場の草原で、野焼きの危険性とかそういうのをボランティアの方に、確か大瀬先生がお話ししますが、話してもらつておるところですね。次どうぞ。

これがいよいよ、去年の春の野焼きの本番です。これは研修を終えて、いよいよ本番を迎えるボランティアが、地元の船橋に分乗して、野焼きの火を入れる現場に向かつているところです。次、お願いします。

で、続いて、それぞれの火消し棒を両手から握りしめて、今準備に入っているところですね。次どうぞ。

そしてこれは、地元の区長さんから、野焼きの要領や注意事項について説明を受けているところですね。これ私ですけど。次どうぞ。

で、一応、取り掛かる前に、ちょっと記念撮影をした様子です。1つの牧野、村岡町の場合、1つの牧野相手で普通300ヘクタールとか、まあ大きい牧野では800ヘクタールとかの規模になります。ここは確か鳥居町の牧野ですが、野焼きするところは100ヘクタールくらい、80から100ヘクタールくらいの規模のところに、地元の方が80名くらい、ボランティアが30名くらい、これ確か30名くらい入つてます。次、お願いします。

このようにボランティアが入ることによって、以前は地元の人達だけで2日掛けて野焼きをやっていたところですが、一応ボランティアが入ることによって、1日で終わるようになっております。これが実際にボランティアが入つて野焼きをしているところで、向こうから、こう、火が燃えてきている、そしてこっちから抑え火をちょっと打つて、火消しなん

かをしている、というところです。次、お願いします。

これも野焼きの写真です。次どうぞ。

これは、県立大の女子大生もボランティアに参加しておる。向こうの方に火が燃えているところですね。次どうぞ。

これが、これは去年の春の野焼きの風景です。次お願いします。

これも去年の岸山での野焼きの風景ですね。で、ボランティアは、遠くはですね、今年もそうだったんですが、東京、埼玉なんかからもいらっしゃいます。今年は、埼玉の所から主婦の方が4人くらい来られて、また今年は初心者研修を受けて、来年「2年掛かりで」ということで、来年「本番」に参加するというふうなことを言ってらつしやいました。毎年東京、埼玉なんかから何名かづついらっしゃいます。

で、参加者の大半、半分弱が熊本県内、そして残りの半分が、福岡とか、その次多いのが佐賀、大分ですね。九州各県から参加していただいております。今年の初心者研修、延べ210名くらい。去年も250名くらいで、一昨年も250名くらいです。そして初心者研修を受けた人は、一応そのまま本番に入りますので、今年は現時点で、本番への申し込みが、確か300名くらいになっていると思います。

で、ようやく最近、去年あたりから、地元の連携も得られるようになります。最初のうちは地元の人も「都市の人」が来ても足手まといになる「ぱっかりだ」という雰囲気が非常に強かったのですが、2年続けて、去年、一昨年と2年続けることによって、非常にボランティアの評価が良くなってきております。で、最初4町村の8牧野とか10牧野くらいしか受け入れがなかったのですが、今年は7町村の14牧野が受け入れ、まあ受け入れといふか「平てはしい」というふうになつてきています。

で、今年は初めて、今まで人手が足らなくて野焼きを中心していたところを、地元の人とボランティアと一緒にやることで「野焼きを復活させよう」という動きが出ております。あの本高源という割と有名なところがありますが、その近くの牧野で今度、復活作業をするということになっています。

野焼きボランティアの人はですね、大体一後輩られます。非常に感動して、もうほとんどのマットします。で、実は私共のところでは「野焼き支援ボランティアの会」というのを作つてしまつて、これは初心者研修講習をちゃんと受けただかないとこの手帳を発行出来ないんですが、講習を受けた「資格がある人」だけに発行しております。

で、この会に参加されるボランティアは、去年発足して100名くらい。今年も初心者研修を受け付けていますので、恐らく今年も250名くらいになるんだと思いますが、そういう方達は、もうほとんどの毎年のように何度も野焼きに来ら

れます。で、その数も段々と増えてきたものですから、この中から更にリーダーを、今養成していまして、「リーダー養成講座」も開いております。

で、もうそういう方は野焼きのために、ご承知かもしれませんが野焼きというのは天気に左右されますので、天気が悪いと予定日が、どんどんどんどん、1週間ずつ相延したりするんですね。で、そういうこともあって、大半のボランティアのリーダーの人達なんかは、2月から3月にかけての日曜日は、ずっと野焼きのために空けとつもらっていて、「いつ野焼きがあるっても駆けつけられる」というふうな様子になってきています。

まあそんな感じで、最近になってようやく、今までほとんど無関係、まあ出会いも関係もなかった都市の人々と地元の牧野組合の方達とが、ようやく初めて出会って、一緒に連携して「河跡の草原の保全に取り組もう」という雰囲気が出てきたところです。

実はこれ、最後のこの写真は、去年の福山牧野組合での野焼きを撮ったものですが、実はこれ、私の後ろ姿なんですけど、これは何か「ナショナルジオグラフィック」という、何か有名な写真雑誌の国内特別部門賞を受賞したんだそうです。撮った方は別のボランティアの方なんですね。一応、以上で私の報告を終わらさせていただきます。

宇佐見

はい、山内さんありがとうございました。今の山内さんの「市民参加の草原保全の取り組み」というご報告について、補足説明が必要な方、或いは質問がありましたらお願いいたします。

ええ、第1報告と第2報告で、河跡を素材にしていただきまして、まあ歴史的な変化。そして今どういう形で草原の保全に人が関わる、或いは動物、牛が関わっているのかという、まあ概要ですね。これを皆さんに聞いていただいたと思っております。

で、第3報告は、久住からお越しの佐藤隆幸さんです。佐藤さんは、地元でお米と畜産の複合経営をなさっておりまして、実際に福山牧野組合のメンバーであられます。で、発表の題目はですね、「畜産と野焼き」ということで、久住の例を使いながら、実際にどんな形で保全がなされているのか、そこにはどういう形の「林わわい」が見られるのかというのをご報告していただきたいと思います。それでは佐藤さんよろしくお願いいたします。

佐藤

ただ今ご紹介にあずかりました佐藤でございます。実は私は昭和48年地元の高校を卒業しまして、以来、農家の伴といたしまして、又の後を継ぎまして百姓として今日まできた訳でございます。しかしながら時代の変遷と共に、「一足のわらじ」ではどうしても生活も出来ないということで、地元の通り酒場に昭和57年より出ておりまして、冬の間は酒

り酒屋の奥の中に逃げ込むと、うまい酒を啜りながら酒通りに飲みまして、今日も2泊3日ではござりますが、親方の旦を、まあゴマをすって、「ちょっと山口の方へ遊びに行ってきますのでよろしく」ということで、酒場から抜け出してきた様な次第でござりますので、どうか話の方は決してうまくございません。でも本音を話させていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。座らせていただきたいと思います。

私の話ですけれども、昭和48年、1町5反の田んぼで6~7頭の牛、成牛と、そして椎茸を2~300キロ作るというようなことを「なりわい」として始めまして、以来、今日までずっと來ている次第でございます。

そうした中で、春になれば、3月の上旬には野焼き、そして4月の15日頃から牛の放牧が始まる訳でございます。そして秋になりますと草地切りがございまして、そういったものは先程の大瀧先生、山内先生のスライドの中でご見になつたと思いますが、全くあのようない状態のちのである訳なんです。草地切りの日に、野草地の野を分ける「野分け」というものがござります。ここからここまでAさん、またBさんはこの辺りの草を刈ってくれというようなことで、野分けをしまして、草を実際に入れるのが9月の下旬くらいから、私も小さい頃を思い出しながら、大瀧先生のスライドを見せていただいた訳でございます。牛の背に乗り、或いは牛車に曳かれてながら、朝の5時頃家を出まして、父から「あれが俊明けの明星だ」ちゅうようなことをですね、今で言えば金量でしょうか、そういったことを言われながら、牛の背、或いは牛車に曳かれてながら、てくてくと歩いて数時間かけて、久住農原の方に行つて、高原で遊んだことを覚えていた訳でございます。

そういった形で保全をされてきた牧場の形態が変わりかけたのが昭和54年だったと思います。ちょうどその頃に「久住農田広域牧場開発」なるものがございまして、大型外國製トラクターの導入と、それまでは大筋で草を刈つておったものが、だんだんと背負い式の草刈り機と刈り机い機、さらには大型の外國製のトラクターというものに変わつてしまつて、それが現在まで、およそ22年目でしょうか、至つている訳でございます。ちょうど昭和54年当時、県の畜産試験場に「牧場オペレーター養成」というようなことで、私も研修生として行ったのか記憶に新しいところでございます。そしてそういった中でずっとやって來ておった訳です。

その当時の牛の頭数がどうかといいますと、私の手元の資料には昭和50年頃の牛の頭数の資料がある訳でございます。当時、久住の農家の戸数が820戸あって、頭数が1,700頭ほどいるんですね。1戸当たりの平均頭数2.7頭とそれが6年後になりますと590戸になりまして、頭数は若干減っていると、さらに8年後つとですね、戸数は6年間に100戸ずつ、ずっと減つて來ている訳でございます。平成3年が380戸、さらには現在220戸までに減つておりまして、

しかしながら減ると反比例しまして、南勢地区の方は2,800頭くらいに増えてきてあります、1戸当たりの平均頭数が約1頭になっておる次第でございます。

これは、農家の戸当たりの頭数が増えたということは、農家もそれなりに努力をして、何とか不況の波を乗り越えるべく努力をしている姿の結果だと思えば良い訳なんですが、しかしながら牧場全体として記述した時に、例えば「何故、野焼きボランティアを入れたか」という経緯にしても、そこにはやはり農家の減少という深刻な問題がある訳です。現在私共の牧場では、元々9戸あった農家が先日8戸になりました。「入会権」の放棄ですね。それは子供、或いは孫が東京、大阪の方に出ていると、庭は誰も守らないというようなことで、輪地切り、輪地焼き、庭には野焼きに出られないと、これが現状でございます。

そういった中で久住町の方では、第1回の「野焼きシンポジウム・草原サミット」なるものを、氣味苦々さんを呼んでやったのが平成7年だったと思うのですが、その時に、「久住町を特徴付けるものは何といつても高原である」、高原を語りて他にはない。しかしながらそういった現実から、久住町23牧場ありますが、実際火入れをしているところは13牧場しかない訳でございます。ですから、何とか野焼きの文化というものが、他にもあらゆるものがあるんだけれども、そうしたものが絶えないようにするために、人手を都合に求めようということで「野焼きボランティア」等を入れまして、外からの啓蒙運動のひとつとして、そういったシンボルジウムのようなものを聞くとか、ボランティアによるご加勢を願うとかいうようなことを行なっている訳でございます。

「野焼きボランティア」は毎年申込者が増えて、近年では100名くらい集まるようになりました。しかしながら、如何せん8月の上旬というのは、飼育のあの周辺は天候が非常に不安定な時期でございまして、どうしても決められた開催日に野焼きが出来ない訳でございます。そこで予定といふことで、2日、3日と延長するとなりますと、ボランティアの方も動かがございまして、そう何日も休みが取れないということもありますて、帰られてしまう訳です。例年は今年の場合は3月の11日が野焼きとなっている訳でございますが、その後には予備日が13日、また15日と続く訳でございます。例年ならば大抵50人から80人くらいはボランティアの方の応募がございます。しかしながらどうしてもまとまり一回たりとも開催出来たことがないということで、結局20名程度で終わる訳でございます。今年もまた60名くらいは、近くは鹿児島の方からやって来る訳でございます。

そうして地元の「受け入れ体制」としましては、最初は「物好きでやって来るんだ」と、「恐縮だ」、「面倒くさい」というような意見もございました。しかし、毎年のようにやって来て下さるボランティアの方もいらっしゃいます。作業にあたっては、消防署の方から消火の道具を借りる、「ジェットシャーナー」という水の入った袋を使って火を消す訳でござい

ますが、それを使って消すとか、自分で消火道具を調達するとか、回を重ねる毎にボランティアの方の土気は高まっている訳でございます。中には単なる物見登山の方、写真撮影の方、いろいろなタイプの方がおりまして、今後地元がそれに対してどう対応を取れば良いのか、また事故等起きた時にはどういうふうに対応すれば良いのか、というようなことが一つの大きな問題になっていいるところでございます。

私個人のことを申し上げてなんんですけど、そういったボランティアの方が見えられても、仕事だけして、ちょっと「なまらいいをして、それではいい、さようなら」じゃあ面白くないんで、「お茶でも飲みませんか」というところから話しあ始めたところ、そういったボランティアの方々、いろいろな職種から、大学の教授からお医者さんからいろいろな方がおられますか、そういうボランティアの中のお一人が、「私はもとを持っている、あなたの酒造りの話と、山を飛んで廻った話が面白そうだから、一喋までそういう話をしてくれないか」と言うことで、大方にある、文化的多目的ホールがあるんですけど、そこに月1回寄りまして、私もお酒を造っているし、造ったお酒をどんな形で世の中の人が飲んでいいのだろうかということを「考案に行く」と、着手な言い方ではございますけれど、酒の飲み方も少しは勉強しなければ、造るばかりが能じゃないと言うようなことで、月1回行ってみはさんと対話をしていくようになりました。その内に非常に「人間の和」というか、そういったものがどんどん広がって行きまして、そちらの会の方も今30名くらい、学生からずっと年のいった方までおられる訳でございます。

まあそういうのですが、私が父の跡を受け、16歳くらいで農業を始めたときには、それは実に辛くて口しゃ苦い表はないものでした。「何でこの田舎の山の中に廻が残って百姓せんにゃならんのか」と、先程大瀬先生、山内先生あたりが話された近所の牧場には国道、観光道路が走っている訳でございますが、地下足袋を履いて牛を引っこまつて歩いて行く、そのそばに同じような年代の若者が赤いスポーツカーにきれいな女の子を乗せて通勤と通じてると、そこで牛がうんこをボトリと落とせば乗っている女の子の「あらいやだ」という声が聞こえて来る訳でございます。私も自分が悪いことでもしたように顔を赤らめて下に向いて牛を引いたような経験もある訳でございます。

しかしながら、それも今も見てみればホントまあ「いい時代」で、今は牛を引いて歩くどころか、近年の社会情勢の変化によって、組合を取り巻く環境が大きく変わりまして、新たな問題も出てきておる訳でございます。

久住町の場合は「観光も併せて推進する」というようなことで、現在ウチの牧場の中に、20時歩ほど農地を元りましてビール工場、それからコテージ、オートキャンプ場なるものが出来て、大変な車の通りでございます。そのような中で、去年の10月だったですか、牛が夜間に牧場より外に出まして、国道を過ごたと、そこにちょうど2日連休の最終

日だったところで大変な交通事故があつて、牛と車との正面衝突があつて、牛1頭が死亡して数頭が怪我をしたのですけれども、自動車7台の損壊が甚だしく、その対応について最近まで追われたとおっしゃるのかおっしゃるございます。

開発を続ける中にも、全ての人間が農家ではございません。88戸ある組合員の中でも、牛を飼っている農家は若干23戸でございます。先日までは半数以上が牛を飼っている有畜農家だった訳です。そうなりますと同じ牧場の入会権を持つ組合員でも、有畜農家とそうでない者の間で意識のズレが出てくる訳でござります。牧野組合が一年に一度懇親会をする訳でございますが、懇親会の席上で、「何で牛を飼っている者のために野焼きをしなければならないか?」「我々は野焼きをする必要もないと思うし、出るのも面倒くさい」といったような話も出て参りました。並んで「町有の土地」なんですけれども、「牛を飼っている者は、飼っていない者に対して使用料を払え!など」というような基論とも考えられるよう話まで出てくる始末でござります。今後、実際はんとに、この先どうなるだろうかと危惧しております。農家の戸数は減ってしまうし、どういう様な形でボランティアと協力して野焼きを続けていかなければいけないのか。そうしなければいけないんですけれども、これが一番のうちの牧場の問題点でございます。

こうして本日参りましたのも、皆様方のお知恵をこの場で借りたいというのが本音でございます。私としましては、ボランティアを取り入れて、彼らとお付き合いしながら、自然の中で農業を続けていきたい。これは今まで自分が思っていた様な、腰を赤らめて牛を引いていた時の様な「情けなさ」。しかし逆にボランティアの方から喜んでいた。自然と共に融合して行く農業の夢は、先祖が今までやって来た、野焼きをして牛を飼ってやってきたこの姿は、「決して間違ひじゃないんだ」と、「もっと自分自身に自信を持て良いんじゃないか!」ということを私はボランティアの方から逆に教わりました。これはボランティアを入れて、みなさんはどういうふうにお考えになるか分かりませんけれど、私自身が得た、体験した実感でございます。

以上簡単ではございますけれど、とりとめのないような話なんですけれども、今日は本当に皆様方のお知恵を、ご意見等を賜りまして、お知恵を借りたいというのが本音でございます。以上でございますが、何かご質問がございましたら。

宇佐見

佐藤さん、ありがとうございました。何かご質問がござりますでしょうか。

自らの体験、自らの地域の抱えている問題、というのを報告していただいた訳です。ボランティアと換することによって、ご自身がどういうふうに変わったのか。考え方等々のその一部をご披露していただいたのですけれども、ご質問はございませんでしょうか。

では、ないということで、次の報告に行きたいと想います。どうも佐藤さんありがとうございました。

続きまして第4報告、今ご報告いただきました佐藤さんと同じように「実地調査」でございます。報告者のお名前は川村季信さんで、島根県の大田市から来ていただきました。川村さんも繁殖肥育一環経営をなさっている方でございます。

発表の題目は、「国立公園三瓶山における和牛放牧と草原の保全」という題目で報告をいただきます。よろしくお願いいたします。

川村

私は「第2回草原シンポジウム・サミット」が開かれました大田市の三瓶山からお越しいてあります川村と申します。この分科会にお招きいただきましてありがとうございました。

私は三瓶山の牧野を利用して和牛の放牧と、そこから生まれて来る子牛の肥育をやっておりまして、繁殖肥育の一環経営なるものをやっていている訳ですが、繁殖牛がおよそ10頭、それから肥育牛が80頭、子牛と合わせまして220頭の総頭数でございます。私は昭和22年生まれでござりますが、54歳になりますが子供の頃から見て来た時間がおよそ40年間ばかりあるかと思つてすけれど、この40年間の間の三瓶山の変化について、一冊ではござりますが皆様方にスライドを使ってご報告をしようと思っています。それではスライドをお願いします。

これは、島根県のある機関が、三瓶山に来られた来訪者215名の方に対しても実施したアンケート調査の集計結果として発表されたものですけれども、実は「一度三瓶山に訪れた方は再び草原を訪れる」という結果が出ております。こちらの秋吉台には24.8%の方がお越しになつてゐるということとして、「草原を訪れた方は、草原に引かれて、また次の草原を訪れる」ということから、私が大田市の三瓶山とこの秋吉台とがリンクして、お互いのパンフレット等で草原を紹介し合つて、というふうなことが出来たら良いのじゃないかなというふうに思つてゐるところです。それでは次、お願いします。

「三瓶山における放牧の歴史的な変遷」ということで絵に描いてありますか。実は三瓶山の放牧の始まりは、記録によりますと1730年代に朝鮮で牛疫が発生しまして、牛が次々と死んだそうですが、朝鮮ではこれを海上に投げ捨てるというような習慣があったようで、これが佐藤県から本州の山口県の長門の方、それから島根県の海岸に流れ着いて、その影響から相当数の牛が三瓶に近い格好になり、大田市にいたりも相当数の牛が死んだというふうに聞いております。このときに、藤沢周平さんはご存知かと思いますが、数年前に亡なりましたが、あの方も会津若松(福島)の

出身ですが、会津若松に当時おりました加藤という姓が、古来との諱いの中から、夫婦がありました大田市の中台町に移封になりました。40万石から1万石になった訳ですが、この方が上方から黒牛を入れて三瓶山放牧をしたのが「放牧の初め」だと言われてあります。それ以前のことについてはどうだったかと云うことについては分からぬ訳ですが、けれども、おそらくそれ以前から放牧がされていたのではないかと考えております。

昭和の初め、大正の終わり頃には、この三瓶山の周辺の外側に集落がある訳でございまして、一軒台帳でも4,000ヘクタール以上の牧草放牧地がある、だいたい3,000頭以上の牛が放牧されておったというふうに、三瓶牧野委員会の記録の中に残っています。

またこれは昭和25年頃の話ですが、だいたい三瓶山周辺の牧草放牧地が1,300ヘクタール、ここに春と秋の2回に分けて合計、或いは「延」と言いますか1,300頭の牛が放牧されておったようですが、この放牧を伴う草原の景観が美しいということで、三瓶山の景観が国立公園に編入される大きな理由になったようです。1963年に、昭和38年ですが、三瓶山が「大山・隅岳国立公園」に編入されました。編入の理由は「火山的地形及び草原に適する牧野景観を維持するに足る区域」ということで編入になったようです。

ところが1960年代以降、「農業の近代化」と言いますか、役牛から耕作機とかテーラーとかいうふうな形の「機械化」が進んで来まして、牛の放牧が、農家の頭数も減りましたし、放牧が少なくなって参りました。当然のように三瓶山の周辺が、二次草原(放牧、耕作、野焼きなど人為的行為によって維持されてきた草原)だった訳ですが、これが林になってしまって、草原性の植物が減少していった訳です。次お願いします。

これが、1950年代の三瓶山の「西の原」の風景ですが、何と同様に、やはり水たまりがありまして、ここで牛が水を飲んだり、涼を得ると、うるうながたちです。

現在の三瓶山には唐松がございますが、当時はまだ、もう間に植林はしてあったと思いますが、まだ大きくなっていますので、松の姿を見ることは出来ませんが、この草原の美しさが評価されて、先程の国立公園に編入されたというふうに譲っています。次お願いします。

これは1995年頃の写真ですが、まだ西の原に放牧が再開されておりません。野焼きによって草原が維持されている訳ですが、この野焼きだけだと、ススキのような長草型の草の勢いが増すばかりで、日の当たるところを好むような放牧によって維持される、よるな草原性の植物が、ススキの下に隠れてしまっている訳です。生きるか死ぬかという状態の中で生息しているというふうな状況です。

昭和20年前後に植林された唐松が既にこのように大きくなって三瓶山の草原の姿が大きく変化しております。

こういうふうな姿になろうとは誰も、国立公園に編入されただ當時には思っていなかったろうと思います。次お願いします。

これは平成元年頃の写真の「三瓶温泉スキー場」の様子ですが、実は昭和50年代の半ば頃から、放牧する面倒としては、私が唯一、1軒だけになってしまった訳です。50ヘクタールある草原の中に牛が7頭ないし10頭という状態ですから、ススキ型の草が生い茂っていたという状況です。次お願いします。

これは平成10年前後の「三瓶温泉スキー場」の写真ですが、先程のススキに隠されたスキー場が、牛の頭数が増えに従いまして、芝型の草地へと変わってしまったという風景です。放牧頭数は、だいたい1ヘクタールあたり1頭前後の割合ですから、50ヘクタールある草地に多いときには40頭前後の牛が放牧されております。

(草原の)下の方にあった芝を牛が食べて、(山の)上にあって草をする。裏には芝の種が混じっており茎とともに落ちる。それが発芽しやすい状態になっておりますので、広がっていったということです。ススキの再生は非常に悪い訳ですが、芝の再生は、牛が食べれば食べほど成長点が下にさがる、或いは踏まれれば踏まれるほど根が広がる、成長の速いススキは適化して芝型の草原になったという訳です。

実はこのスキー場では、毎年秋に100人から150人くらいの刈り払いの方を雇って、一斉に草刈りをやってスキーシーズンに備えました訳ですが、今では有刺類(有刺植物、トゲのある植物)の除去のため刈り払い機で少ししかれるという程度で、すぐにスキー場として利用できると、芝型の草地ですから(牛の)つめまで見えるというふうな短い草です。ですから今のような暖冬の時期でも30センチ程度の積雪でスキーが出来るようになりました。かつては、-80センチの積雪がある場所でしたが、東向きの斜面ということ、もう一つは飛雪ということ、1月も半ばにならないと積雪がないというようなスキー場です。次お願いします。

これは、24年ぶりに西の原で、平成8年から放牧が再開された訳ですが、その目的として農家サイドとしては、「里山に残された草地資源を活用した肉用牛生産振興による地域農業の活性化」ということと、二番目は「国立公園に指定された当時の美しい三瓶山の姿をもう一度蘇らせる」ということで、景観の保全、景観を元に返すという目的のもとに、国の補助金をいただきながら里山整備と、補助金は大田市が出して、平成7年度事業でしたけれど、放牧用地設置事業によって西の原の放牧が再開されました。次お願いします。

これが平成8年から放牧が再開された西の原の様子ですが、ここは毎年春に野焼きをするもので、元々はススキが生い茂っておった訳ですが、それが3年ないし4年経つ間に、元々あった芝が、ススキの影に隠れて姿を見せなかつた訳ですが、ススキがなくなるに連れて放牧場一帯を覆うようになりまして、かつての三瓶山の草原の状態に今復元されつつある訳です。

今、大田市ではここにクロスカントリーコースをつぶっておりまして、このそばをクロカンの競技者たち、或いは馬連で走る方々、或いは散歩される方が歩いておられます。次お願いします。

これは先程から見ていただきましたように、全国的に二次的な草原の重要性が見直されるようになります。文在の後、平成9年に第2回の『全国草原シンポジウム・サミット』が大田市で開催された時の写真です。次お願いします。

これは今村奈良臣先生の著書の中にもありますように、牛は「劇的動物である」と言われておられる訳ですが、今まで放牧が廃れて24年間、草原だけだったところですが、ここに牛が放牧されることによって、勿論牛はそれ自体が経済的な効果も発揮する訳ですが、ここに牛が放牧されることによって、「動物」「劇的動物」としての新しい価値が生まれてきたと語っております。草原そのものも、動物がいることによって活気づいている訳です。この牛を見に、子供も大人も、こうじらうに牛がいるところに寄ってきて牛を見ておられるというふうなところです。次お願いします。

これは大田市の「市の花」に指定されているレンゲツツジですが、これが野焼きによって毎年1年生になる訳ですね。株だけがようやく生き残っているところに、成長の早いススキがどんどん大きくなってしまって、このレンゲツツジは花を咲かせるチャンスが今までなかつた訳です。ですが牛を放牧することによってススキがなくなると、ここは今火入れをしていないところですが、毎年新しい花芽がついで花を咲かせる。牛はこのレンゲツツジは食べないものですから、この株が毎年広がっておりまして、大田市の「市の花」にふさわしい姿を今たくさん見せ始めております。次お願いします。

これは同じく日の当たる場所を好むオキナグサです。私は小さい頃は、このオキナグサはたくさんあります。この毛でお手玉を作つて遊んだという方もいらっしゃいます。私は三瓶に遊びに行っても、「オキナグサを取ると雨が降る」ということを言われておりましたので、この花は見るだけで手折らないようにしてありましたし、この花は赤紫の紫色の大好きな花を付けるところから、子供心に何となく気持ちの悪い花のように思つてました。幼元では「知の

花」、「キツネバナ」というふうな呼び方をしておりまして、「オキナグサ」ということを最近私も知ったという状況です。

こういうふうな放牧を再開することによって、ウメ(チヅウ、センブリ)も出てきておりますし、いろいろな日の当たる場所を好む草原性の草花が復活しております。次お願いします。

これは「オキナグサのサイズ構造」を内藤(内藤和明)さんと高橋(高橋佳季)さんが調べられたものですけれども、(プライドを指し示して)こっちは「茎の太さ」です。5ミリ、10ミリで、こちらの方は株数ですけど「個体数」。こっちは「放牧している場所」。こっちは「火入れだけの場所」で、後ススキに覆われて日が当たらなくなるところです。

よく見てみると放牧をしているところは個体数も20を越えてたくさんありますし、黄色く色付けしているところは「花が咲いた」という「繁殖個体」ですけど、この繁殖する個体がたくさんあると、茎の太さも倍ぐらいの太さになっていて、火入れだけではこういう草原性の植物は守つて行けない。ただ「死なずに生きている」というふうな状況が今の三瓶の草原では見える訳です。次お願いします。

草原を維持するために、現在、西の原だけですけれども、大田市が中心となって火入れをしています。この写真では牧柵と火入れをするところの間が防火帯になっている訳ですが、よく見てみると、刈り払い機で刈り払いをしています。

この防火帯を作るための柱が掛かるということから、大田市は実は平成10年度の火入れを止めたいというふうなことを言った訳です。「緑と水の道発会議」は、これは地域のボランティア団体な訳ですが、平成9年に『全国シンポジウム・サミット』を開いた翌年に火入れを止めるというのには非常に過激だということから、牛による防火帯作りをした訳ですが、これ以前からこういうふうに大田市に於いても、二次草原を市民においても守つていただきたい。そういう草原の維持作業に市民も積極的に関わつていただきたいということから、ボランティアが火入れに参加することを大田市にお願いして、草原の維持活動をやつてもらつた訳です。次お願いします。

これは今、こちら側が放牧地で、こちら側が防火帯で、ここに今ススキが生い茂っているのが見えますけれども、この間が防火帯で、防火帯には一回に9頭から12~3頭の牛を一週間から10日間、ずっと直いなく程度まで放牧して、草がなくなりますと牧区の方へ移動します。水飲み場はこの牧柵のそばにドラム缶の半切りが置いてある訳です。

草原の維持というものは実は火入れだけでは、先程から書つてありますように草原性の植物がなくなつて、或いは私共の目に触れない。また、放牧だけでは有刺藪や毒草

が茂って来まして、草原を維持することが出来ない訳です。で、実は「黒山放牧研究会」という10人前後の和牛農家、或いは乳牛を飼いながら放牧している、或いは和牛を飼っているという農家の人は達と一緒に、ひと月に一回、学習を兼ねて各農家を訪れて、団体で共同作業をするというようなことをやっておりますし、また「緑と水の連絡会議」の応援も兼ねて都市市民の方ですが、メンバーの方々の力添えを得ながら刈り払い作業をしているところで、次お願いします。

これは防火帯の様子ですが、ここに「電気牧柵」があります。これは1本のナイロンのワイヤー、ボリエチレンのワイヤーに4本の細いステンレス線が編み込んであります。12ボルト前後のバッテリーで電圧を上げて、触ると電気ショックがある。そういうことで牛が外に逃げないようにしている訳です。こちら側が春になったら火入れをするところですが、ここに牧柵が見えると扇いあすけれども牧柵と電気牧柵の間を防火帯として使っております。

で、よく見てもらうと分かるように、牛のヒツメぐらいまでしか草で覆れていない訳ですから、防火帯としての役割を十分に牛の放牧で作り上げることが出来る。で、大田市は経験を必要としない。この防火帯を「緑と水の連絡会議」では「モーモー発電」という表現をしています。今、「牛で防火帯を作る方法」を発信していると思います。次お願いします。

これ最後ですけど、第2回の「シンポジウム・サミット」が終わった後、草原を守るために農家だけでは、或いは大田市だけではうまくいかない訳ですから、市民のみなさんの方の協力を得るということで、これは私達の「緑と水の連絡会議」の仲間のワイルズ・カズミさんという農家の方に描いていただきました「三浦の将来の絵」です。人と牛と山と草花が融合して、いろいろな方に心の癒しを与えるというふうにしたいなという、ううな夢を描いた絵ですが、このテレビ・ポジカードを販売して活動費に充てたというふうな経験もあります。

私共は申し上げましたように、農家の「なりわい」だけでは草原は維持出来ませんし、今から先はどうしても都市市民の皆様方の協力も得ないと、国立公園に編入された当時の三浦山の景観を維持することが出来ないと思っております。そういうことを目標に廻げながら、今後とも皆様方の協力を得て三浦を守っていく活動を続けていきたいと思っておりますので、今後とも一つよろしくお願いいたします。

宇佐見

それでは今の川村さんのご報告にご質問がありましたらお聞きしたいんですけれども、ございませんでしょうか。

それではどうも川村さんありがとうございました。

休憩を5分ほど取らましょうか。その方がリフレッシュが出来て、活発な議論が出来ると思いますから。それでは5分ほど休憩を取りますので、5分たらもう一度お席にお戻りいただき、残りの時間、いろんなディスカッションをしたいと思います。よろしくお願いします。報告者の方、こちらの方に手荒、お届いできますでしょうか。

(休憩)

宇佐見

それでは引き続いてディスカッションに移らせていただきます。

先程4名の方からご報告いただいたように、阿蘇、久住、それから三浦と、それぞれ地理性がある。独自の文化がある地域ですけれども、そこにおいて草原がどういうふうな問題を抱えているのか、そしてその草原を保全していくためには、この分科会のテーマである、どんな「なりわい」を作っていくのかということですね。

昔は、草原も牛を「仲立ち」と言うんでしょうか、間に立てて、人と上手く結び付けていたと。それが世の中の農業、或いは産業の構造の変化で、今よく言われる「過疎のサイクリル」が途切れてしまった。そうした中で「草原との結びつき」をどうやって続けていけば良いのか、君は地域で何とか「出来た事」が出来なくなってきた。それを「何とかしよう」と言うことで、「外からの応援団」と言うんでしょうか、ボランティアという方を取り込んで保全していくようなシステムが出来つつあると、だけでもなかなか問題が多い、と聞うことだろうと思います。

で、4名の方からご報告いただいた各地域の草原、どれも共通するのは「公園である」ということですね。そういう一種の「制度」も考えなければいけない、「出来ること」と「出来ないこと」がある。「やりたいけれどやれないことがある」ということなんですね。

最初のお二人、最初の2報告が、地元と消費者、或いはボランティアの方を上手くマッチングさせる。まじめに言う「NPO」たとか「NGO」で活動されている方ですね。で、残りのお二人っていうのは、草原を上手く使って、何とか「なりわい」を成立させようと努力なさっている方、まあこういう2つに分かれるんじゃないかなと思います。

で、私、この分科会のテーマ「なりわいと保全」というのをいただきまして、私自身も目順よく「なりわい」という言葉を使いますが、「生業」、「生きるための業」ですね。まあ「業」は「ゴウ」とも言いますね、で、調べてみました。そしたらやはり「生活するための農業」みたいな意味なんですね。で、昔は全部「生活」、すなわち生きていかなければいけない。それには所有がいる、自給自足が出来ればどうにか所得を得ることが出来る。で、何とか自分で自己完結が出来たんですけれども、それが出来なくなってきた。

私自身はこの「生業」というものを「生産者の生業」とそ

うでない方、都市側、非農家の方の「生業」というものを、何とか上手く融合させていかないといけないんじゃないじゃないか、どうも「生業」っていうのは農業者だとか漁業者だとか林業者の方だけの言葉になりかちですが、そうじゃなくて、生活者全体が「生業」という言葉を、自分達のものとして新しく作り上げていかなければいけないんじゃないじゃないかと思う訳です。そのためには、双方、やはりいろいろ御相談も頂いてますから、字はなきらいいけないし、お互い歩み寄りっていう言葉がいいがどうか分かりませんけども、何か新しいものを作っていくなきゃいけない。そうしないと、どうも今回のテーマである「保全」、特に「豊かな草原」というものを推進して行けなくなつたんじゃないかと思う訳です。

まあそんなような方向で、みなさんとの議論を通じて、いこうと頑張っている訳です。で、先ず最初にですね、4報告について議論を深めていただきたいということ。そして報告者とここにおられる参加者ですね、どんな「なりわい」というものを提案していくか、ということがこここのテーマである「草原」というもの、「地域資源」って言えば非常にいいんですけども、そこには文化があり、そこで生活している方がいる訳ですけども、どうやって「なりわい」としていけるのかというものを「提案する」という点で、みなさんのいろんなお心遣を盛り込んでいたたく。そうすると佐藤さんのように、折角2泊3日で来たんだから、地元の方に「こういうふうな考えがあるから、自分でやってみないか」とかですね、またプランティアの仲立ちをされている方にも「こうされば新しい関わりを持つ人を巻き起こしていくんじゃないか」ということが、或いは報告者の方のご体験をみなさん自身がお受け止めになれば、「新しいエネルギー」と言うんでしょうかね、「波」と言ふんでしょうか「運動」と言うものを呼び起こしていけるんじゃないかと思います。で、結してはこのシンボルシムの想である「秋吉台」についてもですね、今抱えている問題を解くことが出来るんじゃないか、というふうに思っている訳です。

まあどうか、実現可能かどうかは分かりませんけれども、やはり最初はどんなアイデアも出来るか出来ないかは分からない。「無責任なことを言っている」と言われていたようなものでも、いろんなプロセスを経ていくことで「実のなるもの」になっていくんだろうと思いますし、地元に定着していくんじゃないかと思います。

まずは4報告について、何かお考えとか、苦労話とか、そういう「きっかけ」だとかいうものについて何とか質問はございませんでしょうか。どんな些細な質問でも構いません。ございませんか。

じゃあ、4名の方でですね、時間が足らなかったから「言いたれなかった」というようなものがございましたら、追加報告なり、追加説明をしていただけませんでしょうか。どうぞ。

大変

今一箇所難で困っていることはですね、採草地での「利

用圧」の減少です。先程川村さんからもお話をありましたようにですね、昔は九州横断道路または外輪山の方を車で走りますと、もう何万個というくらいの「千車小積み」ですね、80t-10tの小積みという千車小積みが連続してあったのが、今走りますと、まあ良くて数十個、ほつんほつんとなる程度ですね。

それはどうしてそんなに採草地が減ったかと言いますと、「水田転作」で他人経営の所有地に農耕地が示ると、そこでより栄養生産性の高いより効率生産性の高いホールグローブサイレージのトウモロコシを作るんですね。といったことで、草原に行って芭翁をして栄養価の低い乾草を取るよりも、自分の経営内蔵で、耕作でより栄養価の高い飼料作物を作った方が良いと、そういう判断で。それから高齢化現象ですね、それから機械化刈りが草原では出来ないとか、傾斜地があつて草原では機械が使えないとか、そういうことがあって水田転作での飼料作物作りというのがぐんと伸びてきてですね、採草地の利用が減って来たということです。

ということで採草地利用の「圧」が高くなつてるとススキの単純な草原になる。野焼き面積はどんどん拡大する。そして採草地しないところが増えてくると(火入れをしたときの)火の勢いというのまだまだ強くなる。そういう田舎のの中に今ある訳です。

そこで「どう保草地の活性化を計るか」という論議がある訳ですが、「実験」は昭和30年代から40年代前半頃の阿蘇の農業。その頃の阿蘇の農業は「有機農業」で、先程映像でご紹介したように、草原と家畜と農耕地には有機的な結合関係によって「連鎖関係」があった。牛1頭で30アールの耕地をまかねうことが出来た。牛1頭には1ヘクタールの採草地がいる。そういう「有機的な関連」を復活させていこうと。そして「有機農業」を、より「草の付加価値が高くなる作物」に転換していく。それはプリンスメロンであり、その地域のトマトであったカイチゴであったりすると。そういう付加価値の高い作物に、草原の草、スキを価値転換することによって、その草地が面積として大きられ、そして品質として支えられると。そういう運動が起つたところでございます。

それから一方放牧地の衰退というの、昔は2万頭も牛がおったのが今は1万頭と、これは草原に対する「放牧圧」の減少ということで、チカラソバが増えて放牧地の荒廃が起きております。ということでこれら対策としては、かなりの理論体系が出来てきました。放牧期間の延長、または周年放牧することによって、省力・低コストの牛が生産出来るということで、放牧期間を延長することによって放牧圧を緩げていく。そういう動きがあります。

それから平地部(地域外)から「入会權の枠」を飛び越えて、畜産団体が間に入つての「預託放牧」ですね。具体的には1日200円を払う訳ですけれども、平地部の、全然入会權のない阿蘇郡以外の町村から、トラックに牛が積まれて阿

前の放牧地にやってきます。大体それが今200頭くらいであります。

まあそういうことで、市の行政でも「放牧圧を何とか掛けないこう」と、「放牧圧」は、今言いましたように「有機農業の優先」ということで掛けないこうと。そういうことが今雇用されているところです。

宇佐見

今、「新しい動き」、或いは「新しい取組み」というのをご披露していただいた訳ですが、その場合ですね、今「有機農業」というのは非常に多くの方が関心を持っておられる訳ですね。昔は採草をして、それが牛舎に行って、「貯肥」ですか、有機堆肥になって、その農家の方が自分の農業経営の中で活用させていた、というものを先程のスライドで見せていただいた訳ですけども、今ご提案なさった「有機農業とつながる」と言ったときには、片方では牛等々が減っちゃつてますよね。そうしますと「誰が有機肥料を作るのか」というところが、ちょっと私自身、「どうしたらしいのかなあ」、「どんなお考えがあるのかなあ」というところが、ちょっと分からなかったんですけど、何でご説明をいただけませんか。

大庭

おっしゃる通り、ご指摘の通りですね。今まで私は自分の経営内部の「自己完結型の農業」ではそれが出来たんですね。人手不足という中で出来たんですね。ということでこれからは、「有機農業を実現する」ためには、農協が担当している准拠センター一つのがありますね。そういうところに併結していくこと。そして「地域的な流れ」ということで、阿蘇では今「付加価値の高い農産物」と言いますと高冷地のトマトなんですね。それとイチゴですが、より平野部にある「日本全国No.1」と言わされている(熊本のスイカ)(熊本県植木町)ですね。そういうところに流そうと、そういう試みが今されているところです。

で、その「きさし」もありますけど、何しろまだその「流れ」が細くてですね、まあこの「流れ」がどれだけ大きくなり、阿蘇の豆原のスキガ付加価値の高い肥料になり、堆肥になるかってことは、まだちょっと時間かかるかもしれません。

宇佐見

佐藤さんは実際に有機で複合耕作をされている訳ですけれども、今のようなご提案についてですね、いかがお考えでしょうか。佐藤さんに自身の経営で、或いは地域の中でですね、「有機農業」を上手く取り込んでいけば、経営としても、或いは地域としても、付加価値を高めることができます。で地域も活性化していく。というような形になるんではなかろうかと、まあシロワトは外から見ると感じるんですけども、ご自身のご経験なり、現状なりからどんなふうにお考えでしょうか。

佐藤

確かに牛も20頭を越えますと、経営していく上で堆肥の処理をどういうふうにするのかという問題があります。堆肥の野積み等は「畜産糞便物法」によりまして、一軒年くらいからですか、規制されるようになります。しかしながら田んぼ、或いは畠等にマニュアルレッダ(堆肥を撒く機械)等を使って撒く、或いは多頭飼育をされている方、一番多い方で50頭ですが、そういう方は、農業センターはまだ出張ておりませんけども、近所にBMW方式あたりで農業用の堆肥をやって販売される方がいらっしゃいますのでそういうところに持っていく、或いは近所の農家にあげてウラと交換するといったような、そういう方で処理をしておるみたいです。

それと今、大庭先生が言われた「放牧圧」、阿蘇の放牧の衰退というお話を聞きました。私井の先程の「牛の脱牧事故」についてなんですが、これもある意味では「過密放牧」になってしまっているという現状から起きたのではないかというふうに思っておるところでございます。放牧の利用率が高過ぎて牛の方が多いし草が無い。草が無いもんだから、ある意味では牛の方が新しい草を求めて脱牧して、それが事故にあった、というのが現実な状況です。まあ大方吳では昔から「赤牛」、熊本県では「青牛」と、それの地域を代表した文化がある訳なんですねけれども、私も昔は赤牛を育てておりましたし、赤牛の世話をすこしておったこともあります。ですからそういうことも「場の構」を飛び越えて話が出来れば、お互いに話ができるいいなあと、大庭先生のお話を伺いながら、今考えさせていただいているところでございます。

宇佐見

そうですね、片方は「過密」で片方は「過疎」だということであれば、まあ「どれだけコストがかかるのか」ってのは本当の「なりわい」、生活に應わることですから、やはりもう一度境界しなければいけないと思うんですけれども、そういうことも今後は考えていかなければならぬことかも知れませんね。

えっと、何から、どうぞ。すみません、お名前を言ってご発言をお願いできませんでしょうか。一番後ろの方です。

庵津

広島から来ました庵津と申しますけども、2つほど質問して、それからもうひとつ、私の専門から「言葉使いがおかしいな」というのがありましたので。

ひとつは「牛と住民のトラブル」の問題ですね。私は広島県の国定公園の百葉山の草原の問題と言うか、まあ「生業を生かした景観形成」って言うんですが、景観作りを田舎地帯、林業地帯をすべて張っていなんですが、その内での草原、今耕田もやってるし、その野生菜からしても「住民活動」に付いてちょっと聞きたいのですが。その「トラブル」

の問題ですね、結局、私の固定公園のところでは、最後まで一人、60頭を頭数されていた人、放牧されている人が、婦人の方が怪我されて、それが大問題になって、県と当局として、いろいろと年々掛かって、それで毎年会の周りに柵をして「人が入らないようにして、つまり周りに牛がいて柵をしてその中に人を入れる、そういう形を取られたと。その後2、3年して私が聞き尋ねに行ったときには、ついには後輩がいなくてやめちゃったんですね。それで問題になつたんですけども、今解決したかどうかは分かりませんが、これも大変だと。

で、その観点で僕ずっと、まあ動物との関係もあって、島原町(佐賀県)の島の問題、ちょっとこれは観光産業の問題とはちょっと違うんですけど、やはりこれもトラブルがあるんですね。そういう動物とのトラブルの問題をずっと考えてみて、「牛との付き合い方」ってのは、昔の人はちゃんと出来ていたんですね。ですから先程の「野焼きボランティア」の話にもありましたか、やはりそうした動物との関係についても「研修」をやらなきゃいけん。つまり山に行けば山の動物の、牧場に行けば牛の、棲し方、付き合い方をちゃんとやらないと、いい加減な気持ちで行くと、やはりトラブルになっちゃう。

そういうところで今回の久住の場合は大変だったろうと思いますが、その辺を具体的にお聞かせいただきたい、どういうふうなプロセスで、何百万円掛かったのか、どっちがどうなったのか、その辺のところをお聞かせいただきたい。

僕は本当は「金は払うべきじゃない」と思ってるんです。「牛が瘤いんじゃない」と思ってるんですね。つまり「付き合い方」が間違っているから、人間が間違っているから、瘤うから言うけど、でも現実は行政の方がどうしてものは、そうなっちゃう。

もうひとつは住民参加のボランティアの件ですけどね。これはいろんなパターンがあるとは思うんで、私も今論文を書いてるんですけど、例えば参加の対象や形態、それから保全とかの活動についても、いわゆる「体験型」なのか、「遊び型」なのか。例えば私が今、林業の関係でまとめているのが「ホルンを作ろう」っていうんですね。ホルンを作ろうってことで山に行ってもらって、並んで、木を探してもらう。ホルンにならうな曲がった木を探す訳です。その結果として森林のこと、林業のことを理解してもらう。そういうテクニックなどが経験としてあるんですね。そういう「遊び心」と「草原」との、何て言うか例えは「カヤを利用してよしうさを作る」とかね、何かそういうことをされているのか、その辺をお聞きしたい。

で、最後に「景観動物」ってことを誰か言われたんですけども、これ、私の、景観をやってる者の立場から言いますと問題がある。「景観動物ってどういう動物か」って言いたいんですね。それから「景観作物」ってことでも言われる。むしろそうじゃなくて「景観」とて言うのは、「島の景観」、「島の景観」、「さわる景観」、全部あるんですね。それらの総称と

して「景観」というものがある訳ですから、むしろあれは、正しく言うならば「景観要素としての動物」という理解の仕方なんですね。ですからそこら辺がいつも聞いてて引っ掛かる。

で、「生産を生かした景観づくり」ってことを言わないと、申なる都市のための犠牲じゃないと思うんですね。延々ですね、例えば「草原では牛が良う」という生産ですね。林業なんかでは「生産耕地」という言い方で儲ける、畠田なんかでは地面に何か大豆なんかを作つて儲けるとかね。で、そういうものを「景観作物」とは言わないので、私の専門からは、ちょっとああいう言葉はおかしいなど、逆に私から言うとおかしいんで、ただ作物の方とか生産の方達はそういう言葉を使われているんですけど、僕は正しくないなど。以上です。

宇佐見

ありがとうございました、麻津さん。じゃあ先ず最初、「補助」のことで何か、どういうふうな点でつことを、下さい。

佐藤

「事故の対応」という事なんですかね。まあ私のところの牧場(放牧場)は、下は(標高)700m、上はおよそ1,000mぐらいまでの分布がある訳でございます。で、その中に国道が1本通っています。で、(放牧場に牛を連れて行くために)800mからの100mくらいを上るとこでは国道を利用して、昔は牛を引いて移動をしていたと。先程お話ししましたとおりですね。

ところが1頭倒し、2頭倒し、5頭倒しじゃあ生活できない。「牛と共に生計を立てて」ということになりますと牛の数も増やさなければなりません。10頭、或いは20頭、人によつては50頭と、で、50頭の牛を倒っていてその「放牧場」というのは大抵割合分くらいですから、30頭から、多い人で40頭くらいの牛を個人的に牧場に出している。1頭、2頭の方も勿論ございますが、1頭、2頭の方は(運搬用の)トラックを持たないから、歩いて牛を引いて移動させる。それはそれでいいんですけども、30頭も40頭も移動させる方はいちいち引いて行く訳には行かない。で、トラックで移動させる、しかしそれには相当な時間がかかる。

そこでそういう方はどうしていたかと言いますと、昔は国道と言えども牛を引いて歩いて移動をさせていたと。しかし段々段々牛を引いて歩くこともままならなくなりまして、もう「いち、にの、さん」で牛を許して(放して)しまった訳ですよ。誰かか、で、そうすると、後ろの方から牛が追いかけてくるから、前の方でゆっくり牛を引いて歩いている人も、「これも危険だ」ということで手綱を許すようになって、で、あるときから一斉に、時間を決めて「牛を放そうじゃあないかい」というね。これ非常に危険なんですよ。ですからその間が約1.5キロメートルから2キロメートルある訳なんですけどね、朝の、早朝の引時頃、車の通りの一一番少な

い時間帯を見計らって、「(牛を)放すところ」と「放牧場に入るところ」に人を置いて、「牛を移動しておきますので通行の車の方はご協力をお願いします」ということでやっておりましたのですから、牛の方も「夜中に国道を走ってもいいんだ」という具合に体で覚えてしまった訳ですよ。実際の話ね。

ですから、牛も習性として、ある程度のところまで上がってくれば、国道を越えて次の地点へ行くことが出来るということを、いつのまにか覚えてしまった。で、たまたまその場所の有刺鉄線の状態が良くなかった。自然に切れたのか、人為的に切ったのか、それは分かりません。で、30頭くらいの牛が国道に出て事故に合ったと。途中恐らく一番先頭を走っていたであろうと思われる牛が、向こうから来た車と正面衝突をして、自動車は大破した。牛も恐らく3、4回くらいは違う車に跳ねられただろうと思われる車もありました。牛は80分以内に死亡。自動車は大破、人も怪我をしたと、そういうことがあります。

宇佐見

ということは、確認ですけども、一定の「ルール」みたいなものはあったと。すなわち車の通行量の少ない側面でしたか。そのときに「放す」というルールはあったんだけれども、たまたま何か不測があって起こってしまったということですか。

佐藤

ええ、事故が起ったのは夜の7時から8時頃と思われるんですね。

武井

ちなみにどのくらいのスピードだったんですか。

佐藤

スピードはですね、そこは直線でとても見通しのいいところでございます。道路標識では40キロです。標識がありますけど40で走る方はおりません。大抵70、80は出でています。ただでも、そういうことを(事故の瞬間を)見もしないで、状況だけから「何キロ出てただろう」というようなことは言われませんから、なかなか難しいところで、運転者の側の話を聞けば、牛の方が突進して止まっている車にぶつかって来たと。牛の方が飛び込んで来たんだと。大変な事になったんだと言うことで、7台の車と事故を起してしまった。中には外車もございまして、擦り傷一本入っただけだったんですけど、パンネットを換えたとか、パンバーを取り換えたということでですね。(補償の金額が)外車あたりは1台50万円(円)という、まあボルボでしたけれどね。

宇佐見

ありがとうございます。3回質問をいただいてありますので、次に移らせていただきます。

ボランティアの方を受け入れているということなんですか。

ボランティアの方を受け入れているということなんですか。けれども、単に「レジャー型のボランティア」なのか、もつと「教育性を目的としたボランティア」なのかというような質問だったと原うんですけども、どんな「方針」って言うんでしょうかね、持続的な目標を持って、ボランティアの仲立ちと言ふんでしょうか、NGOをやっておられるかということなんですか。

山内

私の方ではですね、元々「財團の草原は生産によって維持されてきている」という捉え方を出発点からしております。まあそういう意味で、よく地元の方なんかが言われるんですけど、「草原を守るために自分達は畜産をやってきた訳じゃないけど、畜産をやってきて、その結果草原が出来ているんだ」というふうによく言われるんですね。まあその言葉どおりだと思います。そういう意味で私が「草原を守る」と言うとき、財團の立場は「生産資源としての草原を後世に引き継ぐ」というのが財團の目的なんですが、ただボランティアの面ではあくまでも、そういう生産によって草原を維持してきておられる地元の牧野組合の人々に対する「助つ人」である、という捉え方をしております。従って、行く行くは都市の人々に「入口」としての「体験見学的」な企画もしくはは思っておりますが、基本的に「ボランティア」っていうのと「体験見学」とは別に区別するつもりであります。

今私共のやっている「ボランティア」っていうのは、実は今日もやっているんですが、「初心者研修会」なんかでは、刈り払い機の扱い方の講習なんかもします。かわりそういう意味では、きっちり講習をして「事故が起きないよう」ということで、また「地元の人の定手」といにならないように、その辺りはきっちりと指導します。で、こういう「ボランティア手帳」にも「ボランティアの心得5ヶ条」という形で明記しております。

先程佐藤さんからのお話で、「いつも天気に振り回されて、延期になって」と書かれてましたか。阿蘇もご多分に漏れず、この2年間は本番の日曜日はほとんど3回延期になっています。毎年延期になっています。それでもやつぱり来てもらう訳ですね。阿蘇の場合は「日曜日」ってことになりますから、「今週の日曜日がダメだったら来週の日曜日」って場合になりますから、それでもう2年3年経験を積んだ私共や慣れたボランティアの人には、もうとにかく「3月の日曜日」はすっと空けさせてもらう。で、参加した人達は非常に感謝して「また来年も来たい」と思う訳ですよ。で、是非参加したいと思われるものですから、必ず空けていてもらって、「運が良ければ本番に参加できる」と、そういうふうな形であります。ですから「心得5ヶ条」の一番最後には「天気に従う」というふうになっております。

宇佐見

まさに、生業がうまくいくように「それに従う」っていう感じでした。

佐藤

ちょっと元気の話を補足させていただきたいんですけれど、最終的には7台の車で、人身事故等含めまして、500万円払うことになりました。そういう事に決まりました。県の顧問弁護士などのお話しを伺った結果、「やはりどうして監理責任を問われる」ということで、それはそういうふうに対応して行かなければならんだろうと。それは私、まあ個人的な意見ですけれども、500万でも600万でも、お金は努力をすれば何とかなるじゃないかと。大変ですけど。

しかしながらですね、そういう事態が起きて、組合員の、入会権を持つ組戸の農家の間の、お互いの心と心の間に亀裂が入ってしまったと、「回だお前達は、一体どういう監理をやってるのか」と、今までやてきたような野焼きたの何だのいろいろあるけれども、「そんな問題を起すぐらいだったう、この際もう止めてしまえ」と、「よその牧場で牛を倒え」とか、並いては、先程も申しましたように、同じ組合員でありながら「お互いに(土地の)貸し借りをすればいいじゃないか」とかですね、「温度差」がひどくてですね、もう極端なことはばかり言って、組合員の、折角今まで守ってこれたそういうひとつつの「形態」に、もう存続さえも危ぶまれるんじゃないかと感われるような意見まで出る始末で、それがやっぱり今一層困っております。半句の墨でには「観光会社に叩き元れ」と、そういうようなところまできております。

宇佐見

ありがとうございました。それでは最後の「専観動物」という言葉違いなんですかけれども、高津さんの方は、いろいろご自身のお考えを披露していただきたいんですけども、どうでしょうか、川村さん。

川村

まあそれは「分かりやすい言葉」としてそういうふうに言われているということで、まあ「市民感覚」なら合うかなあというふうに思います。まあ新しい言葉ですから。おっしゃるよう「専観動物としての動物」というのが正しい表現なのかも知れない。

宇佐見

やはり「そこにいることが専観を構成する」という形で、意識されて使っておられるみたいですね。

坂津

ちょっとそれから「住民参加のボランティア」の件ですね。僕はずっと考えているんですけど、まあ「どれかいいか」とてのは分かりませんけど、ひとつ言いたいのがですね、や

っぱり、いろんな、例えば地元住民の方々、今僕は「生業の地域における住民参加のあり方はどうあるべきか」というのを考えているんです。そうすると、今ボランティアの方が絶対必要だと、この人達も住民参加の一員だと。それからもうひとつですね、三瓶の方だったと思いますけど、やっぱ専門家をね。だから地元住民の方、ボランティア。それから行政の方、それからやはり専門家が入ると入らないでは、これはかなり違うんじゃないのか。私が専門家だからそんなことを言ふんじゃないですが、例えば草花のことをするときには草花の専門家が要りますよね。まあそういう面では三瓶の方では中国農試の専門家の方もおられるし、そのパートナーの方はNGOだとかすごくいい傾向だと思うんですけど、その辺りを教えていただきたい。

宇佐見

どうですか。あの「新しい形」と言うか、「構成」ですね。「参加型」と言ったときに、地元、それからボランティアの方、そのボランティアの方も先程は頑か、大学の先生だといろいろな「その道のプロ」だとかが出てきて、というご報告だったんですけども、そんな形でみんなさんが、多種多様な方がボランティアとして参加して、それぞれ専門的な意見等々を発言しながら、まあ運営していくなり、或いは「どういった活動をするのか」という、まあ、ボランティアの組織全体の運営にも向うかの形で反映されるんでしょうか。

山内

二個目の答えになつていいかどうか判りませんが、まあボランティアの研修会等には、例えば大連先生にお話しするとか、刈り払い機の場合は地元の方が「先生」なんですね。実際の野焼きの際にもそうなります。

で、ボランティアの数が今増えてきつつあるんですから、私共の財団は小さな財団なわけですから「なかなか手が回らない」とてこともあるって、ボランティアの会の中に「運営委員会」を作つて、またその中で、もう2年くらい野焼きを経験されて「毎年でも来よう」という方なんかを対象にして、今「リーダー養成研修会」を今年から始めております。で、第1期生がこの前18人、「リーダー養成研修会」を終了して、キチリと「修了証書」をお渡しして、カッコいい、アメリカの「森林ボランティア」みたいな帽子を作ろうかという話になつておりますが。

まあそんなふうに、ある程度「専門的な人」ですね、向面の野焼きの場合、古い廻野のずっと奥まで作業に入つて行くもんですから、きっちりとした「リーダー体制」を取らないと更改が起こりかねないんで、そういう体制だけは取るようにしています。

宇佐見

ありがとうございました。大体スケジュール通りに終わりたいと思いますので、私の力量不足で、いかなか「なりわ

いいという姿が見えてこなかったと思うんですけれども、まあ今回だけではなくて、今後もこういうような会は続きますし、またみなさんの地元へ行けばですね、こういう懇親会はいろいろあるんだろうと思いますので、その面には、今回の4名の方のご報告を七手八手活用していきながら、或いは紹介していただくことですね、みなさんご自身のご意見を発表していくだけれどいいんじゃないかと思います。

どうも、今回ほど参加していただきありがとうございました。どうもありがとうございました。最後に4名の報告者の方に拍手をお願いしたいんですけど、よろしくお願ひします。どうも報告者の方、ありがとうございました。(拍手)

それでは、この後「パネルディスカッション」のプログラムが待ってありますので、先程のホールの方へ移動をお願いいたします。

■シンポジウム

秋吉台草原シンポジウム2001 —今、草原に必要なこと—

パネラー 森本大学法学部教授
佐藤 誠
パネラー 農林水産省中国農業試験場主任研究員
高橋 佳孝
パネラー 山口大学農学部助教授
宇佐見 晃一
パネラー 地元秋吉台関係者代表
田村 昭雄
コーディネーター 九州大学大学院人間環境学研究院教授
小川 全夫
コメンテーター (財)自然公園美化管理財団専務理事
瀬田 信哉



司会

さて皆様、本日のこの会が始まりましてから早7時間が過ぎて参りました。かなりいろいろな討議、意見交換などが行われて参りましたが、そろそろお疲れのこととは思います。さあ、もう一息がんばりましょう。第3部もしっかりと素晴らしい意見の交換が出来ればと思います。それでは、第3部の「シンポジウム」を開催させていただきます。

ステージの上にすらっと並んでいただいている皆様、シンポジウムの関係者の皆様をご紹介して参りたいと思います。まずコーディネーターとして九州大学大学院人間環境学研究院教授の小川全夫様にお願いしております。そしてコメンテーターは財団法人自然公園美化管理財団専務理事の瀬田信哉様でございます。パネリストのみなさんをご紹介いたします。森本大学法学部教授の佐藤誠様です。農林水産省中国農業試験場主任研究官の高橋佳孝様でございます。山口大学農学部助教授の宇佐見晃一様でございます。もうおひとかた、地元秋吉台で生業などを通じ長く関わってこられました、田村昭雄様でございます。

さあ、それでは進行は小川先生にお願いします。ようしくお願いいたします。

小川

はい、かしこまりました。それでは本日の締め括りのですね。会になりますが、「今、草原に必要なこと」というテーマでシンポジウムを行ないたいと思います。

このシンポジウムの進行の仕方ですけれども、まず最初にこの直前に行なわれました3つの分科会。その3つの分科会にみなさん分かれて参加されましたので、他の分科会ではいったいどう言う論点が提起されたのか、というところがお判りでないかもしれませんので、それぞれの分科会の座長をつとめていたたきましたパネリストの方々から、

まずお話しをしていただきます。だいたい13分ぐらいを目途にして、こういう論点の話が出ましたという紹介を得たいと思います。

で、その上で次には地元で秋吉台に関わりながら生業を続けてこられた田村さんの方からこれまでの生き方とうまうこと、と言ったような点からの、まあある意味での問題提起を受けたいと思います。

で、それに対しまして、また今度は先程の座長という役割を経て、まあ個人としてですね、パネリストの方々に自分は今この問題についてどう考えるか、この草原というものに対して何が必要だと考えて、どういうことをするべきだろうかと、まあ、そういうことについてのそれぞれのパネリストなりの答えをですね、提起していただくということになります。

で、それぞれの方の提起されたことから順番にして、もしご意見等がありましたら、相互のやり取りを少しやらせていただきます。そしてその中では勿論コメンテーターの瀬田さんにも加わっていただきます。瀬田さんにはこれまでのこのサミット・シンポジウムについて随分ご存知ですかから、そういうことも踏まえましていろいろと話に絡んでいただけて、全体の締め括りも先ずはそのコメンテーターの瀬田さんの方にお願いしたいと思っています。もし時間に少しでも余裕がありましたら、パネリストの方々にも一言のまとめをいただきますが、時間に余裕がなければ、最後は私どもの方で引き取らせていただきまして、最後の締め括りをしたいというふうに思っています。

まあ、いずれにしても、この草原の過去のことについてはですね、いろいろと情報交換は出来たと思います。では、草原が今後どうなったらしいのかという未来の姿については、どうも少しつつ感覚のズレが、この参加している人達の中にもあるんじゃないかな、と申します。じゃあ、その過去と、

将来、未来というものを語る今、何をすべきなのかということになると、もっと、その道は多岐にわたって判らなくなっているというところがあると思います。しかし、そういう現実というものを踏まえた上で、このシンポジウムをあえて、進めたいたいというふうに思っております。

ではまず最初に第1分科会の方ではですね、いったいどのような事柄が話されたのかということにつきまして、まことに報告をお願いします。じゃあ、佐藤先生お願いします。

佐藤

『観光と保全』(從来矛盾しがちなものを草原でどう結び付けるか)ということを話されました。事例発表は、地元で「わくわく村」という草の根のツーリズム開発をやっておられる松原さんという農家の方。地元の防長交通の観光部長の春野さん。そして研究者としてグランドワークに関わっておられる浦田さん。3人が1時間程度しゃべりまして、フローラーと1時間論議しました。

かいつまんで申しますと、論議の段階から実践の段階に移らないところをもう草原はもたない、と、ではどうしたらいいか、1つは草原のメリットを受けている人が、草原管理のコストを払うという原則を明確にしよう。そのためのトラストや草原への入場料をヨーロッパやニュージーランド、オーストラリアのようにきちんと取って、地元の方にお金が落ちるようにならうという事が1点です。

それではお客様が減るじゃないかという観光業の方から叫びが流れましたけれども、それへの対策として、本邦森に戻って行くことが自然の成り行きであるはずの日本において、草原として維持されているといふことには特徴的な自然、経済、条件があってのことなので、それを学術的に多様な観点から、この草原がいかに価値が高いかということをきちんと、田園的に通用する形で調査をしよう。そして、選んで。例えば「草原四十八景」とか、観光資源としても価値のある草原を選別し、その三十か四十か百か判りませんがそこにツーリストが「草原ツア」という形で、シリーズで全国、もしくは世界から観光客がたくさん来てくれるようなそういうネットワークを作ろうと。

そして第3点目が、来年、国連が「エコツーリズム・イヤー」ということで、日本ではまだそういうことに対応する動きがありませんが、草原のエコツーリズムというものを強烈に世界に向かって売り出して行こう。そういう3点が話されました。

以上です。

小川

はい、ありがとうございました。

かなり今取組むべき具体的な課題、草原への入場料を取ってみよう、そしてそれを地元へと還元しよう。ツーリストが来れるような三十ないし四十通りの草原のポイントを決めて、そこでツーリストが来れるようなネットワークをは

かっていこう。で、来年は「エコツーリズム・イヤー」という、これは国連が定めた記念行事の年ですが、それに草原エコツーリズムというものを掲げて取組もうじゃないかと、末路なり具体的にその目標を設定しての論議がなされたにようですね。

それでは第2分科会の方は、高橋さんの方ですね、よろしくお願いします。

高橋

第2分科会は「生態系と保全」というテーマでした。ただ、その生態系のことばかりをお話するという内容だけではなくて、随分幅広い意見が出てきました。

最初は「秋吉台パークボランティアの会」の方から、それから蝶の保護を通して生態系の保全をしたいと考えるナチュラリストの方から。それから家裡に草花を植えたり、生態系を保全するために技術の力を借りて「坊がつる」というところで「野焼き」を再開した事例。それから、じゃあ、草原の健全な生態系を保全するためには何をとっているか、あるいは新しい試みを山口県畜産試験場の方からしていただきました。

で、それぞれの方、それぞれの立場からですね、例えば、採草という形態がなければ人は入れをしたって樹木が生えてくるんだよ、という考え方。あるいは蝶の立場からいうと、草刈るという行為によって蝶が食草とするような植物が増えるんだよ、というお話。それから、民間を活用してそこに火入れを実施することによってノハナショウブなど、野の花が増えてきているという実験をしているという話。それから、作を使うことで、これは阿蘇や三瓶でもやっていますけれども、草原保全にとても低コストで役立つんだよ、という便利の事例が出てきました。

で、草原の生態を生物多様性のような観点から眺めてみたとき、やはり火入れと同時に刈り取りも欲しいという意見が大勢を占めました。それから勿論場合によっては放牧も考えてみたらどうかと。それから一番大事なことはですね、そういう生態系を研究している立場から、あるいはそれに携わっている人の立場から、草原を管理していくことはこんなに大切なことをもっとアピールしようじゃないかと。これまでその部分がとても不足していた。そのためにもっともっと私達からアピールしていくという発言がありました。

それからそれに付随する内容として、じゃあ、守っていく、管理していく形態をどう取っていくか。やはり草そのものをですね、農産業とリンクさせると、あるいは地域振興と考えるか、勿論ツーリズムということもあるでしょうけれども、それが今ひとつであると。

それから実際管理していく手ですね、どこに求めらるかということをもっと整理しようじゃないか。先程お金を払うべきだというお話をありましたけど、そこまで具体的

ではないにしても、ボランティアなど多面的なですね、そういう想いの像というのを提示してその地域にあった実情に変えていったらどうかと。

それから、どうしても自然公園にしか、今はもう農原といふものは残っていない以上は、規制とか、あるいは制度といふもののとの関わりがある訳ですけれども、今はいろんな、環境庁なら環境庁としての立場からも、二次的自然に対する理解といふものは進んでいますし、進まっている。問題は地元が「どういう自然を守りたいか」という意思決定をするかどうかが問題じゃあないかな。と、そういう諸々の意見が出て、生態系の検討というよりは、何かそういう観察面でありますね、いろいろな提言が多かったのが特徴です。

それと、生態系という観点から言えば、末端に火を燃やすとダイオキシンが出るんではないかとかですね、あるいはCO₂(二酸化炭素)が増えるんではないかとか。あるいはセイタカアワタチソウのような外来植物が随分と増えてるんだけども、それをどう考えるかというそういう個別の問題も提示されました。

小川

ありがとうございました。

かなりまあ、「生態系と保全」ということになりますと論点が多く出でたいたいですね。しかしそれらは、手を共通して一言でいいますと、どうも地域資源の活用と保全に関する「マネジメント」が問題になったということのようですね。お互いに利害の相反するもの。あるいは技術面でも、火入れかいいのか刈取りがいいのか。それらの組合せはどうしたらいいのか。牛を入れるのかいいのかどうなのか。草花のことだけを考えていいいのか、蝶のことだけを考えていいいのか。人間のことはどうなるんだろうかという様々な想いがあって、それらを全部「マネジメント」という形でどうやってまとめ上げることが出来るのか。まあ、そのあたりのところの論点が随分たくさん出たような感じでしたね。

はい、どうもありがとうございました。それでは第3分科会、宇佐見先生の方からよろしくお願いします。

宇佐見

第3分科会のテーマは「なりわいと保全」です。4名の方からご報告をいただきまして、お二人がボランティア活動について、残りの二人がまさに生業を実践されている方からご報告を受けました。

前の2つの報告は、やはり草原は人が関わって保全されている、と。しかしそれはどうも昔のようになんかを繰り返す方に任せただけでは出来なくなりつつある。やはり、これまでの経験から、都市の方にボランティアとして何らかの形で関わっていただかないとどうも保全が出来なくなってきたということで、その取り組みを報告していただきました。

尚半は、実際に放牧をやっておられる方から、放牧をすることとは草原をうまく復元するためにもいい方法である、

と。ただし個人の力だけでは限界がある。すなはち、どこかの地域も権利としての入会地を持っている。けれども権利を持っている人の間には様々な考え方があり、やはり自分は農業を生業としてやっていく人とそうでない人、子供が農村を離れて都会へ出でてしまったために後輩のいない人、あるいは自身が農村を離れてしまった人。権利の面では問題なんだけれども、関わり方が違うと考え方が違う、何か問題が起きたときには非常に厄介なことになる。從来自然と出来ていた意思の疎通とか、関係が非常に元気にならなくてくるというような問題が指摘されました。やはりボランティアの方たちと連携しながらやっていかないと自分達の生業も持続できないというようなご報告がありました。

会場の方からはボランティアもいいけれども、やはりどういうボランティアなのか、将来どういうふうな形で参加している方を取り込んでいくのかということについてもお話ししなければいけないんじゃないのかというご意見がありました。単なる観光型のボランティアで終わらせるのではなく、ボランティアとして参加する人自身が積極的に参加して自分の専門性を発揮しながら、草原のあり方を提起していく、活動のあり方を提起していく、そういう関わりをうまく作っていかないと持続性がないんじゃないかというご意見でした。

もうひとつ、最後に景観ということについての議論がありました、「そこにあることがその景観を成す」。それは營みであったり、そこにある植物であったり、牛もやはりそこにいることで、從来言われていていた経済動物ということだけではなくて、景観をうまく構成する動物として評価し直していくかなければいけない。牛だけではなく、植物や草地もそうだというようななかたちで、景観に対する「考え方」そのものについてもフロアの方からご提案がありました。

以上です。

小川

はい、ありがとうございました。

地元の方々にとって見れば最も大きな問題である生業と、そういう自然環境の保全とを、どう折り合いをつけていくかということに迷いました。もう地元の元々権利を持っている人達の力だけでは持続性、保全が出来ないような実感にあります。じゃあそのときに市場からボランティアのような人達に関わってもらう道は、どういう形でなら可能なのか、それにまつわるところの期待と不安と問題点、こういったようなことについての議論がなされたようです。そして、この会での話としては、何よりも草原といふものは人が関わってこそ今の姿である、そういう意味では、人が関わる結果される条件というののはいったいどういう形でななのかというところが共通の課題として頭に残ってきたというふうな感じがいたします。

どうもありがとうございました。これらの各分科会の話をまとめるという意味では、もう一度、秋吉台に生業を掛け

て聴わってこられた田村さんのお話を伺いしながら、もう一度現場の感覚に宿ついて今の問題を振り返ってみようというふうに思いますので、聞いて田村さんの方から、これまでどのようにして秋吉台に関わってこられたのか、少しお話をいただけますでしょうか。よろしくお願ひいたします。

どうぞ座ったままで結構ですよ。

田村

只今ご紹介にあずかりました、秋吉台の麓に住んでおります田村昭雄でございます。振舞方の前でこうして話をすることは大変不慣れでございます。大変お詫び苦しい点があろうかと思います。何卒よろしくご声援、ご聴取をお願い申し上げます。

「秋吉台シンポジウム」といわれておりますが、純文字としては私にはよくわかりません。秋吉台の生業と保全ということで私が聴から聞かされたり、あるいは体験にあったことをちょっと語させていただきます。

秋吉台には山焼きという行事がございます。その山焼きを行なうためには、昔、火道切りという作業をしなければなりませんでした。私が聴から聞かされたことでは、火道切りということは「火道切り」と書かれておったようございます。これは土地を、秋吉台の土地をクリアして、山焼きの火が漏れないように守りをするようなことをしていたようで、地元の森林と草原の境を作るために削ったような形が現在も残されております。これを火道切りと呼んでいた訳です。現在は美東町と秋芳町との境としても形が残されておる訳です。

現在の山焼きとしては、美東町、秋芳町が一斉に火を放して秋吉台を焼いてある訳です。

昔、私が子供の頃、昭和16、7年だったと思います。よく憶えておりますが、また児に行ったこともあります。私どもの軽道が火道を作るために天候の良い日、または風の吹かないという天候のときに、みなさんが集合されて、原野に火をつけ、約5メートル幅を焼いて、両方から消して行く姿を憶えております。

今では時代が変わりまして、作業の仕方が変わってきました。現在では刈り払い機を使って防火帯を作るようになつたようなことです。

山焼きを経えるとやがて春が過ぎ、夏が来ます。秋吉台には青々とした草が育つ季節です。高麗農家では牛馬の飼料として、相作農家では肥料やしを作るために、草刈り作業が始まるのです。昔は相作農家を作るには今のような化学肥料は無いし、その肥料として草を刈取って、堆肥を作りそれを作物を作るために使っていたのです。秋吉台の草は農業にとって大変貴重な資源だったのです。今ではそういう姿は見られませんが、でも秋吉台に登つてみると、草刈り競技大会という催しがあったことがあります。私もそれに参加させていただきました。



秋吉台には「へこ地」(くぼ地)があります。これをトリーと呼んでいます。このトリーの底を農民が耕作していました。秋吉台には「長者ヶ森」という森がありますが、そこには昔、こうしたトリーの畠の地主が住んでおられたということです。その耕地を農民に作らせて小作料を徴め、長者になられたということです。今ではそのトリーも個人の所有になっており、私もその耕地を持っておる訳です。戦時中から戦後に掛けては面積増加ということで、芋、豆、コボウ、そばなんかを作っていました。上り道、あるいは下り道、細い道を片道1時間は上掛けて、荷物は馬の背中にのせて運んでいたのです。このことを思い出しますと、今でも、極最近の出来事のように思われます。

春にはワラビ採り、秋にはセンブリ(センブリ)採り、行楽、山登りなどたくさんの人々が利用されています。

この秋吉台を利用するにおいて、今日では自動車時代でございます。その車で地元から上がりられるような道を私どもは作りたくなりました。しかしながら、天然記念物、または文化財とかいわれて、秋吉台を削ることが出来ないのが、私どもには残念でなりません。時代は私ども高齢者時代になりました。この山焼きはたいていに凶暴な仕事をなってきた訳です。ですが山焼きはやめることが出来ません。何とか良き方法で秋吉台を価値あることに、大事に利用していきたいものです。

以上、聴かれてございましたが、皆様方のご厚意、誠にありがとうございました。

小川

はい、どうもありがとうございました。

田村さんは、それこそ農業を営みながら秋吉台に関わつてこられた時代がございました。その後、その農業の面では使えなくなったその土地を、今度は観光的に利用しようというので、農を引いてですね、観光客に来ていただかくというような、そういうお仕事もされたそうです。そして今日までこうして見てこられたのですが、いよいよ自分の年を考えてみたときに、この高齢化した私の力で果たして今

のような状態の秋吉台はどうやって飽われるんだろうか、そういう思いを色々と感じておられるんでしょうね。それは恐らく田村さんだけではなくて、この秋吉台や美東町にいる、秋吉台に権利を持っておられる方々の共通している悩みではないかなあ、という感じがいたします。

まあ、このあたりのところからいろいろ論点が出てくると思うのですが、まずコメントーターの新田さんですね、先程の分科会から田村さんの今の現状のお話までを聞いての簡単な感想を、ひとつようしくお聞いしたいと思います。

新田

えー、まず田村さんのお話の中で、草がとっても大事な資源であったとおっしゃってましたですね。それはきっとその資源である草が、草は人が刈り取る訳ですけれども、草が生えてくる秋吉台が、皆さん生息の人達の大きな資源だから、その資源から、毎年两年の草が生えてくる。そしてそれを資源にお使いなってたというふうに思うんですね。

で、最後のところでちょっと、私が聞き間違ったかもしれませんか。特別天然記念物だから、まあいいしいる事ができないというか。あるいは削る事ができないというふうに伺ったんですが、もし仮に秋吉台という山上が、まあ田村さんなり、あるいは他の方でもいいんですけれども、削って広い、真っ平らの所というふうに考えましょうかね。そうするとそれは空間にはなるんですね。で、空間になればグランドになる事もあるかもしれないし、ゴルフ場になる事だってできるかもしれない。そういう一つの土地が空間として有るというのも、これは人間がどう使うかというための土地そのものが資源では有りますけれど。けれども、草が出てくるとかあるいはそれを、今、田村さんが馬の背中に観光客を乗つけてあげて、喜んでもらって、まあ、いくばかりかの観光収入を得られる、というような資源としては成り立って安心ですね。また別の使い方としての資源は有るかもしれません、それは土地の空間にしかならないなあと私は思います。

という事でちょっと今のところ、私の解釈が間違ったかもしれませんけれども、やっぱり秋吉台が有るという事の、大きな資源をどういう形で資源にして、その資源を使っていくかというのが、今草原をこれからどうするかというテーマではないのかなというふうに実は思いました。

それで今は皆さん3人とも、先生方でパネルディスカッションをしていらっしゃった訳ですからそれなりに。例えば、高橋さんの「生態」という問題、佐藤さんの「エコツーリズム」、場合によってグリーンツーリズム、エコツーリズム。その両方が有るのかもしれませんね。それから宇佐見さんの「生業」という中で、えー、どういいましょうか、本来の日本の観光というものは、何か新しいものを。例えばディズニーワールドだとかディズニーシーというのを作っていますけれども、そういうものを作つてそこに人を埋ぶというよりも、本来生業のある中で非常にオリジナルなもの、そうしたものを作

り観賞する。そして当然そこに生業があるという事は食べる事の出来るもの、あるいは呑む事の出来るもの、いじる事の出来るものといいますか全くいいじってはいけないというんでなくて、そういうものがそこに必ずある訳ですから、そういうものを口にする事、手にする事が出来る、ということで目にするだけではないいろんな事があって、まあ私はグリーンツーリズムでいいですかそういうものになると想うですね。

で、かってはそうだったんだけれども、一端そうではない、大規模な、バスで風景を見せるというカプセル旅行といつても良いと思います。そういうもので全国を走り回わられるといいますか、そういう大量、大量、高速の観光形態というものが工業化社会では一番効率の良いものという小国になっておりましたけれども、その工業化社会を越えて、今、まあ情報化社会といいますか、その中ではもう一度自然と人間の関係、あるいはそういう自然を舞台にした人と人との関係、これはボランティアとかインナーフリティーションといいますか、お客様とその自然をお客さんに説明する人、あるいはボランティアの方々とそこに訪ねて来た人達との関係、こうした人と人の関係だと思いますし、そういう舞台としての視点があつたりする、というふうに思います。

便りにはまたお話が出来ればと思いますけど、今あと心ならそんな事かだと想います。

小川

はい、ありがとうございました。

今ちょっと、誤解があつてはいけないので、田村さんの方からですね、今いつれたところでですね、あの、決してそうではないんですね、真っ平らな土地を作つてということではなくて、あの、私の方で少し補足しますので、後でまたよろしくお願いします。

要するにこの秋吉台の場合にですね、火道切り作業の負担をどうするかという話がありまして、これを非常に競争サイドの事業者、作業道を造つこうとしたことがあるんですねけれども、そのことを巡つてかなり緊張関係が出来まして、「石一つ動かすのもまかりならん」という話になりました。そういうことで結局は権利の人達が火道切りに行くための作業道も設置出来ないような状態になつてしまつた、というそういう具体的なことがありましたので、ちょっとそこらあたりの話を話題として出たということですね。

まあ、そういう意味では生業と公園だとか文化財だとかといいういろんな規制との関わりの中でありますし、特にこの秋吉台の場合には昔そのものが嚴重な世界遺産に匹敵するようなものになっているということもありまして、その上でどのような営みをするのかというの、開発だけの開拓じゃなくて、もっと広くいろんな課題をたくさん抱えている所です。

しかしそういう規制があり強くありますというふうに感じた場合には、多くの人々はそこで、自分達の生業を展

聞することは出来ませんから、結果として見れば、若い人はそこにはまくなつて、残った人は高齢者ばかりになつて、という、そういう話になつてしまつたのです。

そこで今の問題が出てくるというところなんですが、まあこれから少しですね、今回は「山焼きシンポジウム」という話になつて、この山焼きをせざるを得ない状態、またその山焼きというその最終手段をもつてないようなことさえも、現在では出来難くなつてるとそういう現状あたりからですね、色々とバネリストの方々に意見をいただこうと思うんですが、最初はどうしましようか。じゃあ高橋さんの方に回しましようか。

高橋さんの方にですね、大体、こういう環境というのは大事だということは言われているんですね、草原を守る技術体系だとかですね、草原というものを見守るということに賛するような制度とかというようなことになると、結構その過度して良く解らないという感じがしますね、このあたりについてはどういうふうにお考えでしょうか。

高橋

はい、えーと、守るとか維持するとかの技術ということになると、火を入れるということと、それから草を刈るということ、それから牛馬を放牧すると、まあ二つに分けられると思います。その内、草を刈るということと牛馬を放牧するということは、まさしく生業そのものと直結することなんですよ。それによって牛や馬を飼って、生活の糧としてやると、で、火を入れること自体はそれでお金が入る訳ではない、ということですね。ですからある意味では少し区別をした方がいいのかなという気がします。

それで火を入れることは放牧する場合にも、あるいは採草する場合にも有効な手段ではあります。ということで技術的にはですね、火入れというのが三角点の頂点にある様な恰好で、放牧、採草というふうに、箇所それだけではございませんけれども、そう考えるのも一つの考え方ではないかなと思います。

それで秋吉台の場合は、放牧という慣行は以前に少しありましたけれども、ほとんどがその採草利用ということまでの、直接その生業というか生業と関わるところは採草という形だったんだと思います。

もう一つのご質問何でしたつけ。えーと制度等の関係ということですか。それは、そういう行為をすることに対する規制という意味なんでしょうか。まあそれは鶴田さんの方が詳しいとは思うんですけど。秋吉台の場合の文化財としての指定の根拠がどの辺にあるのかというと、その台上のものということなので、台そのものをいじるということに対する規制というのは、かなり厳しいんじゃないかなと。で、阿蘇や久住の場合には、その草原の景観が国立公園の指定要件、まあ三瓶山もそうですけれども、そういう所が幾つかある場合には、その管理としての草原を守るということはある程度許される部分かなりあるんだと思うんですね。

で、生態系の分科会でも出たんです。例えば規制区域の内でも最も規制の厳しい様な特別保護地区みたいな場所に手を加えること自体がどうなのか、というお話にもなって、でも実際には特別保護地区でも火入れをしている所もあるし、刈り取りを行っている所もある。それから、環境庁の方から、まあ個人的な意見ということではあったんですけども、私もおもろくそつたうと思つておらずけれども、規制があるからしあわいだけないという立場では必ずしもない。ただしその場合でも「やり方」はきちんとやって欲しいということですね。公園管理上どうしても、やはり手続きはきちんと積んで欲しいし、その地元の意識としてきちんとしたもの上げて欲しい。

ですから、で、その制度がまた別々にあるというのかまた困った問題でして、文化庁側は文化庁側で環境庁側は環境庁側それから、入金を含めた管轄という点ではまあ監督者も入るんだと思うんですね。それそれが相対しているという状況が非常に不思議な感覚ではないかと思つんだけれども。

まあ一つの提案といつてはなんですかね、どこかがですね、環境省なり農水省なり、あるいは文部科学省なり、どこかが監視の調整をするようなシステムって出来ないのかなというのが私のまあ漠然とした希望ではあるんですけど。

まあその草原管理に関わる制度とか、技術とかいうのは、そういう形ではないでしょうか。なんか補足があればまた補足してください。

小川

そうですね。今、重要な提案がありました。草原という概念について、それを技術的にどういう形でやればいいのかということを、まあ幾つかのパターンはあるようですが、それが本当に現実の様々な制度的な規制の上に立って考えた場合に、どういうのがベストであるかということについての協議をするためには、省庁間、縦割り行政というものの「構を整えて行く」ような工夫がいるだろうと、どこかが首領を取ってその調整役を取たせるふうになつたら、少しは草原に対する問題の解決も出てくるんじゃないかな、というご提案だったと思うんです。

これに関しまして、先程佐藤さんの分科会でもですね、言うならば「草原学」のようなものを立て、学問的なことでありますみんなの統一になってるんで、統一したらどうかという話が出ていたと思うので、ちょっとそのあたりに関連してご意見をいただければと思いますが。

佐藤

はい、「畜産と草原」というのは草地試験場とかでやられていますし、「生態学と草原」というのもあります。また「地質学」、「地理学」と草原」というテーマもありますし、「環境」「観光」と草原」と、まだたくさん草原についての学術的研

究というのではありませんけれども、生業も含めて、地質も含めて、そして歴史も含めてひっくり返る、日本では本来存在しない稀有な資源として草原がある訳ですから、ひっくり返る全体像を研究するってことが今まで無かったと思います。

それでなんか地元の方は草原があるから、これはありますけれどものだと、あまり価値が判らないんだけれど、世界的に見ますと、例えば蒙古の草原というのは行ってみれば現代化した土だけの、緑から見ると緑はいいんですけど、上から見ると石ころだらけの砂漠です。それから基本的にそのサバンナというのも水が無いところにある草原であります。日本の様にこう無いのがある草原、蒙古の学者あたりに阿蘇の草原見せたらもう目をむいて驚いていましたけれども、本当に珍しい。ですからかつては何處にでもあったんでしうげども、明治以降も10分の1位に、国土面積のもう1パーセントを切ろうとしている。「ふるさと」の唱歌にあります「うさぎ這いし」という、ああいう草原ていうのは、ものすごい資源的価値が出てきたんですね。これはもう、その根拠をこれから、やはり可及的速やかに調査したいと思います。

小川

ということで、少なくとも世界的に見ても希少価値のある草原。そういうものを個々から学んで研究していくってもやっぱり省庁間の縦割りと同じ様なことではないか。もう少し自然科学的なこと、歴史科学あるいは人文科学的なこと、そういうものも含めて、あるいはまあ社会科学的なことも含めて、「草原学」の様なことを一つ立てて検討してみることが省庁間の、「総に繋げて行く調整」ということにも関係するでしょうし、実際にこの秋吉台で人々がここに廻りながら生きて行くという道を探る上でも非常に有用になって行くのではないかなあ、まあこういう提言だと思います。

まあこれについてはですね、実際に地元近くにおられるからこの秋吉台の方にボランティアとして、というか「勝手道」として関わっている宇佐見さんの方からですね、今の秋



芳町あるいは美東町の人達がどういう生活の中で秋吉台と関わっておられるのか、そこに都合の、というか町場の人間としてどういうふうに関わってですね、何か課題になってるというふうに感じておられるのか、少しそのあたりのことについてのご意見をいただきたいと願います。

宇佐見

今、小川先生からご紹介いただいたように、私は三年前に山口県に引っ越しして参りました。色々な経緯でまあ秋芳町に足をつっこんでいます。今はですね、皆さんご存じのようにドリースを使ったシバの耕作に汗を流している訳です。まあ年に4回ほど来る訳ですけれども。

私は山口大学にありますけれども、いろいろな機会を作っています。学生にまあ農業とか農村に親しんで欲しいと思っている訳です。それはやはりそうしたきっかけを作りっていうのは非常に大切なことだと思います。

で、これまでいろんな方が、それぞれの専門の立場から良いことをおっしゃる。でもそこでは止まってしまっているということで、何か実現できない訳です。農村へ行きたくてもどうして行けばいいのか判らない。やりたいことがあってもどこに行けばできるのか判らない。そうしたことを私はこれまでの経験で痛感しておきましたので、まあアクセス出来る、即ち何らかのきっかけを与える、それに参加する、そこで何かを感じるってことですね。そうしますとその人の能力が発揮される訳ですね。そうすることで今まで無かったもの、あるいは潜在していたものが発現して来るという、まあ夢を持ってですね、取り組んでいる訳です。

で、どこにいけば良いのか判らない、誰がどんなことを作ってくれるのか判らない、ということですが、幸いにして、それは私どもの専門会議でも出たことですが、幸いにしてボランティアの方々、あるいはNGOの方々がその準備をしてくれてます。

で、報告の中にもあったんですけれども、私も字ばかりはいけないと思っていますが、勝手に機会だけを作っちゃいけない。やはり、阿蘇の「グリーンストック」(財団法人阿蘇グリーンストック)ですか、研修に来ていただいて、良く理解していただいた上で、本当に理解してみたい、本当に体験してみたい、という機会を次に設けてあげる。で、おそらく将来的には何かのプロになるような、人材を育てるような、機会を準備して行くと。そういうようなものにして行けばですね、面白い展開が出来るんじゃないかと思いますよ。

ですから、参加者といわれる訳ですけれども、やはりいろんな方を取り込んで、それそれが持っている能力を何とか生かせないのかなあ、そして同じような、まあ目標といつていいんでしょうか、一緒にやって考えるような資金を双方がですね、あるマナーを作り上げて接していくかないと、片方の力が大きいとそっちに引張られてある特定の方向へ行ってしまうので、どうもそういうことがあります。求められているような気がするし、私自身もそういう

所に気を付けてやって行かないといけないと思っていました。ですから私はあくまで大学に勤めてるということは直いといて、山口県山口市に住んでいる一都会人としてですね、時に住んでいる者として、秋吉とお付き合いをします。そしていろんなことを学ばせていただく。即ち、お隣の田村さんのような方と接すればですね、昔はこうした村のお付き合いの仕方があったとか、秋吉台とこうゆうお付き合いの仕方があつたんだとさういふ「生きた情報」というんでしょかね。「生きた文化」みたいなものを学べることが出来る訳ですね。そうすると感動する訳です、私たちの学生を通して来てもですね、私が色々と大学で話すような口調でさうよりもですね、こうした生きた教材がある訳ですから、そういう方に教えると感動する訳ですね、「あ～そうか」ということで、まあ8割といいほんまにそれとも、半分ぐらいはさすね、何らかの形で関係を持ち続けることができる訳ですね。

そうしてほんたん人達が今度、山口の中で就職する、あるいは就職に戻って就職する、そうするとやはりまた、尋ねる永いといふんでしょうかね、長いお付き合いが出来るような気がするし、うまく行けば今いわれるよう「広報団」みたいな形ですそ野を広げていけるんじゃないか。また、何ていうんですかね、人を一番信頼させて、説得出来るものは「口コミ」ですかね。口コミほど強いものはありませんから、そうゆうような口コミで広げて行けるような人材を見て行くような機会をオープンにして行く。勿論その機会を作る時、あるいはそれを運営する時には、いろんな方の意見を聞きながらやって行くということが大切じゃないでしょうか。

やはりビジョンからアクションへとゆう時代が、佐藤さんの方から出てたと思うんですか、やはりもうその時代になつて来た。たけどもそれを何か実現して行ける、素地なりお知恵はですね、いろんな方が持つてて、どうもそうゆうような意見を披露できる機会を、よその人あるいは秋吉町に帰る方達が同じように一緒にやって作って行く。そんな時代じゃないかなと思つています。またそれをやつてたたけたしれ、それに興味があることが出来たら私、個人的には非常に楽しむなと思っています。以上です。

小川

はい、ありがとうございます。

草原を想う人は多くて、ビジョンも語れるような人達はたくさん出て来たんだけれど、これをアクション、行動に移すためには、どうもそのための作法をわざわざするということが必要なんですね。「草原の作法」というんでしょか、星野講演では岸本先生の中から「風景の作法」という言葉がありました。それをじつはいうならば「草原の作法」というようなことをみんなが学び取ってそれから行動に入る、ということが必要なのかもしれませんね。

そういう意味では田村さんの方にちょっとお伺いしたいのですが、田村さんの所では、火入れとかそういう作業の時には、自分達の農家だけでやっておられるのですか、

それともボランティアのような人、都会の人なんかも少しあつてやっておられるんでしょうか。

田村

ボランティアといつて別に私は、あのー今まで意識したことはありませんか。

あの一昭和37年でしたか、鹿野馬が要らなくなったために、観光用の馬に切り換えて、秋吉台の展望台の下で30年間働いた訳ですが、そこで知り合いの方でボランティアに来ておられる方に会って話したりしてね、私もいろいろお客様の為に、お手もいたいたいたりしたことがありますから、やっぱそういう観光(ボランティア)のことについてね、一緒に入って出来ればいいなーと、思いつつ今までそういうおこないが出来ないで、こんなに過ぎ去ってしまった訳ですけどね。はい。

小川

はい、どうもありがとうございました。

まあいすれにしても、随分と、この「山焼き」、「野焼き」をする所では、地元の人達の力だけではどうにもならなくて、それだけに多くのボランティアがなんとかうまく組入れられるんだろうかという話は上がるんですけども、果たしてそれがうまくいくかどうかということについては、いろんな所で懸念もされているようですけれども。

先程のお話のように、少なくともそういうところに関わるために、事前の訓練とか、そういうことが必要だらうし、一回限りというのではなくてもう少し長い付き合いが出来るような関係を作った上で、構造として位置づけた方が良いんじやないかというような、そういうご指摘は考えるべきことがたくさんあるんじゃないかなと思います。

高橋さんの話でもやはり、そういうボランティアとこうした草原の関わりというようなことについての何かご意見が出ましたですか。

高橋

はい出ました。で、秋吉台の場合はその阿蘇、久住とはちょっと違うんだという話、まあ詳しくはお話ししないんですけど、その日本型のとてもがっちりした火入れのシステムというのがあってですね、そこにボランティアが入り込むことは非常に難しくて、ということと、意識の中で当たり前の仕事をしているんです。地元の人達は、それでそれが去年もやつたから今年もしていく。今年やつたから来年もしていくという意識感覚で続けていく。だから何でボランティアが来るんだということの理解はなかなかできにくい。それと、さつきお話をしたように、なんといつても多放の問題とか、そういう問題があるので、非常に体験を積んで訓練をしてくれないとなかなか難しいよ、というお話をありましたけれど。

小川

まあ、このあたりは佐藤さんのところでもですね、まあ佐藤さんのところというか、その阿蘇の「グリーンストック」との関係でも、やはりこういう都會の人達が、山焼きなんかに觸れるという問題についてはですね、かなりいろんな論議があったと想うんですが。現状とまあその論議の乗り越え方というところでしょうか。どんな話になったかということをちょっと現行していなければと思うんですが。

佐藤

あの、その前に、秋芳町でも「わくわく村」では地元の6~8人の方だけでは野焼きが出来ないから、50名まで野焼きにボランティアを入れていると聞きました。

ですから、阿蘇の話でもですね、これまでそんなことは絶対不可能だと、地元だと危険性だとかいうことで、集落のチームワーク以外では不可能で、「遊び半分の都會の人」は邪魔になるだけだ」とずっといわれてきました。それが変わったのは、今日もおみえですけども、あの環境省の方で「旱地懇話会」というのが平成8年からあって、そこで実際に水耕栽培でやってみたりですね。そしたら結構役に立ったんですよ。

それで「グリーンストック財団」。今日おみえの阿蘇町の川崎町長が理事長ですが、公的な一つの信用がある財団が地元の新聞で半年間キャンペーンやって、県原基金が5千円集まりました。でその半分で草原ボランティアの備品と活動費を5年間出していたみたいであります。

最初は幾つかの集落だけだったんですが、今年は僅か10町村、いや4町村十数牧野組合だか、阿蘇には175の牧野組合が在りますけど、割合の牧野が、しかも町村の農政課を通して正規の要請と組織的な対応という形で実施しております。新聞のアピールで、今どんどん参加者が増えて、数百人集まっていると聞いていますけども、山内業務が非常に努力されて、そのための専門的リーダー養成の講習会を徹底してやっています。その内の運営委員会が三十数名、正式な資格を持たリーダーを養成して、場合によっては数千名を雇用する、そうゆうこう特殊な構造を備えたものになっていくんだろうと考えています。

そして私共に要請がある生落というのには、例えば26戸で800ヘクタールもの牧野を管理しなければいけないといふところです。阿蘇の経験では、野焼きの火が飛びすると杉山が焼ける。焼けたら10年間下草刈りをしなければならない。田んぼの忙しい時に労働でその補償をせんといふかんと、もうこんなもの、とってもリスクを負えないということが一番大きいんですね。それで都会から来た人でも、勢ちかのうちに飛びした火を、あちこちでとにかく既時に叩けた火事にはならない訳ですから、そこで生落保険を掛け野焼き参加者は必ず一日のトレーニングと「火消し棒」(火を叩いて消す道具)を作成してもらって、命に觸れる危険ということを叩き込んだ上でやれば、これは枕木になる。

そして参加者ですね、ワクワク、ドキドキ、ハラハラ、そして笑快。「野焼きは私にとってレクレーションです」という私記が並ぶんですけども、親み付きになってですね同じ集会に毎年行ったり、野焼きだけじゃなくて、「旱地切り」も参加してくれてますしね。そして以外とですね参加者の中には大手の企業の専務だったり常務だったり偉いさんが来てるんですね、以外ですけども。そしてその人達はもうファンになって地元の農家、集落と親戚付き合いをして、半年後はここに移住したいという関係も出来つつあります。

そういう意味では、その中に草原とボランティアというよりは、人間に会いに行く旅とか、親戚付き合いとか、農村への移住とか、そういうテーマに非常に良い。リスクがあるだけに、逆境共同体作りには「野焼き」は良いですよ。

小川

今のお話を伺いますと、ボランティアに対して懸念が弓げている状態から、少し積極的に、どういった訓練をしたり、どういう仕組みを作ったらそのまま野焼きが広がって、どういうところまでは手伝っていただけるかという、ひとつの展望が開けてきそうですね。

この辺のところは、お互いにそのノウハウを学びあって、より良き方向を考えていくということが出来るんじゃないかなと思いますね。まあ言葉ならば「草原の心機運作り」はどうやってやれば可能か。こういうところのテーマがひとつの課題としてあるんじゃないかなと思います。

今までの話を聞いてですね、浦田さんの方から少しこメントをいいただければと思いますが、よろしくお願ひします。

浦田

まず、今の佐藤さんからお話をありましたけれども「ボランティア」というのと、それから高橋さんから「継続性」というお話をありましたね。ワクワク、ドキドキ、ハラハラと、情熱ボランティアも言しかつたらやらない。楽しいと、ただし「楽しい」というのは「心が楽しい」とって言った方がいいですね。手足なりなんなりは汗をかいたり大変で、虫を切らせてハアハアってことはあっても、楽しくなければきっと「継続性」には至らないと思います。ですからそういう面では、さと佐藤先生がおっしゃったことは、みんな継続性があるってことは「楽しい」ことがそこにある、それが自分の身に戻ってくるんだろうと思うんですね。

で、私は「日本型のボランティア」ってありますか、ボランティアを随分考えて。あ、その前に、実は来年は「エコツーリズム年」なんですが、今年は「ボランティア国際年」なんですね。国連でボランティアの、これは亡くなった小糸さんが外務大臣のときにニューヨークの国連本部で開催して、「21世紀のスタート、那就是ボランティアの活動で開きましょう。」という演説をされて、それが採択されて「ボランティア国際年」ということになりました。「国際ボランティア年」と言ってしまうと、何か日本から外に出ていくて何かしなければなら

ないような誤解があるので、「ボランティア国際年」というのが、実は昨年の11月20日、ニューヨークの国連がオープニングをしたときから今年いっぱいをそういう年にしています。

ただ私、日本のボランティアと言いますか、ひやあ日本にボランティアはなかったのかと、ボランティアと言うのは志願兵だと、あるいは中世の十字軍だとかというふうだったり、あるいは教会への募金なんかですね、そういうところのふうに思われがちであります。日本では、きっとそういう「共同の活動」っていうのは3つのパターンがあったと想うんです。

「尽くす」という、これは領主とか庄屋さん(いろいろな仕事を呼ばれてやらざるを得ないという)まあ昔で言う「相・譲・請」という、税金を納めるのもありれば「使役」に出かけていくというのも律令時代からありましたけども、その「肩」といいますが「使役」、領主のために働くというようなことがありますね。

それから2番目には「務める」という考え方。これは村落の共同体の中では当然みんなで共同してひとつの仕事をしないと成り立たないものがあります。例えば堤防を直すとか、あるいは溜め池をさらって水を溜めるとか、灌漑用水の水を引くとかいうようなことがありますね。これはすべて農業の中での「お務め」でありますし、この中に火を使うという「薪焼き」があったと思います。「火」と「水」はその面から言えば、個人が自由の意思でやれるものではなくて、やはりその生活といつも共同体の中、日本でいえば「ムラ」というふうによくカタカナで書きますけれども、この中で「みんなと一緒にやる」ことが「務める」という考え方だと思います。

3つ目は「つき合う」という中での効率力のやり取り、「オウ、ちよっと手を貸してくれよ」ということで個人と個人がやるハナシですから、場合によるとこれはよく言われるのは「合掌造り」の日川(岐阜県大野郡日川村)の挙動きだとか、田植えをするときなどですね。「今日はアンタのことを手伝うから、明日はウチの田植えを手伝ってね」とってことです。今、毎年とこのことについて「エコマネー」っていいますか、日本でも、「私はこういう仕事を出来ますから、何がのときにお手伝うから他のことでは助けてね」と、例えば「お年よりのお世話をしますから、ウチの庭木を刈ってよ」と。そういうときの何時間分とか何人分とか、ボランティアの代償の尺度として「エコマネー」という考え方方が出来てきています。これは今、全国で、いろんなところで地域のコミュニティーとして出てきています。

ただ「火を扱う」ということについて言えば、私は2の「務める」ということだと思います。そしてそれは小さな集落だけの「務め」ではなくて、日本列島の中で、やはり農業を守っていくということについて、都市の人も農村の人もが一緒になるルールを、「務める」という中に共に作っていくことができればいいなというふうに思っています。

もうひとつボランティアでご紹介しておきますと、イギリスには「BTCV (British Trust for Conservation Volunteers 英国環境保護団体)」と言いまして、ボランティアの人達の手配をするトラストがあります。あるいは「ナショナルトラスト(The National Trust)」にも「エーコンキャンプ(ACORN Camp)」といって、そういういろんな作業をする。ナショナルトラストの中で棚を直すとか、あるいは水道(みずみち)を整備するとか。そういうことをするプログラムが何百もありまして、それを年賀1冊の本にしますが、そして「こういうことを参加する人がいるのか」ということで掛け括りで、多くの人が早い者勝ちで申し込んで行く訳です。その間に「ここには(宿泊できる)小屋があり食事も提供される」、「ここでは(宿泊施設がないので)テントで生活をする」というようになっているのですが、これはボランティアの人達が実はお金を持って行くんです。そんなに高いお金じゃありませんけれども、「ワーキングホリデー」とて言いまして、自分達がお金を出して出向いて、そういう場所でボランティア活動をする。ですから日本からもイギリスのエーコンキャンプというナショナルトラストのキャンプへ行く人達もいます。行ってみてやはり自分が啓発される。楽しかったということがあるのでこれが職業となり、またその人ばかりではなくて次の人にと続いていくというリレーをしている。そういうことがこれから「務める」という世界の中で繋ければいいなあというふうに私は思っています。

小川

どうもありがとうございました。非常に有意義なコメントをいただいたと感覚ですが、ボランティアという名前、これをもう少し日本語に翻して言えば「尽くす」「務める」「つき合う」という、この辺の言葉でいえば「結」とか「てまがい(手間換え)」という分野なんでしょうね。そういう分野として聞いて、もう一度理解してみると、「火入れ」というのは「務める」という分野だから、これを農業のところで出来ないのなら、もっと日本国民全体として「お務めをする」という形の火入れの方法を考えることが大切なではないかという話でした。

それから実際に今話されているようなところでは「つき合い」をしていくというところで、新しい都市住民と農村の人達との関係のあり方が混在になってきたというところで、イギリスなんかの有り様というものを学べば、もう少しそういう人達を斡旋できるような機関を日本でも作ってみてはどうかという、今後非常に展開の可能性が深いというか可能性のあるご提言をいただきました。これも考えてみなくてはいけないことかなというふうに思いました。

さて先程、分科会からの報告の中でもお話をありましたし、今の酒田さんのコメントの中にもありました、国連がいろいろと、その年その年のテーマを提起していますね。1993年は「国際農業年」だったんですね。これらより大掛か

つなイベントにはなりませんで、知らないかった人も多いと思うのですけれども。今年は「ボランティアの年」という名前になっておりまして、ボランティア、これは何も福祉だけの問題じゃありません。こういう環境保全の関係のボランティアも含めましてもっと考えていくという、そういうことになっているということですから、ちょうどタイミングよくこのシンポジウムでもですね、そういうことが起きたというのには嬉しいと思うのですが。

さて、来年はエコツーリズムということの国際年だという話しが佐藤さんの方からありましたから、どうもその辺りのところがひとつ「到達点」かと到りませんし、準備となることになると思いますが、現状として、これだけ草地というのが日本の中でも瀕死の状態になってきていると、しかしそこでは新しく実例を生めて「草原学」のようなことやらなくてはならないだろうし、「草原に開拓する作法」というものをもう少し再確認していかなければいけないだろうし、更には「草原十日草」のようなものを植えねばいけばならないというような課題が出てきたということで、そういう世界の「エコツーリズム」というようなことに聞いてですね、どう考えていくべきか、佐藤さんの想いということで結構ですから少しお話をいただければと思いますが。

佐藤

何か突然アジアの人達も、欧米先進国の人は同じように国際なんかの活動に参画するようになりましたよね。我々日本人、特に私も英語が下手で、気後れするからアジアの人々に遅れをとっていますけども、エコツーリズムとかグリーンツーリズムというようなものはアジアでもねたやたらと最近、政府が動かして、観光の新しい姿として事象化が進んでいます。

例えば一番猛烈なのは、中国政府が99年を「エコツーリズムイヤー」と定めて空港(空)で国際花博をやりましたけれども、中国政府ははっきりとした戦略を持っていましたし、内蒙古の草原を生かしたグリーンツーリズム、雲南とか内陸部のエコツーリズム、それを今までやってきた東部の海岸都市の開発、「大西部開発」と言っていますけども、その国家戦略としてグリーンツーリズム、エコツーリズムを位置付けて、観光収入としてGDPの8%を2010年には獲得するというにて、今ものすごいことになっています。

今、7億人位の中国人が旅行をしていると言われています。そして年収1,000万円を越える人が1,000万人いると言われています。10年後は1億人だと書かれています。その受け皿を、早く我々は、九州から北海道まで連携して、受け皿作りを急ぐべきではないかと思います。

アジアの他の国でも韓国でも政府が最近「観光文化省」というのを作ってツーリズム産業を国策として推進していますし、タイでもそうです。タイの大学には「エコツーリズム学部」もできております。それに比べると、アジアの人達

に比べると日本人はボケっとしてるんですね。

まあそういうことですけれども、アジアのエネルギーも受け入れるような形で、来年一緒にどうでしょう、草原をテーマにした、例えばアジアでは草原が砂漠化する危機が起つたり、熱帯雨林を草原にしたんだけれどその後がうまくいかなかつたりとかあって、要するに「外貨を稼ぐツーリズム」というのに対して猛烈に熱心なんですね。そういう「産・官・学」一体の、アジア連携の「国際シンポジウム」なんかを来年開催でやりませんか。

その「手始め」といってはアレですが、実は昨年、高木先生で「地域連携フォーラム」というのを作って「アジア世界のツーリズム」「草原を生かす」という国際シンポジウムをやったんですよ。そういうことで中国、韓国とはチャンネルがありまして、タイとかもありますから、是非、環境省なんかで、農水省や国土交通省にも呼び掛けて、今度やりませんか。

高木

いや、規模がだんだんと壮大になってまいりましたね。

草原の問題、草地の問題というのは、おそらく日本国内ではかなりマイノリティーといいますか、少數派の「課題」ということになりますけれども、特にアジアの世界を見てみた場合には、この資源というもののとの関わりなくしては、新しい意味での「観光」というんでしょか、それはエコツーリズムとかグリーンツーリズムとかって言うのでしょうか、もとと違うならば「サステナブル・ツーリズム」って言うんですね。「環境可能なツーリズム」ということに賛同するのかも知れませんが、そういう共通の課題をこのシンポジウムから提起できれば非常に面白い動きになるのではないかでしょうか。

日本では、どうも国際に対する取組みというのは日本政府を通してしか出来ないというような、何かそういうちょっと趣が引いたような感じになっていますけれども、今の国連は全然違います。政府と同じようにNGO、こういう民間の団体、あるいは一地方の自治体が一緒にになって、国連に直接、いろんな形で関わるということが出来るというような体制になっていますから、そういうことの取組みをやってみると新しい展望が開けるかも知りません。

そしてまたそういう動きの中では、先程ありました「ワーキングホリデー」というご紹介がありましたね。こういう動きというのは、今結構、九州辺りでも畠田の保全のためにイギリス辺りからワーキングホリデーでやってきて、日本の「畠田ボランティア」と一緒に行動しているなんてこともありますから、そういう「新しい動き」が出てくるかも知れませんし、そこでもまた意見交換があれば、今までとは違った「新しい動き」が出てくるかも知れないと思おそうということでしょうね。

今のふうな構造が出来ましたが、田村さん、こういふ話を聞かれてどういうふうな感想を持たれますか。今のような、例えば世界の草原を持っている人達との話し合いの機会が

日本で持たれるといつもようなことが今話されたんですか、こういう考え方についてどういうふうに思われますか。

田村

ちょっとこのところ、何て言いましょうか、ピンと

小川

ま、今はどんなところでやっても、きちんと通訳が付きますので、いろんなところで起きることが簡単にできるとは思うんですけどね。

宇佐見さんの方は今のような話を聞かれてどういうふうに思われますか。

宇佐見

私、年に数回アジアに行かせていただいているのですが、地域の産業、特に観光地は、山間部だと、日本でいえば中山間地ですね。そういうところ、森などが残っているところは「生物の多様性」ということで、何とかそれをうまく観光ビジネスに乗っけていいのかということに非常に关心を持っている訳です。それも先程あったように開発者の方が非常に活躍している、日本流でいえばインダーブリッジを育てるなどと観光専門の学校を作るなどをしていている訳ですね。

お説それを支えるにはNGOの活動が活発なんですね。やはり従来のような環境があざなむ地域、条件不利地域などいわれる地域で生かせる資源は「観光」だと。それもやはり「持続性」を持っていなければいけない。それを維持管理するのは、NGOは一時的に手伝いはできるかも知れないけれども、やはり長くお付き合いは持続管理するのは地元の方々ですかね。地元の方々の能力も高め、そしてどうやって自分達の生活と結び付けていくことが「観光につながる」のかということを一生懸命考えている訳ですね。だからどうして「そこに住んでいる人達の能力を高める」ということをなくして、やはり持続的なツーリズムは成り立たないと思う訳ですよ。

私は以前京都で、都市と農村の関係に関する調査をいろんな人達と、私と、國学者とですね、歴史学者といふんだけれども、そのときに私が感動したのは、日本の観光は、これは私自身の独断と偏見なんですが、どうも日本の観光は「(商品の)切り売り」をしてきたんじゃないですかね。だからストック(在庫)をどんどん、どんどん運んでしまってフロー(流れ流し)でやってきたから、効率的にまとめて儲かなくなれば産業が終わってしまう。どうもこれからは「生身」ですね。草原の中に文化、そこに関わっている人達の生活みたいなものをもう一度見直していくことで新しい観光資源を作り上げていく。そこにNBOなどいろんな人を取り込んでいく、そういう作法ですね、文化を見つめ直していく、ある

いは作っていく、そういうことをもう一度「振り起こす」ということです。そして「振れる」ということをどういう形で具体化するのか、これが大切ですね。私はいつも「振れる」というのが好きなんですね、音楽として、どう振るっていくのか。そして振り起すということですね。やはり何十年、何世紀にわたって培われた文化には、やはり見習うべき「作法」なり「規範」がある訳ですね。それを振り起していくことか、今品題になっているツーリズムをですね、持続性がある、地域の文化だと地域の資源がいろんな形で関わるまさに21世紀のひとつつの「社会のあり方」みたいなものをお教えてくれるんじゃないかなと思います。以上です。

小川

そうですね。まあそういう草原に関わる人々の生活のあり方、草原と一言いっても個々の状況は随分と違うんだけどそういうもののもわざと見ていくということ、また草原というものの独自の価値というものをそこに見出していくということになりますと、それはただ単に「草原」という言葉でくるよりも「草原文化」という言葉でくくった方が良いのかとおもいます。そうした「草原文化」について国際的に話し合いかでできるような場になればボントいいだうな、という、なんか夢が浮いてきますね。

高橋さんの方から、今のような構想について何かご意見があれば。

高橋

そうですね。私の分野は「生物多様性」が観点でしたから「生物多様性が観光行政と結び付く」というのが実は諸外国の今の現実、というか新しい試みだとと思うんですね。これまで「生物多様性」というと何か学者間のマスター・セミナー(自己測定)で終わっていたようなところもあるんですけども、そうではなくて、もっとグローバルに見たときには、今草原がおかれているのは、実は大変さん(大変典故、熊本大学非常勤講師)がよくおっしゃるんですけど、「滅死の状態」とおっしゃるんですね。で、滅死の状態にリバーテープを貼っておこうがないんだと思うんですよ。いわゆる傷口をふさぐような、例えばちょっとした火傷への資金提供とかですね。まあ震災も震死ですから震災用の「補助金制度」みたいなものですか。(震災省開発省が)誰もいませんからいいんですけどね。今日は(笑い)。そういうものはいわば傷口をリバーテープでふさぐようなもので、そういうふうで「輸血されるもの」でなくちゃいけない。そうなると人材を生み出すとか、文化を生み出す、文化を発見すること、あるいは技術を提供すること、その技術を高度化していくことも次の段階で必要だと思うんですね。

でも「輸血」でもやっぱり駄目なんだと思うんですね。「輸血」しないと、若返らないといけないやしないかと思うんですね。そうなると事業への展開とか、ツーリズム

を含むそうした農業を営む、地域振興へと持っていく、と。そうした観点から草原をもう一度捉え直して見るのも、ひとつ手ではないかという気がするんですけども、すみません、いらんことを言ってしまいました。

りVII

いや、非常に大切な視点だと願います。

まさに「今、草原で何をするべきか」という、必要なことというのをですね、まさに廃死の状態になってるんだから、何がいいテープのようなもので傷口をふさぐような形でやつたってそれだけでは済まないもう少し「体力」を戻してゆく、「造血作用」まであるようなプログラムを考えていかなければならない。そうなってくるとそこには「人材の育成」という問題もあるだろうし、これは農家で言えば「後継者問題」ということになるかも知れませんね。後継者がいなければ新しい農村の住民をどうやって作り出すかということでしょうし、草原に馴染む人間が少なくなってきたというのであれば新しい草原に関われるような、そういう知恵と技を持った人達をどう育成していくかということでもあろうかと思います。更にその人達に対して新しい生き方だとか技術だとか、そういうことを如何にして授けていくか、あるいは新しい知恵というものを作り出していかかということでもなければならぬないでしょうし、それらが今の社会では経済の仕組みに乗っからなきゃいけない訳ですね。お金が掛かる訳ですから、お金がそれに伴って回るような仕組みをどうやって作っていくのか、この辺のことを真剣に考えてみる必要が出てきた。いわば「草原をビジネスチャンスとして考える」ということができるような条件をどうやって整えていくのかというのを非常に大切にしなってきているという問題提起は、これは恐らく「次のシンポジウム」あるいは「永遠のシンポジウム」かも知りません。みんなでそのことについての想いを交換していかなければならぬんじゃないかなといふふうに思います。

それでは、もう時間が迫って参りましたので、ここらへんで「まとめ」の方の話になっていくと思いますが、まずこれまでのところの話に付いて、またひとつコメントをいただきたいと思います。どうかよろしくお願いします。

瀬田

実は「まとめ」にふさわしくないかも知れませんが、最初に私がこの秋吉台とどんな関わりを持ってきたかということについて、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

今朝の早朝演説でも、ここ秋吉台には3億年の自然の歴史があり、そして人が開拓して2千年だとおっしゃってましたね。実は私は55年、秋吉台、秋芳洞と馴染みがあります。私はもう82歳でありますけれども、7歳のときにここに来たことがあります。それはどういうことかと言いますと、私の母親は防府(山口県防府市)の三田尻の出身で、唯一の叔母が越(山口県萩市)にいます。野原が終わった年は無理です

けども、昭和21年には母親に連れられて三田尻に降りて、そして若田という防府の田舎の方に行って、それから廻りいく。その廻には秋吉台、秋芳洞に来た、というのが私の最初の旅だったと思うんですね。

それからいろいろな仕事の関係で、特に環境庁の仕事をいたしましたから、ここで自然公園大会があったとき、初めて皇太子さまと雅子さまがいらっしゃったときには、もう役人は辞めておりましたか、その役取りをしたということでやって参りました。

その後に、実は私は朝日カルチャーセンターで「自然に聞く」というツアーを持ってた訳です。これは自分なりにエコツアードと思っておりますから、佐藤さんのエコツーリズムの想いと非常にぴったりとするんですけれども、それでここに来たことがあるんです。秋吉台の野焼き(山焼き)をテーマに、野焼きを狙って、東京から十数名連れて、朝日から沿って、「さあ野焼きだ」と思ったら音が鳴って中止になりました。これは仕方ないんで、「じゃあ、歩こうよ」というので、そこにいる山野呂だとか地元の方々と一緒にこの山上を歩くことにしたんですね。そうしましたらドドッとイノシシが7、8頭現れ出してきたんです。彼ら(東京からのツアー客)は(イノシシに遭遇したのは)初めてなんですね。まさかこれは野焼きをしたらこのイノシシはどうやって避けたんだろうかと思いましたが、私も写真を撮りたいと思ったのですが、やっぱりもライノシシの方がはるかに逃げ足が速い。

で、そのときに思ったんですね。エコツアーやエコツーリズムとか、私が企画をする時には、今北渓道に行って山の中を歩くとか流水の上を歩くとか、あるいは西表島に行くとかっていう企画を組む訳ですが、実は本州でそういうツアーを組むというときにはどうすればいいのかなというのを考えたんですね。まあ野焼きというテーマがあつたから良かったんですけど。

ただ、来こみたら野焼きはなくて、じゃあ山上を歩きましょうということで歩いたときに、説明された人はよく「こんな所は時々来るけど、車で30分位で通り過ぎたところだ」とおっしゃる。「しかし歩いてみたら、今までの自分の運命になかったものが随分発見できますね。だってイノシシ見たのが初めてですよ。」というふうになっています。

そうなっていったときに、実は「自然」というものは、新しいものは、決して期待していたものに出会えなくても、それに代わる別のものがちゃんと待ち構えている、そういうものが「自然」と私は思ってるんですね。ですからそういう自然に我々がどれだけ合せるか、自然がメッセージしててくれているもの、本来の隠れの舞台ではなくても、それにチャンネルを合せるのは我々なんですね。人がチャンネルを合せるしかないんです。自然の方は天気が悪ければ雪が降ることもあります。そういうことを常に考えるということが実はエコツーリズムなりエコツアーハンは大切だと思っています。

ですから私は廻をするときには、初編「時刻表」というの

は過度の手段として必要なんですがその前に「理科年表」がやはり手放せないんです。それは日の出が何時なのか、海であれば大潮がいつなのか、潮の干満がどうなっているのか、というものの中でツアーリストの組み立てていくということが必要になると思っていました。

ですからこの秋吉台で、勿論4月、5月の時期、あるいは春の青々とした草原の景色も、それは素晴らしいと思いますが、枯れ野であるときもまた素晴らしいと思います。そして場合によれば明日火が放たれるかも知れないというとき、しかしその火が雪で駄目になったときでも、それは「また来年を狙おう」ということになると思うんですね。そのときに、どれだけ自然に列して自分の心が近寄っているかによって、行ってみて「つらくなかった」と思うか、「また来年挑戦しよう」と思うかというようなことが分かれるのかな、というふうに思います。

これは今、先生のお話とは離れたかも知れませんけど、まあみんなさんも「秋吉台が大切だ」あるいは「何とかしたい」というふうに心配いりましょうし、佐藤先生にとっての問題は、秋吉台のみなさんと同じ、あるいはそれ以上かも知れません。それでそのところにあるものに、私達の方からいろいろなチャレンジを持って近付いて行くということが、私は大切だというふうに思っています。あまり「まとめ」にならないかも知れませんけども、物語していただきたいと思います。

（小川）

どうもありがとうございました。

朝田さんも随分と良い付き合いの中で、この秋吉台と触れ合ってこられたということで、その中のひとつの「知恵」ですね、「理科年表」を片手に接するというというのが、エコツーリズムのひとつのか法ではないのかということですか、この辺りからのいろいろな知恵ということになりますと、またそれの方方がお持ちだと思います。

さて「まとめ」の時間になっておりますので、ひとまずつ感想をいただいて、最後に私の方で締め括らせていただきますが、それでは佐藤さんの方からひと言、今日のシンポジウムに参加しての感想を、ひと言でまとめてください。

（佐藤）

田村さんが馬を引いて女性の方が乗っている写真、すごく心に響きました。私は「人道切り」、「草地焼き」を、「馬の道」という形で使うといいんじゃないかと思います。もし、トラックの道として整備することができなければ、馬車の道として整備してもいいじゃないかと思います。

イギリスのトラスト運動というの、原島はエンクロージャーとして囲み込まれる牧草地を住民が自分達がレジャーリーする権利のためにコモンズ（共有地）もしくは入会地として守ったという歴史でありまして、その中で20世紀の余暇文化、ツーリズムというものが花咲いた訳だし、ゴルフだってそうですし、フットバスの散歩のウォーキングも

そうです。私どもは日本においても都市の人が自分の生きるかけがいのない空間として草原にアクセスする権利みたいなものを受入ながら、共通の「道」として、歩いたり、馬に乗ったり、馬車で行ったり、自転車でとか、そういう形でいつもそれがツーリズムのルートとして使える形で、草地が切れるといいな、と思います。

（小川）

ありがとうございました。

馬がいた時代を思い返して現代版「馬の道」として「人道」を見直してみると、そこに新たな可能性があるのではないかというご提案でしたね。

それでは高橋さんの方から、今日のシンポジウムに参加してのご感想をお願いします。

（高橋）

私は三瓶にいますので「生業と草原」というものが身近な存在としてある訳で、例えば秋吉台のように観光のために火を入れる、あるいは植物を守るために草刈りをするという観点が、新しい原理の方法として、頻繁に耳に入ると、それは新鮮な思いがしていきます。

感じたことというか、先程お話をしたように「造血」ということを考えたときに、今までのような省庁から県に降りて地元に降りてくるというような「トップダウン」のシステムではなくて、今度は地元の力量が附わっていくだろうと思うんですね。ですから地域視興味を手にとって「ボトムアップ」のシステムに挑戦して欲しいな、という気がします。ですから逆に言えばそれだけの能力や人材が必要だと思うので、人材が唯一じゃないかな、という気がします。

それから生態という観点から言うと、草原がこれ程まで少なくなったということは、ある意味では希少価値を持っている訳で、その「ビジネスチャンス」と考えていいんじゃないでしょうか。だから言わば、先程おっしゃったように「草原文化」として、文化的な「資産」のひとつでもある訳ですから、法隆寺のように保護していくことも、決して古民権を守ることではないんじゃないかな、と思います。ただその「声」なり「データ」なり、「裏付け」をきちんとみんなで出さなきゃいけないんだなと、自分でも思っています。

で、その「文化」を守る上では、生態によって守られる部分もありますし、ツーリズムによって守られる部分もあるだろうし、ボランティアによって守られる部分もあると思うんですけど、キーワードとして「持続的な管理」とか「持続的な保全のあり方」ということが大事だなと思うんですね。ですから資源を資源として活用しようとしてもその資源を失うような生産や形態では駄目だということですね。

草原を構つ人達や、草原を持つてある自治体、そこにはむ地元の人達にとって、草原が森林に移ることも「草原が壊れる」ことだと私は思います。勿論生態学的に言ったう「森林の方がいい」という人もいらっしゃるでしょうが、

「想いを持っている人達」に会ってみれば、放置して草原が森林になることは「草原が壊れる」とこと言つていいんじやないかと思っています。

小川

そうですね。草原を放置するのも「自然循環」のひとつとして自然的にどうえた方がいいのではないかという、非常に苦いお話をしたと思います。

やはり資源というものを持続的に活用し、守っていく、持続可能な活用の仕方、そういうものを続けていくことが必要ではないか。そのためには何よりも先ず、「トップダウン方式」で中央省庁如何を考えているからそれを自分達のところはどうするかというような「逆立ちした論理」ではなくて、自分達の暮らしている地元から自分達の次の生活をどうしていくかということをきちんと見て、「ボトムアップ型」でいろいろな計画などを提起していく。そういう「力」がこれからは必要なのではないかという、非常に根本的なところでの問題提起をいたいたいと思います。

それじゃ宇佐見さんの方から同じように感想をお願いします。

宇佐見

私は単純に2つだけです。

ひとつ目は、私にとって稻作は非常に身近なものなんですが、草原は、稻作、水田では味わえない感動を与えてくれるところです。私にとって草原とはそういうところであると言ふことです。

2つ目は、齊藤先生のおっしゃることと重複するかも知れませんけれども、やはり一度、秋吉町の方達がどういうふうな形で秋吉台、上(秋吉台)と下(地元)が関わっているのかを見つめ直して、自分達の地域ごくちの内で秋吉台をどう生かしていくのかというものを作り上げていかないとけないんじゃないのか。その上で「できること」と「できないこと」、すなわち誰とどのような関わりを持っていくこと、作り上げていくことが草原、あるいは草原文化というものをもう一度「21世紀型」として作り直して、22世紀につないでいくのかという、そういう壮大なビジョンを「遊び心」が出发点でもいいから知れませんけれどもやってみる。そしてその中でどういうことができるのか、誰にどういうことができるのかということを具体化していくことそれがやはり大切ではないでしょうか。

今回、いろんな方とお会いできて、いろんな想いを持つておられる方と聞くことができて、非常にこのシンポジウムは私にとって刺激的でした。また今後もこういうような活動を味わえるような場に来ることが出来るよう急いでいます。以上です。

小川

はい、ありがとうございます。

先程佐藤さんのご紹介になった山焼き体験をした人の言葉の中にも、「ワクワク」、「ドヤドヤ」、「ハラハラ」、「爽快」というような言葉が過ぎましたが、まさに稻作農業の現場では得られないような感動が草原では得られるんだ、というところがこれは「価値」としてまとめて内容を深めてみる必要があるかも知れませんね。またそういうものをどうやって次歩にしていくかというところをもう一度みんなと一緒に考えてみようというご提案だと思います。

それじゃ田村さんの方から、よろしくお願いします。

田村

この場で失礼かとも思いますが、私が考えておることなり、お願いということをひとつ。

この場には美東町、秋吉町の西附良様方、あるいは議会の方方がおられると思うんですが、草刈りはどうしても、山焼きはどうしても止めることができません。それがどうして私共もこうした高齢化時代ですから、集落でいうと私共ところは28戸ありますが、その3分の2は高齢者の世帯です。そして、美東町長さんと秋吉町長さんにお願いなんですが(毎年2月の)第3日曜が山焼きです。明日がですね。これが雨が降ると第4日曜になる訳です。それが雨が降ると日曜(日曜日)に順延して平日実施になるんですね。こういうことがあります。そこで私共の後継者、若い人は昔と違ってみんな勤めを持っておる訳です。私達の時代はみな農業を耕しておったので後継者がおりましたが私もせがれがおりますが(平日実施だと共同作業に)私しか出られん(出るがいい)ない訳ですね。月曜(平日)は若い者が(山焼きに)のため(仕事を)休むことが困難なんですよ。そうすると林をついででも(秋吉台に)上がらなければならないことになる訳です。

そこでボランティアとか、執行部というか牧場というか消防署というかの手伝いが欲しい訳です。ですからひとつお願いは、第3日曜、第4日曜という(山焼きの実施日は)日曜日をかたどるような方法にしていただくと、私はいいんでなかろうかと思うのがひとつです。

それとさっき馬のことを言われたけど、私は小さいときからずっと、爺ちゃんのその前傾から農耕用の馬、今の世と違ってみな畜産で耕耘しておったんですから、これに應わせる馬を刈りに、お父さんと(馬を)連れて(秋吉台に)上がっていました。私がそういう關係で草刈りは、昔の言葉で言えば高等科(旧制の高等小学校)の頃からやっておりました。そして青年学校を卒業した頃に「草刈り競技会」がありまして、小さいときからやっておるから、自分の目標のようなど、技術がある。いくらか付いておる訳で、だから青年団から(草刈り競技があるか、あなた出でくれんか)と言われたときに、まあ自分の勉強のために出たことが昭和22、23年頃だったと思うんです。

それで昭和35、6年頃になって(農業が)機械化になりました。そして食料もたっぷりあるようになりましたので、秋吉台まで行かなくても、田んぼでさえも耕作が始まったよ

うな時代ですから、そういうような馬で遊ぶよなことが必要なくなつたから、豊馬として何かこれを使おうと思って観光馬車を想い立った訳です。ですがまだ不慣れでございますから阿蘇山とか周囲砂丘とか小さな島とか、研修と言つたらしいのですか、見に行って始まったのが昭和37年です。

そうしたところが、始め頃は、さっそく言ったように天然記念物、文化財ですから、ここに馬をつないだらいけないとか、ここを通ったら(道が)ほげる(穴があく、壊れる)とかいうような問題があつた訳です。でもそれをなんとかして、秋吉台の麓で暮らす者としてせんとか頑張ってやつた。(秋吉台と)私達の一番の命のつながりはやはり保存でしたね。でも遊ぶことち出来なくなつた(馬や肥料として利用することがなくなつた)し、(昭和)35、6年になると化学肥料が出来ましたから馬に(農業が)出来たようになつた訳ですね。だから(農業への)馬の利用をあきらめて、そういうことで始めたのが観光馬車です。

(当時)そこに36人おりまして、その内で私がまあ若いモノ(者)でした。そして一晩まで若さが続いておりましたので続けておりましたが、諒めて現在は馬も農事もおりません。残念です。

その観光を活かしたいのが私ですけれども、(観光馬車の方も)新規者が多いなくて若い者にいろ(ハ)ウ昇進して、町長さんからも「どうか駆けてくれ」という言葉ももらいました。でもねえ、大きい力がある動物ですから、そういう力がある動物を扱いきる人でないと、お客様は素人ですから「もしか」というようなことがあるといけませんから、扱いきれるような技術がないとできないから、なかなかハイ、観光馬をやりましょう!ということにならぬですね。

そういうことですら、なんとか、今日は「山焼き(シンボラム)」ということですから、死程に限りますけど、東東町の町長さんと松原町の町長さんと考えていただいて、出来ることでしたら白曜日に、遅くなつても白曜日に、(山焼きを)していただくと私も幸せかと思うのです。この場でご照れですけど、ハイ、以上です。

小川

はい、ありがとうございました。非常に具体的、切実な感じが流れましたけども。

いずれにしても、こういうところで出てきた「課題」というのは、それ自体具体的に解決していくなければならぬことがあります。それと同時に、やはり全体として、こういう草原をどうするか、あるいは草原を守るひとつの技術としての山焼きというものをどうして持続できるのか。もし持続できないとしたら、一体その代替案はどういう形で展開すればいいのか。草原の全体を守ることができるので、その中ではシーニングをして観光用に見せる草原、あるいは技術的に代替案を考える草原、あるいは自然といいますか、それに任せたままで森林化することもやむなしとする草原、そういう、「シーニング」と言います

けれども、地区を分けて管理することも必要になってくるのかも知れません。

また、実際にはまだ、そこには様々な権利関係というものがある訳ですから、自分の権利があるにも係わらず、様々な規制の中でそれを活用できずにして、負担だけが来るということに対する不満というものがうつせきするということになれば、結果としてみれば、せっかく固定公園というふうに、「活用しながら多くの人々にその公園としての機能を提供する」という概念そのものが崩れてしまいます。様々な意味でこの「草原」というものが持つてあるテーマというのは、21世紀、どれもこれも逃してはならない重要な課題だろと思います。

今日のこの話し合いの中では、「まずは草原」というふうに言うのではなくて、草原と人間の関わりという「草原文化」として、もう一度見直してみようじゃないか。今まで個別別々に考えられていた個別科学の中での草原のとらえ方ではなくて、できれば「草原学」といったようなことを構築することも必要ではないか。ただ単に「ビジョンを描く」という時代を超えて、次の「行動を起さなければならない」ということになると、「草原に携わる作法」というものをもう少し明確に確立していく必要があるのではないか。こういったテーマは、恐らくこの日本の中では非常に希少価値になつた草原を守っている自治体の共通の課題ではあるかも知れませんが、この地方の自治体がむしろ積極的に、こういう草原の「環境計画」というものを立てて、その「環境計画」をもつて国の省庁と連携する必要があるのではないか。そういう意味では道の省庁に対して一緒にこの問題に付いて考えてもらえるような「仕掛け」、あるいは「調整」と言うものを求めていくことが必要ではないか、という話をありました。そして出来れば来年度、ボランティアの話が今年は出来ましたが、「ボランティア国際年」としてはふさわしい年になりましたが、来年は「エコツーリズム」の国際年と云ふことになっていますから、それをきっかけにして出来れば「世界の草原土コツーリズムシンポジウム」もし規模を小さくするとしても国際的な観点から向じようの関心を持っているアジアの「草原文化国際フォーラム」と言ったようなものを提起することが良いのではないか。かなりいろいろなアイデアが出て、どちらこれも検討に値する提案であったかと思います。これは冒頭にあった串本先生からの問題提起に十分に応え得るディスカッションもできたのではないかと思っております。

非常に熱心な質問をしごいていただきました(アリストの)万々、そして有意義なコメントをつけて下さいました瀬田さんに、拍手をもってこの会を締め括りたいと思います。どうもありがとうございました。

司会

ありがとうございました。

大変熱心な1時間50分に渡るご討議、お疲れのことと思

いえす」松吉台からアジアが、そして21世紀が見える、大変
乗りのあるシンボジウムになったと思います。今一度大盛
な拍手をお送り下さい。ありがとうございました。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
全国山焼きサミットin秋吉台 ■

■サミット

全国山焼きサミットin秋吉台

北海道小清水町	企画振興課長 阿部 潤一	高崎市甲斐市	市長 野邊 修光
奈良県吉野村	収入役 平田 徳和	山口県美祢市	助役 小竹 伸夫
島根県大田市	商工観光課長 松村 淳真	山口県美東町	町長 清水 武人
大分県久住町	商工観光課長 川越 賢二	山口県秋芳町	町長 上利 礼昭

□云

それでは時間がまいりましたので「全国山焼きサミットin秋吉台」を始めさせていただきます。

まず今回のサミットへの参加者のみなさまのご紹介をいたします。北海道小清水町からは町長代理で企画進行課長の阿部潤一様。奈良県吉野村からは助役の平田徳和様。島根県大田市からは市長代理で観光商工課長の松村淳真様。山口県美祢市からは助役の小竹伸夫様。大分県久住町からは町長代理で商工観光課長の川越賢二様。宮崎県串間市からは市長の野邊修光様。山口県美東町からは町長の清水武人様。山口県秋芳町からは町長の上利礼昭様。以上のみなさまによりまして熱心なご討論をいただこうと思います。本サミットの議長は地元秋芳町長の上利礼昭様にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

上利

それでは只今、司会の方からご指名をいただきましたので、慣例に従いまして、お許しをいただきまして、本サミットの議長の大役を勤めさせていただきたいと願います。いずれ不慣れでござりますし、こうした経験もございません。ご参会の皆様方のご協力をいただきまして、恐られた時間ではありますか、素晴らしいサミットになりますよう、ようしくお願い申し上げます。

本日は先程来お話をございましたように、北は北海道、南は九州から、8つの市町村の代表の方にきていただきました。草原を取り巻く環境に付きましては先程、我が町の博物館長が「基調講演」で申しましたように、極めて草原を取り巻く環境は厳しい環境にある訳であります。地域地域でそれぞれの実情も異なりますし、それなりに「課題」もお持ちだというふうに思っております。

今回のサミットは数えまして第4回ということになると思っております。第1回は、大分県の久住町で催されました。で、



その後大田市さん、そして小清水町、とああこういう形で今回ここの大田町、秋芳町でこういう会を持つことになりました訳であります。今までこのシンポジウムに、あるいはそのサミットに付きましても「野焼き」という、あるいは「草原」という言葉がありましたけれども、今回特にサミットに付きましては、秋吉台を取り巻くこういう行事等々は「山焼き」とまあこういう呼び方でよく伝わっておりますので、あえて今回は「山焼きサミット」とまあこういうことでお願いをしている訳であります。その辺に付きましては、どうぞよろしくお願いを申し上げたいと思います。

先程来申し上げましたように草原を取り巻く環境は、農耕、あるいは社会環境等々の変化によって、大変変わってまいりました。これをまあどのように今後維持管理をするのか、あるいは現状はどうなっているのか、本日ご参会の皆様等々の発表いただきまして、そして後ほどできますならば、井筒課題の「宣言」というところで、ご協力をいたたければ大変ありがたいというふうに思っておる訳であります。従ってまあ大変あの恐縮ではござりますが、時間も限られておりますので、まあお手短く各市町村の実情に付きまして

御頭かり現状なり、王たるるの種的問題等々があれば、ご発表をいただかず大変あります。というふうに思っております。はなはだ失礼ではございますが、私の方でご指名を申し上げさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いを申し上げたいと思います。

それでは、昨非第3回の草原サミットを実施されました。北海道の小清水町さんからお贈りいただきました。ありがとうございます。よろしくお願いします。

両面

小清水町の両面でございます。まずもって昨年六月に、私共のところで第3回目のシンポジウムを開催させていただきました。全国各地から大勢の方にいらっしゃっていただきましたこと、心よりお礼を申し上げたいと思います。また本日は町長がどうしても離れない用務がございまして出席できなかったこと、お詫びを申し上げたいと思います。

さて私共の野焼きの施設でございますけれども、「原生花園」というところで、病院固定公園の中の一部分でございますが、砂丘のところ、それと層疊地といふのがございまして、そのオホーツク海と遠洋湖に挟まれた砂丘地帯が原生花園となってございます。これらの位置関係に付きましては、ま、ロビーの方にパンフレット等ございますので、ご覧いただきたいと思います。

さて野焼きでございますけれども、実は昭和50年頃から私共の原生花園、百万人近くの観光客の方に見えていました。それでございましたけれども、放牧を中止した、それから、実はまあ、そのところに割合本縁というJPNの路線がございますが、そのところでは気候開拓が廃止になりました。ゼルト開拓になったというようなことで、半廃止しておきました。「野火」がなくなりましたと、こういうようないろいろな状況が重なりまして、あのー、既存の花々、エゾスカシユリ、エゾキスグ、ハマヌス、それからセンダイハイ等、大変変遷していったと、こういうような状況が頭腦になってまいりました。そういうようなことから本町では、昭和50年からですね、あの本町独自で5年まで野焼き、これは湖側をした訳でございますけれども、学術的な、ま、調査の不足というようなこともございまして、「野焼きをしたからどうなった」というようなことについても実際は判らなかったというのが現実でございます。ただ、平成2年から北海道の方を中心となりまして、私共も入りまして、対策協議会を設置していただきまして、その中で、本年までずっと野焼きを部分的に、いっぺんにする訳じゃなくて、地域を分けながら野焼きを続けてきたところでございます。

まあ、その成果等については、いろいろなものが回復してきたということもございますし、また新たに問題が生じてきたという部分もございます。野焼きをすることによりまして、いろいろな形で復活してきた花々が多くあります。その反面、実はまあ、ネナシカズラというような寄生植物がございまして、これは野焼きすることによって逆に発芽が促

進されて、年々になるという現実も出てまいりました。こういうような問題点も現在ござりますけれども、相対的には野焼きをすることによりまして、花々がある程度復活をしてきました。「これは結構強くやつていかなきゃならぬ」というように考えてございます。

ここで研究も行われてございまして、現在北星学院大学の教授でございます・辻井泰一先生、それから本日お見えでございますけれども、筑摩大学の津田一智先生、それから北海道大学の雷士田裕子先生が、生態学研究をしていただいてございます。その成果等についても、若干触れさせていただきたいと思いますけれども、ま、その研究の中からやはり5年サイクルぐらいで野焼きをしていくことが一番良いんではないかというような方向性が若干見えてまいりました。その原因、あの状況というのは、毎年毎年、野焼きをしておりますと、花の数が減ったり、それから、ま、秀才できなくなったりというような状況もでます。5年サイクルくらいが適当なのかなというような、今現在方向性が見えてきてございます。

それから私共のところ、先程申し上げましたように、昭和33年に固定公園に指定されて以来、ま、大変多くの観光客の方にいらっしゃっていただいておりますが、現在固定中でございます。第4次総合計画の中でも、私共の町、「自然と共生する町を目指します」というようなことで、それを大きな目標に掲げて、町づくりを進めようと、こういうことでございます。そういうような意味でも、大変原生花園の野焼きというの、重要な課題になっておるところでございます。

また、私共のところの今後の大きな課題といたしまして、先程お話をございましたように、野焼きは行政、それから割合権開拓が中心になって行っておりますけれども、今後ブルンティアの方々を、どのように巻き込んで町全体でやっていくかということも大きな課題だとこのように思っております。また野焼きばかりではなく、私共、今半は過時期に「抜き取り」って言うんでどうか、先程申し上げましたネナシカズラを抜いてしまうとか、それから、アメリカオニオザミという植物がございますが、これも過時期に抜き取りも併せて行なながら、原生の回復保全を図っていきたい、このように考えておるところでございます。

大変あの短い時間で、舌足らずでございましたけれども、そのような取り組みを今後とも進ますと進めてやっていきたいと、こういうことを申し上げまして、簡単ではございますけれども、現状の報告とさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

上利

どうも、小清水さんありがとうございます。それでは原良原の曾根利さん、座られたままで結構ですから、よろしくお願いします。

平田

豫ったままで失礼いたしました。奈良県からやってまいりました。この山焼きサミットに付きましては今回初めての参加でございます。そういうことでございますので、山焼きの現状、それから村との課題とともに踏まえます前に、少しだけ私たちの村の宣伝もさせていただきたいと思います。

奈良県益田村といいまして、かなりまあ「そこに」と読んでいただくことが少ない訳なんです。位置的には奈良県のはば中央部から東の方へ上がりまして、三重県との境にある小さな村でございます。大部分が室生赤目青山国定公園の中にございまして、村の面積は47.84平方キロメートルという小さな村でございます。昔の室生火山群の噴火の後で落ち込みました谷間にできた村でございますから、柱状節理の山々が周りを囲んでおります。そういう山岳地帯と、それから、これらから申し上げます「曾爾高原」、こういう中にの自然の豊かな村ということでございます。人口は2,470人ほどでございまして、世帯数800ほどあります。気候的には内陸的気候でございますけれども、まあ夏は涼しく冬は厳しいということでございます。

続きまして曾爾高原のことですけれども、曾爾高原という名前は、かなりまあ、近畿圏の方では知っている人とは思いますが、全国的には知名度は薄い訳ではございますけれども、一帯全てススキが自生しております。以前は牧場なり、また植林ブームの時には植林をされた、ということであった訳なんですけれども、今現在は、奈良県に県有地となっておりまして、そして奈良県の委託を受けながら、吉龍村の村人で山焼きを行っているということです。焼く面積はこの秋吉台に比べて樹がないほど少ない訳でございますけれども、面積としましては348.68ヘクタールであります。ですから、約35町歩というほどの面積でございます。参考までに山焼きにかかります部分の金額的なものに付きましては120万ほどの金額を計上して、そして山焼きを行っております。

どういうような山焼きをやってあるかということでございますけれども、この山焼きに付きましてはウチの村に住む人の集落がございまして、曾爾高原のある集落の中の五ヶが共同体でやっていただいているということでございます。約80戸の方々が「出あい」という形をとりまして、そして昔から山焼きをやっていただいている村です。どんな作業をどうすることに付きましたは、まあ他の町村も同じだとと思うんですけども、まず始めに9月の下旬から10月の上旬くらいに「焼切刈り」というものを行います。これは防火線を確保するためでございます。周囲に植林した山林がございますので、そこに飛び火をしないということのために防火線を作ります。まず焼き切り刈りを行います。それを行った後、次には「焼切焼き」と申しまして、これは10月から11月に防火線に刈りましたカヤを焼ききってしまうと、そういうような作業を行います。そして最後に通常「山焼き」を行う訳でございます。また、時期的には3月の下旬を予定してやっている訳



ですけれども、なにぶんにも天候が左右しますので、なかなかその日にできないというようなことがあります。けれども、大体3月の下旬から4月の始めに焼いてしまうことです。これに付きましては崖落の方60軒で、100人程出でいただきまして、そして安全を確保しながら、まず防火線の方を焼いてしまいます。そしてその後、内側から、まず崖落の方から、上方から焼いていきます。そして崖落の見計らいまして、下方の方から一気に焼いてしまうという作業を行います。ですからタイミングが非常に難しいし、危ない作業ですし、生えていたのが全てススキ、ウチらの方では「カヤ」とか言いますが、それですので、かなりのまき火が炎となって煙をまいて天空に昇っていくということでございます。時間は大体、3月の下旬の日曜日ぐらいに行います。10時半から大体2時間くらいで焼ききってしまうというような状態です。

今現在曾爾高原も、ススキが自生しておる訳でありますけれども、最近はハギがたくさん生えてきまして「刈る」ということにいたしましても、また「山焼き」をいたしましても、やはり根が、茎が残ってしまいます。そんな關係で、その部分に付きまして、まあ抜き立てるということで、平成13年の予算といいましたは、いくらかの、ハギを抜いてしまって、ススキだけを残していくというようなことで予算を計上しております。また、その部分に付きましたは、ウチの村としましては、その地域に「国立曾爾少年自然の家」というのがございまして、車の乗り入れ等に付きましたは、禁止をさせていただいておりますので、そのままの形でやっていきたいと思っております。

なによりも、昔からこの山焼きは、村の方々が伝えて、そして残していただきて、毎年美しいススキを残していただきております。村としましても、やはりこれを守って、そしてまた後世に伝えていく、这样一个ことで考えております。またいろいろなご意見をいただきたいと想いしますけれども、簡単であります。報告なり、をさせていただきました。失礼しました。

上村

島根県大田市さんどうもありがとうございました。それでは第2回目の山焼きサミットを開催されました島根県の大田市さん、よろしくお願いします。

松村

島根県大田市からまいりました松村でございます。よろしくお願いします。あの島根県の大田市には「三瓶山」という山がありまして、そこが草原風景が美しいということで、昭和38年に国立公園に指定されたという経過を持っています。

で、私が、商工観光課の人間がこうして代理でまいりましたのは、実は今年度、「新観光計画」の策定ということを行っておりまして、とありますのも、ここ数年、私共の大田市では、この三瓶山エリアと石見銀山という昨年の11月に世界遺産登録の暫定リストに入りました場所がござります。これは1500年代から江戸時代の1600年代の始めにかけて、銀を産出した場所でございまして、その産出された場所が大田市の大森という町の「佐摩」という土地だったのですから、それが海外に出ますと「シマ銀」というふうに、結構その時代にはヨーロッパ遊びで「シマ銀」と呼ばれた銀を大量に出したところであります。その趣によって、秀吉は大阪城を作り、そして宍戸幕府の初期はその財源を石見銀山で支えたとも言われております。

ですが、そうした「観光」という産業が最近衰退しておりまして、と申しますのは大型バスが減ってきたということが一つの要因、それから観光行動が変わってまいりまして、ということは当然消費行動も変わる訳であります。そのことに対応ができるといふことで、入込み客が減ってきております。それを向こう10年間、なんとか建て直したいということで、この1年、今日ここにも参加していただけております「緑と水の連絡会議」の高橋泰子さんにもお会いしてお会いいたしておりますが、12名のメンバーによる委員会で対応を協議していただけております。で、2月の末にはその答申書を作成する訳でありますけれども、これまで9回論議を重ねてまいりまして、意見しますと多分36時間くらいを、論議を重ねてまいりました。で、その委員構成というのは、多くの場合、簡便団体の長を集めた構成になる訳でありますけれども、この12名の委員にはそうした団体の長は入れないと、そして向こう10年間の消費行動をする中心世代になる人達の、いろんな各層の人を入れましょうということで、12名の委員の平均年齢が45歳でありますから、まあ若い委員会で、非常に面白い論議を重ねてまいりました。その中でやはり、私共の抱えておる三瓶高原の草原エリアというものは、温泉よりも、まず草原の美しさというのが先だらうと、日本人は温泉が好きでなければ、温泉は島根県には「玉造温泉」というネームバリューのいい、あちこちに人が流れる温泉があつまっています。やはり温泉から売っていこうという論議を続けてしましました。

で、山焼きというのは1989年から実施しておりますけれども、その広さというのは三瓶高原の面積、草原が150ヘクタールに増えてきたのであります。「西の原」という場所で野焼きは今50ヘクタールくらいです。で、このボランティアの方々も参加されてますが、この山焼きも観光素材にしようではないかということで、その観光素材として取り扱っていこうという論議を既にしてあります。ただ、從来から山焼きをする関係者、市役所でいえば農林課は、非常に危険だからそれはやめてくれ、というのが従来の立場だったなんですが、その山焼き、野焼きも管理をきちんとすれば十分に観光素材として考えられるんではないかといったことで、そのことによって「草原の面白さ」というもののすそ野を広げたいという意味合いもござります。

この草原というものが、皆さん方ご承知のように入放牧や野焼きをしないとどんどんその慣習が流れていくというのは、実は私ついに1、2年の間に教えてもらった訳であります。ここにお集まりの皆さんからすればとんでもないド素人がここに出てきて話を聞いておる訳であります。ただ、その野焼きが行われた、あるいは放牧がされておる場所に、昨年は中学生が生活体験といいますか、いろいろな職場に出向いていて2日間ほど、実習をするカリキュラムが取り入れられて、中学生のグループが石見銀山でありますとか、この三瓶高原の西原にまいりました。そこで、今日この発表会でも出ておいでになりますか。河村さんという方の奥さんと高橋さんにも講師になつていただいて、中学生に草原を案内してもらいました。そうしましたら、もちろん牛の糞があって、草原が、それこそカヤで覆われていたものが、3年目、4年目になるとこんなにきれいになって、野草が新たに出てきている、その実情をつぶさに見てもらつて、そのことを中学生は大変喜んでいたと思います。で、中学生以上に私も非常にそのことが面白くて、あ、これは本当に、あの、牛の糞といふものを利用、活用しながら、草原の維持をするのは非常に面白いものなんだなあと改めて知ることができました。

そういう経験から、こうした「草原サミット」があるから出てこないかということで応じた経過もござりますけれども、山焼きをする、そして牛が放されて、そこに可愛い草花が咲いていく、こうした姿というのをより多くの人、あるいはより多くの子供たちに提供するのは非常に面白い素材になるのではないかなどということを感じております。そうしたことからこのサミットにも参加させていただきました。そういう立場で今後の観光振興にも活かしていきたいということで、ま、ご報告をさせていただきます。以上でございます。

上村

大田市さん、どうもありがとうございました。それでは山口県美祢市さん、どうぞ。

小竹

秋芳町さんとは誠、まあ地元でございますが、西階の町の美称市でございます。先ず私共の市の紹介を少しごさせていただきますと、市の中心を川が流れております、東半分は秋芳町さん側でもございますが、これは石灰岩地帯でございます。西半分は石炭地帯でございまして、元々その石炭を産出するということで先達した街でございまして、この石炭が「無煙炭」という、煙やしても煙が出ない炭でございますけれども、明治38年の日露戦争で船に使われて非常に活躍したということから、國が力をいれて歓迎もびき、炭を産出したというところでございます。ま、昭和40年代に燃料革命、石炭から石油に変わりましたものですから、喪失をいたしまして、当時、從業員3,000人から4,000人一族をあわせて12,000の人口が一挙におられなくなつたと、過度になつたというところでございます。現在は石灰岩を産出しておられますので、セメント原料として採掘して、セメント工場が稼動して産業の中心となっておるところでございます。

先程の上利町長さんの山焼きのお話でございますが、地獄ではございませんけれども、下が大理石の地帯で、「於福台」というところで以前は山焼きをやっておりましたけれども、戦後開拓団の入植地として開拓されまして、現在は梨の生産をしておられるというところがございます。ま、山焼きについてはその程度のことでお話すればいいですけれども、

いかれにいたしましても隣接しております山は、地下資源の方が高くて木の方は、まあ全然金にならないという現在でございますので、地下に埋まっている石炭の方が有効に利用されるという土地柄でございます。最近は「石炭に変わる産業」ということで(企業)活動を盛んに致しておりますけれども、現在の情勢ではなかなかうまく回らない言ふしているところでございます。以上でございます。

上利

はい、どうもありがとうございました。それでは第1回目の「野焼きサミット」を開催されました大分県の久住町さん、お開きいりこします。

川越

大分県の、第1回目の大会を開催させていただきました、大分県の久住町から参りました川越と申します。本日は4名ほど参加させていただいております。本日は、この「野焼きサミット」といいますか、この大会の「火付け役」であつたウチの山田理事が急遽来れなくなりまして、私、リリーフといいますか、全然ブルベンにもいませんでしたし、肩慣らしもしていないのに、いきなりリリーフということでござりますが、何とかご報道を致したいと思います。よろしくお願ひいたします。

まず第1回目で野焼きになつた方はご存知かと思いますが、久住町がどういうところなのかというところを少しご紹介



して、それから「野焼きの現状」に行きたいと思いますので、

ウチの久住町というところは九州のほぼ真中に位置しております。「阿蘇くじゅう国立公園」が町の土地の約半分を占めています。人口は僅か5,000人、この間はちょっと切っておりましたが、面積はものすごく広いんです。150平方キロぐらいありますから相当な面積になります。久住高原は約5,000ヘクタールくらいあります。ちょっと示されたところとか牧草改良したところなどありますので、実際には野焼きをするところは1,000ヘクタールちょっとくらい。そのくらいの面積を毎年野焼きをしております。人口は5,000人足らずですけれども、牛の方は全然減少しておりませんで、牛育農家は減っておりますが、牛の方は人口よりも多く8千頭以上ですかね、「7千頭を目指そう」ということで今畜産家の方が頑張っていらっしゃいます。

野焼きについてなんですが、一昨日でしたか、ウチでは農政課というところが野焼きを担当しておりますが、今年はどういうふうにやるんだとか、どこでグループがいつやるんだとかですね。あのウチでは(野焼きを)一度にはやりませんので、大体一番早いところで2月の25日ですか、次の日曜日から始まりますが、3月の末日までに各団体ごとに分けてやります。今年雇用が出てる方が23団体あります。先程申し上げましたように焼く面積は約1,000ヘクタールです。

「何で野焼きが必要なんだろうか」ということが先程からちらちら出ておりますが、当初「火付け役」だったウチの山田理事の方はですね、東京生まれの東京育ちなんですね。それで久住高原辺りに来たときにはびっくりなさったと思うんですけど、の方辺りが考えておられるることは恐らく、これから21世紀に向けて環境を、環境問題が生じて「野焼き」ということに結び付いたのではないかと思うんですけど、私の場合は久住町に育つてもう53年経つしておりますが、小さいときですね、ウチも効率農家なんですね。昔農家だったんですが、8つか7つぐらいのときから親父に連れられて久住高原に行って、昔ですから今のように機械で草刈るんではなくて、「大縄」っていってですね、2mくらい

物のある大きな旗があるんですけど、それで朝早い内から刈って夕方帰ると、そして冬の寒い時期に草原に乾燥して小積んであった干草を牛にかかるさせて(背負わせて)帰ると、そういうのに連れられて行っておりました。それで片道が朝6時くらいあるものですから、6時か7時のときには、もうさつけて、帰りは牛の背中に乗せてもらって帰ったとか、そういう経験もあります。そういうふうな形で、もう中学生の頃には、今度は野焼きに連れて行かれてですね、先ず広い草原を野焼きをするときに、自分とこの牧場した草を積んでいるところ(干草の集積場所)がある訳なんですね。その周りを「焼け焼き」というんですけど、その周りを先ず焼いておいて、後で全体を焼いたときに干草に火が移らないようにという「焼け焼き」というのをするんですけど、それは草を所有している人がやらなくちゃいけないんで、親父なんかと一緒にそういうことをやっておりましたので、「朝で野焼きをするんだ」とか「どうしてしなきゃいけない」というそういう感覚が全く無くて、最近になって「ああそうか」というふうなことを覚えた訳で、牛を放っているから当然草を刈った後を「片付ける」というか、粗い草が立っているからそういうものを片付けるために焼いているんだな、程度の感覚しかなかった訳です。

まあ私なんかは「野焼き」とはそういう感覚なんですが、今年、野焼きに「アマテュアの方」というと感覚がありますけど、昔からそういうふうに草原を利用されてない方が最近参加されるというような「野焼きの感想」というのが段々出来てきています。久住町にそうした団体が3つあるんですけど、先ず一つ目は第1回目の「野焼きミット」が開かれた平成7年ですからね、そのときに地元の牛を焼いている牧野の組合員の方がボランティアの方を受け入れようということでそのときから始まっています。その組合はやはり120~130ヘクタールくらいを所有しておりまして組合員の方々80名くらいいるんですけども、当初は「人手が欲しい」とかいうことじゃなくて、「社会の方たちとの交流」という形で最初は「野焼きの受け入れ」をしてあります。それも毎年交流がなされておりまして、毎年来る方はほとんど決まっておりますけど、多いときには40人、50人という方に来てもらっています。そして地元の方達と歓喜的な想がりもできておりましてですね、「ウチの家に遊びにおいでよ」とかですね。例えば「シタケができたから送ってあげる」というと向こうの人が、海辺の人であれば「魚のおいしいのが手に入ったから送ってあげる」というようなことがあります。そういうふうな想がりまで出来ているようです。

それからもうひとつのパターンは3年前から、あ、お時間もうちょっとよろしいですか、3年くらい前からですけど、以前野焼きをしていたところ(団体)が他の山に野焼きさせてしまって損害賠償を要求されたと、そういうことでお年寄りの方も多かったので「こんなことならもう止めようや」ということで止めてたんです。ところが地元の4、5人の有志の

方が「これじゃいいかん」「やっぱQ野焼きをせんと草原はめちくちくになるじゃんないか」ということで立ち上がりまして、それに報道機関の方も協力していただいて新聞で「野焼きのボランティア募集」というのをやったんです。そしたらそれでやはり数十名の方が、大分市内の方とが野焼きを全然やったことがない人達が集まっています。それで野焼きをやっているところもあります。これなんかは地元の方ガリードしてやっているので、これからも結構上手く行くんじゃないかなというふうに思っております。

それからもうひとつのパターンは、久住山のちょうど中腹にいるんですけど「坊がつる」というところがあるんです。キャンプ場なんですが、芦洋子さんの唄で「坊がつる賛歌」というのをご存知かと願いますけど、その発祥の地なんですが「坊がつる」というところがございます。ここはやはり80ヘクタールくらいの広さがあると思うんですけど、もう37、8年間ですね、野焼きをやめていないんです。それまでのやはり放牧の牛がそこまで行っていたんで地元の牧野組合の方が野焼きをしていましたけど、もう利用しなくなつたということですと30数年間野焼きがなされておりませんでした。そしたら、そういう環境に關心のある方とか、いろんな方ですね、今日ここに来場者の九州地区の所長さん、団長さんもそこにお見えですが、環境省の方なんかも一緒になり、それから自然を守る会とか、勿論久住町、隣の久住町とかですね、それからある企業の方なども非常に興奮になつて「坊がつるの環境をもっと良くしよう」と、そういうことを先程来てますよ!自然の華が無くなってしまうよ」とかですね。それからもうひとつそのときに言われたのが、元々私は消防署の出身なんですけど、キャンプに来た方が使った火の不始末で1年に何回となくキャンプ場の周囲の山火事が起るんです。ですから山火事防止も兼ねまして「坊がつる」というところのキャンプ場の野焼きをしてあります。昨年から始まりましたか今年も3月24日の土曜日にやる予定にしてあります。これはもう完全なボランティアですね。そういう実行委員会組織を作りました。その会長の方も久住ボランティアです。そういう形でやっています。

そしてもう最後ですが、そこの入口のところにポスターを3枚掲示しておりますが、ウチは観光課の方でポスターを作ったときに、野焼き等は直接ございませんが、タイトルとして「山は天才である」「牛は天才である」「草原は天才である」という3枚のポスターを「天才シリーズ」として作りました。それでひとつ、そのキャッチコピーの面白いのがあるので最後にご紹介いたします。「牛は天才である」というところのキャッチコピーがですね、「牛は草を食べ草原を造る。牛は高原の庭師である。牛の堆肥は有機農産物を作る。牛は久住の農夫である。」そういうキャッチコピーを入れてあります。それからもうひとつですが山の方の「山は天才である」というキャッチコピーがですね、「山は草を育む。山は水を育む。山はすべての命を育む。山

は命の母である。」と、そういうふうなキャラコピを入れてあります。大変時間をオーバーしまして済みません。どうもありがとうございました。

十一

どうも久住町さんありがとうございました。それではお忙しい中岡市でんお距しください。

850

私の年間市は青崎県の最南端に位置する訳であります。昭和28年に市制施行をしいた訳であります。が、当時4万3千近い人口であります。今はもう2万6千台ということになって、道筋の一途をたどってしまっておる訳でござります。面積294平方キロ、その中で海岸線が77キロございまして、この海岸線のほとんどが「日南海岸国定公園」に指定されている訳であります。従いまして農林水産業が主幹産業となります。と同時に観光面での活用をしていきたいということで、その中でも特に「都井岬」という、皆様方ご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、野生馬の産地がある訳でございます。

その中でいろいろなイベントを計画しておる訳でありまして、「ショギング都井岬」とかあるいは「火祭り」、あるいはまた「とび角すくい」、まあそういう諸々の計画がなされていく訳であります、何の方にも第3セクターで運営しているホテル等もございまして、以前は70,80万台の入込み観光客がございましたけれども今は30万台になってしまっておるということでああこの「都井岬」に付しましても野焼きをやっておりますので、これらが何とか生かせないだらうかということで参加致した訳であります。

まあこの「京都井神」に付きましては約500ヘクタールを牧相合というのが運営しておる説であります、野生馬が國の天然記念物に指定され、またソテツの自生地として「川原」ということで3,000本のソテツが特別天然記念物に指定されている説であります。その中で今114頭の野生馬が生息している説でありますけれども、500ヘクタールの中の1/5が50ヘクタールが毎年野焼きをやっている説であります。



新しい単の生成を計るという目的で行っておきます。今年は週日、2月の10日に野焼きの方は済んでいたる訳ではありますか、これもひとつ何かのイベントとして活用できないだろうかという考え方を持つている訳であります。ああみなさん方のご紹介にありましたような広範囲の野焼きではございませんが、観光面で活かさせていただきたいと、まあこういう考え方を持つて参加させていただきたいしている訳であります。簡単ではございますが、私も特別、準備致しておりませんので、以上で終わらせていただきたいと思います。

上册

串間市さん、どうもありがとうございました。

それでは「秋吉台」のことに付きましては奥東町の清水町長さんの方からご報告をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

清本

美里町の清水でございます。秋吉台に付きましては、先程庫本路長さんの方からですね、秋吉台が出来た当時から現在に至るまでの、また現状に付きましてのいろんなお話をございましたけれども、まあそれぞれ秋芳町と美里町が現在守っている訳であります。そういうことで現状の草原が保たれているというような状況であります。

現在1,500ヘクタールという数字になっておりますが、大正時代には1,700ヘクタールあったというようなことも聞いております。ですがそれも随々、公有地と民有地にそれぞれ分けまして、造林をしてきて、相当の面積が減ってきているような状況であります。

また先程の基調講演にもありましたように、明治31年に陸軍の演習場になりました、それからまた大正11年には第5師団の42連隊等のいろいろな問題で「覚書」等も交わしながら、多少地元にお金が入ったようなことも歴史の中で見ておられます。1ヘクタールが19円とかですね、当時はそのお金がどのくらいの価値)であったか私も判りませんが、そういうしたことち誂べますと出てまいります。

いすれにいたしましたこの秋吉台は特別天然記念物でもありますし、また文化財の指定も受けております。この素晴らしい自然を後世に残すというのが私達の責務でもあるので、それが農業や畜産業、行程からいろいろなお話しがありましたけれども、そういった良縁によりまして保全が困難な状況へなりつつありますし、そういったことによって草花が変わったり、自然が変わったりしてきている訳であります。やはり台の草刈り、そしてそれを焼くことによって自然の環境が保たれて来ているのではなかろうかと思っている訳でございます。リンドウにいたしましたのもヤンブリにしましてもオミナエシにしましても、段々最近では非常に草が少なくなっているような感じがいたしております。カヤも相当伸びておりますが、これは一応畜産農家が畜産の肥料として刈取ったり、昔のような農業の、草花を田んぼに入れるといったようなことが細々とではありますか続けられていることで、また山焼きを行なうことで、素晴らしい原生林が残されて来ている訳です。先程より申し上げますように、農業(形態)も最近変わってきたりですね、衰退してしまって、(農業)を取り戻す状況も悪くなっていますし、畜産にしましても、段々畜産農家が減ってきてまして、台の草もいろいろと制限を受けたりということで、「保護と活用」についていろんな問題もある訳でありますけれども、私はやはり、「刈り」そしてそれを「焼く」ことにおいて自然が残されているんではなかろうか、というようなことも考えております。

また「保存」という観点から言えば、昔は雖で刈っておりましたが、今は草刈り機で刈るということもありますし、作業のための林道網の整備もしていかなければいけないし、そしてまたここ秋吉台は他の草原とは異なりまして、石灰岩の多い地帯でありますので、専門ではなかなかその「管理」、草刈りがないという特異な草原であろうかとも思う訳です。

私、今思いますが、昭和48年頃、禁煙の良かった時に、台上にいろいろな建物が出来、放牧を始めたり、いろんな状況が変わつた時期に、山口県と秋芳町、美東町、そして教育委員会とで「秋吉台を守っていこう」ということでマスター・プランの作成に掛かりまして、「家並みの状況はこうしよう」とか「草原はこうしようじゃないか」とか、そして「お互いに守って後世に伝えていくじゃないか」というような「約束事」もしたことを思う訳であります。

まあいすれにいたしました、秋吉台の「山焼き」に付きましては、各集落のみなさん、消防団のみなさんの協力によって、現在保たれているようになりますのであります。町(秋芳、美東)としましても、経済も相当掛かりますけれども、これに付きますてお互いに力を合わせて、後世に伝えていかなければならぬと、私考えておる状況であります。

まあ歴史的なことに付きましては先程お話ししがありましたので、「私の意見」のようなことになりましたけれども、発表に代えさせていただきたいと思います。以上でござい

ます。

上利

はい、どうもありがとうございました。

一応本日ご参加をいただきました皆様方からひと通りのご発言をいただきました。なにか補足といいますか、もうひとつ言い足らないところがあるという方に付きましたは発言を求めるかと思いますが、「是非これだけは」というものがあればお願いできたらと思います。

どうぞ。

小竹

農業のあり方も変わりましたけれど、老齢化が進んだということで、山焼きも一番重荷になっているのが「火道を切る」ことではあるまいかというふうに見ておられます。

それで私共(美東市)にあります山口畜産試験場では、試験場があります(河原台(美東市伊佐町)川に沿って、「火道切り」を行なう範囲に牛を放牧して、牛に草を食べさせて「草刈り」の代わりとするという研究を最近始めておられます。まあ牛そのものの数が現在少なくなっていますのでどうかということもありますし、その効果についても伺つておられませんので、「如何か」というところもござりますけれども、注目に値するのではあるまいかというふうに思えております。以上でございます。

上利

はい、どうもありがとうございました。

今は「火道切り」のことに付いてお話をいたしましたが、このことに付きましたはですね、後程「分科会」の場に於いて山口畜産試験場の方からご報告なりご提案をいただくということになっておるようになっておりますので、またそちらの方で皆様方とともにこの問題をご協議いただけるのではないかと思っておりますので、只今のところは「お聞きをする」ということだけで宿めさせていただきたいと思います。

他に何かござりますか。

今お話を聞かますと、やはり農業の形態が変わってきたとか、あるいは観光に利活用できないかと、まあこういうふうな、それぞれの地域の実状によって十分ご検討されておるやにお聞きをしておる訳であります。

まあ、今までこの「自然保護」と言いますとですね、誰も手を加えない、ただ放置をすればというふうな、ややもすればそういう自然保護の意識があつたんではないかというふうに思つておる訳であります。やはりこの草原といいますか、こうした草原のすばらしい景観というものは、ある程度の「人の手」を入れなければこれは維持、あるいは守っていくことができないということが、私は最近、社会に、みなさんに認知をされてきたんではないかとそういうふうに



思つておる訳であります。それはそれなりに今後我々もですね、この草原をどうしても先程お話をありましたように、「後世に伝えていかなくてはならない」という我々の責務があるというふうに思つておりましたし、それから、「削減の危機にある」というふうな阿木町長のお話もありました。草原だけでなしに、ここに生えている植物、あるいは動物なども草原が変わることによって、と、まあこいつはお話を聞きました訳であります。我々といたしましては、今後皆様方と共にこの草原を守り遂に生きるならば「地域の活性化」のために活用ができるれば、というふうに思つておる訳であります。

まだ、若干時間はございますが、何かご発言があれば、どうぞひとつお願いしたいと思います。

別においよいよございましたらですね、せっかくのこうしたサミットでありますので「宣言」を是非行いたいということで、一応、実行委員会の方で「案」を作つております。皆様方にお配りしたいと思いますのでご検討いただければと思っております。

〔サミット宣言案〕の配布

只今事務局サイドでありますね、「宣言案」なるものをお配りを致しました。皆様方からご了解頂きましたならば、このシンポジウムが終わりました最後の「閉会式」にこれを発表させていただければというふうに思つております。で、それまでにこの宣言案に付きまして、ご一読頂きました、ご意見等々があればお顔かせを頂ければというふうに思つております。

なお次回といいりますか、次のですね、このサミットを阿木町長の阿木町さんが「是非開催をしたい」というお話でござります。実は「この会だ」ということであつましたが、まだ時間的などとご勤務されておりませんが、午後はご参加かいただけますかというふうに伺つております。従つて次回のこのサミットを阿木町の阿木町さんが引き受けたいとのことがある訳でありますか、ご出席の皆様方のご了解が頂けれ

ば大変り難いと思いますが、その辺よろしくお詫びしますが、ありがとうございました。それでは次回の開催地に付きましては、阿木町の阿木町さんということで一つ方向を決めて頂きたいと思います。

それでは、先程申し上げましたように宣言に付きましては、充分ご検討頂きまして「閉会式」までに、ひとつご検討いただき、何かございましたら秋の方に、これで良かったら、ひとつそのまま「宣言案」にさせて頂ければというふうに思つております。

他に向か、せっかくの機会でありますので、よろしくお詫びします。

それでは、大変「とりまとめ」も不十分で、なおこうした不慣れなものが、議長の大役をお任せつかりましたが、参加をいただきました皆様方の大変暖かいご協力を頂きました。皆様方のご協力にたいして深くお礼を申し上げます。

午後は、「分科会」あるいは「シンポジウム」等々でこの草原に付きまして深く皆様方の研究成績なり、問題点が協議されるというふうに思つております。この「サミット」に付きましては、各自出発地や環境なり条件も書いておりますので、一応の「おおまかなか方向付け」に、とまあこういうことでありますので、今後いすれにたいしましても、「草原を守っていく」、こういうことを意識を頂いたということを議長の大役を終わらしたいと思います。皆様方のご協力深くお礼を申し上げます。以上で終わります。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
閉会セレモニー

閉会セレモニー

司会

それでは『草原シンポジウム2001 全国山焼きサミット in 秋吉台』の閉会式を始めさせていただきます。

閉会に先立ちまして、『全国山焼きサミット in 秋吉台』で採択されました『サミット宣言』を行ないます。

宣言者は先来川長、高木武人様、お願いいたします。

高木

サミットで宣言があとありましたので、皆様方にお配りしましたと思いますけれども、「案」を消していただきたいと思います。

それでは朗読をさせていただきます。

今、草原景観は存続の危機を迎えてます。この危機はそのまま草原に生きる虫や草花の絶滅の危機を招くと同時に、先人達が築いてきた草原文化を根底から壊るがそうとしています。

農林業や畜産業の衰退によって、採草や放牧という利用目的が失われつつあるからです。草原景観の維持は各地域共通の問題点です。

一方で社会の進展と高度化によって生まれ、疲労した心の癒しの場として、美しい草原には多くの人々が訪れるようになりました。人々の健康と安らぎにとって草原はかけがえのない場所となってきたのです。そこには観光、福祉、健康という新たな生業も育ちつつあります。

本日、秋吉台山焼きサミットに集う自治体は、草原景観を地域の宝、国民の財産として維持保全していくことを誓いました。また、ともに人々の癒しの草原を管理、保全する義務も認識しながら、運営上誠実している実状も認識しました。

今後は、機会あるごとに、こうした実状を国や国民に訴えかけ、国民の財産、地域の宝、そして援助と支援を要請しながら、草原景観の維持保全に一層の努力を傾注する事を宣言しとします。

平成13年2月17日、全国山焼きサミット、秋吉台

以上でございます。

司会

さて今回のサミットに於きました、次回の、5回目にになりますが、開催は阿蘇郡、阿蘇地域12町村でお引き受けいただくことが承認されました。

代して阿蘇町長、川奇教夫様よりご挨拶を頂戴いたしました。

川奇

ご紹ひいただきました。那本県は阿蘇郡12ヶ町村で構成いたしますが、町村長をいたしております、阿蘇町長、川奇でございます。

例はともあれ、今回の『秋吉台草原シンポ』、そして『山焼きサミット』ですか、阿蘇ならば『野焼きサミット』でございますけれども、御地では『山焼きサミット』と言うことだそうでございまして、あく盛合に、そして真剣に討議が行なわれまして、終盤を迎えることができまして、同じ草原を持つ強さといいたしましても、限りない喜びでございます。

せっかくでございますので、お邊のところでございますけれども、我が阿蘇のことについて若干ご報告、おつなげ申し上げたいと思います。

先程申し上げましたように、阿蘇郡は12ヶ町村、6町6村ございます。そしてその6町6村の、12ヶ町村の面積は119,800ヘクタール。ちょっと私も、みなさまもお判りにならないかと思いますけれども、佐賀県の半分ございます。そして香川県の7割から8割分、阿蘇郡はございます。ああそういう中で76,000人ほどの住民が生活をいたしております。そして阿蘇の草原でございますけれども22,000ヘクタール。極地秋吉台が1,300ヘクタールでございますので、約17倍の草原がございます。

先程来いろいろとご討議の中にもございましたように、これは私の私見も含めてござりますけれども、ここに地元の町長さんもお見えてございますが、本來ならば、畜産、林業、等々がですね、ペイすれば野焼きボランティアも必要ない訳でございますけれども、現在はそういうわがままも言っておられません。從いまして5年程前に、私共の業者野焼きの中、草原という風景の野焼きに、消防団も含めまして4名の方が大火傷をしました。

そのときから、今グリーンストップの専務もお見えでございますけれども、地元の火消しのプロの消防団でさえ火傷をするとさもあるんだと、これで野焼きのボランティアなんて考えられないと思っておりましたけれども、背に腹はかえられませんでした。本当に高齢化して野焼きができない。ならばやはり、先程のお話にもございましたように、この阿蘇の素晴らしい草原景観は国民の財産だと言うことで、ボランティアも甘んじて、これは変な言い方でございますけれども、受けざるを得ないということで、先程の報告の通り資格者の講習会等々も開きました。それこそ地元の本當の長老はじめ、地元のプロというプロ、農家の方々もですね、この素晴らしいボランティアの技術、取組む姿勢、本当に敬服をして今日までなりました。

来年はいよいよ私たちの阿蘇でこのシンポジウムが開かれます。関係各位の数多くのご参加をいたしまして、今回の

いろいろと討議されました二ことが次の問題の地で、問題解決に一步でも近付くようなシンポジウムにさせていただきました。このように阿蘇郡12ヶ町村長、そしてまた阿蘇郡民76,000人がお待ちいたしてあります。皆様方のお越しを心からお待ち申し上げまして、ごあいさつに代えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

司会

熱誠あらわれるご挨拶、前にありがとうございました。
それでは、最後に本大会、閉会のご挨拶を、実行委員長の
阿蘇上島亮が申し上げます。

阿蘇上

みなさん、豪雨間に要り大変お疲れでございました。
私も相当疲れてはおりますが、まも何とか今日まで持つて
参りました。これもスタッフ一同、一生懸命頑張っていただきまして、今日の日を與えることができました。まもこれで
明日「山焼き」ができれば、本当に「パンザイ」と言いたいと
ころなんですか、できますよね、司会さん、是非できるよう
にお願いしたいと思います。

こういった大会を、私も初めてこうした委員長という形で
経験いたしましたが、まも大変なものでございました。まも
そういったことで阿蘇町さんにも来て貰おう張っていただき
たいと思いますし、この草原を守る、草原の必要性を説くこ
の大会がですね、全国に広まり永く続けられていく、国民
の財産としての草原を国民の心の中に植付くことを願って、
閉会の挨拶とします。

どうもお疲れでございました。ありがとうございました。

司会

以上を持ちまして「秋さわぎシンポジウム2001・全国
山焼きサミット」(秋吉台)、閉幕とさせていただきます。
みなさん、今日は朝6時から長い時間、本当にお疲れ様で
した。そしてありがとうございました。
また来年は阿蘇でお会いしましょう。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
スナップ



AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
スナップ



1. 主会場の秋吉台国際会議棟



2. 受付風景



3. 受付風景



4. 地元特産品販売



5. 参加市町村の展示コーナー



6. 山口県畜産試験場の展示



7. オープニング カルリスト草薙太鼓



8. 車本館長の基調講演



9. 分科会 事例発表者の皆さん



10. 分科会 会場の参加者からもたくさんのお問い合わせがありました。



11. 総合司会の岡田さん



12. 秋芳北中学校生徒による郷土芸能披露

スナップ



13. サミット B市町村が参加



14. サミット B市町村が参加



15. シンポジウム



16. シンポジウム パネリストの皆さん



17. シンポジウム コーディネーターの小川さんと
コメンテーターの瀬田さん



18. レセプション



19. レセプション 各開催地の実行委員長のみなさん



20. レセプションを盛り上げる美東接登太鼓保存会



21. レセプション 「野火」を演奏する風来坊の皆さん



22. 次回開催地のアピール



23. 同時開催された秋吉台に親しむ会による「秋吉台写真展」

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001
資料



■資料 講師紹介

●基調講演

庫本 正(くもと ただし)

秋吉台科学博物館館長・農学博士

1936年生まれ。昭和34年に秋吉台科学博物館が開館して以来、秋吉台の研究・自然保護・教育普及活動（インター プリテーション）を続けてきました。現在秋吉台科学博物館長・秋吉台管理事務所長の他、山口県環境教育学会会長、秋芳町地方文化研究会会長・ワバーレフォトクラブ会長・秋吉台パークボランティア会員、山口県自然保護政策監修委員、宇部市環境保全委員会委員、山口県日放送会議監修会委員などを務めています。

専門は植物学・動物生態学・洞窟学で、多数の論文がある。著書には「コウモリ一地下生物室からの報告」（サンクイ元年出版文化賞）など多数。

●シンポジウム

佐藤 誠(さとう まこと)

熊本大学法學部教授

1944年、中国生まれ。九州大学院法学博士。九州大学助手、西南学院・筑波大学助教授、熊本大学教養学部助教授を経て法学部教授。専門はソーリズム・地域経済論。主著は「ソーリズム批判」岩波新書、「阿蘇グリーンストック」石風社。

国土庁・都道府県地域整備研究員、豊小屋・那山森林型リゾート研究会委員、環境庁・里地づくり研究会委員、九州ソーリズム大学・ソーリズム学科長などを歴任。

1987年から阿蘇の豊前・豊後・日向・日向リゾートの三位一体でのグリーンストック運動を提唱し、95年（財）阿蘇グリーンストック設立以降理事。

高橋 佳孝(たかはし よしたか)

中国農業試験場畜産部主任研究官・農学博士

1954年福岡県生まれ。専門分野は草地生物学。1979年福林水務省に入省。中国農業試験場に付いて草地の系統的評価整理並びに他感作用に関する研究に従事。最近は特に、三筋山の草場施肥・保全管理に関する研究を行っている。1988年より同局山野草主任研究官。1997年大田市で開催された「第2回京原セミナー」の実行委員を務める。1999年日本草地学会賞を受賞。

著書に「三筋山草野の変遷と種子の調査」、「農地保育と生物多様性の保全（共著）」など。

宇佐見晃一(うさみ こういち)

山口大学農学部助教授

1956年3月29日生まれ。1978年3月 名古屋大学農学部卒業。専門は農村開発論、農業経営学。「とってもゆかく」な秋吉台ミーティングにて活動3年。

田村 昭雄(たむら あきお)

農業

昭和4年5月生まれ。子供の頃より秋吉台に多くの開拓してきた。昭和16年～35年、台上にてドリーネ耕作をおこなう。昭和17年～36年、台上にて草刈りをむこない農業に活動。昭和22年に「草刈り競技会」に参加。昭和37年～平成11年5月まで秋吉台にて貢し農業に従事。愛馬は4代に亘る、3代の愛馬と共にTV番組出演も多数。

小川 全夫(おがわ たけお)

九州大学大学院人間環境学研究科教授

昭和18年台北市生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了、博士（文学）。筑波大学、山口大学を経て平成10年から九州大学大学院教授。人間環境学研究員共生社会学講座所属、地域社会学担当。曾村環境整備センター中央委員会（委員）。山口県中山間地域等の持続化政策研究会（座長）、日本学術会議社会学系研究会委員会（幹事）など。著書に

「よださばの世界—西日本の社会学的プロフィール」（丸善社）
「都心と農村の文脈」（ぎょうせい）
「地域の高齢化と福祉—高齢者のコミュニケーション状況」（恒星社）
「持続社会のための都市・山口県からの提案」（ミネルワ書房）など。

瀬田 信哉(せた のぶや)

（財）自然公園美化管理財団等務理事、
日本環境教育フォーラム理事

1938年大阪市生まれ。

1961年、国立公園のレンジャーになりたて厚生省国立公園（現在の環境省）に入省。山地環境自然保護局等の係長および官房副議官（自然保護担当）を歴任。1992年に環境庁を退官後現在に至る。

「京原サミット・シンポジウム」の「生きの恵」のひとり。1993年、秋吉台で開催された自然公園大会を支援し、秋吉台全体の市民運動に大きな影響を与えた。

●分科会事例発表

松原 峰夫(まつばら みねお)

秋芳町 わくわく村村長

秋芳町においておづくりを中心の実験室。「とってもゆかく」な秋吉台ミーティングにて早くより参加、活動。平成10年、地元青野地区に地域の入と「わくわく村」を設立、以降代表を務める。

浦田 健作 (うらた けんさく)

平尾台の自然を考える会

1988年生まれ。九州大学理学部地質学系卒、広島大学大学院、東京都立大学大学院修了。専門 楽原都立大学専門会員。専門はカルスト・システム学、洞窟学。理学博士。日本洞窟学会評議員。平尾台の自然を考える会会員。カロナロ改修監修主導。

未だ著書（評議）に

「平尾台の石灰洞」日本洞窟協会
「ケイビンウ入門とカイド」山と渓谷社
「カルリストその環境と人びととのかかわり」大明書

春野 義一 (はるの よしかず)

防長交通株式会社 取締役観光部長

昭和40年 防長交通(株)入社、広島営業部課長代理
昭和45年 防長営業部課長
昭和54年 小郡営業所営業係
昭和55年 高社営業所長、大野営業所所長
平成元年 山口県観光連絡会員
平成2年 防長監査所次長
平成3年 本社観光部長
平成5年 本社観光部長
平成11年 本社観光部長
平成12年 取締役観光部長
防長バス営業部(株式会社)平尾台強化推進

塩谷 信夫 (しおたに のぶお)

秋吉台パークボランティアの会

1958年生まれ。

1994年4月～1997年3月 山口県自然保護委員会
2000年10月～秋吉台パークボランティアの会会員

武次 房江 (たけつぐ ふさえ)

ナチュラリスト・日本鍼灸学会会員

福井県立郷土文化館、山陰史の会会員。

1992年、ロシアでの駆逐のルートを探る旅団隊に参加、秋吉台の保全を隊の観点から考える活動を開始。

弘藏 岳久 (ひろくら たけひさ)

坊がつる野焼き実行委員会会員

平成元年、野焼きが行われる坊がつるの北西にある法華院温泉に赴き、平成12年4月、同温泉の代表取締役に就任。坊がつる野焼き実行委員会会員、現在2期目。

藤井 宏志 (ふじい こうじ)

山口県畜産試験場 放牧管理グループ研究員

平成4年春 山口県試験場畜産試験室・4年
平成8年春 山口県畜産試験室放牧研究室・4年
平成11年春 山口県畜産試験場放牧管理グループ動物・2年目
現在研究員

山内 康二 (やまうち やすじ)

財団法人 阿蘇グリーンストック専務理事

昭和45年より熊本での市民農園設立活動に参加、昭和52年より平成4年まで熊本のグリーンコープ熊本共生社の専務理事、平成4年より財団法人阿蘇グリーンストック設立準備の取り組みにかかわり、同年秋より東横会事務局長、平成7年財團設立により、財團専務理事に就任。現在に至る。

大滝 典雄 (おおたき のりお)

熊本大学非常勤講師・環境省自然公園指導員

元、熊本県畜産試験場阿蘇支場長。熊本県自然公園指導員委員、阿蘇地区パークマネジメントアドバイザリ、自然公園指導員。

川村 孝信 (かわむら たかのぶ)

西の原牧野組合組合員

昭和22年1月生まれ。
大田市三郷牧野組合、昭和40年春卒後、農業に従事。
向原牛の原山冬里方式による繁殖・肥育一貫経営。

佐藤 隆幸 (さとう たかゆき)

久住町稻葉牧野組合

稻葉牧野組合では観光部設置を始めた。施設で半・畜産複合経営を行う。また、冬季は干羽越越冬で久住が全国に誇る「越冬干羽越」の宿泊にあたってい。

AKIYOSHIDAI GRASSLAND SYMPOSIUM 2001 郷土芸能



別府念仏踊り

秋芳北中学校跡の中に、「日本の名水百選」にも選ばれ、清らかな水がわき出ている別府井天池があります。この井天池にまつわる伝説の中に、念仏踊りの由来が、次のように記されています。

その昔、ラから約1200年前の大同年間に、この村の長者が堅田(かたた)といつところの林を切り開きたいと志願していました。

ある夜、夢の中に翁(おきな)があらわれ「二つの鐘で林を切り開く」ようお告げがあり、その通りに開墾をしましたが、今度はその土地に与える水がないで困っていました。

すると、再び夢の中に翁(おきな)があらわれて「自分に二ついてこい」とお告げました。そして、今の井天池の近くにいくと、手にした青竹を突き立てて「この竹を引き抜け」と命じ姿を消しました。翁者が青竹を引き抜くと、清らかな水がごんごんと湧きだしました。

これが、井天池の由来です。山坂村人は、水口(みなくち)に、井天(べんてん)様などの神々を祭り、神によって与えられた水に感謝し、鐘(ごうちゆう)三軒に震えるまで止めないと誓って伝承されてきた續りが、この別府念仏踊りなのです。

この念仏踊りは、単純素朴で、決して優美でもなければ五音(そうしょく)でもありませんが、それだけに、祖先の生活の一端や自然の恵みに対する感謝の心を、今に伝えていくともいえましょう。

この踊りは、昭和43年4月5日に山口県無形文化財に指定され、別府念仏踊り保存会の皆さんによって継承されていますが、本日でも、「さるさことに学び、ふるさとを愛する心を育てる教育」の一環として、平成2年から学校に取り入れ、今日に至っています。



カルスト草炎太鼓 (秋芳町)

カルスト草炎太鼓グループは、昭和63年4月1日播磨の伝統芸能「カルスト草炎太鼓」をめぐして発足。以来「地域の伝統文化」をキーワードベースとして、町内外にかけらむ多くの催事へ参加、演説してきました。また平成2年、山口県指定のアーラクションで中学生150名との「百人太鼓」、平成5年、全国自然公園大会式典のアーラクションとして町内保育園児、小学生、中学生、一般の参加者500名で「カルスト草炎千人太鼓」を披露(秋吉台の山焼きを表現)、等々の企画、指導をしてきました。さらに秋吉小学校では学校教育に太鼓を取り入れられ、全校児童に指導を行っています。



美東長登太鼓保存会 (美東町)

町の活性化、若者の定住、相互の親睦などを目指し、平成2年4月に発足。町内外、県外へと数多くのイベントに参加しています。

日本最初の神山「長登り神山」から名前をいたたき、持ち曲「原はやし」、「神山開眼」、「上り三事」、「男なら」、「三毛」などがあります。

西日本新聞 13年2月17日

「秋吉台宣言」発表へ

きょうの草原シンボ・山焼きサミット

「保全へ。うねり、起こそう」

首長や研究者230人結集

西日本新聞 13年2月18日



西日本新聞 13年2月18日

「草原文化」目指す

維持、保全支援呼びかけ



西日本新聞 13年2月18日

西日本新聞 13年2月18日

「草原の維持・保全」

秋吉台で全国山焼きサミット

報告、意見発表

個人参加

西日本新聞 13年2月18日

「保全に一層努力」
秋吉台で全国山焼きサミット
秋吉台宣言を採択

草原は心のいやし場

山口新聞 13年2月1日



山口新聞 13年2月27日



山口新聞 13年2月1日



新潟新聞 13年2月21日



山口新聞 13年2月9日



あの山の火の事

「山焼き準備って大変」

立志式で防火帯作り

新潟新聞 13年2月21日

新潟新聞 13年2月21日

山口新助13年2月13日

草原に春呼ぶ炎

界の物語を語る桜井の本格作が出版。山田邦彦監修と題され、著者たる桜井は自己認定ではあった。これまで西洋画の上位3000人を挙げるシナリオ集。

山西断臂12年12月18日

秋吉台「山焼き」の防火帯

「火道切り」準備は大変

莫要 + 萝芳町

出口新聞13年1月21日

项目未完成 2023年1月18日

放牧牛が草食べ「防火帯」

草刈り省力化へ効果実証

防火帯づくりキツイ、ならば…

牛の舌で草を刈ろう

昨夏から放牧、成功

秋叶山房集

28日に水入れ実証試験

山口新聞 | 3年2月5日

秋吉台山焼き
防火帯づくり

「放牧」でも大丈夫 火入れで実証確認



草木で火入れの境界を確かめて火入れする様子

秋吉台の道しるべ
「良悟松」を復活へ

苗木原本を植樹

秋吉台の道しるべ
「良悟松」を復活へ
苗木原本を植樹



山口新聞 | 3年2月20日

来月11日に植樹祭 参加者募集



秋芳で住民計画

「良悟松」復活させよう 秋芳で住民計画

中国新聞 | 3年3月8日

「良悟松」を復元
記念植樹参加を
秋芳のグループ

「良悟松」を復元
記念植樹参加を
秋芳のグループ

野 火

詞・曲 吉屋康男

※風にあおられ おびになれ
風をはらめ 地を焦がせ

冬枯れの野に 走る炎
春待つ大地の ひとつのいとなみ
芽吹きの春に 萌えるおもい
うなれよ炎 大地をはって

※(くりかえし)

草木が燃えて 風を起こし
大地が燃えて 雲を呼ぶ
草木が燃えて 雨を起こし
大地が燃えて いのち芽吹く

※(くりかえし)

※(くりかえし)

焼け跡に 白き墓標
太古のいのち この地に眠る
幾千もの 白き墓標
太古の風は 炎によみがえる

※(くりかえし)

※(くりかえし)

秋吉台草原シンポジウム2001/全国山焼きサミットin秋吉台

主 催

秋吉台草原シンポジウム・サミット実行委員会

後 援

環境省、山口県、全労済山口県本部、中・四国環境教育ネットワーク、社団法人 山口県観光連盟、財団法人 山口県文化振興財団、西日本洞窟潜水研究会、秋吉台エコ・ミュージアム、秋芳町観光協会、美東町観光協会、秋芳町商工会、美東町商工会、秋吉台科学博物館、財団法人 秋吉台家族旅行村財團、株式会社 防長トラベル、秋芳ロイヤルホテル秋芳館、山口秋芳プラザホテル、秋吉台ユースビレッジ、国民宿舎秋吉台、国民宿舎秋吉台若竹山荘、NHK山口放送局、KRY山口放送、TYSテレビ山口、YAB山口朝日放送、朝日新聞社、共同通信社、産経新聞、時事通信社、中国新聞社、日本経済新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、山口新聞社、読売新聞西部本社

秋吉台草原シンポジウム 全国山焼きサミットin秋吉台報告書

2002年3月31日発行

発行所 / 秋吉台草原シンポジウム・サミット実行委員会

連絡先 / 山口県美祢郡秋芳町秋吉広谷

<http://www.ymg.urban.ne.jp/home/karusuto/index.html>

印刷所 / 摄報社写真印刷株式会社

(本電子を引用する時には出典を明記して下さい)

秋吉台草原シンポジウム2001
全国山焼きサミットin秋吉台

AKIYOSHIDAI
GRASSLAND
SYMPOSIUM
2001 2.16_{Fri.}~18_{Sun.}

報告書